

2003年十勝沖地震における津波避難行動 住民聞き取り調査を中心に -

Evacuatoion Activities at the Tokachi-Oki Earthquake,2004

廣井 脩 Hiroi Osamu
福田 充 Fukuda Mitsuru
関谷直也 Sekiya Naoya
松尾一郎 Matsuo Ichirou
中村 功 Nakamura Isao
中森広道 Nakamori Hiromichi
三上俊治 Mikami Shunji
宇田川真之 Udagawa Saneyuki

目次

- 1 . はじめに
 - 1.1 地震概要
 - 1.2 調査目的
 - 1.3 アンケート調査の概要
- 2 . 厚岸町床潭地区
 - 2.1 地域の特徴
 - 2.2 避難行動
 - 2.2.1 全体的傾向
 - 2.2.2 迅速な避難のケース
 - 2.2.3 遅れた避難のケース
 - 2.2.4 避難しないケース
 - 2.3 避難行動の背景
 - 2.3.1 迅速な避難のケース
 - 2.3.2 遅れた避難のケース
 - 2.3.3 避難しないケース
 - 2.4 まとめ
- 3 . 静内町
 - 3.1 地域の特徴
 - 3.2 住民の避難行動の背景
 - 3.3 住民の避難行動と心理
 - 3.4 まとめ
- 4 . 豊頃町
 - 4.1 地域の特徴
 - 4.2 津波への対応の様子
 - 4.3 津波対応行動の背景

補論 津波警報について

- 附属資料 1 アンケート調査表(単純集計結果)
附属資料 2 厚岸町床潭地区住民聞き取り(抜粋)

キーワード：災害情報、地震、津波、沖だし、災害文化

執筆分担：廣井 脩(東京大学) 1、監修

中村 功(東洋大学) 1 2.1 2.2.1 2.2.2 2.3.1 2.4

福田 充(日本大学) 2.2.3 2.3.2

中森広道(日本大学) 2.2.4 2.3.3 補論 1

関谷直也(東京大学) 2.1 3

三上俊治(東洋大学) 3.1

宇田川真之(建設技術研究所) 4

松尾一郎(建設技術研究所) 4

1. はじめに

1.1 地震の概要

2003年9月26日午前4時50分、十勝沖（北緯42.0度、東経143.9度）の深さ25kmを震源として、マグニチュード8.0の巨大地震が発生した。2003年十勝沖地震である。この地震により、北海道の太平洋岸の新冠町、静内町、浦河町など9町で震度6弱の揺れを記録した。また津波の来襲が予想されたため、気象庁は、地震の6分後の午前4時56分、津波警報（北海道太平洋沿岸東部，北海道太平洋沿岸中部）と津波注意報（北海道太平洋沿岸西部，青森県日本海沿岸，青森県太平洋沿岸，岩手県，宮城県，福島県）を発令し、津波への警戒を呼びかけた。実際、気象庁の調査によると、この地震によって、高いところでは4メートル（襟裳岬東側の百人浜）、あるいは3～4メートル（大樹町・豊頃町）の津

表 1.1 各地の震度

震度 6 弱	新冠町	静内町	浦河町	鹿追町	忠類町	幕別町	豊頃町	釧路町	厚岸町
震度 5 強	厚岸町 音別町	帯広市 別海町	更別村	広尾町	本別町	足寄町	釧路市	弟子屈町	

表 1.2 各地の津波遡上高（単位：m 気象庁）

襟裳岬百人浜	4.0	浜大樹	3.4	晩成温泉	3.4	十勝港	2.5
釧路西港	1.6-2.0	昆布森	1.3	厚岸	1.1	厚岸床潭	3.1
厚岸末広	4.0 (参考)	霧多布	1.3	静内漁港	0.5		(参考)

表 1.3 検潮所測定 of 津波到達時刻（気象庁）

釧路	第1波	26日05時06分	(+)	1.0 m
	最大波	26日05時18分		1.0 m
根室市花咲	第1波	26日05時27分	(+)	0.9 m
	最大波	26日05時40分		0.9 m
浦河	第1波	26日05時07分	(+)	0.2 m
	最大波	26日06時24分		1.3 m
室蘭	第1波	26日05時26分	(-)	0.1 m
	最大波	26日06時24分		0.1 m
函館	第1波	26日06時05分	(+)	0.3 m
	最大波	26日06時21分		0.3 m
八戸	第1波	26日05時44分	(+)	0.6 m
	最大波	26日05時53分		0.6 m
むつ市関根浜	第1波	26日05時39分	(+)	0.4 m
	最大波	26日06時07分		0.5 m
宮古	第1波	26日05時34分	(+)	0.6 m
	最大波	26日05時44分		0.6 m
大船渡	第1波	26日05時44分	(+)	0.2 m
	最大波	26日05時49分		0.2 m
釜石	第1波	26日05時40分	(+)	0.4 m
	最大波	26日06時39分		0.4 m
牡鹿町鮎川	第1波	26日05時59分	(+)	0.2 m
	最大波	26日06時04分		0.2 m
いわき市小名浜	第1波	26日06時15分	(+)	0.1 m
	最大波	26日06時24分		0.1 m

波が発生している。また参考値ではあるが、厚岸町末広で4.0メートル、厚岸町床潭でも3.1メートルの津波が遡上した。しかし、津波が発生した時、引き潮であったためもあって、人家を押し流すほどではなかった。検潮所の記録によると、こうした津波は、早いところでは、地震16分後の午前5時6分に到達している。

また、この地震の被害をみると、行方不明2名、負傷者849名の人的被害が出たが、行方不明者はいずれも、十勝川河口付近で釣りをしていたところ、津波に襲われたものである。物的被害としては、全壊116棟、半壊368棟、一部損壊1580棟の家屋被害が記録されている。火災は4件だったが、うち一件は苫小牧の石油タンク火災で、再発火した火は9月30日まで燃え続けた（消防庁調べ）。

1.2 調査目的

前述のように、今回の地震では、津波は家屋を流出させるような大きな被害はもたらさなかった。しかし、深さ25km、マグニチュード8.0の巨大地震だったので、ひょっとしたら津波はより高くなり、甚大な被害をもたらした可能性もある。従って、たまたま被害は少なかったが、今回の地震でも、津波の被害を防ぐための迅速な避難が必要であったと考えられる。

では、沿岸の津波危険地域に住む人びとは、今回の地震に遭遇してどのように感じ、どのように行動したのであろうか。また、避難した人としなかった人には、どのような要因が関係していたのであろうか。これらの問題を包括的に探るため、我々を含む研究グループは、津波警報が出た北海道沿岸8市町の住民2500人を対象にした、郵送アンケート調査を実施している（結果は、東京経済大学報告書『2003年十勝沖地震における津波危険地区住民の避難行動実態』参照）。

今回は、この対象地域の中から、さらに特徴的な3地区を選び、住民にインテンシブな聞き取り調査を実施して、より詳細に避難行動の実態とその背景にある心理を探ることにした。対象とした地区は、厚岸町床潭(トコタン)地区、静内町沿岸部、および豊頃町沿岸部の3カ所である。床潭地区はかつて大きな津波被害を経験しており、避難率の高い地区として選択した。また、静内町は、これまで深刻な津波被害を受けたことがなく、比較的避難行動が不活発な地域ではないか、ということで選択した。一方、豊頃町は漁港をかかえ、沖出しなど漁民の動きが特徴的な地域ということに注目して選択した。

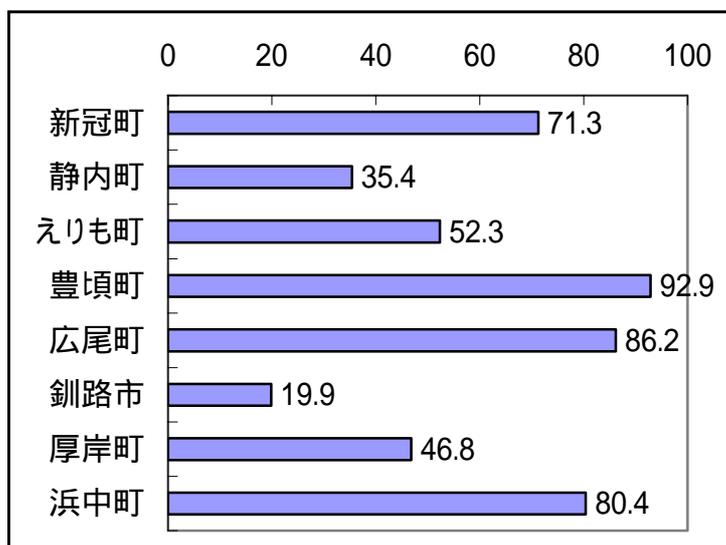
本論では、まずアンケート調査から全体像を把握し、その後、厚岸町床潭地区の29世帯に対する悉皆的聞き取り調査の報告を行い、ついで静内町、豊頃町について報告することにしたい。

1.3 アンケート調査結果

まず前記のアンケート調査(東京経済大学報告書『2003年十勝沖地震における津波危険地区住民の避難行動実態』)から、住民の避難行動及びその要因となる条件について、全体的な傾向を簡単に把握しておこう。

アンケートを実施したのは、地元自治体が避難の呼びかけを行った北海道太平洋沿岸の8市町(新冠町、静内町、えりも町、豊頃町、広尾町、釧路市、厚岸町、浜中町)であるが、なかでも自治体への聞き取りから、津波の危険があると考えられる地区の住民に絞って調査を行った。

避難した人の割合は全体で55.8%と、自治体が把握している数字よりは多かったが、それでも半数近くの人には避難していなかったことがわかる。地域別では豊頃町、広尾町、浜中町などでは8割を越えていたが、静内町や釧路市では避難率が低かった。今回聞き取り調査を行った豊頃町では9割以上の人々が避難していたが、これは、避難の呼びかけを行ったのが大津地区という、危険度の特に高い場所だけだったためと考えられる。また厚岸町で46.8%の避難率だったが、聞き取りを行った床潭地区は町内でも危険度の最も高い地区なので、床潭の避難率はこの数字より高いと考えられる。他方、静内町では33.4%と避難率が低くなっている。

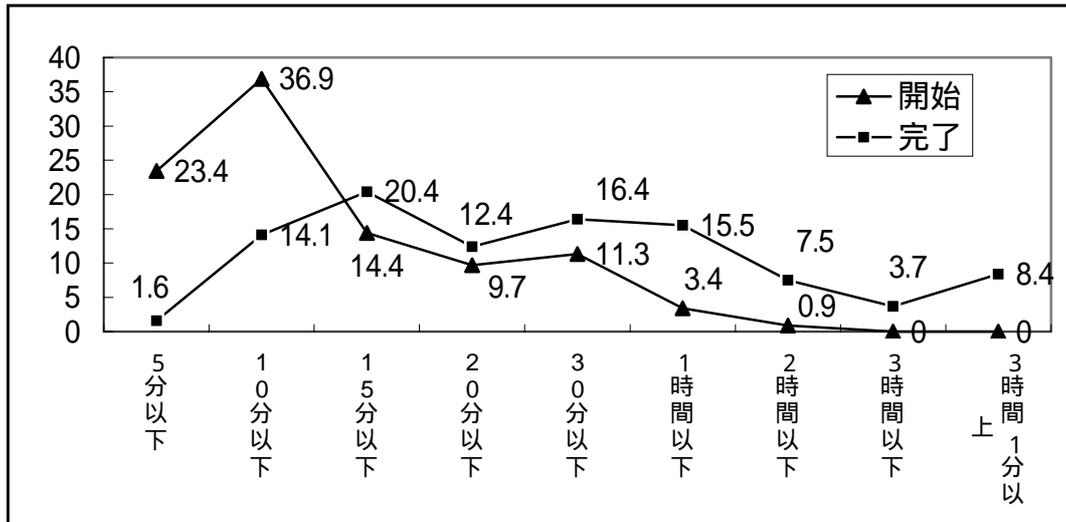


(出典：東京経済大学報告書『2003年十勝沖地震における津波危険地区住民の避難行動実態』)

図 1.1 住民の避難率 (%)

いうまでもなく、津波からの避難は迅速さが重要である。今回の津波では、釧路市では地震の16分後に津波の第一波が観測されているが、調査によると、住民の避難開始までは平均14.6分(中央値10分)、避難完了までは平均50.1分(中央値23分)もかかっている。

全体としては必ずしも迅速な避難とはいえない。これをもっと詳しくみると、避難開始は10分以下にピークがあり、10分以内に避難を開始した人が6割程度であった。一方、避難完了は15分以下と30分～1時間以下の2つのピークがある。15分以内に避難を完了した人は全体の約1/3だったが、かれらは迅速な避難をしたといえよう。また、彼らは地震後とるものもとりあえず5分前後で避難を開始した人たちでもある。しかし、それ以外の2/3の人たちは、結局は避難したものの、遅れてしまったグループである。



(出典：東京経済大学報告書『2003年十勝沖地震における津波危険地区住民の避難行動実態』)

図 1.2 避難の迅速さ(避難開始時刻 避難完了時刻)

では、避難した人と、しなかった人を分けた要因は何だろうか。

このことを調べるため、避難の有無と各要因(変数)をクロス集計して、統計的検定(二乗検定)をしたところ、まず、地域によって避難率が異なっていた。そのほか、避難を促進した要因としては次のようなものがあった(表 1.4)。すなわち、「津波が来る不安がある」こと、「津波が来る確信がある」こと、「避難の切迫性を感じた」こと、「そのとき居た場所に留まると危険性が高いと認識している」こと、「避難の呼びかけ認知している」こと、「津波から車を守りたいと思う」こと、「津波を受けた経験がある」こと、「揺れに襲われたら逃げるべきと感じている」こと、「職業が漁業または主婦である」こと、「津波危険地域に指定されている」こと、「近くに安全な避難場所がある」ことであり、これらはいずれも統計的にきわめて有意な関係($p < 0.001$)が見られた。そのほか、「女性である」こと、「津波から船を守りたいと思う」ことは非常に有意な関連($p < 0.01$)がみられ、また、「通帳・印鑑を守りたいと思う」こと、「家族にかまわず逃げるべきと思う」ことは、有意な関連($p < 0.05$)があった。また避難を抑制する要因としては、「津波の怖さがぴんこない」こと

が、統計的にきわめて有意な関連があった ($p < 0.001$)。

しかし、これらの要素は互いに関連しあっていて、どの要因が実際に避難に影響しているのか、判然としないところがある。たとえば、漁業関係者の避難率や、津波から船を守りたいと思う人の避難率が高くなっている。しかしこれは、漁業関係者の多くが、海岸近くの危険地域に住んでいるため、職業や船への意識とは直接関係がない「擬似的相関」かもしれないのである。

そこで、各要因の影響を整理し、擬似的相関を取り去るために、避難の有無を従属変数に、各要素を独立変数としたロジスティック回帰分析を行った(1)。その結果、その場所にとどまると危険度が高いと認識すること(Q11)、および近くに安全な避難場所があること

表 1.4 避難の有無に関係する要素 (クロス集計 カイ2乗検定の結果)

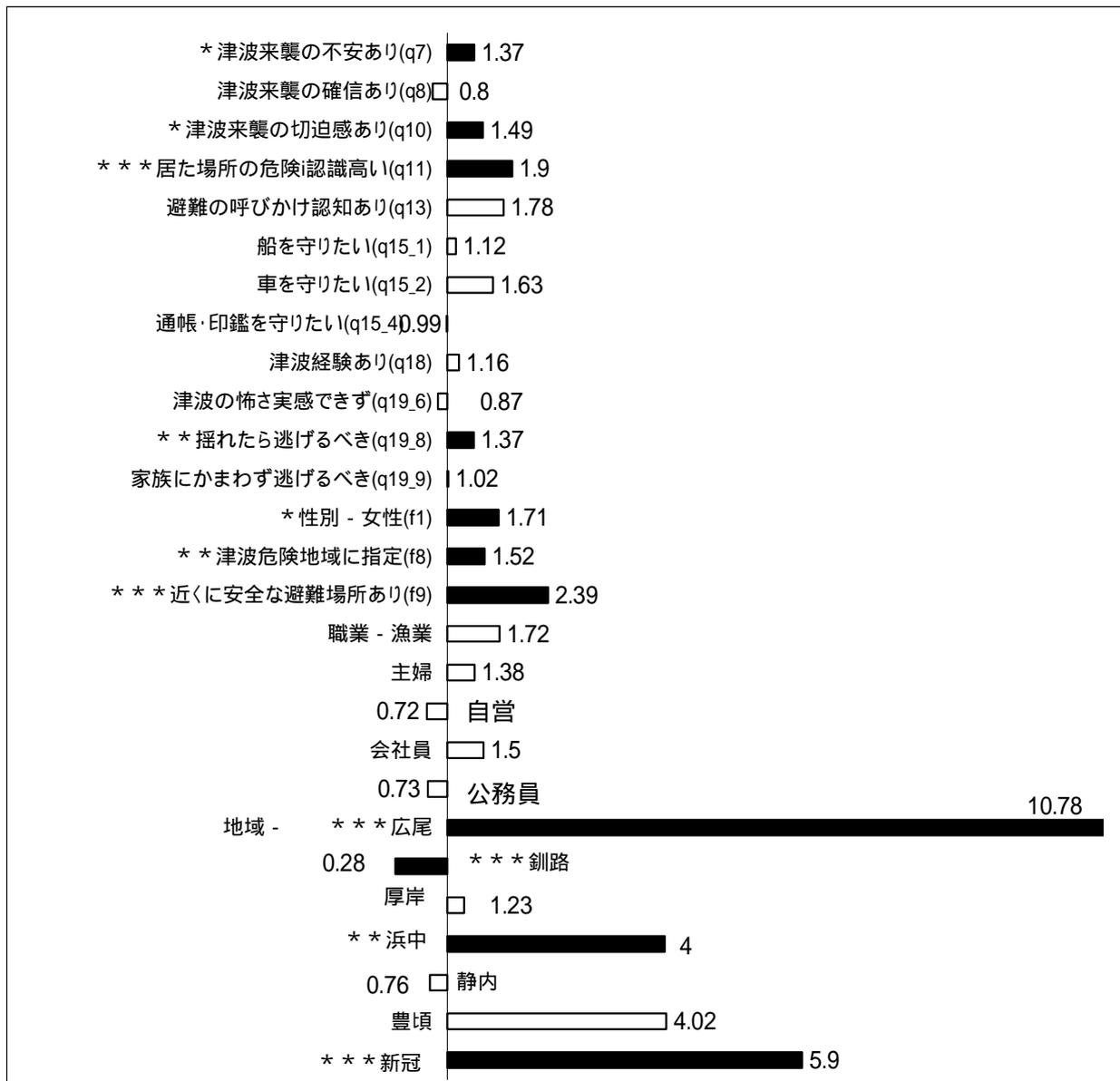
促進的(正の)関係	津波が来る不安あり(問7)*** 津波が来る確信あり(問8)*** 避難の切迫性あり(問10)*** 居た場所に留まる危険性高い(問11)*** 避難の呼びかけ認知あり(問13)*** 船を守りたい(15-1)** 車を守りたい(15-2)*** 通帳・印鑑を守りたい(15-4)* 津波経験あり(問18)*** 揺れに襲われたら逃げるべき(19-8)*** 家族にかまわず逃げるべき(19-9)* 女性** 職業(漁業・主婦)*** 津波危険地域に指定(F8)*** 近くに安全な避難場所あり(F9)***
抑制的(負の)関係	怖さ実感できず(問19-6)***
関係なし (一定の傾向なし)	津波警報の認知(問12) 知識(100m 走並に速い 19-1) 知識(警報後の避難で間に合う 19-2) 知識(100m 走並に速い 19-3) 知識(まず潮が引く 19-4)* 知識(いきなり来る 19-5)* 知識(ジェット機並の速さ 19-7) 年齢 車所有

2 *: $p < 0.05$ **: $p < 0.01$ ***: $p < 0.001$

(F9)といった2変数が、最も避難を促進する要因であることがわかった(有意水準0.1%未満)。それについて、大きく揺れたらすぐ避難すべきだと考えていること(Q19_8)、住んでいるところが津波危険地域に指定されていること(F8)、という2変数も明確な避難促進効果が見られた(有意水準1%未満)。さらに、津波来襲の不安が高いこと(Q7)、津波来襲の切迫感が高いこと(Q10)、性別が女性であること(F1)なども、避難に促進的影響を持っていた(有意水準5%未満)。

なお、ここで注目すべきなのは、避難率に影響がないと判断された諸変数である。まず、単純なクロス集計の段階で、影響がないとみなされたものに、津波警報の認知がある。人々が警報を聞いて逃げたわけではないというのは大きな問題であるが、これは、後述の聞き

取りにもあるように、津波警報が出る前に、すでに避難した人が多かったためでもある。また、津波に関する各種の知識も避難の有無に影響を及ぼしていない。とくに、「津波はま



*: p<0.05 ** : p<0.01 *** : p<0.001

Cox & Snell R² 乗.399、Nagelkerke R² 乗.536、 正分類率 - セット 79.0

黒棒グラフは有意な関係を白棒グラフは有意でない関係を示す。数値は1以上が促進、1以下は抑制方向の影響力を表す。

図 1.3 避難の有無に関係のある要因 (ロジスティック回帰分析によるオッズ比(2))

ず引き波からくる」という誤った知識は、避難に悪影響があるのではないかと心配されたが、アンケート調査ではそのような影響はみられなかった。後で触れることになっている聞き取り調査の分析から、その理由が明らかにされるだろう。

次に、単純クロスでは影響があったが、ロジスティック回帰分析で影響なしとされたものについて触れると、先の予想通り、職業は住んでいる場所や性別を反映したもののなので、擬似的な相関であった。



図 1.4 有意な関連のあった要因別の避難率(クロス集計)

また、避難の呼びかけを聞いたかどうかということも、ロジスティック回帰分析では影響なしとなっている。単純なクロス集計では、避難率の低かった釧路市で呼びかけ聴取率が低かったことによって差が生まれたが、その他の地域も含めて調整すると関係性が弱くなってしまったのである。ちなみに、地域ごとに3重クロス集計を行うと、浜中町、新冠町、釧路市では呼びかけの効果がみられるが、厚岸町、豊頃町、広尾町などでは、かえって呼びかけを聞かない人のほうが避難率が高かった。

表 1.5 地域ごとの避難呼びかけ聴取の有無と避難率(3重クロス集計)

	釧路	厚岸	えりも	静内	豊頃	新冠***	浜中***	広尾	全体***
聞いた	24.2	46.3	53.1	36.8	84.6	75.8	84.4	83.3	60.4
聞かない	15.6	64.7	45.5	33.3	100	9.1	30.8	90.0	38.0

2 ***:p<0.001

しかしその一方、アンケート調査では、別の質問で避難のきっかけについてたずねており、そこでは避難した人の54.2%が、市や町が避難を呼びかけたから避難したと答えており、これをみると避難の呼びかけも一定の影響があると考えられる。したがって、避難の呼びかけを聞いた人のほうが避難率が低かった各町では、避難の呼びかけの前にすでに多くの方が避難していたということなのかもしれない。そうした例は、後述のヒアリング調査で明らかになるだろう。

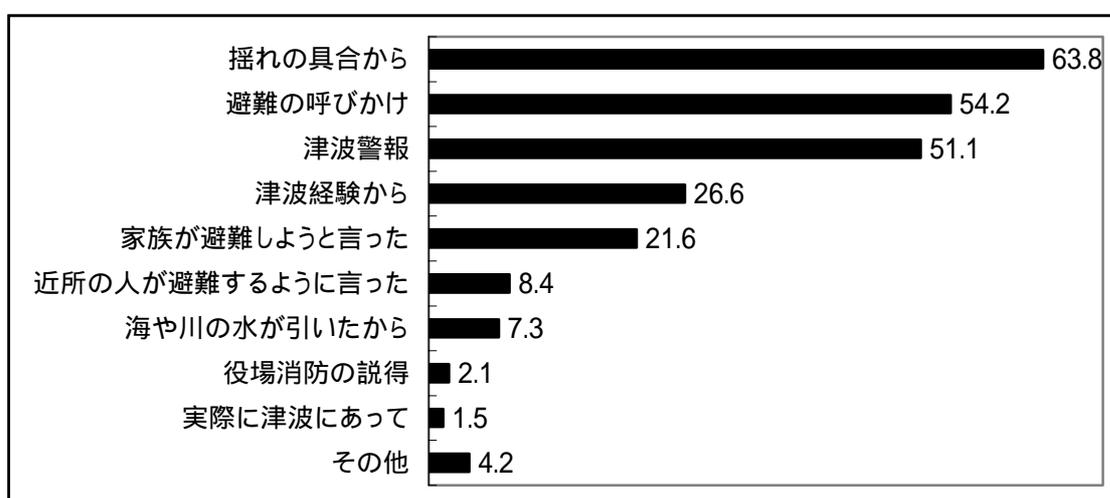


図 1.5 避難のきっかけ

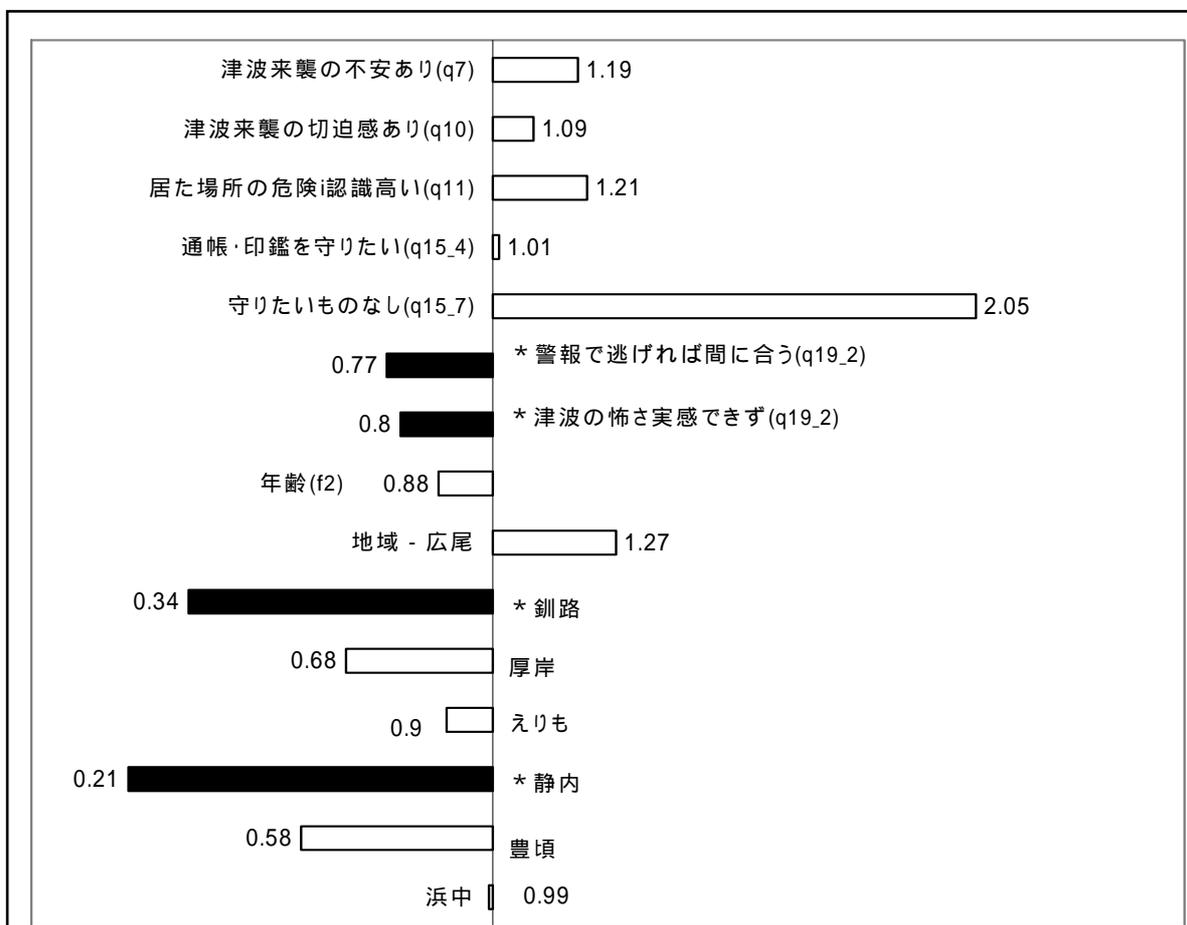
表 1.6 避難の迅速さ(15分以内に避難完了)に関する要素 (カイ二乗検定の結果)

促進的(正の)関係	津波が来る不安あり(問7)* 避難の切迫性あり(問10)* 居た場所の危険度認識高い(問11)* 年齢(30代40代)* 守りたいものはない(15-7)*
抑制的(負の)関係	知識(警報後の避難で間に合う(19-2)**通帳・印鑑を守りたい(15-4)* 怖さ実感できず(問19-6)**
関係なし(一定の傾向なし)	津波が来る確信(問8) 津波警報の認知(問12) 避難の呼びかけ認知(問13) 津波経験(問18) 知識(100m走並に速い19-3) 知識(100m走並に速い19-4) 知識(いきなり来る19-5) 知識(ジェット機並の速さ19-7) 揺れに襲われたら逃げるべき(19-8) 家族にかまわず逃げるべき(19-9) 性別 職業 津波危険地域に指定(F8)*** 近くに安全な避難場所あり(F9) 車所有

2 *:p<0.05 **:p<0.01 ***:p<0.001

また、興味あるのは津波経験である。クロス集計では明確な関連が見られたのに、ロジスティック回帰分析では、津波経験と避難率の関係性が消えてしまった。この結果から判断すると、かつて恐ろしい津波経験をして、今いるところが危険であると感じなければ避難はしない、ということになる。実際にそのようなことがあるのかどうか、聞き取り調査で確認していきたい。

ところで次に、避難の迅速性にはどのような要因が影響しているのだろうか。ここでは、避難の迅速性を、15分以内に避難を完了したかどうかを基準に判断する。クロス集計の結果、避難の迅速性に促進的な(正の)相関を持つ変数として、津波が来る不安がある(Q7)、避難の切迫性がある(Q10)、居た場所の危険度の認識が高い(Q11)、年齢が30代-40代、守りたいものはない(Q15-7)などがあつた(いずれも有意水準は5%)。



Cox & Snell R² 乗.112、Nagelkerke R² 乗0.15、正分類率 -セト67.49、² *:p<0.05
 黒棒グラフは有意な関係を白棒グラフは有意でない関係を示す。数値は1以上が促進、
 1以下は抑制方向の影響力を表す。

図 1.6 避難の迅速さに関係のある要因(ロジスティック回帰分析)

一方、避難の迅速性に対して抑制的な(負の)相関をもつ要因として、警報後の避難で間に合うと思う(Q19-2)、津波の怖さを実感できない、(Q19-6)、通帳・印鑑を守りたい(Q15-4)などがあった。

次に、独立変数としてこれらに調査地域を加え、迅速性(迅速1 - 迅速でない0)を従属変数として、ロジスティック回帰分析を行った。その結果、統計的に有意な関連が確認できたのは、津波の怖さを実感できない(Q19-6)と、警報後の避難で間に合うと思う(Q19-2)の二つであった。これらはいずれもクロス集計での有意水準が1%未満と高かったので、関係性が残ったのであろう。

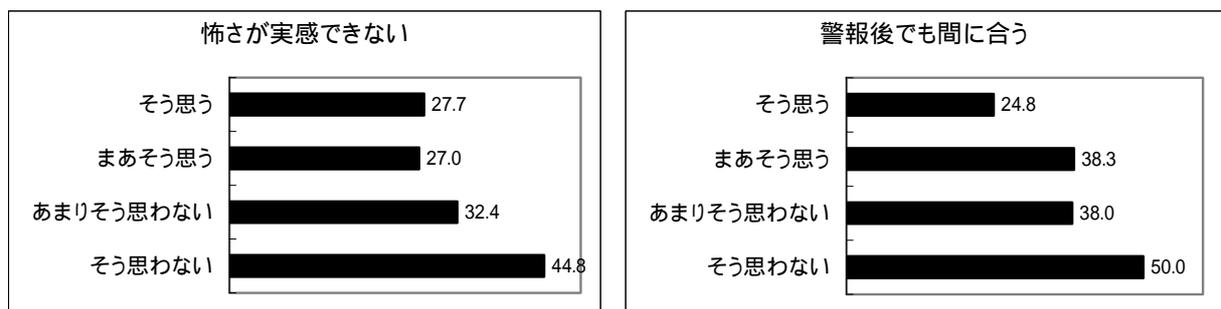


図 1.7 迅速な避難(15分以内に避難完了した人)の割合

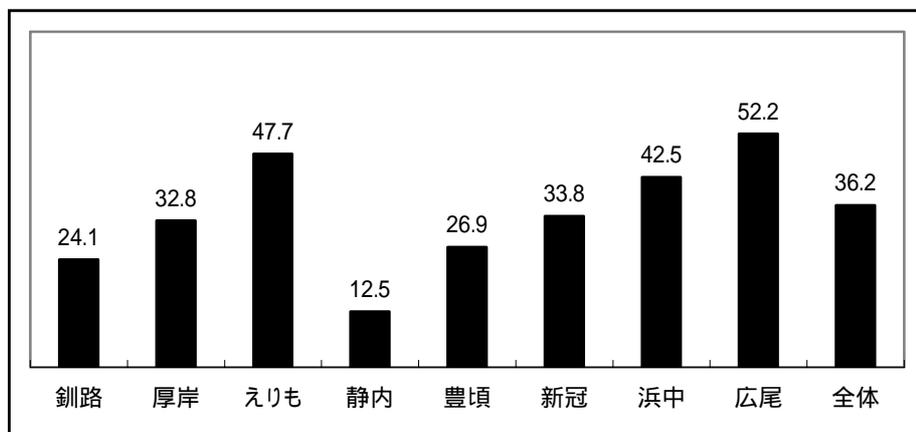


図 1.8 迅速に避難完了した人割合 - 地域別

2 . 厚岸町床潭地区

2.1 地域の特徴

(1)被害状況と行政対応

厚岸町は北海道太平洋岸にある漁業の町で、人口は 12261 人である。今回ヒアリング調査をした床潭(トコタン)地区は、厚岸町の中心部から 10 キロほど南東に離れた海沿いの集落であり、戸数は 171 で、そこに 676 人が住んでおり(2003 年 10 月現在)、多くの住民が昆布漁を生業としている。

厚岸町は今回の地震で震度 6 弱の揺れにみまわれたが、被害は大被害というほどではなかった。被害の内容としては、10 名がけが(軽症)をし、漁港では 2 隻の昆布船と 1 隻の上架漁船が津波により転倒している。また、ひびが入った程度の家屋被害はあったが、全壊した家屋はなかった。さらに、町の中心部では停電はなかったが、末広や床潭などの周辺地区では、合計 466 世帯が停電し、同日午前 11 時 14 頃に復旧している。

今回の地震時の厚岸町の対応をみると、津波警報が発令された 1 分後の午前 4 時 57 分に、同報無線を使って津波警戒の呼びかけをしている。そしてその後、5 時 10 分に「津波警報発令、沿岸地域住民は直ちに避難してください」と、同報無線を使って避難の呼びかけをした。ここでは避難の対象地域や避難先は明示されていないが、町ではこれをもって避難勧告発令としている。町によると、標高 10 メートル以下の場所を、津波の浸水危険地域(通称「ブルーゾーン」)として日頃から指定しており、そこを対象地域として放送したという。

表2.1 沿岸市町の同報無線運用状況 (避難勧告時刻、避難者数、けが人数は道資料より)

	同報無線 津波警報	同報無線 避難呼びかけ	避 難 勧 告	避 難 者 数 率		けが・ 死者	震度
1. 浜中	4:58(自動)	5:06	5:06	1671	36.8	3	-
2. 厚岸	4:57(消防)	5:10	5:10	1100	11.5	10	6 弱
3. 釧路市	5:00(消防)	5:12	×	193	3.9	243	5 強
4. 豊頃	5:17	5:17	5:13	200	48.3	54(2)	6 弱
5. 広尾	4:57(消防)	4:57(消防)	5:13*	200	29.8	6	5 強
6. えりも	4:57(自動)	4:57(自動)	5:08*	233	3.7	2	-
7. 静内	4:56(自動)	4:56(自動)	7:00	236	11.8	71	6 弱
8. 新冠	5:03	5:03	5:03	1425	36.5	5	6 弱
釧路町	4:57(自動)	4:57(自動)	×	167	12.8	20	6 弱
音別	同報無線無しオフトーク停電で不可		5:50	115	31.2	19	5 強
大樹		5:58	×			20	-
浦河		5:00	×	253		76	6 弱

この避難の呼びかけは、市町村防災行政無線を通じて行われたが、防災無線は町の全戸

に屋内に設置する戸別受信機が配布されており、さらに沿岸部には屋外拡声方式の防災無線もある。また、特に危険と見なされた床潭地区には広報車でも避難を呼びかけている。

この地域に住む避難勧告の対象者数は9600人であるが、町の資料によれば、指定避難場所に避難したのはこのうち1100名で、これは避難率にして11.5%にすぎない。しかしすでに述べたように、アンケート調査では厚岸町で46.8%の人が避難したと答えている。この違いは、近くの高台や知人宅など、公的に指定された避難場所以外に避難した人が多かったことを反映している。

また、地域によっても避難率の差がある。たとえば、勧告地域に指定されている太田南地区などは、標高こそ低いもののかなり内陸なので、津波の危険性が少なく、実際ほとんどの人が避難しなかったという。これは、浸水危険地域の範囲が、シミュレーションによって定められたのではなく、標高10メートル以下を基準に、一律に指定されたことによる。

(2)津波の経験

この地域は、これまで比較的大きな地震や津波を繰り返し経験してきた。昭和27年(1952年)3月の十勝沖地震、昭和35年(1960年)5月のチリ地震津波、平成5年(1993年)1月の釧路沖地震、平成6年(1994年)10月の北海道東方沖地震などがそれである。そして、釧路沖、北海道東方沖をきっかけにして、同報無線が整備されたり、津波ハザードマップが作成されたり、毎年避難訓練を行ったりするなど、町の津波対策はずいぶん進んできた。

津波被害という点では、昭和27年の十勝沖地震が特に大きな被害をもたらした。今回調査対象とした床潭地区も、この地震で甚大な被害を受けている。すなわち、『厚岸町史』によると、地震の30分後に津波が床潭地区を襲い、死者3名、負傷者18名、流失家屋



図 2.1 昭和27年の被害 (床潭地区八番地方面) 高島昭氏提供

44戸の大被害となった(図2.1)。特に被害の大きかったのは地区の中央部で、ここには小川が流れ込んでおり、その上流には床潭沼があった。津波はこの川とその周辺の低地に集中して流れ込み、家屋をなぎ倒し、なかには奥の沼まで流された家屋もあったという。川のほとりには床潭小学校があったが、学校にいた児童たちは津波に追われて氷の張っていた沼の上を走って逃げたという。また、地区の東側(床潭漁港周辺)の家屋にも津波が襲っている。その一方、地区の両端では、家の目の前を津波が通っただけで、被害は受けなかった。

(3)被調査者の全体的傾向

すでに述べたように、床潭地区を調査地域に選んだのは、住民の避難率が高かったであろうと予想したからである。床潭はかつて深刻な津波被害を受けているし、町役場では今回の地震時にも多くの住民が避難したと認識していた。そこで床潭地区のうち、かつて被害を受けた、危険度の高い地区を中心に、悉皆的聞き取り調査を行うことにした。具体的には、地区の中央部である床潭小学校周辺の25世帯をすべて調査し、加えて、かつて被害を受けたことがある床潭漁港近くの地区から1世帯、そして被害のなかった世帯を3世帯、計29世帯を対象に聞き取り調査を行った(調査世帯の地理的配置および避難パターンは付属地図参照)。

避難の全体的傾向は、表2.2に整理されているが、その特徴をまとめると次のようになる。

第一に、住民の多くが迅速な避難をしていたということである。聞き取りができた27世帯の避難率は88%に達しており、アンケート調査の厚岸町の避難率(46.8%)を大幅に上回っていた。

第二に、避難したのは、その場所が津波に対して危険だと認識していたためで、津波警報や避難勧告などの呼びかけ情報によるものではなかった、ということである。これはアンケートの分析結果(ロジスティック回帰分析)とも符合している。ちなみに、警報を聞いたのをきっかけに避難したのは1件だけであった。

第三に、津波経験の逆効果もみられた。すなわち、かつて被害がなかった場所に住んでいる人は、たとえ過去に危機的な経験をしていても、ここは大丈夫だろうと考え避難しなかった人、またかつては地震後30分に津波が来たので、30分は津波が来ないだろうと、ゆっくり避難していた人がいたのである。

第四に、津波が早く来ると思ったのは、テレビで奥尻島の津波被害の様子を見聞していたからだという人がいた。

第五に、大きな地震があったら、空振りをおそれずにとにかく避難する、という災害文化が見られた。

表 2.2 床潭地区聞き取り調査結果一覧

世帯番号	避難	避難開始時間	戻り時間	危機感・避難のきっかけ	津波経験	家族構成	避難手段	その他
1		30分後	7:30	地震がきたから	親が経験	9人(夫婦・両親・曾祖母・子3人・弟)	車	災害弱者(赤ちゃん・曾祖母)に手間どる
2	x	-	-	「場所が高いから不必要」	夫が経験	2人(夫婦 昆布漁)	-	ラジオを聴くため、車のエンジンをかけた。防災無線聞いたが覚えてない
3	x	-	-	「大した地震じゃなかった」			-	怪しい、立ち話
4		5時以降不明	10:00	地震があって、すぐ津波のことを考えたから	S27時小学生。妻沼に逃げた	3人(夫婦・娘 夫は留守)	車	27宅裏避難場所へ避難
5								不在
6								不在
7		4:57前	9:30	祖母の呼びかけで	義母・義父・夫によく聞いていた。	6人(祖母、嫁、子3人 夫は留守)	車	
8				大地震時は毎回避難している	S27時、自宅床上浸水	一人(95歳 娘が佐藤弘さん)	徒歩	近所(世帯2)宅前まで避難、高齢
9		5分後	8:30	津波の経験があったのですぐ逃げようとした	S27時小学生。沼の氷上まで逃げた。	二人(奥さん)	車	厚岸へ通じる道へ避難。指定の避難所には、海沿いを通るので怖くて行きづらい。津波時はまず潮が引くと信じている
10		すぐ(10分後に避難8:00ころ先到着)	解除前	大地震で、津波のことを考えたから。以前は「津波は、地震発生後30分くらいで来る」と考えていたが、奥尻島の被害を見て、津波は地震後すぐに来ると考えるようになった。	S27年の経験?	6人(夫婦、長男夫妻、孫2人)	車	妻の話。山の手の知人宅(F)へ避難。この日、この地域は昆布の検査が入っていた。午前中の予定を午後へ変更するように求めた。
11					S27年の経験 息子避難時に亡		車	拒否 - 近所の人からの聞き取り
12			9:00	枕元に防災グッズを置ききいて、...?	夫、祖母が経験 奥さん27年の被災は聞いている	4人(祖母 夫婦 娘)	車	幌月別(奥さんの実家)へ避難 旦那だけ途中二回くらい戻ってきた 実家が海の近くの高台で、津波の様子は昔から見ている
13		すぐ	解除時	親が厚岸町の人で津波の話はよく聞いていた。何も持たずに逃げた		5人(昆布漁師 夫婦、子3人)	車	高台知人宅(F)へ避難。平成4年に、現住所に引越してきた。
14		すぐ			S27で弟を亡くしている	2人(夫婦)	徒歩	神社に逃げた?Kさんのワゴンにいた。 高齢者夫婦(伝聞)
15		20分後	3~4時間後	枕元に防災グッズを置く。警報、テレビの後に逃げた。財布だけ 切迫感あり	S27に全壊	2人(夫婦)	徒歩	住民24は親戚。高齢80代。元村議
16		すぐ	夫6時妻孫12	切迫感あり。着替えをして金だけ持って逃げた。近所の親(高齢一人暮らし)にも声をかけず。津波を経験しているし、奥尻の例もあるので。	S27妻の実家が床上浸水。夫は山にいたが実家は浸水	4人(夫婦、娘、孫)	車	本町の弟宅(奔渡町)まで避難。 孫だけ避難リュックを準備
17		すぐ	解除後	大きな地震の後は、津波が来ると思ったから	S27十勝沖を経験。S.27の津波で死亡した、清昨氏の弟は、清三氏のおじ	6人(夫婦、父母、娘、息子)14久保田清	車	床潭東側知人宅(鈴木武二)へ避難。これまで、大きな地震が起こると、津波警報発表に関係なくすぐに避難している。H5年の釧路沖地震の時も避難した。
18	x	5分後	10:30 11時後	津波が来ると思ったので夫は冲出し? 切迫感あり	親が体験	2人(昆布漁師 夫婦)妻は3時起きていた	徒歩	神社に逃げた 避難用の服・懐中電灯を常備
19								
20		すぐ				3人		- 立ち話
21		すぐ		地震=津波の頭で、必死に逃げた。揺れの最中から着替え始めた。タンスが倒れた音も気がつかなかった。	本人はなし。30代。親から聞いていた。	5人(夫婦子供2人母親)親は当日留守	車	避難用の服、薬を用意している。懐中電灯は各自枕元に配置。家具固定するも釘抜ける。家中めちゃくちゃ。地震時は毎回避難している。
22		5分後	6時すぎ	夫は切迫感あまりなし。慣れ。「海を見るために高台へ行った」妻は奥尻から危機感あり。「命あっての物種」	本人なし。親から聞く。S27自宅は津波の被害なし。	3人(夫婦・息子)息子は出勤中。妻は他所から嫁ぐ。	車	厚岸大橋を渡り、国道沿いの高台広場へ避難。床潭側は島のような感覚なので。家の倒壊を心配して外にでて、寒いから車で外出した。カーラジオで津波警報知る。
23		40分後	避難の30分後	TV見て、防災無線聞き、消防広報を聞き、周囲の反応を見て避難。切迫感なし。	なし	一人(本人のみ)	車	車で道路の高台に避難。避難途中で徒歩避難中の石田勇夫妻を車に乗せて共に避難。
24								
25		30~40分後	避難の30分後			2人(夫婦)	徒歩 車	「被害もなく、避難もしない」との証言。実際は高島美恵子さんの車で避難。
26	x	-	-	住いが襲われていない経験から、大きな津波は来ないと考える。居間から波を見ていた。台風の方が怖い	S27小学生で、沼まで逃げた。	5人(夫婦、長男孫2人)	-	地区の西端、海際の家。孫だけ裏山に30分間避難させる。津波が来たら裏山に避難すればいいと考えていた。自宅近くで崖崩れあり。
27	x	-	-	S27の時、被害なかったで津波の心配せず。消防の広報車で津波警報を知り、地震30分後役場の人が避難呼びかけるも避難せず。	S27の時、被害なし。湾月の高校に居た。床潭3代目	6人(夫婦、息子夫婦、娘、孫)	-	裏山を公的避難場所に貸す。自宅前広場に避難者が集まってきた。町内会長
28		40分後	9:00頃(解除前)	大きな地震の後は津波が来ると思っているから。ただし避難は40分後。	S27の十勝沖で家が壊れる。その際、津波で逃げ遅れた人を救助した。	6人(夫婦、長男夫婦、孫2人)	徒歩	裏の道に避難階段で避難。長男は、厚岸の湾月にある船を冲出した。津波は「押し波からくることもある」と知っている。ただし、津波が来るまで、ある程度時間があると考え、4台の車を高台に上げ、片づけをしてから避難。昭和27年以前に、親から「南米で地震が起こると津波がある」と聞く。
29	x	-	-	これまで自宅が襲われたことなく、津波はあっても、自宅までは来ないと確信。台風の方が怖い。	妻はあり。	7人(夫婦・娘夫婦・子供3人)	-	地区の東端、海際の家。海面から10mの高さ。29日土砂崩れによる避難勧告で避難。電池切れで防災無線聞こえず。

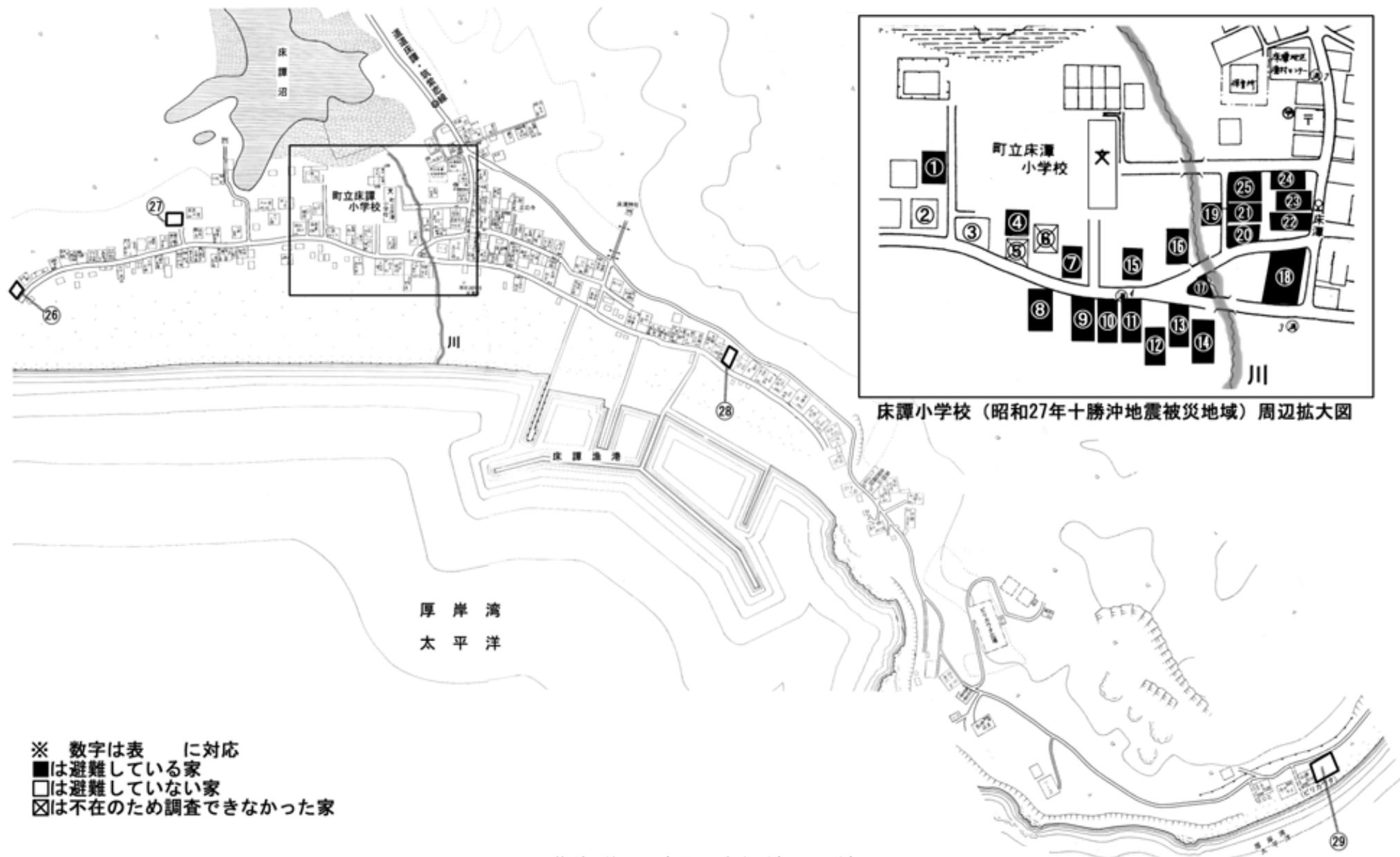


図 2.2 北海道 厚岸町 床譚地区の地図と
調査対象（床譚小学校周辺拡大図）

2.2 避難行動

2.2.1 全体的傾向

次に、住民の避難行動を、もう少し詳しく見ていく。

全体的傾向としては、避難した人が多く、しかも地震直後に避難した人が多かった。調査対象とした29世帯中、避難したのは22世帯。避難が確認できなかったのは7世帯にとどまった(うち2世帯は調査時不在)。とくに1952年(昭和27年)の十勝沖地震で大きな津波被害を受けた地区中央部では、避難しなかったのは<住民2><住民3>の2世帯だけで、ほとんどの世帯が避難していた。一方、これまで津波の被害を受けたことのない周辺部の世帯(<住民26><住民27><住民29>)は、避難していなかった。

避難のスピードも迅速な人が多かった。地震後すぐに家を出て、10分後には高台に到達しているようなケースを迅速な避難とすると、避難した22世帯中13世帯(<住民7><住民9><住民10><住民13><住民14><住民16><住民17><住民18><住民19><住民20><住民21><住民22><住民24>)が迅速な避難をしていた。一方、<住民1><住民15><住民23><住民25><住民28>の5世帯は、避難したのが地震後20 - 40分後と、遅れ気味であった。なお、これ以外の4世帯では避難したことは確認できたが、避難した時刻は不明である。

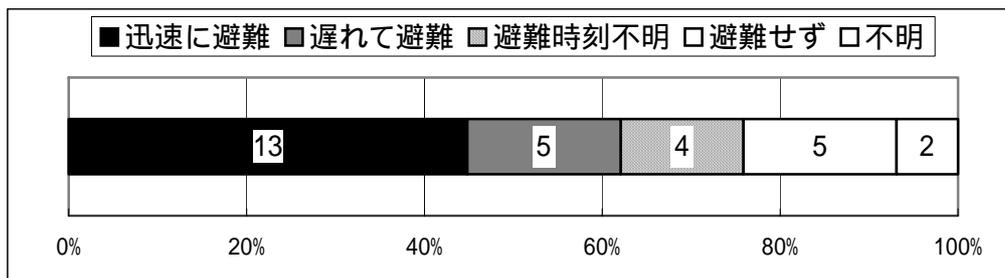


図 2.3 聞き取り対象住民(世帯)の避難行動

以上が避難の概要であるが、次に、以下、「迅速な避難のケース」、「避難の遅れたケース」、「避難しなかったケース」の3つのケースごとに、避難の状況および避難行動の背景にある心理について、分析していこう。

2.2.2 迅速な避難のケース

(1)家を出るまでの行動

地震が4時50分と早朝だったため、寝ていた人が多かったが、迅速な避難をした人たちは、揺れの最中に目を覚まし、すぐに簡単な着替えをして、避難の準備をしている。すなわち、<住民21>のように、揺れの最中から着替えを開始した人もいるし、<住民9>のようにパジャマの上から上着を羽織っただけの人もいた。あるいは<住民10>のように靴下をはかないまま避難した人もいた。

揺れから避難開始まで<住民 21>

質問：(地震が)起きたとき、揺れたときっていうのは。

住民 21 最初は小さかったベさ、そのときにあっと思って起きて、それから起きるわけだ。そしてまずは津波のこ
としか頭にはないから、もう先に逃げる用意をして。

質問： もう、すぐ起きた瞬間、地震だと思った瞬間に津波が。

住民 21 うん、その頭しかないから。もうここ川近いし、家の前はもう平らだから、来たらもう一気にいっちゃう
っていう頭しかないから、まずは着替えしか持っていないで、それで逃げるだけ。

質問： 寝てるときは、寝るためのラフな格好ですけれども。

住民 21 普通のね。

質問： それは着替えたりはしなかったですか。

住民 21 すぐはいたよ、着替えたよ。着替えてるときに、もう大きくなってたから。

質問： もう揺れが収まる前から、着替えていたと、逃げようと思って。

住民 21 そう。

(中略)

<住民 21> その後は車で高台っていうのかい、その方に。

質問： こっちの厚岸の方に。

<住民 21> いや、その上の方に兄貴いるんだわ、うち建てて。そしたら、そっちの高いところまで。

質問： そのときにはご家族一緒で。

<住民 21> みんな一緒。

揺れから避難開始まで<住民 9>

質問： 1階の、道路っぶちの方に寝ていて、一応飛び起きたというか、何もしないで。その後すぐどうしました？
揺れが収まってからは。

住民 9 着替え。着て、あとはもう逃げる算段。

質問： 着替えて、逃げる。

住民 9 着るもの、ある程度寝ているから、厚いものを上に羽織って。

質問： 羽織るだけですか。

住民 9 その後、たんすから出したとか何か着てはいない。普段こういうようなのを着て、あとは上に、言うなれば
オカン というか、そういうもので。

質問： 一応、着替えたわけですね。そのときにはもう、あ、これは津波だなと思って、逃げなきゃと思ったんで
すか。着替えて羽織ってるということは、もう逃げようと思って。

住民 9 やっぱりもう、あれだけの地震だから逃げるのがあれだから、津波どうであれやっぱり。

質問： 奥さんもそのころには、着替えているころには家の中に入ってきて、長靴を履いたまま。

住民 9 もう逃げると。

質問： 逃げよう。じゃあ、奥さんはその住民 9 さんを起こしてというか、連れてそのまま逃げようと思ったんで、
長靴で家の中に入ってきたと。

住民 9 もう脱いだって、うちの中、玄関に水槽あって、そういうのもみんな。

質問： めちゃくちゃですか。

住民 9 めちゃくちゃだから、そんな靴脱いでもあれだろうから。

質問： 出発するにはどれぐらい時間かかったんですかね、車で。

住民 9 収まってからやっぱり、5分やそこらはかかっているね。収まってから何だという。

揺れから避難開始まで<住民 10>

質問： じゃあ、お孫さんと。

住民 10 嫁さんが。

質問： それで、ここに戻ってきまして、その後どうされましたか、戻ってきて。

住民 10 もうすぐ逃げようと言って、車でもって。

住民 9 妻 何もものなんか持たないものね。

質問： 何も持たないで。倉庫にいらっしやったので、外に出る格好だと思うんですけど、お孫さんとかお嫁さんな
んかは。

住民 9 妻 パジャマの上だったね。

住民 10 パジャマだった。

質問： その上に何か着て。

住民9妻 着て。

住民10 着てたわ。

住民9妻 そうやって逃げているよね。

住民10 それで、知っているうちのところまで逃げたけれども、靴下を履いていないし、今度寒いと。

住民9妻 借りた。

住民10 気が付いてあれなんで、何も、そのままただ着て、パジャマの上に。

また、避難するときの持ち物も、<住民9>や<住民17>のように何も持たない人が多く、持っても財布程度<住民16>とか、手近のパンと飲み物<住民24>といった簡単なものであった。注目されるのは、<住民19>や<住民21>のように、ふだんから避難用の荷物をまとめて、枕元においている人が少なくなかったことである。

避難時の持ち物<住民17>

質問： 特にはないですか、とにかく何も持たずにパツと逃げると。

住民17 そう。みんな女の人は欲があるもんだから、貯金通帳だ、お金だ、何だかんだって、みんなパツと探すけど、もうそんなの持たなくてもいいって、貯金通帳なんかそんなものなくなってもまたすぐ発行できるんだから、何も持たずにすぐ逃げる。

避難時の持ち物<住民19>

住民19 これ、だから、この津波情報入る前に、バーツともう、うちのばあさんは、もうすぐ背負って行けるように準備はしているんだ、常に準備している。

質問： 日ごろからね。

住民19 俺はそんなもんやらないけど。だから食料でも、ある程度1カ月でも2カ月でもたてば、それを出して代わり買ってきて入れて、そうやって常にやっているんだ。

住民19妻 食料品から下着とか。枕元にも電池と、ラジオ付いた電池と。

住民19 だからリュックサックを背負えば、それでポツと行けるようにしているんだ。

避難時の持ち物<住民21>

質問： 着替えはいつも。

住民21妻 うん、ひとまとめにして、廊下、踊り場の階段の踊り場のところに、持ち出しやすいところに置いてあったのを、それただ1つ持って逃げたんだ。

質問： いつもそういうふう準備している。

住民21妻 いつもっていうわけじゃないですけど、でも。

住民21 前の地震のとき。

住民21妻 いや、この地震来る前にテレビで地震の話が結構出てたんですよ。それでお父さんが「用意しておけよ」って言ったのを、たまたま用意して、それをただ1つだけ持って。でも今はもう常備入れて、いつでもそれ1つ持っていけば、まずは着替える分だけは大丈夫なように。あと薬とか、カットパンとかそういう、ちょっとした薬品と。

質問： もうそこに入っているんですか。

住民21妻 そうです。電池とかも枕元に置いたり。

避難時の持ち物<住民24>

質問： 地震があった後に、すぐ下の方に2人とも下りて、それは避難しなきゃと思って下りて？

長女 そう、絶対に津波来ると思って、誰か絶対死ぬと思ったから、とにかく自分の大事なものをに入れて、そこら辺にあるもの、服を着て、「危ないから靴下をはけ」とか言って、靴下も全然ちゃんとはいていないけど、もうとにかく何でもいいからはけと言って、下に下りてきた。

住民24 大事なものって、何をもちましたか。

長女 絶対、友達に誰か津波で死ぬと思ったから、学校で撮ったカメラと、あとプリ帳、プリクラを張っているやつ、思い出に、死んでも大丈夫なように、それと、お金も大事だと思って、お金と、あと携帯をやっぱり連絡を取るようにと思って、携帯。

次女 でも、あれ電池なかったんだよね。

長女 電池、1個しかなかったけど、持たないよりはいいと思ってすぐ持って、とにかくリュックに詰め込んで、

そこら辺にある服を適当に着て。

長女 私はお金だけ。

住民 24 だから着替えをひと替わりと、結局、大事なものを詰めて、着替えをして下にもう1回下りておいでと。そうしたら、私は、とにかくスリッパを投げてくれと言って、スリッパを履かないと来られないから。

(中略)

次女 あと靴をちゃんと履けと言われた。

長女 とにかくパンとアミノサプリを持ってね。

住民 24 やっぱり避難をして、長いとおなかがすくでしょう、朝起きたばかりだから。だから結局、手ごろなものと云ったらパンだよ、パンと飲み物と。

このように、多くの人々がほとんど荷物を持たずに避難したり、揺れが始まってすぐに着替えを始めたり<住民 21>、近所に住む親に声をかけずに逃げたり<住民 16>といった状況を見ると、これらの人々は、津波に対してかなり切迫感・危機感をもっていたと考えられる。そして、揺れを感知してから避難決定までは何の躊躇もなく、ほぼ反射的に行動をおこなっている。こうした住民の中には、避難前にテレビ・ラジオ・防災無線などから情報を収集しようとした人はいなかった。彼らは大きな揺れがあったらすぐに避難しようと考えているので、避難の決定にこうした情報を得る必要がなかったのである。また地震の6分後に流された防災無線の放送を聞いた人もいなかった。戸別受信機の予備電池が切れていた可能性も考えられるが、放送前にすでに家を出ていたためとみられる。

避難のタイミング<住民 21>

質問： 放送はお聞きになりました、その日は。

住民 21 まあ、相当びっちり。これと、消防団の方、出歩いているからね。

質問： そのタイミングとしては、ここで避難を取りあえずしてくださいみたいな呼び掛けを聞いて、出てるっていう時間的なタイミングになりますかね。

住民 21 いや、その前、その前。

質問： その前ですか。

住民 21 もう放送かかる前だもん。前にはもう逃げているっていう状態。とにかく地震が収まったら逃げてると。

質問： 早いですね。

住民 21 だって早く逃げないと死んじゃうんだよ。

(2)避難手段と避難先

避難するときには、多くの人々が車を使用し、地震後10分ほどで高台に到達している(<住民 9><住民 10><住民 13><住民 16><住民 17><住民 21><住民 22>)。避難訓練では徒歩による避難が決められているが、車で避難すれば避難先までの移動が早いこと、屋外避難時に暖をとれること、避難後の移動等に便利なこと、プライバシーが守られること、津波から車を守れることなどから、多くの人々が車による避難を選択している。もちろん<住民 14><住民 18><住民 19><住民 24>のように、徒歩で高台に避難した人もいる。そうした住民の1人である<住民 24>は、車での渋滞を避けるために、徒歩で避難したという。

避難の手段<住民 24>

住民 24 そうだね、わりと私はあまりどきどきも何もしないで、とにかく、少し揺れて、これは、大きくなるかなと思って、起きようと思っている寸前だから、自分で起きて、まずたんすとかを押さえたんだけど、そっちに寝ているから、よくドアとかが開かなくなるというから、まずドアを開けて、来ようとしたら、その茶たんすの中のものが、全部ガチャガチャ落ちてきちゃったのさ、瀬戸物が。そうしたらもう行かれないでしょう、足、はだだし、そこでじっとしていたんだよね。

上で子供たちが寝ているから、あまり大きい声を出すとびっくりしちゃうから、だから少し黙っていて、そうしたら下りてきたから、そうして、すぐ着替えをさせて、私も着替えをして。だから何も片付けなくて、ただ本当に大事なものをちょっと持つぐらいで、それでただ飲み物とパンとかそれを持って、そして徒歩で、車を使っても込んだりするとだめだなと思って、車は置いて、徒歩で避難所ってあるでしょう、そのの上にあるんだ、神社のちょっと下の方に、そこに行ったのね、そのときは一番乗りだったね。誰もいなかったね。

A A 大していなかったよね。

住民 24 それと私たちがそこへ上がっていく、友達のうちの家族が上がってきて。

A A 山まで登ってきてる人、少なかったよね。

住民 24 そうだね。

A A ほとんどその上の道路のところさ。

住民 24 車が、おそらくずらーっと並んだと思うんだよね。結局、車が流されてはもったいないとやっぱり思うでしょう、みんな。だから車をとにかく上に上げなきゃということ、上の道路に。だから上の道路は、わりと結構いっぱいだったみたい。

避難先としては、<住民 9><住民 22>のように屋外の高台か、親戚・知り合いの家（<住民 16><住民 17><住民 21><住民 10>）が多く、町が指定した避難場所に避難した人は少なかった（<住民 24>）。町の指定した避難場所は、床潭では<住民 27>の家の裏の小山（写真）と床潭神社付近にある。町で指定した避難場所のほとんどは屋外であるために、暖がとれず、知り合いの家に行くか、車の中に留まる人が多かった。



図 2.2 床潭地区の津波避難場所（<住民 27>裏の小山）

また、中には<住民 19>のように近所の高台に避難用の小屋を造り、そこに避難した人もいた。

避難の手段<住民 19>

質問： じゃあ、今回もやっぱりもう地震だって揺れたら、もうすぐに逃げられたわけですか。
住民 19 うん、今回は。
住民 19 妻 逃げるのに、揺れが終わってからにしないで、危ないから。
住民 19 連絡もらう間もない、町の放送も入るけど、だけど、そんなもの待っていると、自分は浜辺にいるんだから、一番様子分かるんだから、もうすぐに今度、この持つ物、ばばが用意してあるから、それを2人して連れて背負って、俺はそこに小屋造ってあるんだ、山に避難所として。
住民 19 帰るときに見えるさ、ポツンとあるから。
質問： ああ、そうなんですか。
質問： 個人の避難所ですか。
住民 19 妻 自分のところ。
住民 19 うん、6畳間くらいの小屋が造ってあるんだ。
質問： どちら辺ですか。
住民 19 妻 いや、もうここ行けば、ずっとすぐ。
住民 19 床潭、床屋さんあるべさ。床屋さんのすぐ上の方に。
質問： あるんですか。
住民 19 妻 向かいの方に。
住民 19 床潭の入り口のこの上に俺、小屋造ってあるんだ。

(3)習慣化した避難

迅速な避難のケースで特筆されるのは、避難が習慣化している点である。

すなわち、ほとんどの世帯(<住民 9><住民 10><住民 16><住民 17><住民 19><住民 21>)では、津波から避難したのが、今回が初めてではなく、1993年釧路沖地震や1994年の北海道東方沖地震でも避難していた。これらの地震では津波に襲われず、結果として避難が空振りに終わったことになったが、それにもかかわらず今回も避難しているのである。

習慣化している避難 <住民 10>

質問： それ1台で、お孫さん2人と4人で逃げたというわけですね。そしてどこへ向かったんですか、避難するところは。
住民 10 避難をする場所はそこにあるんだけど、知っているうちのね。床屋さんの向かいを上げていったところにFさんがあるんだよね。
(中略)
住民 10 ここに、山の上だから。そこは知っているうちで、前のときもそこに。
住民 9 妻 そこに避難をしているの。
住民 10 逃げさせてもらったんだよね。
質問： そうですか。
住民 10 だから、とにかくそこに上がっていきなという感じで。
質問： 避難場所ではなくてFさんのところへ逃げたと。前の地震というのは東方沖のときにそこへ逃げたということですか。Fさんのお宅へ着くまでに地震が起こってから、だいたいどれくらい時間がかかっていましたか。
住民 9 妻 10分もかからないでしょう、すぐだものね。

習慣化している避難<住民 21>

質問： 十勝沖の 27 年の後、何回か地震があって、この辺でも警報とか出てたんですが、そういうときにもやはり素早く逃げていたんでしょうか。

住民 21 逃げてたね、やっぱり高台に。

質問： この辺だと釧路沖地震とか十勝沖 東方沖地震ですか、最近ありましたね。

(中略)

質問： 10 月のころ(東方沖地震)は、やはり逃げて。

住民 21 逃げた。逃げたよな。

住民 21 妻 逃げた。

(中略)

住民 21 1 月(釧路沖地震)は羅臼の方に稼ぎに行ってたから。

質問： そのときにはご主人はいらっしゃらなかったと。ご家族の方は、そのときは逃げましたか。

住民 21 妻 そのときも逃げましたね。

質問： そうすると大きめの地震があったら、素早く逃げるというのが、もう毎回のことという。

住民 21 そうだね。うちにはいないね、地震来ては。

質問： だいたいそのお兄さんのところに行くっていうのは、やはり定番ということになりますか。

住民 21 うん。どうしても子供たちがいるから、どうしても。そして高いし、まずはうちだからさ。

習慣化している避難<住民 16>

質問： そうすると、その後も何回か地震がありましたけど、そのたびにやはり避難はしていらっしゃるんですか。

住民 16 妻 そうですね。

質問： 釧路沖とか東方沖とかありましたから。

住民 16 妻 そうです。

質問： そのときも、いつもこの弟さんのところに。

住民 16 妻 そうです。

避難が習慣化している人たちは、親戚知人宅など避難する避難先が決まっている（あるいは前述のように避難小屋を建てた人もいた）。また避難持ち出し品をあらかじめ準備している人もいる。これらの人たちは、緊急時に非常持ち出し品を探したり、避難先をいろいろ思案する必要がないため、いざというときにも迅速な避難が可能である。

2.2.3 避難が遅れたケース

この節では、避難が遅れたケースについて考察を行う。

津波の避難に関しては、避難のタイミングによって生死が分かれ、避難の遅れが人的被害につながりかねない。以下、避難が遅れた住民の代表的な事例を紹介する。

<住民 1>は避難を行ったが、避難を開始した時間は地震の約 30 分後であった。<住民 1>は、曾祖母とその息子夫婦、孫夫婦、その弟、曾孫 3 人の 4 世代からなる 9 人家族で、高齢者と乳幼児の避難準備に時間がかかり、地震から避難を開始するまでに 30 分を要している。このように、高齢者や幼児のような災害弱者（災害時要援護者）が家族にいる場合には、避難が遅れる可能性がある。また、<住民 1>の家族は家族そろって自家用車で避難したため、このように家族全員でそろって同時に避難しようとする、避難に時間がかかる

ことが多い。

<住民 15>は、元村議を勤めた経験もある建設事業・トラック事業を経営する 80 歳代の老夫婦二人の家族であるが、避難開始は地震が発生して約 20 分後であった。自宅は砂地の上の地盤の弱い場所であるため、自宅は大きく揺れ、戸棚のガラスが割れたり、電子レンジが 2 m 近くも飛んで落ちるといった被害があった。就寝中には、常に枕元に防災グッズを置いているという津波防災意識の高い家庭であるが、それでも避難を開始したのは、テレビをつけて、警報を聞いた後であった。警報を聞いて切迫感を感じ、持ち出したのは財布だけであったにもかかわらず、それでも避難開始に 20 分が経過してしまった。この地震が発生したのは明け方だったということと、高齢者の体力を考えると、やむを得ない側面もある。この二人は、近所の少し高地にある親戚の床屋まで徒歩で避難し、そこで 3 ~ 4 時間過ごしている。津波の避難行動のパターンには、避難について自分の経験や知識だけで判断する「自己判断型」、行政の避難勧告やマスコミからの情報などを参考にして避難する「情報誘発型」、まわりの住民など他者の動向を見てから判断する「他者追従型」があるが、この<住民 15>は「自己判断型」にあたる。

<住民 23>は、かつて商店を営んでいた一人暮らしの中高年女性であるが、地震発生の約 40 分後に避難している。地震に気づいてテレビをつけ、防災無線を聞き、消防広報を聞き、さらに自宅から外の周囲の反応を見てから、避難を決意した。その間、40 分が経過している。そして、自家用車で一人で道路の高台に避難したが、その途中で、近所に住む<住民 25>の中高年夫婦が歩いて避難しているのを見かけ、車に乗せて避難している。

避難が遅れたケース<住民 23>

私はまかなったり、そこら辺の電気を見たり、ストーブを見たり、そうやっていました。そしてこの犬ね。津波警報だって車がどんどん町の方に行くんだけど、いや、車出すといたって車ではなと思いつつ、一応シャッターを開けて、でも車はエンジンはかけましたよね。 だけど私は逃げなかったの、まず初めは。初めは少し避難しなかったんだけど、あんまりにも 消防署の方が言って歩くし、あたりを見たら誰もいないんだよね、そこの近所に人が。みんなそこら辺の人方早いのもう地震になったらすぐ避難するの。前に何か津波が来て、怖い経験があるといつて、私はそのときここにいなかったから。みんないなくなったし、何かあったら困るなと思って、一応、今度車で、山の上まで道路のずっと高いところまで避難したんです。

この発言からもわかるように、女性の一人暮らしでも、地震が来たらすぐ津波を警戒して避難するという習慣がない場合には、テレビ、防災無線、広報車などからの情報やまわりの住民の反応を確かめないと、すぐに行動できない場合がある。彼女のような避難行動は「情報誘発型」と「他者追従型」の混合パターンである。

<住民 28>は、昆布漁で生計を立てる 6 人家族である。夫婦と、その長男夫婦、娘、孫一人の 6 人家族である。この家庭には、自宅前の築港に昆布漁の漁船、厚岸町湾月にサンマ漁、シシャモ漁の漁船 1 隻を係留している。地震が起こったのは、明け方であったが、す

で住民 28 の妻は、自宅倉庫で昆布の作業を行っており、地震の揺れの最中に外に出て、家族を起こした。地震直後、長男と孫は厚岸の湾月にある漁船を沖出しするために自家用車で出かけた。漁師であるため、津波は「押し波からくることがある」ことも知っていたが、津波がくるまである程度時間があると考えて、まず自家用車 4 台を自宅の裏の高台に上げ、漁の道具などの片づけをしてから避難を開始している。

避難が遅れたケース<住民 28>

地震からなら、やっぱりかご片づけた。あっちの船を網かけてきた。実際に上に上がったのは、40分や50分かかってるな。(中略)俺は最後までね、かごが散らかっているから、それを全部片づけてさ。だから俺が一番最後だったんだ、上がるのはね。

こうして一連の行動を行った後、家族で徒歩による避難を開始したのは、地震発生後約 40～50 分後のことであった。この<住民 28>の場合も「自己判断型」といえる。

このように避難が遅れた家庭の代表的なケースを概観したが、そこからいくつかの教訓を引き出すことができる。

高齢者だけの自力避難にはかなりの時間がかかる

大家族の場合、家族全員がそろって避難するために準備に時間がかかり避難が遅れる

特にその家族に、幼児や高齢者などの災害弱者がいる場合にはさらに時間がかかる

一人暮らしの場合、周囲の反応を見ないと決断がしにくいため避難が遅れる

家の片づけ、家業の道具の片づけ、車や重要家財の対応をしていると避難が遅れる

これらの傾向を行政が熟知した上で、津波防災対策を行う必要がある。特に、避難指示の際には、上記のような具体的な問題が解消されるような指示が必要である。

2.2.4 避難しなかったケース

次に、避難しなかった人々のケースを見ていくことにする。

今回のヒアリング調査では、悉皆調査対象地域(厚岸町立床譚小学校周辺)の 25 世帯中、避難しなかった人がいたと回答した世帯が 2 世帯あり、また、その他の地域でも 3 世帯で避難しなかった人がいたという回答があった。

たとえば<住民 2>宅では、「住宅が建っている場所が高い」という理由から、また、<住民 3>宅では「たいした地震ではなかった」という理由で避難しなかったという(ただし、<住民 3>宅のヒアリングは十分な話を聞くことができなかったため、回答の信頼度は高くない)。

他の地区では、床譚地区西端の<住民 26>宅、<住民 26>宅と床譚小学校の間にある<住民 27>宅(町内会長)、床譚地区東端の住民 29>宅の各世帯で避難しなかったという回答があった。

<住民 26>宅は、住宅の目の前が海で、また住宅の裏側は急斜面の裏山が迫っているという立地条件であり、外見から言って、地震や津波に対して非常に危険な場所である。<住民 26>宅は夫婦、長男、孫 2 人の 5 人家族であるが、孫は裏山へ避難させたものの、夫婦と長男は避難しなかった。また、孫が裏山に避難したのも、地震から 30 分後のことであった。避難しなかった理由は、これまで住宅が津波に襲われた経験がないことや、いざとなれば（津波が来れば）裏山に逃げればよいと考えていたことなどである。

<住民 27>宅は、夫婦、息子夫婦、娘、孫の 5 人家族である。<住民 27>宅では、消防の広報車で津波警報を知り、また、地震 30 分後には役場の人から避難を呼びかけたのに、避難しなかった。その大きな理由は、<住民 26>宅の立地条件にあり、このお宅は、地域の中では比較的高い場所にあり、また住宅の裏山がこの地域の公式な津波避難場所として指定されている。また、高い場所にあるということから、自宅前の広場にこの地域の住民が避難していた。住宅がこのような場所にあるため、津波の被害はないと考え、避難しなかったようである。また、昭和 27（1952）年の十勝沖地震をはじめ、これまで津波被害の経験がないことも、避難を考えなかった理由のようである。

<住民 29>宅は、夫婦、娘夫婦、孫 3 人の 7 人家族であるが、誰も避難しなかった。その理由も、やはり住宅の立地条件にある。<住民 29>宅は、海際にあるが、海面から約 10 メートルの高さの場所にあり、住宅まで津波はこないと考えているため避難しなかったという。そして、これまでに津波の被害経験がないことも、この考えを補強しているようである。

2.3 避難行動の背景

次に、こうした避難行動の背景となる心理状況を見てみよう。迅速な避難はなぜ可能となり、避難の遅れはなぜ発生したのだろうか。このことを、避難ケースごとにみてみよう。

2.3.1 迅速な避難のケース

(1) 津波経験と危険地域の感覚

すでに述べたように、迅速な避難をしたのは床潭地区中央部に住んでいた人たちであり、彼らは相当な危機意識をもって避難していた。その危機意識の最大の原因は、彼らが「今住んでいるところが、津波の危険地帯である」という明確な意識を持っていたことである。そしてその意識の源は、昭和 27 年の十勝沖地震の時に、現在住んでいる場所（あるいはごく近く）まで津波が来た、という事実である。

こうした危険認識は、自分や家族の津波経験に裏打ちされている。たとえば<住民 17>は叔父を津波で亡くしているし、<住民 9><住民 16>などは小学生の時に自ら津波から逃げた経験がある。

昭和27年の地震で家族が被害を受けた住民<住民17>

住民17 うちらはね、うち小さいときに、俺が本当の生まれてすぐのときに一度ここさ津波が来てるんです。
質問： 十勝沖地震ですかね。
住民17 十勝だね。
質問： 昭和27年の。
住民9 そうそう。そのときにうちのじいさんの一番兄が亡くなったんです、津波で。
質問： おじいさんの。お父さんのお兄さん。おじさんがですか。
住民17 そうそう、おじさん。だからそういう経験があるものだから、教えられてるものだから、地震来たといったら、もう津波警報も何もない、大きい地震来たなと思ったら、もう津波という考えがあるものだからすぐ逃げてしまう。
質問： そうだったんですか。まだお小さいころだったんですか。
住民17 そうそう、全然物心分らんようなときにそういうのが来てるの。
質問： それでおじさんというのは津波で流された、逃げ遅れたんですか。
住民17 そうそう。
質問： そういうことがあって、すぐに逃げるという。
住民17 そうそう、そういう習慣がもう付いている。うちらはね。それと川があるものだから。それとここは海よりもこっちの方が低いというような、したもんだからもう。

津波から逃げた経験をもつ住民<住民9>

住民9 そんな。我々、それ以上のあれは経験しているから、小さい。
質問： 十勝、27年の。
住民9 やっぱり小さくても、まだ音が出なくてもそういうのは恐ろしいっちゃうことを。
質問： 27年のときはどんな恐ろしい経験だったんですか、住民9さんご自身は。覚えていらっしゃるでしょうか。
住民9 そう何というあれでもないけど、やっぱり地震というあれになったら、もう逃げるというものが、もう大きい地震になったら、もう津波という頭があるから。
質問： やっぱり親御さんとかが、津波は怖いから逃げるとか、そういうふうな話もあったんですか。
住民9 やっぱり我々小学校かそこらのときは、ここにいたからね。我々、あれの3月、小学校のときは走ったからね、津波で。沼、走って逃げたもんだから。
質問： 沼の方まで。
住民9 沼に氷が張っていたから、そのころは。そういう経験があるから、やっぱり大きい地震というものになれば、津波というのがあるから。

また、自ら津波を経験していない人も、<住民17><住民10><住民22>などは親からの伝聞によって、自分の住んでいる場所の危険性を認識している。

昭和27年十勝沖地震の伝聞 <住民17>

質問： そころはまだ27年のころは、ご主人もまだ。
住民17 分からない、分からない。
質問： そういう話っていうのは、何かご家族とか近所の人から聞いているわけですか。
住民17 いや、まずね、この川伝わって船も一緒に流れていったとかっていうから。
質問： もうご両親なんかもずっとここにいらした？
住民17 元はここでないけど、近くにいたんだけど、それは言ってるから。
質問： じゃあ、親御さんから、よく昔の話は聞いていたと。
住民17 うん。

しかし、かつて津波から避難した経験があっても、その体験をしたのが今住んでいる場所でないために、津波危険地域に住んでいるという自覚がわからず、避難しなかった<住民26>の例もある。したがって住まいが危険である、という認識は津波経験だけによるものでは

ないと考えられる。津波で恐ろしい体験をしたというだけでなく、実際にその場所が津波に襲われた歴史や、川沿いにあるなど、住んでいる場所の特性が大きいように思われる。

また、学校教育もそうした危険認識に貢献している。<住民 24>の長女と次女は小学校で学習し、また学校で津波の避難訓練をしていたので、地震があったら津波に注意しなければならない、という意識を持っていた。

学校教育と津波危険意識<住民 24>

質問： 地震が来たら津波だというのは、やっぱりそう思う？

住民 24 昔から結局ここは……

次女 学校で勉強していたから。

長女 学校の避難訓練も、やっぱり津波ということで。

質問： その小学校？

長女 私は中学校だけど、小学校のときから言われていたから、地震が来たらもう津波だって。

住民 24 ここは海がそばだから、まず津波だね。地震よりも津波でしょう。結局、ここで地震がなくても、昔の子り地震というんですか。あれでも津波が、ここより浜中の方が強かったけど来たでしょう。向こうからの津波が来たから、だからやっぱり津波がおっかないんだよね。だから昔の人は、結局津波、津波という頭があるから、地震が来たら、とにかく津波というのがあるでしょう。

(中略)

住民 24 昔の経験上、結局こここのそばがもう川でしょう、ここは浜で。これがうちの実家の浜なのさ、川のすぐここが。だから川伝いに来るからおっかないというのは、昔から言っていたよね。

質問： それはやっぱりそう覚えている？

住民 24 うん。

次女 ばあちゃんが言ってたんだよね。

質問： それは聞いたことはある、川のところとか？

長女 微妙。

質問： あまり川という意識はない？

長女 川はない。

質問： ただ、津波はここは怖い。

長女 でも学校では言っていた。昔すごかったって、この川が。

(2)奥尻島を襲った津波のインパクト

昭和 27 年の十勝沖地震の経験が生きていたといっても、避難がこれほどまで迅速だったのは、それ以外の要因によるところが大きい。というのは、昭和 27 年の時は地震のおよそ 30 分後に津波が襲っており、その経験からは、それほど避難を急ぐ必要はない、と多くの人が考えても、不思議はないからである。

迅速に避難した人たちがしばしば口にしたのは、1993 年に起きた北海道南西沖地震の奥尻島の記憶であった。この地震では津波により 202 名の犠牲者が出たが、震源地に近い奥尻島では、地震後わずか 5 分程度で津波が来襲している。床潭の人々はテレビや新聞などの報道に接して、自分の住む所にも地震後すぐに津波が襲うかもしれない、と考えるようになったと思われる(<住民 10><住民 21><住民 9>)。自らが津波危険地域に住んでいるという自覚を持つ人は、奥尻のことを他人事には感じなかった。それゆえ、彼らには正常化の

奥尻島の津波によって変わった住民意識<住民 10>

質問： そのときに避難をしたのは、やはり十勝沖地震とかチリの地震があったから、それとも、前年の奥尻島の地震があったからですか。

住民 9 妻 奥尻島がね。

住民 10 あれね。

質問： 奥尻ですか。

住民 9 妻 だから漁村センターに避難した。

質問： 漁村センターに、あそこにありますよね。奥尻のやっぱり印象が強かったと、やっぱり地震の後には津波が来ると。

住民 10 その前まではうちのお父さんが、地震になっても 30 分は津波が来ないから大丈夫だと言っていたんだよね。

質問： 30 分は来ないと。

住民 10 でも奥尻はもうすぐ来たから。

住民 9 妻 奥尻は地震の後 6 分か 7 分でぱっと来たらしいから、それが頭から離れないの。

住民 10 すぐ逃げると。その前までは、地震が来てもまだ 30 分は津波は来ないから大丈夫だというんだよね。

質問： やはり奥尻の地震、あれは日本海側ではありますけれども、地震の後にはすぐ来るといったのは、やっぱりあの奥尻が一番。

住民 9 妻 奥尻がやっぱりあるから、意識に思っているね。

住民 10 だからこの度もすぐ津波と……

(中略)

住民 9 妻 だからうちのお父さんは、もう今は、前は地震が来て津波警報が出たぞといえば船を巻きに行ったものですが、みんな、浜に明かりがついて、夜中にみんな船を巻いているよという感じ。

質問： 揚げるとか、縛るとかして。

住民 9 妻 揚げたとかロープで縛ったりとかして。今は誰もそうやってやらない。

住民 10 妻 やらないね。

住民 9 妻 それも奥尻。

質問： 奥尻ですか。

住民 9 妻 うん。船を見にいったら絶対いいことをしないから、津波が来たら船どころではないと、体一つで逃げよう。

奥尻島の津波によって変わった住民意識<住民 21>

質問： これは素早い行動ですね。

住民 21 まあ、奥尻のあれがあるから、何分とも言われなし、まずは。

質問： やっぱり奥尻の記憶っていうのが。

住民 21 はい、海近いからさ。よその人はどうであれ、まずは津波のことしかないから。

(中略)

質問： そのときはたぶんもう少し時間が、もう少しというか時間が 30 分ぐらいたってから来たらしいんですけども、もう素早くっていうのは、これはやっぱり奥尻の記憶ですか。

住民 21 だべね。津波来てから逃げたって間に合わないもん。

奥尻島の津波によって変わった住民意識<住民 9>

質問： 津波が来ると思ったときに、船をどうしようっていう考えはなかったんですか。

住民 9 そんなことやっているより、もうそういうのはあれでしょう、そういうところに行って、もし津波とか来たということになれば、そんなことやって死ぬより逃げた方がいい。

質問： じゃあ、もう全然そんなことやっている場合じゃないと。

住民 9 言うなれば、利尻とかああいうようなことを考えればさ。

質問： 利尻というのは。

住民 9 いや、それ津波でさ。

質問： 奥尻ですか。

住民 9 奥尻とか、ああいうことを考えれば、そんな船なんてあったって。ある程度揚げてあるときは縛ってあるんだし。流れたといたって丘に揚がってくるから。縛りに行って、もしものことがあったらどうにもならないし。

偏見が働かず、テレビで見た他人の体験を真摯に受け止め、これまでの態度や行動を変化させるインパクトを持ったのである。

(3)情報とその他の要因

すでに述べたように、迅速な避難をした人は、津波警報や町の避難勧告を聞く前に避難しているので、これらの公的情報が避難を促したという形跡は見られない。地震直後に停電したということもあるが、迅速に避難した住民は反射的ともいえる早さで避難しているので、家を出る前にそうした情報を得る時間がなかったのである。

もちろんその後、避難中に車のラジオなどから津波情報を聞いたり、広報車から避難勧告を聞いている人は少なくない。ラジオからの津波警報は、すでに逃げた人にとっては、帰宅のタイミングをはかるために使われたようであった。たとえば<住民9>はカーラジオで津波警報が解除されていない状況を聞き、帰宅を遅らせた。だとすると、津波到達後は、避難している人に対して、避難し続けるように呼びかけることも、マスメディアの重要な役割であるといえるだろう。

避難途中で津波情報を聞いた<住民9>

質問：	津波警報はどのように最初はお知りになりました？
住民9	最初は、車のラジオ。
質問：	車のラジオね。
住民9	ラジオでもって。言うなれば、解除ならぬから。
(中略)	
住民9	パンとかそういうのを買って、子野日公園で休憩を取った。
質問：	また公園に行くと。そうすると、それは結構長い時間行ったり来たりというか、ここまで戻って来てないわけですね。
住民9	いや、来てない。やっぱり解除になってないからね。神社の方の高い道路、あそこにいる人たちは結構津波のあれを見ているわけ。そうしたら、それからある程度、結構、あれ何時ごろだろう、7時半か8時ごろかな。今度は神社の方のあそこへ、俺が様子を見に来たんだ、どんなような状態になっているかなと思って。

一方、<住民24>のように、近所の人々が避難するのを見て、自らの避難を決断した例もあった。

近所の人々の避難を見て<住民24>

着替えをして、こっち側に来て、逃げようかな、どうしようかなと思ったときに、車がバンバン走るわけさ、避難するのに走るの。避難するのか、ここに車を置くのかは分からないんだけど、とにかくバンバン走るわけ。みんな避難しているのになと思って、避難したの。その後、私は大した、ここまで津波が来るんじゃあ、床潭は全滅だと、みんな一緒に死ぬだろうと思って、避難する気は大してなかったの。だけど車がこんなに行っているのなら、やっぱりやばいかなと思って行ったのさ。
--

(4)災害文化

床潭地区の、特に津波危険地帯に住む人にとっての災害文化といえば、すでにあげたように、「地震が来たらたとえ空振りになっても(津波が来なくても)繰り返し避難する」ということである。

そのほか、津波に関する言い伝えとしては、「津波はまず引き波から来る」というもの

があり、この話はほとんどの人が信じているようであった。その後奥尻島の災害があったが、この信念は変わらないまま、「津波は引き波から来るが、地震直後に（押し波から）来ることもある」と昔からの信念の上に、新しい知識が上書きされているようであった。それでも、結果としては、すばやい避難につながったのだが、もし奥尻の記憶が薄れると、以前の信念だけが残ってしまうという危険もある。

引き波から津波が始まるという<住民 21>

質問： 地震の津波が来るときには、まず引き波から始まるなんて話をする人もいますが、それはどうでしょう。
住民 21 そうじゃないかい、引くよね。この間あたりでも引いたときに、昆布採りの船、アンカーってあるんだけど、それは引いたときにアンカーごと引けちゃったんですって、利かないから。それで船よけてもらって、かっぱがったんだ。
質問： 何か 2 隻ひっくり返ったっていうのは、その引きで。
住民 21 うん、その引き波のときに、アンカーも引っ張られたっていう感じだね。それで船がよけてもらって、かっぱがったらしいね。
質問： だから海を見ていて、引き波を注意してて、引き波になったら逃げるなんていう人もいたんですけども、どうでしょうかね、そういう。
住民 21 そんなでっかくした岸壁行って、海眺めてる状態なんかないべさ。
質問： とにかくいつ来るか分からないから、早くっていうことですね。
住民 21 そうです

また津波に襲われる前には、「ゴー」という音がする、と考えている人もいた。しかし<住民 9>はそうした話を前提としながらも、昭和 27 年の十勝沖の時には音は鳴らなかった、というようなことを発言している。

津波が襲う前に音がするという<住民 22>

それと、俺もずっとここであれしているあれでは、津波のあれは、恐らくまず潮が引くのと音が鳴るべと、海の津波があれすると音が鳴るなど。ゴーというのは、そういう音がしたら、これはやばいな、ぶっ飛ばないとだめだという感じは、いつも、意識はしていないけれども。

津波が襲う前に音がするという<住民 9>

質問： 十勝、27 年の。
住民 9 やっぱり小さくても（音がする）まだ音が出なくてもそういうのは恐ろしいっちゃうことを。

2.3.2 遅れた避難のケース

それでは、避難を遅らせたケースの背景にあるものはいったい何なのだろうか。その避難の決断には、(1)過去の経験、(2)情報伝達、(3)災害文化などが、大きな影響を与える。これらの変数が、避難の遅れにどのように影響したのであろうか。

(1)過去の経験

避難が 30 分後になってしまった<住民 1>は、家族内で祖父母と曾祖母が、昭和 27 年十勝沖地震の津波を経験していた。それゆえ、地震が来たら津波を警戒して高台に避難するということは、知識として家族内で共有されていた。だからこそ家族で避難したのである

が、しかし、その経験者である祖父母と曾祖母がすでに高齢化しているため、むしろ災害弱者として避難を遅らせる要因となっていたことがわかった。

また、<住民 28>は昆布漁を家業とし、自宅前には漁港が広がる海沿いに住んでいる。昭和 27 年の津波でも、津波が自宅に押し寄せ、自宅が全壊している。その際に<住民 28>は、自分も津波に巻き込まれたが助かり、津波で逃げ遅れた人を救助するという経験をしている。このような津波経験をしていながらも、「津波が来るのは地震が起こってからかなり時間がたってからである」という偏った固定観念から、今回の地震後も津波が来るまで 30～40 分は大丈夫だと思いこみ、避難の前に家族で車や漁の道具の片づけを行っていた。

過去の経験は非常に重要であるが、このように数少ない過去の経験事例から間違った経験則が引き出されることがあり、過去の経験が一様に津波防災に役立つとはいえないことは注意すべきである。一般に、災害経験は過去の災害と同規模かそれよりも小さい災害には有効であるが、過去の災害を大きく超える規模の災害が襲ったときにはかえってマイナスになることがある。典型的なのは、1993 年の北海道南西沖地震における奥尻島のケースで、10 年前に襲った日本海中部地震の経験から、津波が来るにしてももう少し時間的余裕があるだろうとか、10 年前はここまでこなかったから今回も大丈夫だろうとか考えて、避難が遅れたり、避難しなかったりして被害が大きくなったケースがあった。つまり、過去の経験も重要であるが、それだけにとらわれず、科学的知識に基づいた正しい防災情報や防災知識を啓発・広報することは重要であるといえる。

津波経験と避難<住民 28>

やっぱり親から聞いてやっぱりそういう経験してる。経験というか、それに昭和 27 年の年にそういうことがあったもんだから、それらはやっぱりね、だから今回も、これだけでいけば（津波が）必ず来るぞと。どんな程度来るか分からないけど必ず来るぞとは言って。だからやっぱり来たことは来たんだから。（中略）（津波が来るタイミングは）そうだな、やっぱり今までからいけば、30分、40分だな。

そこらあたりが目安だと思うな。

また、<住民 15>は、昭和 27 年の津波で自宅が全壊するという災害経験を持っている。彼は長年村議として防災対策、津波対策に努めてきたから、津波への意識は非常に高く、就寝中は常に避難用の防災グッズを置いて寝ている。それほどに津波を警戒して避難することを心がけていたが、今回の地震の時、80 歳代の老夫婦がそろって避難の準備をして避難をするために、20 分の時間を要してしまった。

以上考察した 3 つのケースは、いずれも過去の津波経験が素早い避難に結びつかなかった事例である。津波からの避難は時間との戦いであり、いくら避難の意思があっても、その準備中に津波が来たら意味がないのである。

以上は、避難の経験があっても、それが素早い避難に結びつかなかったケースである。しかし一方で、津波の経験がない住民にとっては、地震後に素早い避難を行うことは、ずっ

と困難なようである。たとえば、<住民 23>は一人暮らしの中高年女性であるが、これまで津波災害の経験が全くなかったため、地震が発生した後、津波が来ることをあまり具体的にイメージできず、そのためにテレビや防災無線の情報を頼りにするしかなかった。そうしているうちに、消防の広報を聞き、周りの家庭の反応を見て、自分も避難したほうがいいのではないかと判断して、やっと 40 分後に避難行動を行ったのである。

津波経験がなかった<住民 23>

しょうがないね、津波もおっかないけどね。私はそういう怖い目に遭ってないから、私方は。だから、すぐ避難するっていう気持ちにならないっていうのかい。みんな、あたりの様子を見ながら避難するっていう感じ。
--

このように、津波経験のない住民にとっては、地震後に防災無線や消防広報車などを使った素早い避難の指示が重要であり、同様に普段からの津波についての啓蒙のための広報が必要であることがわかる。

(2)情報伝達

そこで、津波防災対策には素早い情報伝達が必要になる。

<住民 23>は、地震発生時には眠っていたが、前日、ふと何か悪い予感がしてその夜だけは枕元に着替えを用意して眠っていたという。その予感が的中して、地震が発生した。彼女はすぐに飛び起き、廊下に飛び出して呆然と立っていた。その後、テレビをつけてニュースを見た。そのニュースを見ながら着替えをしていると、防災無線が鳴り、彼女も状況を認識する。はじめは避難するつもりはなかったそうだが、消防の広報車の音が聞こえたため、外の様子を見ると、周りの人々が避難している様子だったため、自分も避難することを決意した。そして、自家用車のエンジンをかけ、家の中の電気を消したり、ガスを止めたり、いろいろなことをしているうちに、車で家を出たのが 40 分後くらいになってしまったという。車で避難している途中で<住民 25>の夫婦をひろい、道路の高台で車を止めて避難していた。そこには車が 10 台ほど停車していて、その避難した住民たちと地震と津波についての会話をした。そしてカーラジオをつけてラジオを聴き、離れて紋別に暮らしている娘と携帯電話で話をした。その高台で 30 分ほど過ごした後、もう大丈夫であると判断して自宅に戻ったという。

同じように、<住民 15>も地震で目覚めた後、最初から避難をするつもりですぐにテレビをつけて、着替えながらテレビを見ていたところ、防災無線の放送を聞いたという。そのとき、離れて暮らしている子どもから自宅に電話があり、その電話で話していたことが、避難の時間を遅らせた要因の 1 つになってしまった。こういった安否確認の電話も、一刻を争う津波災害では、避難を遅らせる要因になる。

電話で話して避難が遅れた<住民 15>

住民 15 地震の時に、あれを持って行く、これを持って行くとやってもだめなの。とにかく体一つでさっと逃げるということ。(中略)だから、地震が来たらすぐ津波という、そうしたら体一つで水から高いところへ逃げるといふ、避難をすることさ、それが一番だ。

住民 15 の妻 地震とかあれば、うちの娘が一番先に釧路から電話が入るものね、どうしたと。泡氷川の娘だったり、真栄の息子は見に来るけど。

住民 15 そして、地震があつてすぐ電話がかかるといふ。

<住民 28>は、防災無線を屋内で聞いた記憶がないという。また、自宅が停電していたため、テレビもつかず、輻輳によるものだろうが家の電話も携帯電話もつながらなかったという。津波警報については、外の放送(おそらく消防広報車)で聞いたというが、ほとんどこのような情報に頼らず、漁師一家の勘ですぐに津波が来ると判断し、自分たちの判断で避難したらしい。しかし、その結果、避難は遅れており、今回は大きな津波が発生しなかったために被害はなかったが、大津波が短時間で発生した場合は、逃げ遅れる可能性があることは否めない。

(3)災害文化

厚岸町床潭では、津波の避難訓練を毎年9月に年1回実施している。その避難訓練は、神社にある避難所に徒歩で避難するものである。また、実際には、避難場所から遠いなどの理由や家族の中に災害時要援護者がいるなどの理由から自家用車で避難する人もいるが、車で避難する家庭では、地震が来たらすぐに避難できるよう車のエンジンをかける習慣があるそうである。また<住民 15>のように地震保険に入っている家庭もある。前述のように、<住民 15>は防災意識が高く、常に防災グッズを枕元に置いて寝る習慣がある。

一方、<住民 28>は、防災グッズや持ち出し品の準備はしていなかったという。そのため、今回の地震では、持ち出したのはお金と貴重品だけだったが、食料が必要であると判断し、ごはんを準備して持参したという。自宅の裏の高台に先に車を上げた後、自宅の片づけや避難の準備をしてから避難しているが、その高台で時間を過ごしたのち、午前9時過ぎに自宅に戻った。自宅に戻ったきっかけは、高台から見える海の潮位の上下をみて、長年の漁師としての判断で安全であると判断したからだ、という。

このように、厚岸には漁師の家庭が多く、海とともに暮らしている生活がある。そのため、<住民 28>の家族では、親から子へ、子から孫へと、津波についての経験が受け継がれている家庭が多い。<住民 28>自身も、これまで地震による津波を経験しており、昭和27年の津波では自宅が全壊している。その津波対策として、自宅前には築港が約10年前に完成し、その結果、津波に対して安全になったと認識しているという。地震の後には必ず津波が来ること、その津波はだいたい30分くらいで来るから、その間に対策をとることという経験的知識を、家族の中でも十分に教えてきたため、今回の地震後にも家族全員で対応

ができたと認識している。

しかし、その漁師ならではの経験則が常に正しいとは限らず、その固定観念が避難を遅らせることがあることは先に述べたとおりである。津波災害に対する災害文化が正しい避難行動に結びつくように、日頃から地域での啓蒙、広報対策を徹底することが求められている。

2.3.3 避難しなかったケース

今回ヒアリング調査を行った各世帯は、すべて津波の被害が及ぶ可能性のある地域に存在している。つまり、今回の地震でも津波に対する避難が必要な世帯であったわけだが、避難しなかった人が何人かいた。では、これらの人々が避難しなかった理由やその背景にはどんなことがあるのだろうか。

ヒアリングの結果から、避難しなかった理由として、(1)住宅の立地条件、(2)津波の経験の2つがあげられる。

(1)住宅の立地条件

まず、避難しなかった人々に共通する理由として、住宅の立地条件があげられる。<住民 2>宅、<住民 27>宅、<住民 29>宅のように、この地域のなかでは比較的高い場所に住宅がある（またはそのように認識している）世帯の住人は、津波には安全と考え、避難の必要がないと判断してしまうのである。

前述のように、<住民 29>は、海に面していながらも海面から 10 メートルほど高いところに住宅があるため、この家の人たちは、津波による被害が生じるとは考えていない。また、<住民 27>宅は、海から少し離れた比較的高い場所にあり、しかも、地域の住民も、津波から逃れるために<住民 27>宅前の広場に避難している。そのようなことから、<住民 27>宅の住人は、津波に対する避難を考えなかったようである。<住民 27>宅のヒアリングにおいて、回答者は「うちのところまで波が来るようになったら、この地域は全滅だろうな」という趣旨の話をしているが、それだけ<住民 27>は、自分の住宅が津波の被害を受ける可能性が低いと思っているようである。

また、<住民 26>、<住民 27>のように、住宅の裏手に山や丘のような高台がある住宅の住人は、いざとなればすぐに逃げられると考えている。このようなことも避難を行わない理由となっているようだ。前述のように、<住民 27>は、自宅の裏山がこの地域の正式な津波避難場所となっており、住宅のそばに避難用の階段もあることから、何かあればすぐに避難できると考えている。また、<住民 26>も、ヒアリングにおいて次のように回答している。

避難しなかった<住民 26>

裏山は近いから、そして高いところ、すぐそばだから。・・・俺ら（の住宅）は浜も近いけど、山も近いから、来たらぱっと逃げられるようなという、そういう感覚もあるもので・・・（一部修正）

このような、住宅のすぐ近くに高台がある世帯では、かえって速やかな避難行動を遅らせることもある。

また、自分の住宅が「津波の通り道からはずれている」と考えている世帯もあった。<住民 29>宅の住人は、自分の住んでいる場所には津波がこないと考えている。<住民 29>宅の住人は、ヒアリングで次のような回答をしている。

避難しなかった<住民 26>

ここは、津波は恐らく入らないと思うよ。・・・ここは(津波の)通り道でないから、さほど高くならないんだろうね(一部修正)

このように、海から比較的高い場所に住宅がある(あると思い込んでいる)とか、住宅のそばに高台があるとか、また、住宅のある場所が津波の通り道ではないと考えたりしている世帯では、津波に対して安全と考え、避難を行わない傾向がある。

(2)津波の経験

ところで、(1)にも関係あることだが、現在住んでいる場所が過去の地震で津波被害を受けていない場合、自分の住宅が津波に安全と考えているようである。例えば、<住民 27>宅の住人は、ヒアリングで次のように回答している。

津波経験のある<住民 27>

まあ、あまりそんな津波に関しての心配というのはなかったですね。(昭和 27 年)の十勝沖(地震)の時もこの周辺は被害に遭っていませんでしたし、大丈夫でしたから、あのときでさえも大丈夫だったんだし、今回の(平成 15 年十勝沖地震)もあれだろう(大丈夫だろう)という、そういう思いはありました(一部修正)

また、<住民 29>宅は、住宅の前がすぐに海でありながら、家人は避難をしていない。その理由として、これまで津波被害を受けていないということをあげている。<住民 26>も、この場所に 55 年前から住んでいるが、その間、一度も自宅は津波被害に遭っていないと回答している。しかし大変興味深いことに、自分自身は小学校の時に、津波に襲われた恐怖体験をしているのである。<住民 29>の妻も同様であった。しかもそのときには、<住民 29>宅では津波を恐れて、自宅から避難をしていたのである。

このように、現在住んでいる場所が過去に津波災害を受けていない場合(特に、厚岸町床譚地区で大きな津波被害が生じた昭和 27 年の十勝沖地震でも被害がなかった場合)、今回の十勝沖地震でも、津波による被害はないだろうと考えた人がいたようである。これは経験の逆作用といえよう。

恐怖体験はあるが自宅の被害はなかった<住民 26>

質問： 昭和 27 年ですよ。

住民 26 そうかもしれない。そのとき学校にいて、そのときは大きい津波が来たからね。T さんも言ってなかったかい？

質問： 言っていました。そのときは、ご主人はどんな感じだったんですか。

住民 26 そのときもすごい地震で、みんな外にいったん逃げて、それから学校の中に入って間もなくじゃないかな。「津波が来た」ということでもって、3月の初めだ、あのとき。あそこに沼があるんだよ。それが凍っていたから、みんなそこを走って、山の方へ。あれが本当に、夏とか何かだったら、相当犠牲者が出たと思うよ、学生の。急に来たものだから、先生の指示も何も全然ないのさ。ただ勝手にみんな逃げていって、先生もどこにいるもんだか。

質問： じゃあ、子供たちが波を見て、これは逃げろという感じで。

住民 26 ワーッと行って逃げたような格好だべな。

質問： じゃあ、かなりな恐怖な体験をなさったと。

住民 26 そうだね。学校の中に入れば、安全だったんだ、学校は流されなかった。かえって外へ出たから、ちょうど学校のところが川縁でしょう。だから、川を伝わるものだものね、津波って。だから船とか、ずっと川の中へ行ったり、家のそれこそ屋根とか、みんなそっちへ流れていった。

質問： そのときと、今回は、違うなという感じがした？

住民 26 そうだね。そのときは子供だったし、津波が来てから逃げたような格好だからね、押し寄せてくるやつを見て。

質問： そうすると、押し寄せてきたら逃げればいいかなという気持ちもあったんですか。

住民 26 そんなに引いていかないからさ。

(中略)

質問： そのときは、ご主人はどこにお住まいだった、ここですか、やっぱり場所的には。

住民 26 ここです。

質問： そのときには、お宅では被害はなかったんですか、その昭和 27 年。

住民 26 被害はなかったね、ここはね。ほんのそばまでは来たんじゃないかな。

恐怖体験はあるが自宅の被害はなかった<住民 29>

質問： あのときはどうでした？ 昭和 27 年の十勝沖で床潭の町の方でかなり。

住民 29 ここは何ともなかったもんな。

住民 29 妻 あのときは、私がちょうど 5 年生のときで、そして学校も古かったから、ガラスは落ちてくる。それで、津波ということはまだそのときは分からないの、津波が来るということは、地震で。そして、なんか変な波が来たぞというので、今度みんな今、床潭の トウ あるでしょう。今、氷が張っているけど、そこを逃げた。

質問： 沼をね。

(中略)

質問： 奥さんは、一応、津波の怖い経験をされて、それでもまあここは高いところだから大丈夫だろうという安心感がありますか。

住民 29 妻 そう。そういうことには慣れていているというのかな。その津波の高さもどのくらいで来るというのが分からないだけで、ただ、津波が来て素通りしているようなもんだから。

(中略)

住民 29 妻 昭和 27 年の十勝沖地震のときは、やっぱり初めての津波だったから、そのときは一番高いところまで上がったんだ。初めてそのとき津波が来たからどのくらい来るのかなと思って。したけど、やっぱり来なかったし、(中略)

質問： 27 年のとき避難したというのは、どなたが避難した、ご家族の方は避難したんですか、津波を恐れていたんですか。

住民 29 妻 A A そうそう。どのくらいの津波が、そのときは初めてで、津波だったんだっていうのは分からないから、一番高いところまで。(中略)

質問： どれぐらいの標高ですかね。(中略)

住民 29 下からだったら 100 メーターぐらいあるね。

(3)災害文化

避難をしなかったその他の理由として、「引き波がなかった」ことをあげた人もいた。

<住民 26>は、「引き波がなかった」ことを避難しなかった理由としてあげている。ヒアリング調査では、次のようなやり取りがあった。

引き波がなかったから避難しなかった<住民 26>

質問： やっぱり大きな津波が来るときには、引き波が必ずあるとか、そういう話なんですか。

住民 26 あるね。

質問： 必ずあるんですか。

住民 26 あります。

質問： そうすると引き波があまりなければ、大きいものも来ないだろうという判断ですか。

住民 26 そうですね

このように、「津波の前には引き波がある」という、言わば「津波神話」を信じている人もいた。

津波をはじめ、自然現象によって大被害を経験することは、人間の一生に一度あるかどうかというものである。しかし、多くの住民は津波に関するわずかな経験から、安全かどうかを勝手に評価する 경우가少なくない。今回、ヒアリングした地域の住民は、結果的に、津波の被害に遭わなかっただけである。大きな地震が発生した場合、また、津波の危険が警告された場合、無駄になってもいいから速やかに避難することを徹底させていくことが、これからの課題となるのではないだろうか。

2.4 まとめ

以上のヒアリング調査の結果を、先述のアンケート調査とつきあわせると、いくつかの点が明らかになってくる。それを今後の対策と関連づけて述べると、次のようになる。

第一に、避難を促進するもっとも大きな要因は、「地震時にいた場所が津波に対して危険である」という認識であった。アンケート調査の多変量解析の結果でもこの影響が強かったし、床潭の聞き取りでも避難した人のほとんどがこの要素をあげていた。

したがって避難を促進するためには、いまいる場所が津波に対して危険である、ということをはかりに納得させるかが鍵となる。ハザードマップづくりはその基本だが、それだけでは十分ではない。それは、地元の地理に関して、住民がそれぞれ一家言を持つ「専門家」だからである。そう遠くない過去に津波に襲われた区域では、住民はその事実を知っており、危険を理解している。しかしその周辺では、微妙な標高の高さとか、湾の形状とか、島の位置とか、川の流れ方とか、防波堤の高さなどから、自宅は襲われた地区とは違って安全だ、という住民が多い。そして、厚岸町のハザードマップはシミュレーションをした

厳密なものではないので、そうした意見が正しくないことを十分に説得することが困難である。

そこで、まず行うべきなのは、シミュレーションに基づいたより現実的なハザードマップの作成である。それには推定される水深やインパクトに応じて、危険度のグレード分けも必要であろう。

第二に、その危険度を徹底的に住民に周知することである。ハザードマップを配布するだけでなく、各戸に「お宅は津波に襲われる危険度が高い」といった内容のダイレクトメールを送ったり、危険箇所を立て看板を立てたり、電柱などに予想される津波高を示す線を書いたり、道路などを危険度によって色付するなどの工夫が考えられる。

第三に、危険度の特に高い場所に住む住民には、相談会のようなものを開催し、個別に危険性を納得してもらうことが重要であろう。住民はそれぞれ固有の安全論理(理屈)を持っているので、その1つ1つに専門家が答えていく必要があると思われる。そして最後に、かつて津波の襲った場所あるいはその近傍に記念碑や立て看板などを建てるなどして住民にアピールし、地域の経験を生かす努力も重要である。

明らかになった第二のポイントは、津波経験が避難の決定的な要因ではなかったことである。これはアンケート調査の多変量解析からも示されているが、インタビューでも同様の傾向がみられた。すなわち、<住民 26>や<住民 29 妻>は、自ら津波に襲われ命の危険にさらされた経験があるにもかかわらず、今回避難しなかったし、逆に<住民 21>や<住民 24>のように、自分は経験していなくても、迅速に避難した人もいた。経験は、ある場合には避難を促進したり、ある場合には避難を抑制したりする、両面の効果を持っている。

避難を促進するために、実際に津波を経験させるわけにはいかないのに、経験が避難の促進に必須ではないという知見は、別の対策の必要性・重要性を示唆している。

第三に、避難のスピードをアップさせたのは、奥尻島の記憶であった。マスコミ報道は、ときにセンセーションリズムとして批判されることがあるが、こうした社会教育的役割を發揮することもある。また災害を扱うバラエティー番組でさえ、避難の準備行動につながるがあった。今後はマスコミ情報を避難の促進にどう活用していくかも課題となるだろう。

第四に、アンケート調査で、はっきりしなかったのが、避難勧告の効果であった。床潭では多くの人々が、津波経験に裏打ちされた危険場所の認識が原因となって、迅速に避難していた。地震があるたびに決まった場所に迅速に避難する彼らには、津波警報や避難勧告はほとんど関係がなかった。彼らの避難は非常に素早いので、それらの情報を聞く時間もなかったのである。彼らを基準にすると、避難の呼びかけを聞いた人はむしろ悠長なグループに属し、避難の呼びかけの認知と避難行動は負の関係にあった。

しかしその一方で、過去に津波の経験がなく、どう行動したらいいかと考えている人も

いた。彼らには行政の避難の呼びかけや、周りの人の避難する様子が、避難を促進したためである。このように、避難の呼びかけと避難には、負の相関と、正の相関が混在するために、あわせるとその効果が消えてしまったのであろう。避難の呼びかけは、誰に対してもマイナス作用はないが、「避難のプロ」には意味がなく、避難にためらいを持つ「避難の素人」には一定の効果がある、ということではないだろうか。

そして第五に、避難促進には避難先の明確化が重要であった。これはアンケート調査でも明らかだったし、床潭の例でも、迅速に避難した人はそれぞれ避難場所が決まっているようであった。しかしそれらは必ずしも公的な避難場所ではない。むしろ知人の家とか、海岸が見え、車が止められる高台の道路などが多かった。津波からの避難は、安全であれば公的避難場所である必要はない。公的避難場所への避難訓練も大事だが、寒いとか、老人や子供がいるとか、車を守りたいなどの理由から、実際にはそれが実行されないことが多いのである。であるならば、実際にどこに避難するかを住民自身に決めさせ、それが安全かどうかをチェックする、というやり方のほうが、現実的なものかもしれない。

3 静内町・海岸町地区

3.1 地域の特徴

(1) 静内町の過去の災害経験・防災対策の概要

静内町は戦後、地震による大きな津波被害は受けていない。しかし年代は定かでないが、錨が神社の木に刺さっており、静内川を津波が駆け上がった跡として伝承されている。

ただし静内町は、昭和46年9月の高波災害、同年8月の台風10号による市街地の浸水など災害経験は多い。すなわち、昭和46年9月、台風26号と低気圧による高波災害で、本調査の対象とした静内町・海岸町の沿岸の家屋十数軒が流出し、海岸線が接近するなど大きな被害を受けている。また、土砂が流出したことにより、海岸町は、それまで海まで相当距離があったのに、その後、海岸べりに接近した地区になってしまった。なお、静内町では、市街地で同年8月10日にも台風10号による浸水被害を多く受け、海岸町の近くの古川で氾濫している。

静内町の津波ハザードマップは、平成8年度に作成され、平成11年度に改定された。それによると、浸水危険地域は、東静内、春立、蒲浦、海岸町、入船の5地区である。海岸町はほとんどが勤め人が住んでおり、それ以外の地域は、近海漁業の漁業者が多い。平成8年に、津波被害の危険がある5地区897世帯には、戸別受信機が設置されている。

防災組織としては、海岸町と春立に自主防災組織が組織されている。毎年10月、いくつかの地区合同で、300人前後が避難訓練を行っているものの、戦後、大きな津波災害を受けていないため、津波に対する意識は、北海道南部の他の地区と比べると低いと思われる。

(2) 静内町の被害・避難状況の概要

今回の地震において、静内町の震度は6弱だった。静内川入船東で津波高 2.3mを記録しているが、津波による浸水被害はなかった。

静内町では、やや内陸にある中心部の泥炭地の地盤が悪いため、地震の被害が大きかった。人的被害・住宅被害は、負傷者 71 名（重傷 7 名、軽傷 64 名）、住宅被害（全壊 41 軒、半壊 29 軒、一部損壊 300 軒）。住宅地である市街地西部の泥炭地に、被害が集中した。大きな建物の被害としては、昭和 49 年建設の静内文化センターが沈下し、柱が剥落している。

この地震では、津波に対する自主避難の呼びかけが行われた。すなわち、4 時 56 分、北海道庁から防災行政無線を通じて道津波警報の伝達を受け、自動放送で、「静内町より連絡します。先程の地震により太平洋沿岸に津波警報が発令されました。町民の皆さんは、速やかに近くの高台に避難して下さい。」と放送している。そして、7 時には、災害対策基本法第 60 条に基づく避難勧告が発令され、警察・町役場の広報車などで、津波警報の伝達、避難呼びかけを行った。この避難勧告は午前 9 時に解除され、「自主避難呼びかけ」に切り替えられている。この自主避難の呼びかけは、防災無線の戸別受信機と屋外拡声機を通して、津波被害の危険性がある地域 5 地区（東静内、春立、蒲浦、海岸町、入船）897 世帯 2003 人に対して、伝えられた。

このときの避難者数は不明であるが、津波危険地域全体では、避難した人の割合は少なかったようである。町役場で把握している人数は、東静内は 2 避難所で 130 人、春立 36 人、海岸町 24 人、公的避難所ではない静内駅約 20 名程度であったが、正確には確認されていない。避難所は 5 時過ぎに各地に開設し、基本的には職員を派遣したが、自治会のほうで開設した場合もあった。

また、人数は定かではないが、静内町の公営住宅がある高台の柏台地区に、車で多くの住民が避難していた。そこに登る道は渋滞とまではいかないものの、車で混雑していた。なお、車で海を見に行った人がいたのを、広報車が目撃している。さらに、漁船などの沖出しも何件かあったようだ、という。

表 3.1 静内町における地震被害の概要

人口・世帯数	22,810 人、10305 世帯（平成 15 年 12 月末現在）	
地区	34 地区、人口は市街地に集中。	
過去の津波被害	<ul style="list-style-type: none"> ・戦後、地震による大きな津波被害は受けていない。 ・年代は定かでないが、静内川を津波が駆け上がり跡として錨が神社の木に刺さっており、伝承されている。 ・過去の台風 26 号と低気圧による高波災害（昭和 46 年 9 月）で、海岸町の沿岸の土砂・家屋 15 軒が流出し、海岸線が接近するなど大きな被害を受けている。 ・津波被害はないが、泥炭地の地震被害、高波、直前の台風 10 号による市街地の浸水など災害経験は多い。 	
防災施設等	<ul style="list-style-type: none"> ・入船地区に 4m 程度の防潮堤を建設している。 	
防災無線の整備状況（戸別受信器、屋外拡声機）	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 8 年に、戸別受信機を設置（浸水可能性地域である東静内、春立、蒲浦、海岸町 897 世帯） ・屋外拡声機も設置されている。 	
津波ハザードマップの有無	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 8 年度に「津波浸水予測図」を作成（平成 11 年度改定）。 ・浸水可能性地域は、東静内、春立、蒲浦、海岸町、入船の 5 地区。海岸町は勤め人のみであり、それ以外の地域は、近海漁業の漁業者が多数の地域である。 	
地震直後の対応	地震発生	<ul style="list-style-type: none"> ・4 時 52 分、地震発生。6 時頃、同程度に感じる有感の余震、数度あり。 ・泥炭地とそれ以外で体感震度の違いが大きい。
	津波警報の伝達（時間、内容、伝達手段）	<ul style="list-style-type: none"> ・4 時 56 分、津波危険地区 5 地区 897 世帯 2003 人に対して、防災無線（戸別受信機と屋外拡声器）により自主避難呼びかけ。防災行政無線を通じた道庁からの津波警報の伝達による自動放送。（静内町より連絡します。先程の地震により太平洋沿岸に津波警報が発令されました。町民の皆さんは、速やかに近くの高台に避難して下さい。） ・7:00 災害対策基本法第 60 条に基づく避難勧告。 ・7:00 前後、広報車で、津波警報の伝達、避難呼びかけ。 ・9:00 避難勧告解除。「自主避難呼びかけ」に切り替え
	住民への避難呼びかけ（時間、対象地区、内容、伝達手段）	
	住民の避難状況	
今回の地震・津波被害	<ul style="list-style-type: none"> ・静内川入船東で津波高 2.3m を記録しているが、津波被害はない。 ・負傷者 71 名（重傷 7 名、軽傷 64 名）、住宅被害（全壊 41 軒、半壊 29 軒、一部損壊 300 軒）。住宅地である市街地西部の泥炭地で、被害が集中した。 ・昭和 49 年建設の静内文化センターが沈下、柱が剥落した。 	



図 3.1 静内町の地域の図

(3) 静内町の災害文化

前にもちょっと触れたが、静内町にあるマウタ山の海拔 10メートル程度の神社の木に「錨」が刺さっている。これが、「何百年前か前の津波」(伏木田さん談)の痕跡だという。静内川の川沿にある高台で、かつ方向的に川の河口にも近く、海まで障害物がない場所なので、高さ 10メートルの津波がきたというより、西南西方向からの津波が斜面を駆け上がったものと思われる。錨の形から、かなり古いものと思われる。

また、同町の川井町に通称「サメ」という地名がある。これは、津波でサメが打ち上げられたという伝承によるという。

このことを静内町郷土資料館の学芸員に問い合わせたところ、町民からも問い合わせがたまにあるが、これらの津波や伝承の記録がなく、わからないという。



図 3.2 錨の突き刺さっている木



図 3.3 錨の突き刺さっている木のある神社から見た海岸の風景

3.2 海岸町住民の避難行動の背景（調査対象地域・海岸町の特徴）

静内町の防災担当者によれば、海岸町は、静内町の中でもっとも防災に熱心な地区であるという。実際、下記のように海岸町の体感震度が低かったにも関わらず、地震直後、多くの人々が避難している。そのため、津波被害可能性地域の5地区のうち、海岸町地区を対象に聞き取りを行った。

海岸町の住民は、サラリーマン、工場員、土木関係など勤め人がほとんどである。年配者が多く、3分の2は70歳を越えている。しかしながら、歩けない人はいない。

海岸町は過去に津波被害を受けているわけではない。しかし、地元での防災活動や防災に関する話し合いが非常に活発だったようである。以下では、(1)地震の概要、(2)地理的特性、特に海岸町における避難行動の背景と考えられる海岸町住民の防災意識に影響を与えた要因として、(3)災害伝承、(4)行政の防災活動支援、(5)話し合いの経緯を分析する。

(1)海岸町の体感震度

静内町の気象庁発表震度は、震度6弱である。

しかしながら、海岸町の揺れは、静内町の他地区とくらべ、あまり激しくなかったようである。海岸町は、各家庭では、皆が「就寝中だが起きた」ほどの揺れを感じたが、家屋の破損、家具の倒壊、物の散乱はほとんどなかった。被害は、「鉢が倒れた」、「コップが落ちた」、「トイレの消臭液がポトンと落ちた」、「不安定な物が倒れた」という程度で、体感震度では、震度3～4程度だったようである。人的被害もなかった。唯一の大きな物的被害は、[26宅]のホームタンク（ガスタンク）の倒壊1件だった。

同町山手地区や同町東静内地区は泥炭地であり、地盤が悪い。今回の地震でも大きな家具が倒れる、家屋自体が半壊するなどの大きな被害が起こっている。しかし、「海岸町は元々、砂が集まってできたところで、地盤がいい」と多くの住民は認識しているようである。これはヒアリングでも度々聞くことができた。

ただし、静内町の震度を測る震度計が泥炭地の近くにあり、この震度計が静内町の中でも特に大きく振れたとも考えられる。

(2)海岸町の地理的環境

海岸町は、駅と川と海に挟まれた35世帯の地域である。市街地から海岸町に向かう道路は一本しかなく、海とJRの線路に挟まれており袋小路になっている。したがって、津波の時には海を背にして逃げるのではなく、海と並行して逃げなければならない。そのため、津波、高潮、水害に対する強い意識をもったコミュニティを形成している。



図 3.4 海岸町全景（奥に向かって海になる）

海岸町は、名前の通り、海岸に接している。家の中でも荒波の音が聞こえ、海が荒れているときは、家の窓や家全体が揺れるほど海風も強い

しかし、元々、海岸町は海岸に接していたわけではない。以前は、現在の護岸防波堤から海に向かって数百メートル程度の大きな砂山が二つ程度あったという。海岸町は、1971年（昭和46年）9月台風26号と低気圧による高波災害で、その砂山二つが海に浚われ、かつ15軒が高波にさらわれ、海岸町一帯が浸水するという被害にあっている。住宅から海岸までかなり距離があったのだが、この高波で、砂浜が流出し、住宅からすぐ海となってしまった。

なお、現在は、防潮堤が設置されており、海岸町は4メートル程度の津波には耐えられとされている。そして、高波に家をさらわれて、被害を受けた住民たちも、多くはそのまま、この地域に住んでいる。高波を直接経験していない人も、その後よそから移り住んだ人たちも、地域の歴史として、この高波被害のことを知っている。しかし、古くから住んでいる人ほど、住民の高波・高潮に対する意識は非常に高い。

また、地震の約1ヶ月前の8月の台風10号の被害により、静内町市街地は冠水し、大きな被害を受けた。海岸町自体は被害を受けてはいないが、このとき、海岸町から市街地に向かう途中にある古川が、8月10日の台風10号の時に氾濫・増水しており、一本道の途中にある川を渡って市街地の方に行けなくなり大変困ったという。しかも、避難場所のひ

とつである公民館が水に漬かり、住民は、古川周辺が低い土地にあるという認識を新たに
した。

また、海岸町には地域内に材木工場などがあることから、わずかな津波でも非常に危
ない地域と考えられる。しかも、駅・川・海に挟まれていることなどから避難路が限られて
折り、この点でも危険な地域であると考えられる。

そのため、高潮、高波、津波などへの関心は高い。津波に特化して関心が高いというよ
りも、高潮、高波、津波、水害など、水による災害全般に対する関心が高いといえよう。



図 3.5 海岸町にある製材工場の材木置場

(3)海岸町住民における災害伝承

海岸町の住民は、戦後の移住者がほとんどで、津波被害を受けた経験はない（ほぼ全員
が勤め人で漁業者はいない）。

しかし、別の地域で津波を体験した人はいる。たとえば、伏木田さんの斜向かいの家に
鈴木関次郎さんという 90 歳の方がいる。この方は、40 年程前にえりも岬の百人浜という
ところで牧場を営んでいた。そこで、1953 年十勝沖地震の津波を経験している。引き潮の
ため今までみたことのない海底の岩が見えたという。また、かれは海岸べりの家屋まで津
波が押し寄せたり、川を遡上したり、家や人が流されたのを直接、見聞している。知人が
津波に巻き込まれたのを、高台から見た。亡くなられた奥さんも様似で津波を経験したこ
とがあるという。

10年前の北海道南西沖地震のときには、地震直後、「おじいさんどうすればいいの」と相談に来た伏木田さんの奥さんを「母さん、こっち来る暇あったら逃げろ」と怒鳴りつけている。鈴木さん本人は覚えていないが、伏木田さんの奥さんは津波があったら逃げなければいけない、という教訓としてはっきりと覚えているという。

鈴木さんは、海岸町の自治会の集まりや、何気ない会話の中でよく「津波が起こったらすぐに逃げなければいけない」、「海岸町は海に平行して逃げなければいけないので、とにかくいち早く逃げなければいけない」、「高台の方に逃げなければいけない」という話をしていたようである。これは、自治会などの正式な場で、津波防災として話していたわけではないが、なんとはなしにこの鈴木さんの津波経験が鈴木さんに近い海岸町住民に共有されていたようである。

特に、伏木田さん夫妻と、鈴木さんの隣に住む[12]さんは、その鈴木さんの話をよく覚えており、結果的に、この2世帯はテレビや行政による津波情報を待たず、地震後すばやく避難行動を行っている。

また、今回の地震では、津波を経験していない鈴木さんの娘さんとお孫さんが「早く逃げなくちゃ」と鈴木さんを迎えにきて、いち早く車で逃げたそうである。

(4)行政の防災活動支援

静内町では、町の行政施策への理解を深めるため、町役場の担当職員が、各自治会の要望に応じて直接住民と対話を行う、「出前講座」を実施している。テーマは、防災、健康保険、ゴミ問題などさまざまである。海岸町住民に対しては、数回、地震や津波に関する防災対策について「出前講座」を実施し、またそのとき住民の意見収集を行っている。台風10号の後も、これを実施し、災害時の避難をどうすればいいか話しあった。

海岸町では、平成13年の自治会が、静内町から自主防災組織についての説明を受け、平成14年夏には、自主防災組織が設置されている。しかし、毎月10月に、消防署員を呼んで火災を想定した防災訓練を実施しているが、地震・津波・水害を想定した特別な訓練はしていなかった。

(5)海岸町住民の自主的な判断・話し合い

海岸町では、普段から、自治会の総会などで、津波が来たら高いところに逃げようと話し合っていた。

海岸地区の避難所は、正式には、コミュニティセンターである「生活館」、「公民館」、「旧NTTビル（現シルバーセンター）2階」である。だが「生活館」は住居と同じ地区に隣接している建物であり、津波の避難場所としては適切ではないという認識がある。かつ「公民館」は、大雨のときに氾濫したり、津波が駆け上がるかもしれない可能性がある古川の近くにあること、海岸町からそこに避難するには古川を超えていかななくてははいけないこと、かつ土地が低いところにあることなどから、これもまた津波の避難場所としては適切では

ないという認識がある。実際、台風 10 号のときには浸水被害にあっている。「旧 NTT ビル（現シルバーセンター）2 階」も、普段は鍵がかかっており、地震直後の津波避難場所としては適切でないという認識がある。



図 3.6 海岸町の防潮堤と生活館（右手の建物が避難所に指定されている生活館）



図 3.7 海岸町生活館

今回の地震の直前に経験した台風 10 号のとき、この地域の水害や津波の危険性を住民が再認識した。その後、自治会で、水害や津波災害の時にはどこに、どのように避難すればよいかを話あった。住民は自治会で話し合っ、津波を考えた場合には

海岸町から 50 メートル程度の距離である比較的近い場所にあり、やや高いところがあり、強固な建物である静内駅駅舎（観光情報センター「ぼっぼ」が併設されている）に逃げること、

海岸町より高いところにある静内町市街地や近くの高台（柏台、マウタ山）に車で逃げること

を、現実的な選択肢として話し合ったという。そして、今回の地震では、そのように行動する住民が多かったのである。



図 3.8 JR 静内駅・観光情報センター「ぼっぼ」

(6)防災リーダーの存在

伏木田さん夫妻（海岸町の自治会長および夫人）は、普段から、鈴木関次郎さんと親しく付き合っており、鈴木さんの 1953 年十勝沖地震の経験を聞いている。先述のように、10 年前の北海道南西沖地震のときも、鈴木関次郎さんに避難を呼びかけに行って、「さっさと逃げろ」と怒られつつ、逃げている。

海岸町の伏木田さんの夫人は、アイヌ文化の保存活動をおこなっており、この活動を通して、学芸員に先の「錨」のことを聞いており、過去、静内町は津波被害を受けていた、津波被害を受ける可能性があるということを夫妻は強く認識していたようである。

昨年度、海岸町に自主防災組織ができたのも、その前の年に伏木田さんが自治会長になったからということも要因として大きいように思われる。「出前講座」で、担当者が自主防災組織について説明し、伏木田さんがすぐに同意し、翌年結成された。

また、伏木田さんは、数十年静内町役場に勤めており、現在も嘱託職員として静内町水道課に勤務している。このため、町役場、ないしは防災担当職員（静内町総務部総務課：岩淵博司氏）との連携を密にすることが可能であった、という人的な要素も大きい。

このように、海岸町の自治会長である伏木田さんは、元々、防災意識が高い上に、行政と仲立ちをできる立場にあり、この地域の防災に関するリーダー的役割を担っていた。津波の危険性を伝える「語り部」としての鈴木さんとともに、この地域の防災意識を高めるのに重要な役割を果たしている。

3.3 海岸町住民の避難行動と心理

本調査では、海岸町全 35 世帯のうち住民の 13 世帯に対して調査を行うことができた。また、災害時に行動を共にしていた人、他の住民の行動を見かけた人、また、事後にどのように行動したかを知っていた人なども合わせて聞き、調査した一人一人の心理状態、世帯の避難行動とともに、海岸町全体の避難概要を掴むように心がけて聞き取りを行った。

なお、時刻に関しては、聞き取り調査から知り得た時刻を記述したほか、時刻がはっきりしているイベントから推定した。具体的には、地震発生が 4 時 52 分であり静内町の防災無線による放送が 4 時 56 分なので、この放送前というタイミングを「4 時 55 分頃」、テレビの津波警報が 5 時 08 分なので、これを見てすぐというタイミングを「5 時 15 分頃」、静内町で大きな余震が起こったのは 6 時 08 分なので、この前を「6 時 00 分頃」、余震後を「6 時 15 分頃」と判断し、聞き取り内容から時刻を推定した。また、住民が時刻を正確に認識していない場合も多く、この場合は、周囲の人の見聞より推定した。

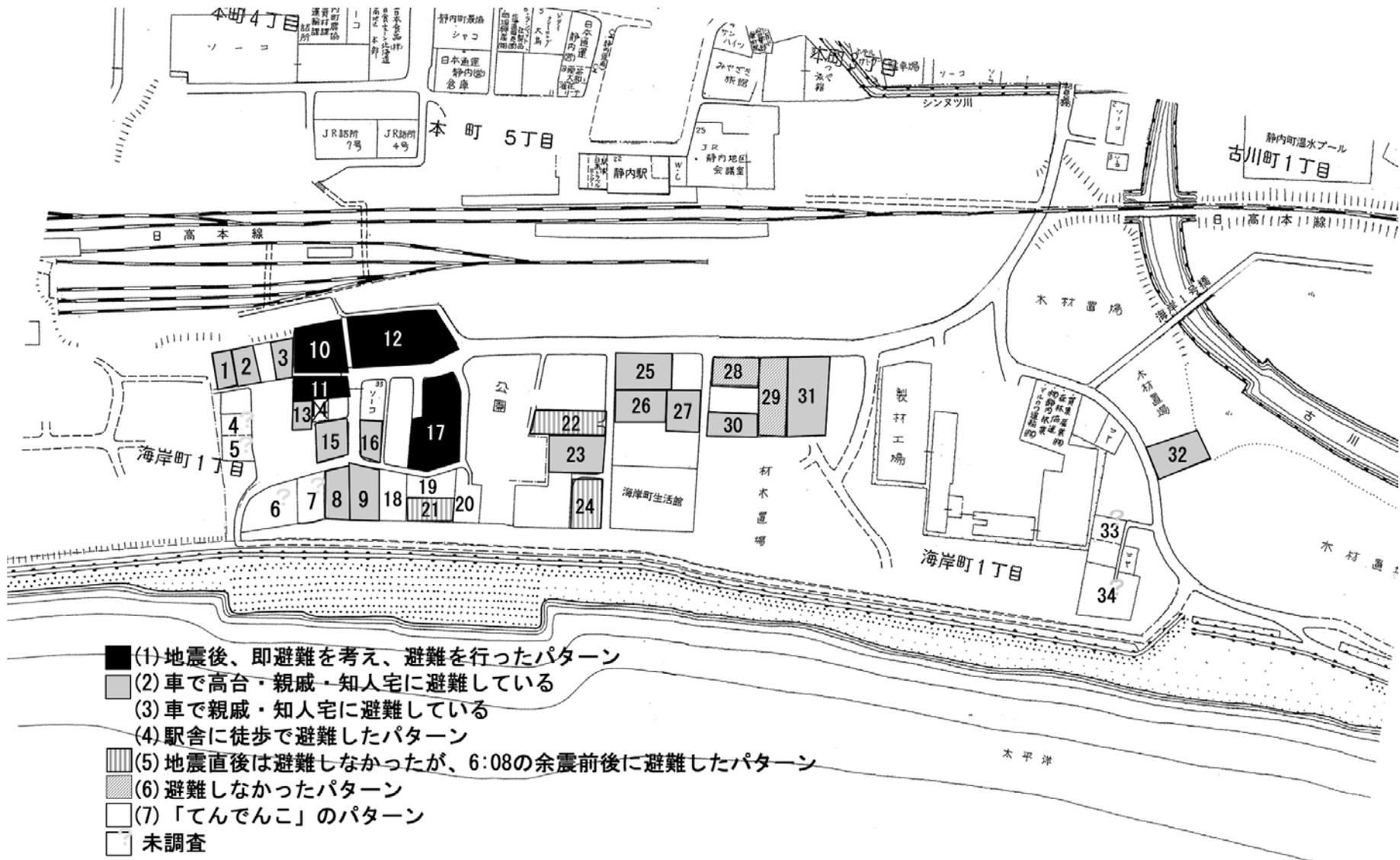


図 3.9 静内町海岸町の避難の概要 (5時台の避難)

表 3.2 静内町海岸町 35 世帯の避難の概要

番号・聞き取りの有無 ¹	人数・家族構成	地震直後の避難(5時台)		余震後の避難(6時以降)		備考
		避難の有無・避難場所・手段・時間 ³		避難の有無・避難場所・手段・時間 ³		
1	5人 夫婦と子3人		マク山・車 5:15頃-6:00頃		駅舎・徒歩 8:00頃-9:00頃	
2	3人 夫婦と子1人		不明・車 5:15以前(不明)			22宅の方が目撃。
3	3人 婦人と子2人		農協前・車 5:10頃-6:00頃		友人宅・車 6:15頃-9:30頃	夫、子二人は仕事に出かけた。
4	3人 夫婦と子1人	?	(不明)	?	(不明)	
5	3人 夫婦と子1人	?	(不明)	?	(不明)	
6	3人 夫婦と子1人	?	(不明)		駅舎・徒歩 (不明)	
7	2人 (2世帯)	?	(不明)	?	(不明)	市内ホテルに勤めている。
8	2人 夫婦		柏台・車 5:15頃-6:00頃		駅舎・車 6:15頃-7:00過	9宅の孫と同時に避難。
9	2人 8番の娘、孫		" "		" "	8宅の祖父母と同時に避難。娘は不在。孫1人のみ。
10	1人		息子宅(山手)・車 5:00頃-10:00頃			11宅の娘・孫と一緒に避難。
11	2人 9番の娘、孫		" "			10宅の父と一緒に避難。
12	4人 夫婦と子2人		柏台・車 5:00頃-8:00頃		駅舎・車 8:00頃-9:30頃	
13	2人		柏台・車 5:15以前(不明)		駅舎・徒歩 (不明)	3宅の方と会話。22宅の方、17宅の方が目撃。
14	x 1人 不在	-		-		仕事で札幌にいており不在。
15	4人		柏台・車 5:00頃-			鈴木さんの呼掛けで避難。奥さんは入院
16	2人 夫婦		娘宅・車 (不明)			娘が車で迎えに来て娘宅に避難した
17	2人 夫婦		市街地・車 5:15頃-5:45頃		駅舎・徒歩 7:00頃-10:00頃	市街地は地内ベニヤ周辺。下宿生4人を連れて。他2人は18宅親子に頼んだ。
18	1人	x	避難せず -	x	避難せず -	20宅の2階で津波が来るか、海を見ていた。
19	2人	x	避難せず -	x	避難せず -	" 旦那さんは山の方へ仕事に行った。
20	2人 夫婦・妻		柏台・車 (不明)	x	避難せず -	"
	・夫		" "	x	一回帰った後、職場へ	伏木田さんの下宿生を2人連れて逃げた。
21	1人	x	避難せず -		職場・徒歩 6:00頃-8:30頃	避難の準備をして職場に出かける。
22	2人 親子	x	避難せず -		駅舎・車 6:15頃-9:00頃	親は老人ホーム。夫は単身赴任で不在。26宅夫婦と一緒に。
23	3人 夫婦と子1人	?			駅舎・徒歩	駅の食堂に勤めている。おにぎりを作っていた。
24	1人 (23宅の母)	x	避難せず -		娘宅・車 6:15頃-10:00頃	職場に行っていた孫(23宅)が車で迎えに来た。
25	2人 夫婦	?	(不明)		駅舎・徒歩	車なし。ホームが地震で倒れ、ガス漏れを起こした。業者に修理に来てもらうことになっており避難途中で帰宅してしまった。
26	2人 夫婦		娘宅(旭町)・車 5:00頃-6:00頃		駅舎・車 6:15頃-9:00頃	娘さんが車で迎えに来た。22宅親子と一緒に。
27	3人 夫婦と娘1人	?	(不明)		駅舎・徒歩	車無し。旦那さんは仕事に行った。
28	2人 親子・親		公民館・徒歩 5:00頃-		駅舎・徒歩	
	・息子		駅舎・徒歩 5:15頃-6:00頃		(不明)	隣のおばと逃げた。
29	2人 夫婦・夫		駅舎・徒歩 5:15頃-6:00頃		駅舎・徒歩 6:15頃-6:45頃	夫は奥さんを先に逃がし、後から避難。奥さんを残して一人で駅に逃げた。
	・妻		駅舎・徒歩 5:15頃-6:00頃	x	避難せず -	奥さんは隣のおいと逃げた。家で朝食を作っていた。
30	2人 親子		兄弟宅・車			
31	4人 夫婦と子2人		親宅・車			
32	5人 夫婦と子3人	?	(不明)		駅舎・徒歩	
33	2人 夫婦	?	(不明)	?	(不明)	
34	1人	?	(不明)	?	(不明)	車無し。職場に行かれたようだ。

3.3.1 海岸町住民の避難行動と心理における共通点

まず、海岸町の住民全体に共通する傾向を分析する。

第一に、ほとんどがテレビから放送された津波警報に危機感を感じて避難している人が多かったことが注目される。すなわち、数人の例外を除いて、テレビから津波警報を確認した後に避難している。

第二に、6時00分前に多くの住民が、自分で「安全だ」と判断し、帰宅している。しかし、この時点で、津波警報が解除されたわけではない。これはある意味で、危機感の低さが表れているといえよう。

第三に、6時00分から7時00分前後にかけて、パトカーや町の広報車、警察官や町役場職員の呼びかけにより、住民が静内駅舎に再び避難している。これは7時00分の避難勧告発令によるものと思われるが、住民同士が「声を掛け合って避難している。このときも、やや切迫感が薄くなっていることが影響していると思われる。

第四に、場所による避難行動の特徴は見られない。つまり、海岸に近いからすぐ避難しているとはいえないし、地域的に奥まっているから避難が遅いというわけでもない。ただ、近隣の人が「地震後すぐに避難した」、「余震後避難した」、「避難しない」など似たような行動をとっていることから、地理的な要因よりも人的な要因が大きいことがわかる。

3.3.2 海岸町住民の避難行動と心理におけるパターン

次に、海岸町住民の避難行動のパターンをいくつかに分けて分析してみる。なお、それぞれのパターンは排他的なものではなく、一部重複する部分もある。

(1)地震後、すぐに避難したパターン（表3.2）

地震後、すぐに避難行動をとった人は少なく、[10・11宅]および[12宅]、[17宅]のみであった。他の家庭では、テレビによる情報を確認せずに避難の準備を始め、テレビによって津波警報を確認した後、すぐに避難を行っている。

[10・11宅]は、[10宅]の鈴木さんが、1953年十勝沖地震の津波被害をえりも岬で見聞しており、そのことを娘・孫によく話していた。地震後、すぐに、孫が迎えに来て、避難の呼びかけが出る前に避難を始めた。

[12宅]は、よく[10宅]の鈴木さんから津波の恐ろしさのことを聞いており、また1968年十勝沖地震の起こったのが結婚した翌年で、出産のときに地震によって大きな被害を受けたので鮮明に覚えているという。それ以来、地震で逃げることは習慣になっており、今回も地震ですぐに津波が思い浮かんで、逃げる準備をはじめた。鈴木さんが逃げるのが見え、「Nさん避難しなきゃだめだぞ」と声を掛けられている。

[17宅]の伏木田さんの家は、揺れが収まった後、夫がテレビを見て、津波の可能性を確認する間に、すでに、奥さんが避難するために、下宿生6人を起こしに行っている。普段から、鈴木さんの話を聞いていて、地震後すぐに避難することを考えており、テレビによ

って津波警報を確認した後、すぐに避難を行っている。

まとめてみると、結果的に地震後、即避難を考えたのは、鈴木さんの1958年十勝沖地震の経験を聞き、見聞とはいえ、その災害経験が事前に共有されていたことが大きいと思われる。結果的に、鈴木さんと親しく付き合っている隣家がいち早く逃げている結果となっている。

表 3.3 地震後、即避難を考え、避難を行ったパターン

番号前	[10・11宅] 鈴木さん (隣の娘・孫と3人)	[12宅] 伏木田さん (夫婦、下宿生6人)	[17宅] 中川さん (夫、旦那、息子2人)		
避難	地震直後の避難 (5時台) 息子宅(山手町)・車	地震直後の避難 (5時台) 余震後の避難 (6時以降) 市街(池内ベニヤ工場付近)・車 駅舎	地震直後の避難 (5時台) 余震後の避難 (6時以降) 柏台・車2台 駅舎・徒歩		
避難開始時間	5:00頃	5:15頃	7:00頃	5:00頃	8:00頃
戻り時間	10:00頃	5:45頃	10:00頃	8:00頃	9:30頃
地震発生時	寝ていた。仏壇を押さえた。避難呼びかけが出る前に逃げた。	寝ていた。次第が大きくなり、夫婦二人でタンスを押さえた。すぐテレビをつけた。避難呼びかけが出る前に逃げた。	寝ていた。避難呼びかけ放送が出る前に逃げた。テレビはすぐつけた。		
危機感・避難の契機	ゆれを感じてすぐ避難した。孫がすぐに迎えにきた。テレビは一応つけた。	テレビの「津波警報」。防災無線の連絡。	バトカー・役場の広報車の呼掛け。夫が車で会社に行ったので、徒歩。	ゆれを感じて、スリーブ、ガス、ご飯のスイッチを消して、すぐ避難した。	駅におにぎりを買っていたし、海岸町の人々がいたので。
戻った契機	娘が仕事に行かなければいけないので。	NHKラジオで「津波の高さが数十センチ」といっていたので、安全と判断した。	駅で役場の人から避難勧告が解除されると言っていたので。	おなかですいたので。	駅で役場の人から避難勧告が解除されると言っていたので。
声かけ行動	[12宅]、[15宅]に声をかけた。	[13宅]、[18宅]に声をかけた。[18宅]に下宿生2人車に乗せて逃げても良かった。	[18宅]、[20宅]、[13宅]、[15宅]に声をかけた。鈴木さんに声をかけたが、いなかった。	鈴木さんに声をかけられた。	
携帯品	保険証、預金通帳。	保険証・印鑑		保険証・財布	
津波経験・伝承	・鈴木関次郎さんが、えりも岬に住んでいて38歳の時に1953年十勝沖地震による津波を経験。 ・1982年浦河沖地震のときには、マウタ山の方に逃げた。普段から柏台に逃げようと娘・孫と話っている。	・鈴木関次郎さんの話を聞いていた。 ・1982年浦河沖地震を体験。 ・奥尻・阪神大震災のことが頭にあった。 ・台風10号の直後で、古川が津波や水害のときに怖いという認識がある。 ・マウタ山に錨が刺さっていることを知っている。	・鈴木関次郎さんの話を聞いていた。 ・1968年十勝沖地震、1982年浦河沖地震を経験。		

(2)車で高台に避難したパターン

次に、 柏台（[8・9宅]、[12宅]、[13宅]、[18宅]）、 静内川を渡ったマウタ山（[1宅]）、 駅を超えた市街地である池内ベニヤ周辺や（[17宅]）、 農協前（[3宅]）などの高台に避難したパターンがある。

このパターンは、家族の中で仕事に行かなければならない者がいたり、お腹が空いて食事したりするため、ほとんどの人が6時頃には自分で「安全だ」と判断して、いったんは帰宅した。しかし帰宅後、多くの方が、住民の呼びかけやパトカーや町の広報車、警察官や町役場職員の呼びかけにより、静内駅舎に再び避難している。

表 3.4 車で高台・親戚・知人宅に避難したパターン

番号 名前	[1宅]		[3宅]		[8・9宅]	
	榊原さん (夫婦・子供3人)		岩本さん (3人家族)		安藤さん	
避難	地震直後 (5時台)	余震後 (6時以降)	地震直後 (5時台)	余震後 (6時以降)	地震直後 (5時台)	余震後 (6時以降)
	マウタ山・車	駅舎・3人は徒歩・長男は自転車	農協前(旭町)・車	友人宅(旭町)・車 息子は仕事に行った。	柏台・車	駅舎・車
避難開始時間	5:15頃	8:00頃	5:10頃	6:15	5:15頃	6:15頃
戻り時間	6:00頃	9:00頃	6:00頃	9:30頃	6:00頃	7:00過ぎ
地震発生時	起きていた。ガスでお湯を沸かしており、地震と同時に止め、元栓も止め、主人、子供を起こした。すぐテレビをつけた。	夫が車で会社に行ったので、徒歩。	寝ていた。すぐテレビをつけた。		起きていた。夫は家の前で釣りをしていた。	
危機感・避難の契機	テレビの「津波警報」	パトカー・役場の広報車の呼び掛け。岩本さんと声をかけあって。	テレビの「津波警報」と防災行政無線の個別受信機。子供がせかしてくれた。	榊原さんと声をかけあって。	テレビ「津波警報」	余震があって、家に帰らない方がいいと判断。駅に向かった。
戻った契機	ラジオ、海の状態を観察し、危険がないと判断した。	駅で役場の方が避難勧告が解除されると言っていたので。	子供に、仕事(復旧作業)に出るよう電話がかかってきたので。		カーラジオ	孫3人の仕事もあるので。戻ったらパトカーが避難を呼びかけていたが避難しなかった。
声かけ行動				榊原さん、大谷さん、安藤さんに声をかけた。 息子さんはちよくちよく海岸町に戻って、[7宅]の様子を見ていた。親よりも、心配していたよう。	もうみんな避難していた。	
携帯品	貴重品のみ。コンビニでおむすびとジャンパーを購入		通帳・犬・犬のおしめ。	かばん(キャッシュカード、現金)	位牌、通帳、食料(避難袋)	
津波経験・伝承	・奥さんが、1968年十勝沖地震を函館で経験。高校生のとき、1982年浦河沖地震を経験。 ・伝承として、ここで津波があったと聞いている。		・1982年浦河沖地震を経験。そのときは「二十間道路」まで逃げた ・津波・高潮が怖い。 ・台風10号の直後で、古川が津波や水害のときに怖いという認識がある。		・以前、NHKの北海道クローズアップで、避難袋を用意しているのが紹介されたことがある。 ・高潮を経験している。怖い。 ・防災マップを見ているので、津波は怖い。	



図 3.10 柏台に向かう道（車が多く停まっていた場所を下から撮影）

(3)車で親戚・知人宅に避難したパターン

また車で、市街地の親戚・知人宅に避難したり[10・11宅]、[30宅]、[31宅]、娘や孫が車で迎えに来て避難したパターン[16宅]、[26宅]、[24宅]がある。この場合は、(2)のパターンと異なり、避難先に腰を落ち着けて、町による避難勧告が解除される9時30頃から10時頃までその場所にとどまっていたようである。[3宅]も、農協前に避難した後、母親を友人宅に避難させている。

この人々に共通するのは、高齢者や病気を持っている人を抱える世帯が多いことである。長時間、自動車の中や寒い避難所などにいるよりも、親戚・知人宅に行った方がいいと判断したのであろう。

(4)駅舎に徒歩で避難したパターン

もう一つのパターンは、車で避難せず、駅に徒歩で向かった人たちである。

[6宅]、[25宅]、[27宅]、[32宅]の人は駅舎に避難していたことが、聞き取りを行った住民に目撃、確認されている。[25宅]、[27宅]は、車を持っていない。そのため、早い時刻から、駅舎に避難していたのではないかと考えられる。

しかし残念ながら、この人々への直接の聞き取りができなかったため、正確な避難時刻は確認できていないし、このパターンにあてはまる人がどれだけいたかは、はっきりしない。

また、多くの住民は、6時00分以降の二度目の避難において、駅に徒歩で避難しているが、これは、自動車を持つ人が働きに行ってしまったことなどによる。

(5)地震直後は避難しなかったが、6時08分の余震前後に避難したパターン

[21宅]は、職場に行けば安全だと考え、保険証を持ち出して職場に向かったが、結局、出発したのは6時00分頃であった。[22宅]は、向かいの([26宅](娘が迎えに来て避難)と「どうしよう」と相談したり、親戚に電話を掛けたりしていたが、結局、避難しなかった。息子が一回職場の様子を見に出かけたものの、被害は大したことがないと帰宅し、再び就寝していたところに、余震がおきた。余震後は、避難の呼びかけや放送があり、周囲の人が避難を始めたので、戻ってきた[26宅]夫婦と、慌てて駅舎に逃げた。

表 3.5 地震直後は避難しなかったが、6:08の余震前後に避難したパターン

番 号 名 前	[21宅]		[22宅]			[24宅]	
	中西カヨ (1人)		佐藤さん (2人・親子、浜浦さんは老人ホーム、夫は単身赴任)			大阪さん (1人)	
避 難	地震直後 (5時台)	余震後 (6時以降)	奥さん 地震直後 (5時台)	息子 地震直後 (5時台)	2人 余震後 (6時以降)	地震直後 (5時台)	余震後 (6時以降)
		避難せず	職場(役場の2階)・徒歩	避難せず	息子	駅舎・車(小関さん夫婦と一緒に)	避難せず
避難開始時間	×	6:00頃	×	5:00過ぎ	6:15	×	6:15
戻り時間	×	8:30頃	×	5:30頃	9:00頃	×	10:00頃
地震発生時	寝ていた。植木が倒れた程度。すぐテレビをつけた。	(職場に向かう途中で余震にあつた)	起きた。夫・姉から電話がかかってきた。けど寝なおした。		余震のときは二人とも寝ていた。	すぐとなりの家(息子宅)のものかどうかが確認。大丈夫と思った。	二回目の余震で慌てた。
危機感・避難の契機	テレビの「津波警報」	避難を兼ねて職場に向かった。	テレビ「津波警報」。「屋外拡声器」		放送が入って、皆が避難していたから。怖くて。	テレビ「津波警報」	孫が迎えにきた。
戻った契機	×	仕事(知的障害の人の食事づくり)が終わったので。	×	職場(給食センター)に向かった。問題なかったのので帰ってきた。		×	
声かけ行動			向かいの[26宅]の方と「どうしよう」「どうする、どうする」と話した。[24宅]の人と「怖かった」と話した。			[22宅]の方と「怖かった」と話した。	
携帯品		保険証だけを持ち出した。			かばん(キャッシュカード、現金)		位牌 着替え、保険証など
津波経験・伝承	<ul style="list-style-type: none"> 1982年蒲河沖地震を同町内で経験。 1993年十勝沖地震のときは北見市に。伝承として、ここで高潮があったときいている。 「太平洋側はすぐには津波はない」という認識がある」 		<ul style="list-style-type: none"> 津波・水害は怖い。 高潮被害は、住んでいなかったのでは知らない。 1993年釧路沖地震のときは旭川に住んでいて遭わなかった。 奥尻・阪神大震災のことが頭にあって、8月の水害で、古川が怖いという認識がある。 			<ul style="list-style-type: none"> 高波が怖い。 台風10号の直後で、古川が津波や水害のときに怖いという認識がある。 海岸町に長く住んでいるが、津波の経験はない。 	

[24 宅]は、隣の息子宅[23 宅]の様子を見て、何も倒れていなかったので大したことはないと思い、警報などを聞いても大丈夫だと思っていたが、余震で非常に恐怖を感じて位牌や着替え、保険証などをまとめ、避難の準備を始めた。その後に孫が迎えに来たため、娘の家に車で連れて行ってもらった。

この人々に共通するのは、50代で地震や津波の経験も比較的少なく、危機感が薄いということである。[21 宅]の人たちは、1982年浦河沖地震を同町内で経験しているものの、1993年釧路沖地震のときは北見市にあり、「(日本海側と違って)太平洋側はすぐには津波が来ない」と言っており、危機感が薄い。[22 宅]の人たちは、1993年の釧路沖地震のときはたまたま旭川に行っていて、揺れ自体は経験していない。[24 宅]の人たちは、過去の地震をあまりよく覚えていなかった。

(6) 避難しなかったパターン

[18 宅]、[19 宅]の高齢の女性は、まったく避難しなかった。[20 宅]の高齢の女性も、息子に連れられていったんは避難したものの、6時00分前に帰宅した後は、避難せず、海岸沿いにある[20 宅]の二階で、「津波」が来るかどうか、「引き潮」があるかどうか、海を見ていたという。その際、自治会長の伏木田さんの夫人や役場の人から、数回逃げるようにいわれたが、その場に留まっていたという。

ただし、この避難勧告を聞いても避難しなかったこの3人も、全く津波の危険性を考えなかったわけではない。結果的に誤った行動ではあるが、自宅から海を見て「津波」、「引き潮」を確認する行動をとっており、津波を意識していなかったわけではない。

この人々に共通するのは、昔から海岸町に住んでおり、海岸町で地震による被害を受けた経験がないことが、逆に「安全だ」という認識につながってしまったと思われる。

(7) 「津波てんでんこ」のパターン

海岸町住民は、家族でまとまって避難した世帯がほとんどであった。唯一の例外が、[28 宅]、[29 宅]である。[28 宅]は、[29 宅]夫婦の弟と甥にあたる。本震直後は、5時00分頃に[28]宅の弟がまず避難している。次いで、テレビから津波警報を確認して[29 宅]の夫が逃げろといい、それを受けて[29 宅]の妻が[28 宅]の甥に声をかけて、5時15分頃に一緒に避難している。そして最後に、[29 宅]の夫が静内駅舎に避難した。避難は早かったが、ばらばらの避難であった。

余震後の避難のときは、[29 宅]の夫は、6時15分頃、一人で駅舎に向かった。奥さんは大したことはないと思い、家にいたそうである。

ここで特筆すべきは、本震直後において、逃げられる者から「てんでんこ」に避難した家族は1組だけで、あとは、全て世帯がまとまって避難していることである。

3.4 まとめ - 海岸町の災害文化の特徴 -

全員に聞き取りを行ったわけではないので、正確な避難率は出せないが、体感震度が非常に低いことを差し引くと、避難行動は非常に活発であったということができよう。

ただし、

地震を契機とした避難というより、避難の呼びかけやテレビの津波警報の認知による避難が多いこと

情報を待っていたため、比較的、避難までの時間が遅かった世帯が多いこと

多くの住民が 6 時前という早い時間に戻ってきていること（危機意識が持続しないこと）

声を掛け合って逃げている世帯が多いこと

避難行動が緩慢であること

津波を全く経験していない地域ではあるが、「津波経験」や「津波経験の伝聞」が非常に避難行動の大きな促進要因・阻害要因になっていること

などに特徴がある。

これは、海岸町の災害文化が、過去の津波経験の伝承によって形成された自然発生的な災害文化ではないことに由来するものと思われる。つまり、それは

高波被害の経験とその伝承

町の古老による他地域の津波文化の伝承

防災意識が高く、かつ町役場の防災担当職員と近い関係にある防災リーダーとしての自治会長の存在

自分たちに直接の被害はなかったが、地元が被災し、自分たちの住んでいる場所が危険を及ぼす可能性があることを認識した台風 10 号の経験

これらを要因とした防災に関する住民同士、行政の担当者との話し合い

などを要因として、人々の努力によって形成された「災害文化」といえよう。

また、近隣の人と避難形態が非常に似ているという結果がでた。このことから、避難行動には個々人の個別の心理的要因や地理的認識だけではなく、人間関係、近隣関係といった人的要因が非常に大きいことが示唆される。

この海岸町の避難行動の事例は、人々の努力によってつくられた「災害文化」のモデルケースである。

また一方で、被害経験のない人々は、往々にして、行政の避難勧告の有無やテレビの津波情報の予測値に頼り過ぎる傾向にあることも示している。どのようにしたら、情報にたよらない防災行動、「地震即避難」という津波災害文化を形成することができるか、その方策を考えていかなければならないという課題も提示している。

4 豊頃町大津地区

豊頃町は、2003年十勝沖地震の際に、震度6弱の強い揺れに襲われた。町南端の大津地区は津波に襲われ、海岸で釣りをしていた2名が行方不明となったほか、漁船や車両などが水没するなどの被害が生じた。



図 4.1 大津港の津波被害（港にとめてあった車が水没した。）

豊頃町大津地区は、こうした被害の大きさばかりでなく、住民の対応行動でも際立っていた。2003年十勝沖地震の被災地8箇所で住民アンケート調査を行った「2003年十勝沖地震時における津波危険地区住民の避難行動実態」によれば、豊頃町大津地区は、他の地域にくらべて、地震時に津波を予想した人や、避難した人の割合がきわめて高かった。

このように、大きな津波被害を受け、適切な対応行動が行われた豊頃町大津地区において、住民の避難行動や漁業従事者の津波対応行動の実態や背景をより詳しく調べるため、聞き取り調査を実施した。

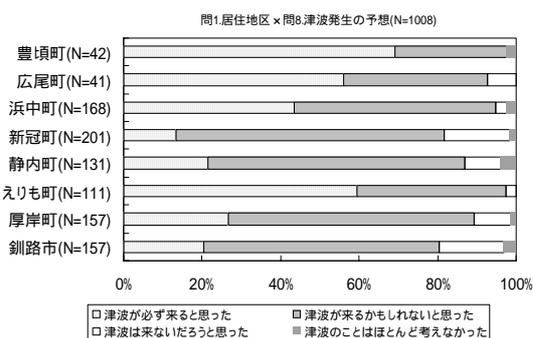


図 4.2 地震時に津波が来ると思った人（地区別）

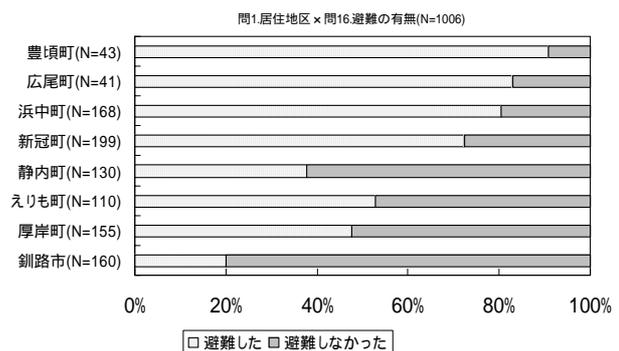


図 4.3 地震後に避難した人（地区別）

4.1 地域の特徴

4.1.1 地勢

豊頃町は、北海道十勝支庁の東南に位置する。町は太平洋に面しており、町の東部には太平洋に至る十勝川が流れている。豊頃町（総人口 4,164 人、1,471 世帯）の中心地は町北部の茂岩地区であり、町役場・消防署などの行政施設がここに集中している。

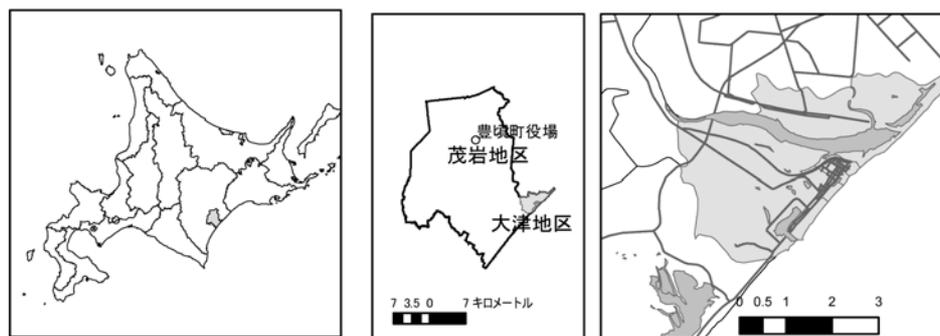


図 4.4 豊頃町大津地区の位置

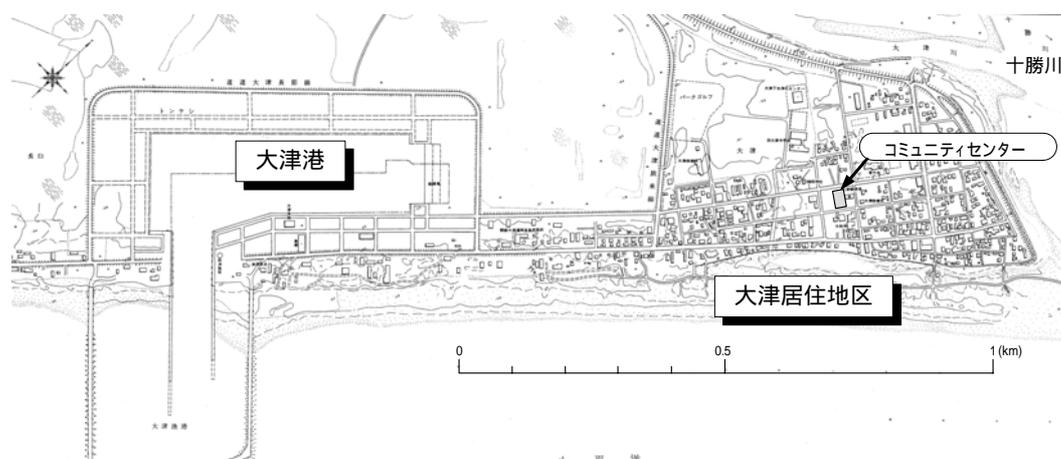


図 4.5 大津地区の詳細図

調査を行った大津地区は、十勝川河口に隣接し、太平洋に面する漁業を中心とした港町である。大津地区の世帯数は 177 世帯、人口は 446 人であり、産業構造をみると第 1 次産業従業者が約半数を占め、なかでも漁業従事者が 77 人と大半である。大津地区における主な居住地域は、十勝河口から大津港につらなる海岸に沿った北東から南西方向約 1 キロメートルの地帯である。住居はほとんどが平屋で、津波のさいに避難場所となるような高層建造物は、後述の大津コミュニティセンターが唯一あるだけである。

居住地域の西南に隣接して、大津漁港がある。大津漁港は沿岸漁業が盛んで、なかでも

サケ定置網が漁獲高の8割をしめており、秋サケの名産地として全国に名高い。地震の起きた9月末はまさにサケ漁の最盛期で、地震発生の早朝には、すでに多くの漁業従事者は海上に出ていた。



図 4.6 大津の居住地区



図 4.7 大津港

大津漁港では、複数の漁家が共同で漁船を所有し、定置網漁業を行っている場合が多い。平成10年漁業センサスによれば、大津港では、北海道および全国平均にくらべて、漁業経営形態として共同経営が多く、漁業従業者の多くはその雇用者となっている。また、漁船の規模を見ると、3~20トンクラスの漁船が多い。複数の漁家が共同で小型の漁船を所有し沿岸漁業を行っているのである。

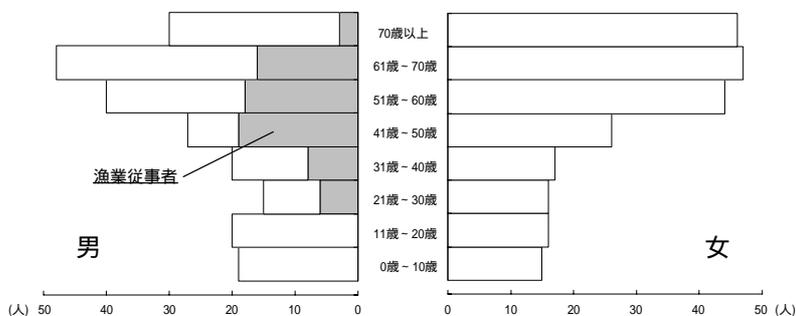


図 4.8 大津地区の男女別人口構成比（男性については漁業従事者数も掲載）

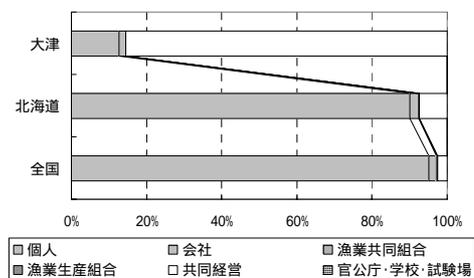


図 4.9 経営組織構成比

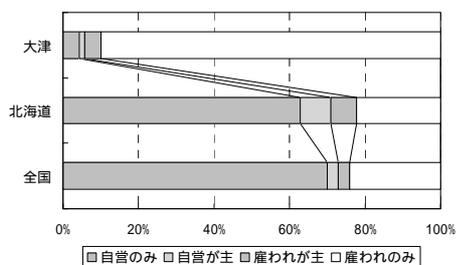


図 4.10 漁業就業種別構成比
（大津と北海道・全国の比較）

4.1.2 大津地区の津波防災関連施設・設備

(1)防潮堤

大津地区は、北海道としては長い歴史をもつ集落（港の開設は明治8年）であり、1952年の十勝沖地震、1960年のチリ地震などで津波に襲われた歴史を持つ。そのため大津地区では、津波防災に対する警戒が強く、居住地域の海岸線に防潮堤が築かれている。防潮堤の高さは、十勝川河口に近い北東側で高く、南西（大津港へ向う方向）に向かって低くなっており、居住地域から外れる大津港周辺には防潮堤は設けられていない。



図 4.11 防潮堤（左側が町、右側が海）



図 4.12 海側から見た防潮堤

(2)情報伝達媒体（防災行政無線、緊急警報放送受信機能付きラジオ）

豊頃町では平成7年には防災行政無線が開局し、大津地区には屋外拡声器が3機設置されている。さらに、全世帯には緊急警報放送受信機能付きのラジオが配布されている。このラジオは、電力がコンセントあるいは乾電池から供給されている際に、津波警報などの緊急警報放送を受信すると自動的に電源が入り音声が出る機能をもつ。



図 4.13 防災行政無線の拡声器



図 4.14 緊急警報放送受信機能付きラジオ

しかし、今回の地震直後には、ほとんどの住民は無線放送の前に、自ら避難を開始していた。また、緊急警報放送受信機能付きラジオも、ほとんど住民に利用されなかった。

< Q > (前略)どのようにして、情報を仕入れようとしたのですか？
 < 高台 - 1 > ラジオですね。
 < Q > 町から配られた、警報放送受信機能付きのラジオですか？
 < 高台 - 1 > 普段使っているラジオです。(後略)
 < Q > 豊頃町から配布されたラジオを使わなかった理由は、どのようなことですか。
 < 高台 - 1 > 電池も入れていなかったし、ずっと使っていなかったのです。

ラジオを配布した関係者によれば、ラジオは戸別訪問して配布され、使用方法も説明された。しかし、多くの大津住民は、より小さい携帯型のラジオなどを普段から愛用していたため、地震発生時にも日常使っているそのラジオを利用する結果となった。

防災用の機器が緊急時に利用されるためには、日常時にも利用されていることが必要条件である。

(3)津波避難施設

大津地区では平成 11 年に、津波避難施設としての機能をもつコミュニティセンタ が完成している。センタ には、毛布などの緊急物資が備蓄されているほか、和室、洋室や炊事施設・シャワ 室なども設置されており、避難生活が可能な施設となっている。同施設には、町役場の大津支所が設置されており、地域の小集会在しばしば開かれるなど、平常時から大津地区の行政活動やコミュニティ活動の拠点となっている。



図 4.15 大津地域コミュニティセンタ



図 4.16 センタ 内の倉庫
(非常物資等を備蓄)

(4)その他

集落内には、コミュニティセンタ 以外に、津波避難施設として適当な建造物は存在しない。地形的な高台も集落内には存在せず、コミュニティセンタ 以外に今回の地震で住民が避難した場所は、集落から北へ 3 キロメートルほど離れた位置にある高台であった。

4.1.2 大津地区における 2003 年地震の被害

2003 年十勝沖地震は、9 月 26 日午前 4 時 50 分に発生した。豊頃町での揺れの大きさは、

震度 6 弱であった。全壊 9 棟、半壊 14 棟、一部破損 105 棟の住居被害が出たほか、町内の多くの道路も被害をうけた。大津地区内の町道も被害をうけ、大津地区から茂岩へ至る道道旅来線でも陥没などの被害が発生した。また、地震直後に大津地区は停電となった。

大津地区では、こうした地震動による被害に加え、津波被害も生じた。豊頃町によれば、大津港には、5 時 24 分に 205cm の津波第一波が到達し、6 時 7 分に 60cm の第二波が、6 時 28 分に 206cm の第 3 波、6 時 50 分に最大の波高となった 258cm の第 4 波が到達した。

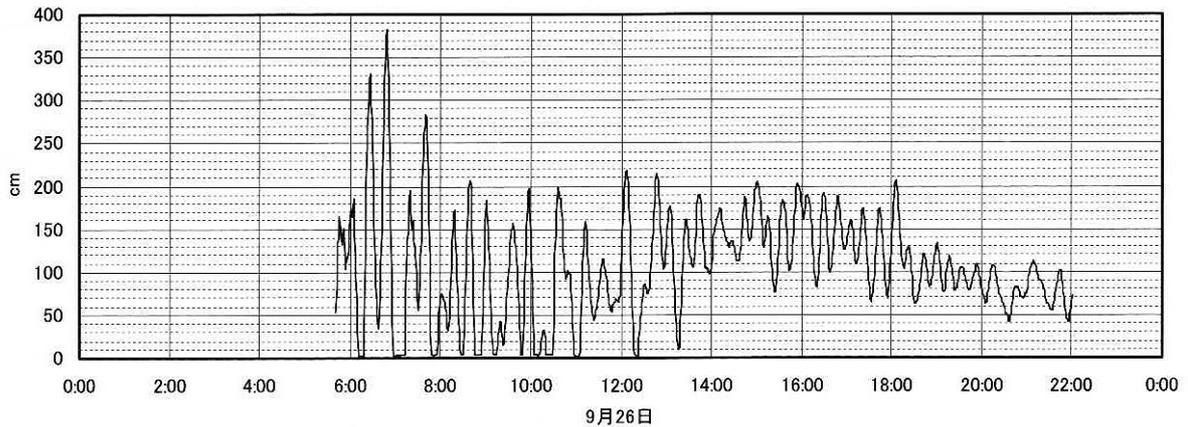


図 4.17 大津港（豊頃町）の検潮所による津波波形記録

津波によって、大津地区の十勝川河口で 2 名が行方不明となった。防潮堤の外側で釣りをしていたところ、津波にさらわれたものと推測されている。防潮堤の内側の居住地には津波による被害は見られなかったものの、防潮堤のない大津漁港周辺では多くの被害が発生した。船揚場では、1 隻が水没し 1 隻が浸水し、漁港内に駐車していた多くの車両が水没した。



図 4.18 道道の被害



図 4.19 大津港の被害

襲来した津波の様子は、大津港周辺で多くの者に目撃されている。大津港のやや南東に位置する工場にいた住民は、津波(第 2 波)が襲来した時の様子を次のように述べている。

階段を正面から見たように感じに見えるんだ。段々になっていて、一つの波の後ろまた違う波、というか海があるという感じ。そして、ず っと来る。ず っと来るような感じで、だんだん上がってくる。みるみるうちに来るよ。そして音がゴオオオという。あと、船がぶつかる音も聞こえた。

(中略)そして、ダ ッとすぐ引いていく。その引くときがすごい。速い。ザ ッと音がして、その辺の物をみんな引っ張っていく。(工場の)物がもう裏の方まで全部動いていった。なくなった物もいっぱいある。あれじゃあ、泳げる人も死んでしまう。

以下に、地震発生当日の大津地区にかかわる事項を時系列にまとめた。

表 4.1 大津町における地震発生当日の時間経緯(豊頃町資料より抜粋)

時間	事 項
4:50	地震発生 震度6弱 マグニチュード8.0
4:57	太平洋沿岸に津波警報発令(2メートル予想)
5:17	大津地区住民(177世帯381人)に避難勧告
5:24	津波第1波到達 205cm
6:07	津波第2波到達 60cm
6:08	余震発生 震度4 マグニチュード7.1
6:28	津波第3波到達 206cm
6:50	津波第4波到達 最大258cm
7:21	津波第5波到達 70cm
7:41	津波第6波到達 158cm
8:18	津波第7波到達 48cm
8:30	通行止め <ul style="list-style-type: none"> ・ 国道336号 浦幌町吉野～豊頃町長節 ・ 国道38号 幕別町明野～浦幌町 ・ 道道旅来豊頃停車場線、道道大津旅来線、道道大津長節線 など ・ 町道・旅来長節線 など
8:39	津波第8波到達 81cm
8:59	津波第9波到達 59cm
9:00	大津地区避難住民400人(避難所:大津コミュニティセンタ 炊き出し開始)
9:00	津波注意報に切り替わる
9:25	大津地区避難勧告解除(自主避難に切り替え)
13:30	第1回災害対策本部会議
15:27	余震発生 震度3 マグニチュード6.2
17:00	災害対策本部に十勝川河口で行方不明者2名の連絡 搜索開始
18:30	津波注意報解除
21:18	全町で停電復旧
22:00	大津地区避難所宿泊者数 60名

4.2 津波への対応行動の様子

4.2.1 概要

前述のように、2003年十勝地震は、9月26日の午前4時50分に発生した。発生時刻が早朝であったため、住民の多くは自宅で就寝中であった。地震によって目を覚ました住民の大半は、すぐに津波を予想し自らの判断で、大津地区内の指定避難所であるコミュニティセンターに避難した（ ）か、あるいは大津地区外の高台に避難（ ）した。これに対し、津波を予想せず避難もしなかった住民（ ）は、ごくわずかであった。

一方、漁業関係者の多くは、地震の起きた9月末が大津港名産の秋サケの最盛期であったため、地震発生時には既に海上で作業にあっていた。漁船のうち、釣り人をのせ港から遠く離れていた釣り船は、津波がおさまるまで沖合で待機した（ ）。これに対し、地震時には港の近くにいた定置網の漁船の大半は急ぎ港へ戻った（ ）。また、地震時にまだ港内にいた1隻の釣り船は、地震後に沖へと船を避難させる「沖出し」を行った（ ）。

以下では、地震発生時に海上にあった漁業従事者と、陸上にいた住民とに大別して、それぞれの津波対応行動について記述していく。

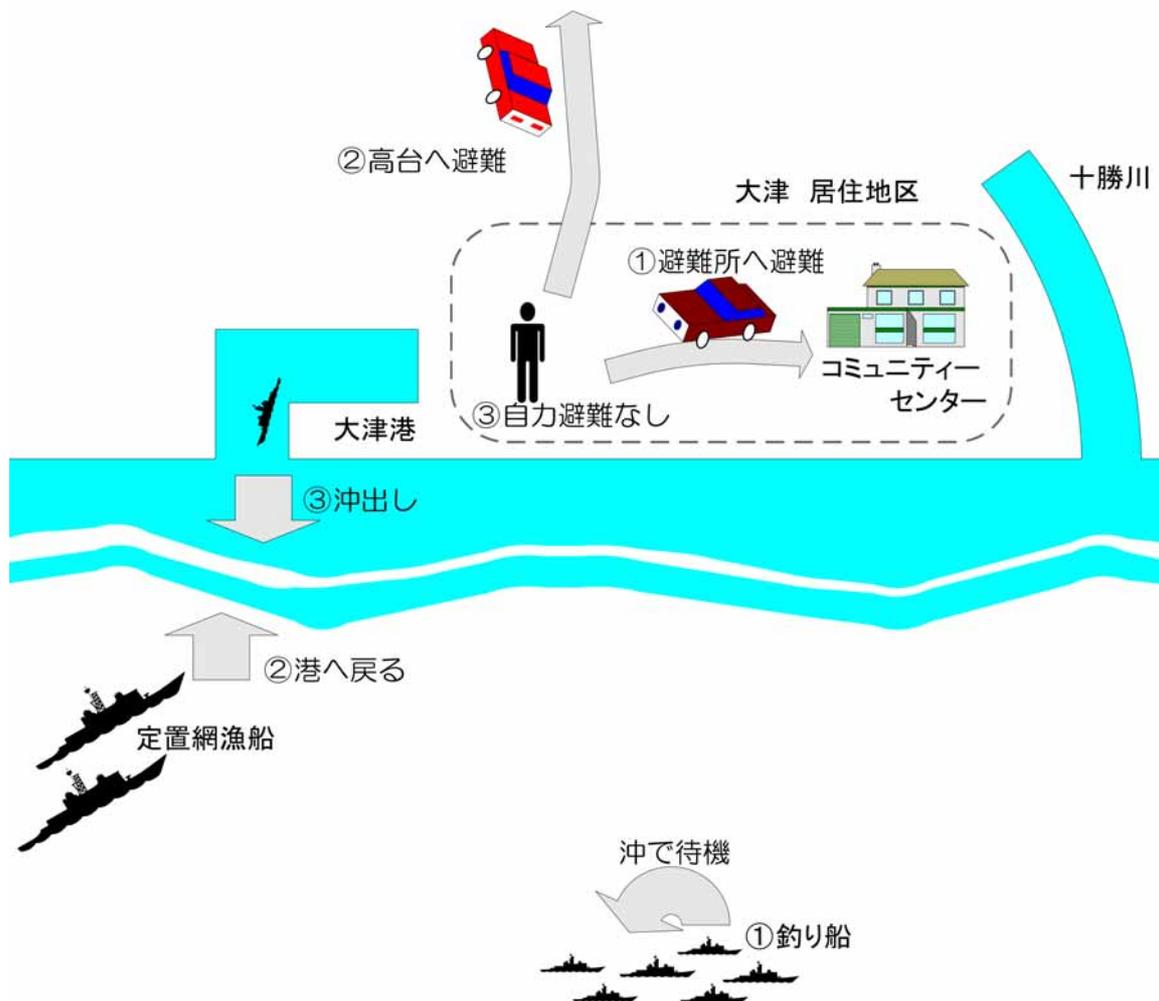


図 4.20 大津住民の地震時の居場所と、地震後の行動の概念図

4.2.2 海上にいた漁業関係者の津波対応行動

地震の発生した9月26日の早朝、サケ漁のために多くの漁船は海上にでていた。漁船は、釣り船と定置網漁船に大別される。

釣り船は小さく（約5トン）、サケ漁のため各地からの釣り人を乗せ、ふつう1人の漁師が操船する。出航時間は早く、地震発生時には数十隻が港から遠く離れた箇所に行った。

一方、定置網漁を行う漁船は大きく（20トン弱）、10名程度の漁師が操船している。出漁時間は釣り船より遅く、地震発生時には7隻程度が港から比較的近い箇所に行った。

こうした漁船の種別と、地震発生時の操業箇所に応じ、津波に対する行動は以下の3つのパターンに分類される。

(1)地震発生時に沖で操業しており、津波がおさまるまで沖に待機した釣り船

(2)地震発生時に港近くで操業しており、地震直後に港に戻った定置網漁船

(3)客が遅れ、地震発生時にまだ港内におり、地震後に沖出しをした釣り船

以下、この3パターンの津波対応行動について記述していく。

(1)釣り船（沖合い）

釣り船の多くは、地震発生時には、既に大勢の釣り客を乗せ、沖合に向かう途中であった。<釣船 1>は、10名ほどの客を乗せた4.9トンの船を一人で操作し、4時30分頃に出港していた。そして4時50分頃、地震によって海水が震動する海震現象に遭遇し、地震の発生を感知した。

<釣船 1> 航海中に、何か衝撃があって、船のプロペラにロブが網を巻いた時と同じような症状になりました。それで、機関を停止したが、振動が鳴りやまない。機関を停止しても何十秒間かドンドンと続いた。それで、これは地震だと思いました。

<Q> それで、すぐに地震だと分かるものなのですか？

<釣船 1> 30年ほど前にも、この海で経験しているので。（中略）船への衝撃は、震度4強以上の地震でないともあまり感じない。震度3ぐらいでは船にはあまり分からないかもしれない。

<Q> それは経験上、震度3ではあまり感じたことがなかったからですか？

<釣船 1> そうです。

<釣船 2>も同様に、ほぼ同時刻に港を出港し、1人で船を操作して沖合に向かう途中、地震に遭遇した。そのときの様子は以下の通りである。

<Q> 地震が起きたときは、何か気付きましたか？

<釣船 2> 気付いた。船が、ガタガタとなる。小さな地震では感じないんだけど。4時50分といたら、まだ暗い中で走っているから、どういふふうにならぬか、はつきりは分からないけど、船におかしな抵抗が加わった。それは感じたね。船が全然進んでいかぬんだ。

<Q> それで、地震が起きたと分かったのですか？

<釣船 2> いや、それだけでは、自分では初めての経験だったから、地震だとは分からなかった。その後、家から携帯へ電話があって、ものすごい地震があったと言われた。それで、あ、これは地震で船がこういふふうになったんだと分かった。昭和27年の十勝沖地震あったときには、僕は中学生で船には乗ってなかった。

このように、いずれの船でも運航中に異常に気づいている。そして、<釣船 1>はかつての体験から、<釣船 2>は経験と情報によって、大きな地震が起きたという認識を得ている。さらに両者は、地震による津波を予想し、安全確保のための行動をとっている。

<釣船 1> 前と同じような症状（船への衝撃）だったので、これは地震だと思い、これだけ衝撃があると、津波も大きいと思いました。

<Q> 津波がくるとすぐ思ったのは、過去に津波を経験したからですか？

<釣船 1> そうです。もう2,30年前です。（中略）船を、さらに沖へ避難させました。無線やラジオを聞いて、津波警報解除になるまで港へは入らないと、お客さんに伝えて了解をもらいました。

<釣船 2> 陸の家族から携帯で、「ものすごい地震があった。すぐ帰ってきてくれ」と言われた。しかし、すぐ後ラジオで津波警報を聞いたので、港に入らず沖合に出た。その方が、津波の影響を受けない。そうして、10時45分まで沖にいた。

このように、いずれの船も、地震直後に津波が来ると予想していた。そして、船を沖合に出して、津波がおさまるまで沖で待機した。（この2隻以外についても、釣り船は全舟が同様に沖に留まっていたと証言している。）特に、<釣船 2>は、海上での津波遭遇体験はない上、陸の家族から帰港を要請されたにもかかわらず、沖合で待機するという津波対応行動をとっていることは着目される。大津地区の漁業従事者の間では、津波に対する安全行動についての知識が十分に共有されていた様子が伺える。

しかし、こうした釣り船の対応行動と、定置網の漁船津波対応行動は著しく異なっていた。

(2)定置網漁船

定置網漁船の大半は、津波の押し寄せるなか、港に戻るという釣り船とは異なる行動をとっていた。定置網漁船は、釣り船と違い、10名ほどの漁師で操船する。作業場は、釣り船に比べて港に近く、出港時間も遅かった。そのため、地震発生時、釣り船はすでにある程度沖まで出ていたのに対し、定置網漁の船は出港したばかりであった。

<定置網 1> および<定置網 2> は仲間と、共同会社を設立してサケ定置網漁の営んでおり、その管理している船に10人ほどが乗船して漁に出ていた。

<定置網 1> 最初は、船に異常を感じた。船体がエンジンに何かトラブルがあったのかと思ったけれども何もなかった。そしたら、陸から船員の携帯に電話があって、地震だと知らされた。それで丘を見たら（停電で）真っ暗になっていたの、これは地震だと思った。

<定置網 2> サケ定置の漁で、海に出ていたんです。共同でサケ定置の会社をやっていて、その管理している船で、そのときは10人くらい乗っていた。

<Q> 地震が起きた時に、「地震が起きたな」と分かったのでしょうか？

< 定置網 2 > 分かりました。下から何回か突き上げるような音がしました。ドンドンと。そして「あれ、変だな」と思って。船のプロペラに物が巻いたときにそういう感じになる。それで、ふたを開けてプロペラを見たけど何ともなくて、「これはおかしいな」と思っていたら、ふだんは街灯のついている丘の方が、全然ついてなかった。それで、「あ、これはおかしい」と。そしたら、一緒に乗っていた社長の携帯電話に電話がきて、「地震だ」と。

このように、定置網漁船においても、海震現象に気づき地震の発生を認知する時点までは、釣り船の場合とほぼ同様であった。すなわち、船体に異常を感じた後、経験や周囲の様子などから、比較的速やかに地震を認知している。

しかし地震を認知した後は、釣り船の対応行動とは著しく異なり、大半の定置網漁船が港に戻るという行動をとっている。

< 定置網 3 > 振り返ってみたら、大津の町の電気が1個もついてない。それでこれはおかしいぞと、すぐ（港へ）引き返した。

定置網漁船が港に戻った時には、すでに港には津波が襲来していた。その際の様子は、次のように語られており、決して安全な行動ではなかったことが伺われる。

< 定置網 1 > 港に津波の1波目が入ると一緒に、舟を港に入れた。船を岸壁に係留すると、岸壁から波があふれた。岸壁は、高さ1メートル50センチ位あるのに、舟が岸壁に着くか着かないかのうちに、もう津波が岸壁を乗り越えていた。
< Q > 危なくなかったですか？
< 定置網 1 > 今、思えば本当に危険で、それこそ危機一髪というか。

< 定置網 3 > うちらは地震後、一番先に帰ってきたんですよ。それでも、もう完全に津波が来ていましたね。水面が普段の高さじゃなくて、もう堤防の上から1メートルぐらいまできている。(中略) 岸壁にも高い所と低い所があります。それで、「これは危ない」ということで、いつもと違う岸壁の高いところに、船を付けました。

このように、定置網漁の船の大半は、津波の押し寄せるなか、港に戻るという行動をとっていた。一方、ほぼ同じ頃に、反対に港を出て沖に向かった船もあったので次に記す。



図 4.21 上空から見た大津港



図 4.22 津波が岸壁を乗り越えている様子

(3) 沖出し（釣り船）

地震発生時、多くの釣り船はすでに沖合にあったが、例外的にまだ港内にいた釣り船があった。乗船予定の客が遅れたためである。この釣り船の漁師は、地震後すぐ、船から釣り客を降ろし家族の安全を確かめた後、船の沖出しを行った。以下に、その経緯を記す。

< 沖出し 1 > たまたま、うちの船はお客さんが来るのが遅くて、他の船が全部出た後にまだ乗船をしていた。それで、いざ出航しようというときに地震があった。まだ岸壁から船が離れる前だった。地震には、船の上でも気づいた。普段と違うコッココッコと音がした。まだ船は出ていなかったのに、まるでプロペラに物を巻いたような音がした。「何かだな」と思ったけど、まさか地震とは思わなかった。そして、ふっと丘を見たら、港に停めてあった車が大きく動いていて、電柱も倒れていた。それで「これは地震だ」と分かった。

このように、港内の漁師も海震現象を感知しており、地上の様子を観察によって地震の発生を認知した。その後は、すぐに津波の発生を予想し、釣り客の安全確保と、家族の安全確認を行っている。

< 沖出し 1 > お客さんには、「この地震だと、ぜったいに津波が来る。今日は釣りに行かないから帰ってくれ」と言った。それでお客さんは車で帰っていった。そして自分も、すぐ車で家に戻った。（中略）戻ったら、家も家族も大丈夫だった。

こうして家族の安全を確認したのち、< 沖出し 1 > は港にとって返し、船を守るために、津波の襲来しているなか船の沖出しを行った。

< 沖出し 1 > それで（家族に）「まだ津波が来るから、すぐ港から船を沖の方へ出す。避難してくれ」と言って、すぐまた車で港に戻った。着いた時には、既に1波目の津波が来ていた。港に停めてあった120台くらいのお客さんの車が、1台残らず水に浸かっていた。そして2波目くらいの津波が来ている最中に、港の中を船で走って外に出た。もうそのときには（津波が）来ていて、コッココッコと波の音がした。そんなふうにして港から出ているとき、丘へ帰って来ようとしている定置網の人達とすれ違った。（中略）一番ひどかったという4波目の津波のときには、もう沖へ出ていた。（中略）沖に出たけども、そこから帰ってこられないから、帰ってきたのは12時ころ。みんなボツボツと戻っていた。そのころでもまだ、小さい津波が何波もあった。

このようにして< 沖出し 1 > は船を沖に出すことに成功し、自分の船を守ることができた。しかし、その行動自体は、決して安全なものではなかったようである。この< 沖出し 1 > の操船を陸から見ていた別の漁師は次のように述べている。

< 定置網 3 > 1波目はそんなに大きくなかったですけど、2波目、3波目。4波目が一番大きかったかな。そのころ、船が心配で、港の中で船を動かした人がいる。あまり大きくない、小さい船を。（中略）津波で港がもう3メートル、4メートル引いて上がっているときで、流されないように自力で前進したり、後進したりと、危機一髪の操船をしていた。「何かあったら」と心配で、みんなが周りで待機していた。

以上で確認した漁船における3つの津波対応パターンについて、下表にまとめた。

表 4.2 漁船の対応行動パターン

	釣り船	定置網漁船	沖出し（釣り船）
操業形態	10名程の客を、 個人所有の小型船に 乗せて、一人で操業	10人程の仲間で 大型の船を共同所有し 操業	客を陸に帰した後、 個人所有の小型船を 一人で操業
地震発生時の 居場所	出漁時間が早く、 地震発生時には既に、 やや沖合にいた。	地震発生時には、 港外の近海にいた	出航が遅れ、 地震発生時にはまだ 港内岸壁にいた
地震の認知と 津波の予想	すぐに地震と気づき、 津波を予想した	（同左）	（同左）
対応行動	沖合で待機	急いで帰港	沖出し （客を降ろした後）

4.2.3 陸上にいた住民の避難行動

地震の発生した時刻が4時50分と早朝だったため、大津地区の漁師以外の一般住民の多くは就寝中であった。地震によって目を覚ました住民は、立ってられないほどの揺れに襲われた。家の中では家財が倒れ、大津地区は全域が停電となった。

こうしたなか、住民の多くは、防災無線が放送される前から、自ら津波を予想し、家を出て避難を始めていた。また、高齢世帯等で自ら避難の難しい者も、別居親族や近隣者の車へ同乗するなどして避難を行った。避難場所としては、多くの者がコミュニティセンタへ避難したが、一部の者は集落から離れた高台へと車で向かった。

こうした、大津住民の避難行動をまとめると、次の3つのパターンに分類される。

(1)地震直後に津波を予想し、自らコミュニティセンタへ避難

(2)地震直後に津波を予想し、自ら高台へ避難

(3)津波を予想せず、自力避難なし。（他人に誘われて避難するか、避難せず）

以下、この3パターンの津波対応行動について記述していく。

(1)コミュニティセンタへ自力避難

これが、最も一般的なパターンであった。そこで、自らコミュニティセンタへ避難した住民の行動を、以下に記す。夫婦2名で暮らし、大津の居住暦が60年をこえる<コミセン1>は、震発生時の様子を、以下のように述べている。

<Q> 寝ているところに、地震があって起きたのですか？

<コミセン1> そう。

<Q> 地震どんな感じだったのですか？

<コミセン1> 最初は、そんなにドンと来たわけじゃない。ガタガタと来て、地震だな、ちょっと強いな、という感じで始まったんだ。そしたらだんだん強くなってきた。家内には、すぐ外に出ると言って、自分は布団の上で筆筒とテレビを押さえた。けれども、押さえていても、全然もうそんな状況じゃない。これはものすごい地震だと思って、立ったんだけど、ドンと振り飛ばされた。体がもう、ころころボールのように転がってね。

この直後、<コミセン1>は過去の体験から、すぐに津波を予想している。

<コミセン1> (前略)これは津波がまず大変だなと。

<Q> 地震の後、津波が来るとすぐに思い付いたのは、昔体験されたからですか？それとも誰かから話を聞いたからですか。

<コミセン1> 僕は昭和27年に、(この大津で)十勝沖地震を経験しているんです。小学校3年生かな。

<コミセン1>は、津波から身を守るため、妻とともにすぐに車で避難した。避難場所としては、コミュニティセンタを選択している。そして、まず別居している高齢親族の家に向かい、ともにセンタへ避難している

<コミセン1> 1階下りてきて、もう鍵を見つけて車で避難されようとした。それはどこに避難しようかという目安はあったのですか。

<Q> そこは、もうコミュニティセンタがありますから、もうそこしかないなと。(中略)90歳の母親がいますので。車を出して真っ直ぐ行って、それですぐ避難させて乗せて、車でセンタに3人で行ったんです。

<コミセン1>が、母親を乗せ、避難所に着いた時刻は、地震がおきてから約20~25分後であった。その頃、すでにコミュニティセンタには数十名の住民が避難していた。

<Q> コミュニティセンタへ着いたときは何時ぐらいでしたか？

<コミセン1> 5時10分か15分です。

<Q> センタには、結構もう人が来ていましたか？

<コミセン1> いました。そのときはもうドアは開いていて、2階に。

<Q> 10人、20人、それとも100人位いましたか？

<コミセン1> いや、100人まではないよね。



図 4.23 コミセンが避難所であることを示す看板



図 4.24 コミセン 2 階の大広間

<コミセン 2>も同様に、過去の経験から津波を予想し、家族揃って車でコミュニティセンタに避難した。途中寄るところもなかった<コミセン 2>がセンタに着いた5時前の時点では、センタの鍵がまだ開いていなかった。

<コミセン 2> 今回の地震は、昭和27年の(十勝沖)地震より、はるかに大きかった。立っていられなかったからね。(中略)大津は、地震が起きて震度5だとか6だとかになれば、直感的に津波だという頭があるんですよ。(中略)うちはお袋とうちの母ちゃんと3人で、すぐ車を出して、コミュニティセンタにいった。僕が最初だった、誰もまだ来ていなかったからね。

<Q> 何時ぐらいに着いたのですか？

<コミセン 2> 3分が4分してから、揺れがちょっと収まったかなというころに着いた。まだ、(コミュニティセンタの玄関の)鍵が開いてなかったよ。

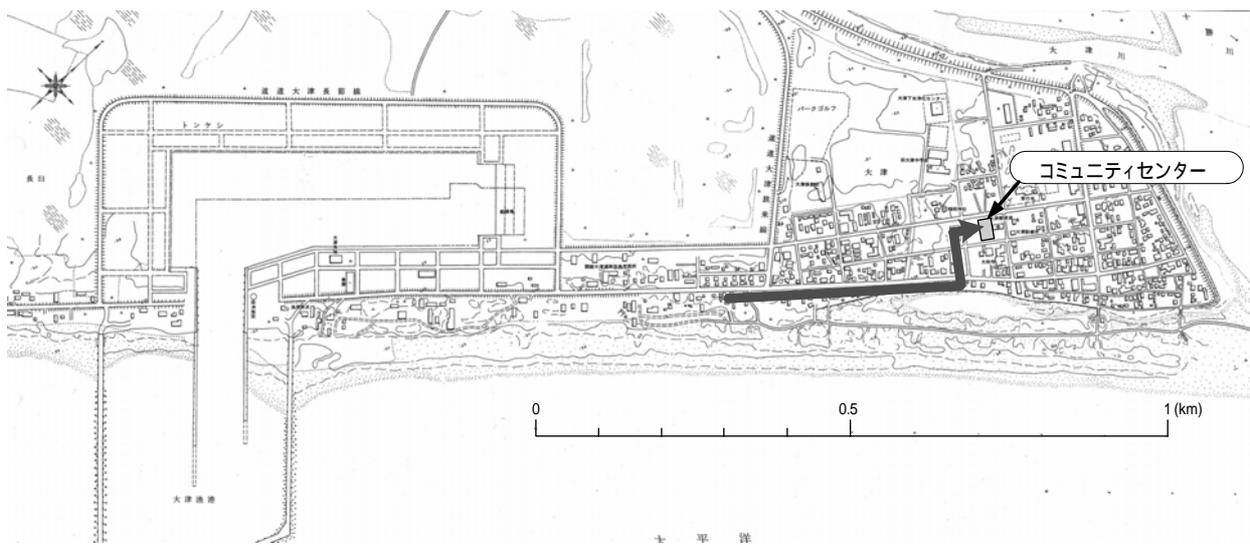


図 4.25 <コミセン 2>の避難経路

センタの鍵を開けた人は、センタ 近くに住む区長の一人<コミセン 3>であった。この人は、50歳前半であるが、停電の暗闇のなか、倒れた家具をおしのけ、眼鏡を見つけ鍵を手にとってセンタ に着いたのは、地震発生から10分以上たった5時過ぎであった。そのときには既に駐車場に15,6台の車が集まっていたという。

センタの鍵は、<コミセン 3>を含む5名の住民が保管していたが、一般住民は誰が保管しているか知らなかった。そのため、<コミセン 3>が鍵をあけるまで、早くセンタ に着いた住民は屋外で待つことを余儀なくされた。

前述の<コミセン 2>は鍵があくまで待っていたが、鍵を待たずにセンタ を離れ、高台へと車で向かったものもいた。

<コミセン 4> (地震が)大きかったので、これはすぐ津波が来る可能性が高いと思って、自分たちで判断してすぐ逃げる体勢になった。着替えて、ちょっと身の回りの大事な物とかを用意して、外に出た。(中略)家族5名で車に乗って、避難所のコミセンに行った。けれども、5時10分にコミセンに着いたら、まだ玄関が開いてない、誰も鍵を持ってないと言われた。

それで、コミセンの前で待っているよりも、高いところへ逃げようということになって、また車を走らせて山の方に行った。途中で、もう1人うちの裏に住んでいる1人暮らしの方(後述の<自力避難せず 1>)を乗せていこうということになって、乗せていった。

このように<コミセン 4>は、当初コミュニティセンタ に逃げたが、鍵がかかっていたため高台に向かった。これとは異なり、最初から高台へと向かった者もいたので次に記す。

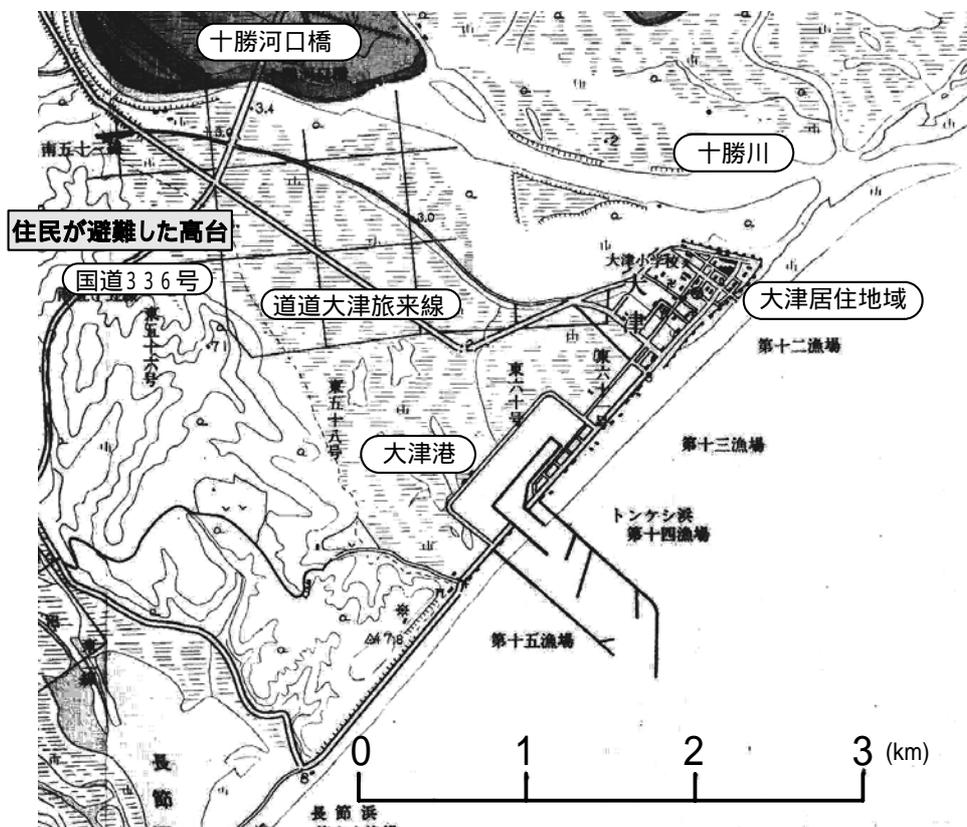


図 4.26 住民が避難した高台

(十勝河口橋付近の国道 336 号と道道大津旅来線の交差点付近)



図 4.27 一部の住民が避難した交差点
(交差点の向こう側の下り坂
を降りると大津地区に出る)



図 4.28 交差点から南西方向の高台を望む

(2)高台へ自力避難

避難先として、コミュニティセンターではなく、高台を最初から選んだ人もいた。少なくとも 20 台くらいの車が、高台に集まったと思われる。

40 際代半ばの〈高台 1〉は、22 年前に大津に移り住み、津波の体験はなかった。しかし、地震後すぐに津波を予想し、子供と車で高台へと向かった。

< Q > 地震が起きたときは、どうしていましたか？

< 高台 1 > 寝ていました。(中略)揺れている最中は、もうほとんど動けない状態です。立っていることもできない。しゃがんで柱につかまっていたんです。(中略)揺れが収まってからすぐ子供部屋に行ったら、けがもしていない。それで、すぐ逃げるように。

< Q > なぜ逃げようとしたのですか？

< 高台 1 > 津波が来る、あれだけ大きな地震だから、絶対津波が来ると。

< Q > それは、そういう放送が流れたのですか？

< 高台 1 > いや、全然。まだそんな時間ではなかったと思う。

(中略)

< Q > 逃げた場所はどこですか？

< 高台 1 > 十勝河口橋の交差点(国道 366 号と道道大津旅来線の交差点)のところ。

また、30 歳台前半で、8 年前に結婚とともに大津に移り住んだの〈高台 2〉も、やはり大津での津波体験はなかったものの、地震後すぐに津波を予想し、車で避難を始めた。避難の途中、義母宅に寄って同乗させた後、高台を目指して道道大津旅来線を北へと向かった。

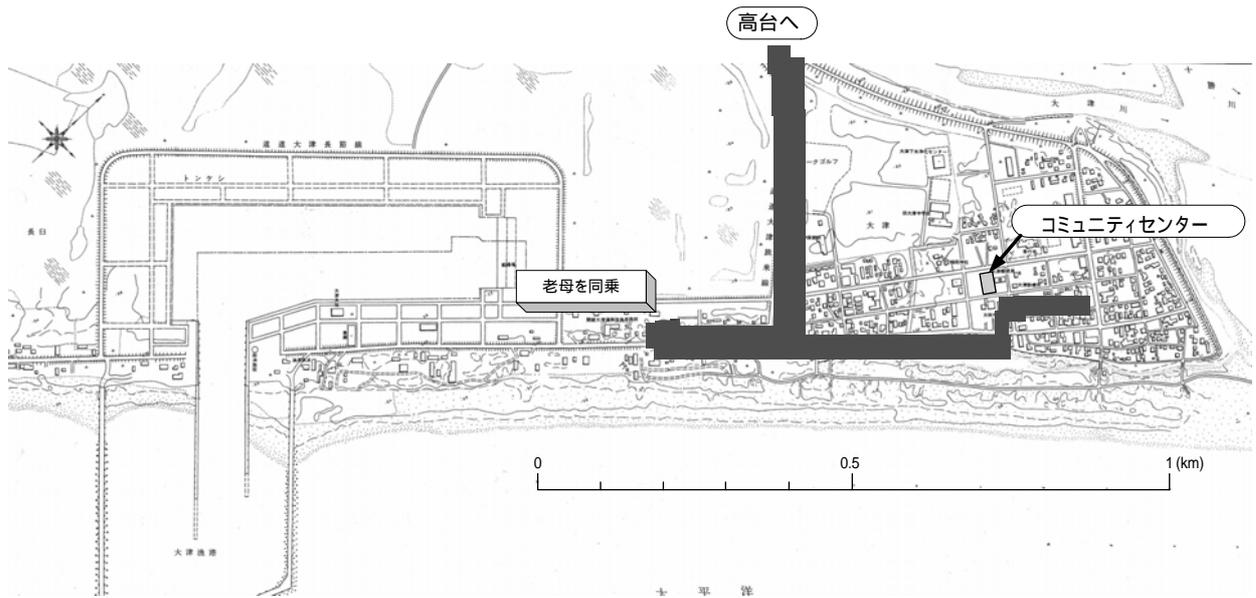


図 4.29 <高台 2> の避難経路

(3)津波を予想せず、自力避難なし

大津住民のなかにも、多くはないものの、地震後に津波を予想しなかった住民もいた。そうした人たちは、自ら避難をはじめたことはなかった。津波を予想しなかったひとは、次の2パターンに大別される。

津波体験はあるが、地震時に気が動転した住民

津波体験のない住民以下に、それぞれの様子を記していく。

津波体験はあるものの、地震時に気が動転した住民

<自力避難せず 1> は、1人暮らしの60代後半の女性で、チリ地震津波などの体験があるが、地震の激しい揺れに動転し、津波の危険や避難の必要性には思いが及ばなかった。しかし地震後、隣人から声をかけられ、隣人の車に同乗し避難することとなった。その様子を以下のように述べている。

<自力避難せず 1> 津波も何も、とっさのときには、頭はパニックだった。1人であるからどうしようという(中略)ドアが開いたからそっちから出たんです。

<Q> 外に出たのは、家から避難しようと思って出たのですか？

<自力避難せず 1> 避難とかそういう頭は全然なかったの。(中略)隣の<コミセン 1>が「避難するから早く支度しな」と声をかけてくれた。1人であるからでしょう。その後、今度は<コミセン 4>が「車、裏で待っているから。早く行くよ。」と言うので、載せてもらった。

<Q> 避難するよと声をかけられた時に、どうして避難するのだろうと思いましたか？

<自力避難せず 1> 津波。ここは、地震といたら津波のことが頭にあります。

動転していた当初は津波のことは念頭になかったにもかかわらず、隣人に避難の声をかけられた際には、津波の危険に思い至っていることが目を引く。

津波体験のない住民

<自力避難せず 2> は、1人暮らしの30代前半の男性で、9年ほど前に大津地区に転勤してきており、津波の体験はない。地震後、津波に対する明確な意識をもたず、地震直後には避難しなかった。

<自力避難せず 2> 地震が発生したときは自宅で寝ていました。(中略)地震の後、物が倒れてきたら困ると思って外に出たり、片付けをしたりしていた。(中略)なんか町をぱっと見たら、誰もいないというか、ションとした感じになっていた。これはちょっと家の中にいたらやばいのかなと、遅ればせながら気付いた。そして様子を見ていたら、コミュニティセンタに、どうも人がいるみたいだった。それで、避難場所になっているから、ちょっと行ってみた。

4.3 津波対応行動の背景

前節で整理したように、海上にいた漁業従事者の津波対応行動は、漁船の種別と地震発生時の作業場所に依り、次の3パターンに分類される。

- (1)地震発生時に沖で操業しており、津波がおさまるまで沖に待機した釣り船
 - (2)地震発生時に港近くで操業しており、地震直後に港に戻った定置網漁船
 - (3)客が遅れ、地震発生時にまだ港内におり、地震後に沖出しした釣り船
- そして、陸上の一般住民の対応は、以下の3パターンに分類される。

- (1)地震直後に津波を予想し、自らコミュニティセンタへ避難
- (2)地震直後に津波を予想し、自ら高台へ避難
- (3)津波を予想せず、自力避難なし(他人に誘われて避難するか、避難せず)

以下では、海上にいた漁業従事者の津波対応行動と、陸上にいた住民の避難行動について、各々その背景を考察していく。背景の考察にあたっては、1)地震認知の背景、2)津波予想の背景、3)対応行動の背景、のように時間順に考察していく。

4.3.1 海上にいた漁業従事者の津波対応行動の背景

前節で整理した地震発生後の対応をみると、地震を認知し津波を予想するまでの過程は、漁船種別や地震遭遇場所にかかわらず、ほぼ同じであった。一方、津波を予想した後の具体的な対応行動は大きく異なり、3つのパターンが確認された。その概要は、下表の通りである。

以下では、まず、地震の認知・津波の予想に影響した共通的な背景を考察する。その後、対応行動に違いが生じた要因について考察していく。

表 4.3 漁業従事者の津波対応行動の背景

	釣り船（沖合い）	定置網漁船（港近く）	釣り船（港内）
操業形態	10名程の客を、 個人所有の小型船に 乗せて、一人で操業	10人程の仲間で 大型の船を共同所有し 操業	客を陸に帰した後、 個人所有の小型船を 一人で操業
地震発生時の 居場所	出漁時間が早く、 地震発生時には既に、 やや沖合にいた。	地震発生時には、 港外の近海にいた	出航が遅れ、 地震発生時にはまだ 港内岸壁にいた
地震の認知と 津波の予想	すぐに地震と気づき、 津波を予想した	（同左）	（同左）
対応行動	沖合で待機	急いで帰港	沖出し （客を降ろした後）

(1)地震の認知

海上で海震現象に遭遇した際、その原因をエンジン異常などではなく地震の発生と認識できるかどうかは必ずしも自明ではない。そうしたなか、大津の漁業従事者達は、比較的迅速に地震と気がついた。以下では、このような地震の認知に影響した要因についてみていく。

海上で震動に見舞われた際の漁師の反応をみると、最初は全員に典型的な「(狭義の)正常化の偏見(Normalcy Bias)」が認められる。すなわち、船体に感じた異常な衝撃の原因を、地震ではなく比較的日常的な機械故障あるいは船体トラブルによって解釈しようとしている。

(再録) <定置網 2> (前略)下から何回か突き上げるような、音がしました。ドンドンと。そして「あれ、変だな」と思って。船のプロペラに、物が巻いたときにそういう感じになった。それで、ふた開けてプロペラ見たけど何ともなくて。「これはおかしいな」と思っていたら...

しかし、こうした解釈は、機関を点検しても異常を見つけられないことから、修正を余儀なくされた。ここで注目すべきは、すべての漁師が、異常音の原因をすぐに地震だと再解釈したことである。こうした再解釈が速やかに行われた背景には、次の3つの要因が見られる。すなわち、1)環境要因(例:陸上の停電など)、2)情報(電話、船体間の無線)、3)過去の経験、である。そして、これらの要因を単独ではなく複数得られたことが、速やかに地震だという確信を得られた背景にあったと思われる。以下では、その各要因について確認していく。

環境要因

地震の認知につながった環境要因として、多くの漁師が「丘が停電になっていた」という観察事実を述べていた。このほか、「陸の車が大きく動き、電柱が倒れた」「まわりの船が、全て泊まっていた」などという事態を目撃したことも、地震と確信した環境要因といえる。

情報交換

また、陸上の家族からの電話連絡によって、地震発生を知らされたことは前述したとおりである。陸上で地震動を直接感じた身近な人からの情報は、地震発生に関する信憑性のきわめて大きい決定的要因であった。

このほか、同じように海上で異常を感じた周囲の船の漁師との会話も、地震にリアリティを与えるものとして機能していたようである。以下の例からは、海上での情報交換と環境要因によって、地震の確信が得られた様子が伺える。

(再録) < Q > その後、これは地震だと確信したのは、どういう経緯だったのですか？
< 定置網 3 > (中略) 船の間を結んでいる無線がある。その会話のなかで「おい、地震でないのか」という言葉がでて、周り見たら、全部の船が一斉に海上で止まっていた。それで「あっ」と気付いて、「地震だ」と思った。

過去の体験

過去に海上で地震を直接に体験した人は多くはないものの、そのような人には過去の体験は有力な要因となっていた。特に、一人で操業する釣船の場合、全てを一人で判断し操船するため、過去の個人体験が強い影響を持っていた。

(再録) < 釣船 1 > 航海中に、何か衝撃があっって、船のプロペラにロブか網を巻いた時と同じような症状になりました。それで、機関を停止したが、振動が鳴りやまない。機関を停止しても何十秒間かドンドンと続いた。それで、これは地震だと思いました。
< Q > それで、すぐに地震だと分かるものなのですか？
< 釣船 1 > 30年ほど前にも、この海で経験しているので。(後略)

このように、「環境要因(目にした光景)」、「情報交換(他者との会話)」、「過去の体験」など複数の要因があいまって、地震の確信が得られていた。

これに対し、地震の認知に続く、津波の予想の段階においては、「過去の体験」が圧倒的に決定要因として作用していた。次にその様子を見ていく。

(2)津波の予想

海上で地震を認知した後は、全員が津波を全員が予想していた。その要因としては、「過去の体験」に言及する人が多かった。一方、「環境要因」や「情報伝達(津波警報の入手)」などは必要とされず、経験にもとづいて全員が津波を予想していた。

< Q > 津波だとすぐ思ったのは、津波を前に体験しているからですか？

< 釣り船 1 > そうです。

< Q > それは先ほどおっしゃった 30 年前の地震ですか？

< 釣り船 1 > そうですね、そのときも、船を操業していて、ドンという底から突き上げられるような衝撃があったので。

< Q > 地震が起きた時、すぐ津波だと思ったのは、今まで経験されたからですか？

< 釣り船 3 > 何十年前のチリ津波、十勝沖地震なんか全部経験している。今回の地震は実際にその場において、船の揺れ方、地震の大きさ、自分の体験で、これはもう津波来ると、とっさにやっぱり考えられるものなんだ。そういうような判断を、我々はできるんだ。

< Q > ...チリ地震の時以外にも、津波も経験しましたか？

< 釣り船 2 > 昭和 27 年の十勝沖地震のときも津波が来て、船が壊れたりした。だから、僕は津波これで 3 回目なんだ。

< Q > 大きな地震が起きると、津波がすぐ頭にかぶるのですか？

< 釣り船 2 > 必ず来ますからね。小規模なものでもあるから。

このように大津の漁師は、海で異常な船体の揺れを感じた際、過去の体験や、周囲の様子、陸や仲間との交信などによって地震の発生に気づいた後は、経験からすぐさま津波を連想していた。下図に、こうした認知の流れをまとめた。次に、津波を予想した後の対応行動の選択に影響を及ぼした要因について考察していく。

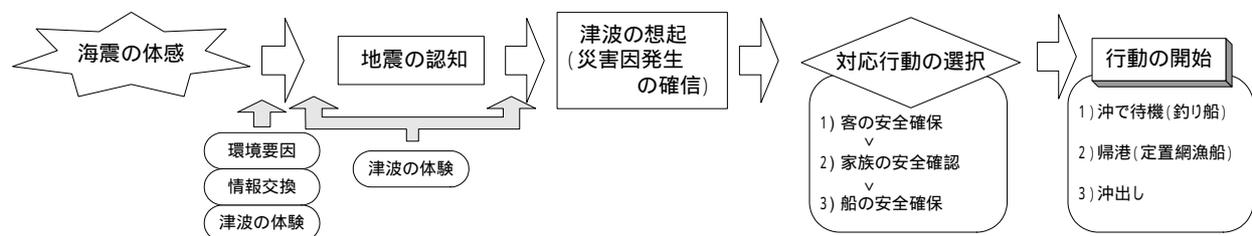


図 4.30 海上にいた漁業関係者の認知・対応行動の流れと背景

(3) 対応行動

漁船や操業場所の違いによらず、迅速な地震の認知と津波の予想は、すべての漁師に共通していた。しかし、その後の対応行動は、前述のように大きく異なる 3 つのパターンが見られた。以下では、そうした違いを生んだ要因について考察していく。

考えられる要因としては、港からの距離という物理的な因子のほか、次の 3 つの要因がある。すなわち、優先度の高い順に 1) 客の安全確保、2) 船員の家族の安全確認、3) 船の安全確保である。以下、これらの要因が、各漁船の行動にどのように影響を与えたのかを順に確認していく。

釣り船（沖合い）

釣り船は客を乗せており、船主にとっては客の安全確保が最重要事項である。次の事例は、そうした考えを明確に示している。

< Q > こういう質問は何かと思うのですが、奥様が丘の上におられたので、地震が起きた後、津波という危険はあるものの、港に戻ろうか思いましたか？
< 釣り船 2 > 戻ろうと思ったさ。だけど、戻ったらだめ。丘がどんなひどいことになっていてもね。例えばうち壊れたとか、物が壊れたとか。そうしたって、警報出たら帰ってはいけない。港へ帰ってきたらたら、船が津波でやられちゃうから。（中略）お客さんの命が大事だから。遊漁船だからね、うちは。お客さん8人なり10人なり乗っているから。

釣り船については、このほか、港から遠かったため、津波の襲来より前に港に戻ることができなかった、という事情を指摘する人もいた。

< Q > 釣り船の方は港に戻って来る舟がなくて、定置網の方は戻ってくる舟が多いというのは、操業場所が違ったからですか？
< 定置網 1 > そう。釣り船はもうあの時間帯はかなり沖へ行ってたから、港にもどるのに20～30分もかかる。一方、うちら定置の船は、10分位で戻ってこられる。

定置網漁船

定置網漁船は、釣り船とは異なり、地震後に船を港へ戻した。こうした定置網漁船の行動の決定権をもつ者は、原則的には船主である。

< Q > その電話（丘からの地震を知らせる電話）の後に「どうしようか」と皆さんで相談したのですか？それとも誰か1人が「港に戻ろう」と言って戻ったのですか？
< 定置網 2 > 社長が「帰るぞ」と。

客はいない定置網漁船において、船主が意思決定の際に最優先したものは、漁師仲間10名の家族である。たとえば、以下のように証言がそれである。

< 定置網 5 > 社長が、船員には家族もいるし、そういうふう考えたのかな。
< Q > 津波が来る前に戻って、家族のところ間に合うかもしれないと。
< 定置網 5 > 船自体も大きい船だから、津波来て、もし港の水なくなっても、そんなゴロツといかないようになってるような形の船なんだよね。

< 沖出し 1 > ひとりで操業する釣り船と違って、定置網には、ほかの人たち（船主以外）も乗っているから。10人ぐらい。10人には10人の家族がいるから、そういうことを心配して、やはり港に入れるものなら港に入って、若い衆を家に戻すと（船主は判断したのだと思う。）

もちろん、定置網漁船の人々も、津波の恐れのあるなか、船を港に戻す危険を知らなか

ったわけではなく、危険を承知で港に戻っている。そうした危険を冒してまで戻った理由として、陸の家族が心配だったことと、操業箇所が近く津波より前に戻れると考えていたことがあげられている。

<定置網 2> 漁師だから、船に乗っている時に地震を感じた場合は、普通は沖合へ出る。そうすれば何も心配ない。
だけど、それだけ大きな地震であれば、やっぱり陸上がどうなっているのか分からないから、家族が心配になる。建物が立っているのか、つぶれているのか。顔を見るまでは安心できない。やっぱりそれが一番だった。普通は、港に戻って入るものではないんだけど、非常に大きい地震だったから入ったんだ。

<定置網 4> 沖に出した方が船も傷まないし、安全だということはある。
<Q> その中を、わざわざ戻ってきたのですか？
<定置網 4> 戻ってきたのは、やっぱり家のことが心配だった。それに、戻ってくるときには、それまでに津波が来ると思わなかったから。まだ。
<Q> 地震があったけど、急いで戻れば津波が来る前に戻れると思ったのですか？
<定置網 4> うん、時間があると思っていた。だけど、(戻ったら)もう第1波が岸壁に来ていた。

沖出し

釣り船は、通常は前述のように客が乗船しているため、客の安全確保が第一優先事項である。しかし、釣り船の<沖出し 1>の事例では、地震発生時にまだ港にいたため、客を陸におろすことができた。さらに、家族の安全についても、家に戻って確認することができた。そのため、<沖出し 1>は、相対的に優先度の低い船の確保を行うに至ったものと解釈できる。

<沖出し 1> うちも大丈夫、家内も大丈夫、孫も大丈夫だから。それで、また津波来るから(中略)港から船を出せば、これが一番安全さ。
<Q> 船が安全ということですか？
<沖出し 1> うん。船は安全、人も安全。やっぱり船は財産だから。何千万だからね。港に置くと、いいことない。港につないで縛っておくと、津波で船が行ったり来たりし、切れたり流れたりして。

危険をおかしてまで、船の安全確保を試みる事情については、以下のように述べられている。

<定置網 5> 船は、1回水に浸かったら、もう、まともな船ではなくなる。エンジンや電気関係に影響がでる。修理しても完全には良くならない。
<Q> 修理には、費用もだいぶ掛かるのですか？
<定置網 5> 掛かる。エンジンだけでも何百万も掛かるんじゃないだろうか。
<Q> 修理の間は、漁もできなくなるのですか？
<定置網 5> できない。

以上をまとめると、漁船の津波対応行動は、操業場所(すなわち陸からの距離)と、安全を確保すべき事項の有無にもとづいて行動がとられた、と解釈できる。安全を確保すべ

き事項は、優先度の高い順に、「(1)客の安全確保」、「(2)船員の家族の安全確認」、「(3)船の安全確保」である。

沖合の釣り船は、第一優先事項の客が乗船していたため、その安全確保のため、沖合いに待機した。また、操業場所が港から遠かったため、津波襲来前に陸に戻る時間もないと考えたようである。

定置網漁船は、第一優先事項となる客は乗船していなかったため、第二優先事項の家族の安否確認が、第三優先事項の船の安全確保より優先され、津波の危険のなかを、あえて港に帰港した。

出港前の釣り船では、第一優先事項となる客の安全確保と、第二優先事項の家族の安全確認が成し遂げられたため、第三優先事項の船の安全確保が実行に移され、沖出しを行ったものと解釈される。

こうした考察の結果を下表にまとめた。

表 4.4 漁船の津波対応行動

	釣り船（沖合い）	定置網漁船（港近く）	釣り船（港内）
地震時の居場所	港から遠い沖合	港から近い場所	港の中の岸壁
	船は安全な場所だが、港に戻る時間はない	港に戻る時間的余裕があると判断される距離	津波が来ると船に危険な場所
乗船客	あり	なし	なし（下船させた）
船員の家族	あり （自分の家族）	あり （船員全員の家族）	なし （安全を確認済み）
船	あり（個人所有）	あり（共同所有）	あり（個人所有）
対応行動	客の安全のため、 沖合で待機	家族の安全のため 急いで帰港	船の安全のため 沖出し（客は下船済）

4.3.2 陸上にいた一般住民の津波避難行動の背景

次に、陸上にいた一般住民の対応行動の背景について考察していく。前述のように、地震を認知するまでの過程は皆同じであった。しかし、その後の、津波の予想の有無や、避難の有無、避難場所については、住民によって違いがみられた。そのパターンは、下表のように3類型に大別された。

以下では、1)地震の認知、2)津波の予想、3)対応行動(避難場所の選定など)の順に、影響要因について考察していく。

表 4.5 陸上にいた一般住民の津波避難行動の背景

	迅速な自力避難 (コミセンへ避難)	迅速な自力避難 (高台へ避難)	迅速な自力避難なし
津波の予想	津波を予想	津波を予想	予想せず or 予想しても漠然
対応行動	避難所へ移動	高台へ移動	避難せず or 周囲の誘導によって避難

(1)地震の認知

陸上で地震動に見舞われた者は、例外なく、その原因を地震と認知していた。地震の体験にもとづく判断である。

(2)津波の予想

地震後に津波が起こると思ったかどうかについては、津波を予想した住民が大半であったものの、予想しなかった住民もわずかながら存在した。次に、こうした違いを生じた背景要因を考察する。

過去の体験

地震後に津波を予想したか否かにおいては、津波の体験の有無が大きく影響していた。地震後に津波を予想した者の多くは、その原因に自らの体験をあげた。

(再録) <コミセン 1> (前略) これは津波がまず大変だなと。
 <Q> 地震の後、津波が来るとすぐに思い付いたのは、昔体験されたからですか？それとも誰かから話を聞いたからですか。
 <コミセン 1> 僕は昭和27年に、(この大津で)十勝沖地震経験しているんです。小学校3年生かな。

<コミセン 2> (前略) 避難勧告が出る出ないは別にして、あれだけ大きな地震があったのだから、津波が来ると、僕らは直感がありますから。大津では、昭和27年の十勝地震のときでも、まず津波というものがあるし。僕も、ここに住んで58年になるけど、津波には2回も3回も遭っているから。

一方、津波を予想しなかった人の多くは、津波に遭遇した体験のない人であった。例えば、次の事例は、地震と津波が結び付けられていない事例である。

< Q > 大津に来て、2年8カ月だったら、津波の経験は全然ないですね？
< 自力避難せず - 3 > ないね。
< Q > 地震が起こって、津波警報を聞くより前に、津波が来ると思いましたか？
< 自力避難せず - 3 > いや、津波は地震があっても、確実にあるってんでもないしね。

また、津波の懸念を漠然とはしたものの、身の危険までは考えが及ばず、結局、避難には至らなかった事例もあった。大津に来てまだ9年程の< 自力避難せず - 2 > は、次のように述べている。

< 自力避難せず - 2 > 大津ということで、やっぱり海岸線はちょっとやばいなと、いつかは（津波が）来るかもしれないっていうのはあった。
けれども、地震が起きたときには分からない。でも、地震が来たとき、地震だけでなく、津波の心配も、ちょっとしていましたね。
（中略）ただ、津波といっても、人がのみ込まれるような、そういうような心配はしていなかったけど。想像力が及ばなかった。津波の心配をしたけど死ぬことはないだろうということです。

情報の伝達・交換（過去の事例の伝聞）

ただし、津波体験がないにもかかわらず、自ら津波を予想して避難を行った人もいた。次の事例は、大津での居住暦が23年の夫婦で、津波に遭遇した体験はない。しかし、地震時の津波の危険について、親族や近隣の人からしばしば耳にしていたため、今回の地震後にも津波に思い至ったようである。

< コミセン 5 > 今回、津波というのは初めてなの。大津というところは、地震が起きたら、津波というのがもう何たって一番先に思ったわ。
< Q > 「大津といったら津波だよ」ということを、周りから聞いていたのですか？
< コミセン 5 > そうそう。初めて転勤してきたときに、地震があったときには必ず津波があるから、まず逃げることもんだよ、周りから聞いていましたよ。
< Q > 誰からそういうことを聞くんですか？
< コミセン 5 > この地域に昔からすんでいる方々。チリ地震や何かで、やっぱり恐ろしい目に遭っているから。
< Q > 1,2人の方から聞いたのですか？それとも、たくさんの方から？
< コミセン 5 > みんな。やっぱりそういう体験をしているから。

以上のように、多くの住民は、地震を体感した後、過去の体験あるいは伝聞により津波を予想している。重要な事は、これら津波を予想した人は、その全員が、避難場所を決め、避難行動を自ら始めている事である。他方、津波を予想しなかった人は、自らは避難行動をおこすことはなかった。次に、こうした避難行動に影響を与えた要因をみていく。

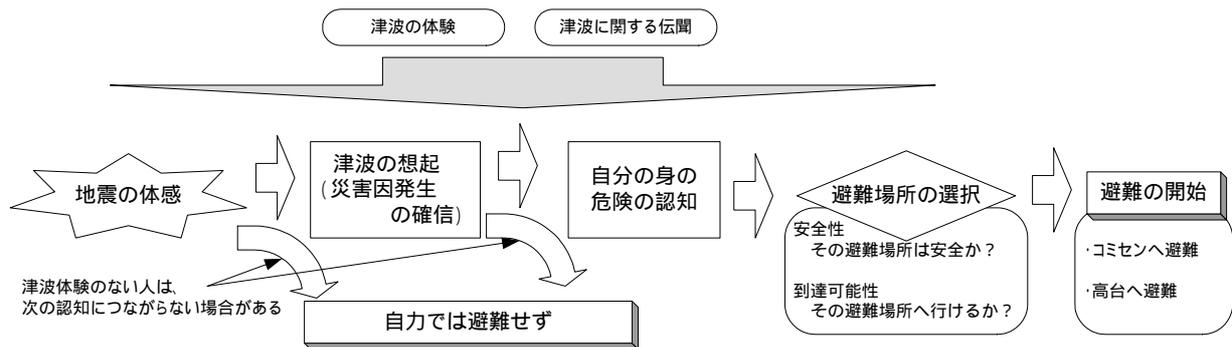


図 4.31 陸上にいた一般住民の認知・対応行動の流れと、その背景

(1)避難行動

津波を予想せず、自力避難なし

地震後に津波を予想しなかった人は、自分からは避難をしなかった。高齢者単独世帯の〈自力避難せず - 1〉は、そうした事例であったが、周囲の人たちから声をかけられ、その車に同乗して避難していた。

(再録)〈自力避難せず - 1〉 避難とかそういう頭は全然なかったの。(中略)隣の阿部さんが「避難するから早く支度しな」と声をかけてくれた。1人であるからでしょう。その後、今度は中村さんが「車、裏で待っているから。早く行くよ。」と言うので、乗せてもらった。

このように、今回の地震の避難の際に、独居老人を親族や近隣者が支援した事例は多くみられた。移動手段を持たず体力的に弱い独居老人の安全確保において、コミュニティのサポートが重要であった。

これに対し、9年前に転勤してきた若い単独世帯の〈自力避難せず - 2〉に対しては、誰も声をかけていない。そのため、〈自力避難せず - 2〉は津波による身の危険になかなか気づけなかった。

< Q > 地震の後、家の外に出て様子を見ている頃に、近所の人から逃げろとか、そういう声を掛けられたりしましたか？
 < 自力避難せず - 2 > そういふのはない。

転入してきた若年の単独世帯は、避難を始めしてしまえば体力的な問題はない。しかし、日常時に周囲との交流が少ないと、地震時にも周囲から津波の警告などをえられず避難がおくれ、被害をこうむる恐れがあるといえよう。

津波を予想し、自力避難

自ら避難した人は、避難先として、最初にコミュニティセンタ を選んだ人と、高台を

選んだ人に大別される。こうした避難先の選択に影響を与えた要因としては、「そこに避難すれば安全か？」という避難場所の防災効果の評価と、「そこへ辿り着けるか？」という避難場所への到達可能性の評価の2つの要因が認められた。

まず、コミュニティセンタへ避難したものは、センタを安全と判断する一方、高台へは道路状況が悪く行くことが出来ないと考えていた。他方、高台へ避難した人は、センタを安全とはみなさず、高台への避難も不可能とは思っていなかった。以下に、こうした避難場所の選定の背景をみていく。

・コミュニティセンタへ避難

コミュニティセンタへ避難した人は、コミュニティセンタを安全とみなす一方、高台への避難については、途中の道道が陥没し辿り着くことができないと推測していた。

例えば、〈コミセン 1〉は、コミュニティセンタについては、次のように述べている。

（再録）〈Q〉（家を出た時）、どこへ避難しようという目安はあったんですか？
〈コミセン 1〉 それは、もうセンタがありますから。10年前は、こういう建物はなかったんですよ。今のコミュニティセンタは、ある程度津波にも地震にも耐えられるという造りで、造り直した建物ですから。

一方、高台については、津波に対する安全性は認めるものの、たどり着く可能性については否定的であった。

〈コミセン 1〉 これだけの大きい地震だから、道路はだめだろうと思いました。この大津の道路は、10年前の釧路地震の時にも陥没してますから、もう道路はまずだめだろうと。堤防もおそらくだめだろうと思いました。（中略）前回の地震の時、（路面の破損を）分からないで行ってしまって、陥没したところに車あれして、あばらを怪我したとかという例がある。

〈コミセン 2〉（前略）上にあがろうとしても、行く前に道路がもう切断になっていると思った。
〈Q〉 前に、そういうことがあったのですか？
〈コミセン 2〉 そう。昔の十勝地震のとき、昭和27年ですか、そのとき、道路にずっと亀裂が入った。だから、車で行っても逃げられないなと思った。

このほか、コミュニティセンタへ避難した人は、防災訓練の際に避難場所としてコミュニティセンタへ避難したことに言及する人もいた。

・高台へ避難

これに対し、高台へ避難した人は、コミュニティセンタは津波に対して安全とはみなしていなかった。

〈Q〉 避難場所であるコミュニティセンタや小学校ではなくて、車で十勝河口橋の方へ行ったのはどうしてですか？
〈高台 1〉 センタは、（建っている地面が）普通の高さでしょう。だから、やっぱり不安。

< Q > コミュニティセンタへ行かなかったのは、どうしてですか？

< 高台 3 > 低いから。(中略)それに、汐見橋のところで防潮堤が2,3間ほど開いているので、そこから津波がいくらでも入ってくる。そしたら、コミュニティセンタは吹っ飛んじゃうよ。特別な建物なら別だけでも、あんな津波の本物が来たら、吹っ飛んじゃうさ。

そして、高台へ避難した人は、その経路にあたる道道を危険とはみなしていなかった。

< 高台 2 > は、8年前に大津に移り住んだため、大津での津波体験はなく、過去の地震の際の道路の破損状況も目撃はしていない。今回の地震の際には、釧路地震の際に高台に避難したという伝聞にもとづいて、高台を避難場所として選択していた。

< 高台 2 > (釧路沖地震の時に)お父さん(=夫)が、ばあちゃん達を車に乗せて、高台に行ったという話を聞いていたので、また同じ場所に逃げようと思って。

また< 高台 3 > は、次のように道道の安全性を主張している。

< Q > 釧路沖地震などの際に、国道336号へ行く道道は、ガタガタになったと聞いたのですが？

< 高台 3 > 大津の市街から国道336号までの間の道道では、そうした被害がでたことはないよ。

< Q > では今回、高台の方に逃げようと思った時、道路が危険とは考えなかったのですか？

< 高台 3 > 考えない。考えないで行った。(中略)今回は、道路はダメになったけどね。

以上で確認した、避難場所の選定にかかわる要因と、避難行動との対応について、下表にまとめた。

表 4.6 避難場所と避難行動の対応

	コミュニティセンタ	
安全性の判断	安全 堅牢な建造物	×危険 立地箇所が低い
到達可能性の判断	到達可能	到達可能

	高台	
安全性の判断	安全	安全
到達可能性の判断	×到達不可 途中の道路が危険	到達可能

対応行動	コミセンへ避難	高台へ避難
------	---------	-------

補論 1 「平成 15 (2003) 年十勝沖地震」と津波予報

はじめに

「平成 15 (2003) 年十勝沖地震」では、北海道の太平洋沿岸に津波警報が発表された。平成 11 (1999) 年の大幅な津波予報の改定以後、日本本土で津波警報が発表されたのは、今回がはじめてであった。そして、この地震により各地で津波が観測され、津波によるものと思われる行方不明者が北海道内で 2 名報告されている。このようなことから、今回の地震は、津波情報に関しても大きく注目された地震といえる。

ところで、平成 11 年に改定された津波予報は、それまで 18 だった予報区を 66 に細分化し、詳しい津波の高さを示す量的予報を導入し、より詳細な情報が発表されるようになった。また、津波予報の発表時間も、地震発生から 3 分を目標とし、より迅速に情報が発表されるようになっていた。ところが、今回の「十勝沖地震」では、津波予報の発表は、地震発生から 6 分後であった。近年、北海道で津波予報が発表された地震を見ると、例えば、平成 6 (1994) 年の「北海道東方沖地震」は、地震発生から 5 分で津波予報が発表され、また、同年、津波予報の迅速化のための観測設備「地震津波早期検知網」を整備するきっかけとなった平成 5 (1993) 年の「北海道南西沖地震」でも、津波予報は、地震発生から 5 分後に発表されている。今回の「十勝沖地震」は、このころよりも観測網が整い、処理能力も進んでいる中で発生したはずであるが、津波予報の発表は、「北海道南西沖地震」「北海道東方沖地震」よりも結果的に遅くなっている。

津波予報は、気象警報などと違い、警報の発表から実際の災害の発生までの時間が非常に短い。そのため、津波予報の発表は、1 分 1 秒の差が人的災害の発生防止に関わっているとと言っても過言ではない。

本論では、今回の「十勝沖地震」における津波予報の発表の経緯と、津波予報についての課題について検討したいと思う。

1 「平成 15 年十勝沖地震」における津波予報の概要

まず、今回の「十勝沖地震」における津波予報の発表状況について、その概要を述べておきたい。

平成 15 年 9 月 26 日 4 時 50 分、釧路沖の深さ 42 キロでマグニチュード 8.0 の地震が発生した。札幌管区気象台は 4 時 56 分、北海道太平洋沿岸東部と中部に津波警報、北海道太平洋沿岸西部に津波注意報を発表した。また、仙台管区気象台は、青森県日本海沿岸と太平洋沿岸、岩手県、宮城県、福島県に津波注意報を発表した。その後、9 時に、札幌管区気象台は、北海道太平洋沿岸東部と中部に発表していた津波警報を津波注意報に切り替えた。また、仙台管区気象台は、15 時に、宮城県と福島県に発表していた津波注意報を解除、

16 時 30 分に、青森県の日本海沿岸と太平洋沿岸、岩手県、に発表していた津波注意報を解除した。そして 18 時 30 分には、すべての津波注意報が解除された。

2 . 津波予報の変遷

現在の津波予報は、「津波警報」と「津波注意報」があり、さらに「津波警報」は「大津波」と「津波」に区分している。津波の高さが 3 メートル以上と予想されるものが「大津波」の「津波警報」、1 メートル以上が「津波」の「津波警報」、0.5 メートル程度のものが「津波注意報」(「津波注意」)となっており、予報が発表される場合に、予想される津波の高さとして、「10 メートル以上」「8メートル」「6メートル」「4メートル」「3メートル」(以上が「大津波」)、「2メートル」「1メートル」(以上が「津波」)、「0.5メートル」(以上が「津波注意」)といった数値が示される(量的津波予報)。そして、前述したように、全国を 66 に分けた津波予報区で発表される。

日本における公式な津波予報は、昭和 16 (1941) 年に東北地方の太平洋沿岸を管轄する気象官署によって整備された津波警報組織が始まりとされている。太平洋戦争後、全国的な津波警報体制が整備され、昭和 27 (1952) 年の「気象業務法」の公布あたりまでに、今日の津波予報の基礎ができていった。ただし、当初は、「津波注意報」はなく「津波警報」だけで、「津波警報」は、「オオツナミ」「ヨワイツナミ」「ツナミナシ」「ツナミカイジョ」そして昭和 31 (1956) 年に追加された「ツナミオソレ」に区分されていた。そして、津波警報の発表は「地震発生後 20 分以内」と定められた。

昭和 46 (1971) 年になって、「津波警報」は、「津波警報」と「津波注意報」に分離し、「ツナミナシ」「ツナミカイジョ」を「津波注意報」とし、その後、昭和 52 (1977) 年には、津波警報を「オオツナミ」と「ツナミ」、津波注意報を「ツナミチュウイ」「ツナミケイホウカイジョ」「ツナミチュウイカイジョ」に改めた。

それまで、津波予報の改善は、どちらかといえば予報の内容が重視されたものであったが、その後、津波予報の発表の迅速化を検討するきっかけとなる津波災害が発生した。昭和 58 (1983 年) の「日本海中部地震」は、場所によっては地震発生から数分で津波が到達した。この時、東北地方の津波予報を発表する仙台管区気象台は、地震発生から 14 分後に津波予報を発表した。「地震発生から 20 分以内」という津波予報発表の規定には抵触してはいなかったが、津波予報発表以前に津波が到達し大きな被害が生じたことから、津波予報発表の迅速化が求められるようになった。

この地震から 10 年後の平成 5 (1993) 年に発生した「北海道南西沖地震」は、北海道の津波予報を発表する札幌管区気象台は、津波予報を地震発生から 5 分(当時の目標は 7 分)で発表できたものの、津波予報が一般住民に届く前に津波が来襲し大きな被害が生じたことから、さらなる津波予報の迅速化が求められた。このため、津波を発生させる地震をよ

り早く、より正確に観測を行うために、国の補正予算により「津波地震早期検知網」が整備された。また、津波予報の発表の迅速化だけでなく、一般住民への伝達の迅速化も検討され、さらには、地域によっては津波予報が発表される前に津波が来襲することもあることから、津波予報が発表されていなくても、ある程度の地震が感じられた場合には、住民各自が津波に警戒することを徹底させることも課題としてあげられた。

加えて、津波予報区の再考も検討された。その背景の一つとして、それまでの津波予報区は全国で18に分けられていたが、予報区が広すぎて津波予報の効果が十分に発揮できないということがあった。例えば、岩手県の沿岸だけに津波警報の発表が必要な場合でも、当時の津波予報区では、青森県から福島県に至る東北地方の太平洋沿岸すべてに津波警報が発表されていた。つまり、津波の大きな被害が予想されない地域も、津波警報の対象となってしまうことがあったのである。このようなことが繰り返されると、警報の効果が低くなってしまふことから、津波予報区の細分化が求められた。

そして、平成11(1999)年に、全国を66の津波予報区に細分化した、新しい津波予報が運用されるようになった。また、この津波予報は、それまで「オオツナミ」「ツナミ」「ツナミチュウイ」といったカタカナ表記の内容を「大津波」「津波」「津波注意」といった漢字表記に改め、また、予想される津波の高さをより詳しく発表するようになった。そして、津波予報の発表の時間を、地震発生から3分が目標となったのである。

3. 「平成15年十勝沖地震」における津波予報の発表時間と課題

前述したように、今回の「十勝沖地震」では、地震発生から津波予報の発表まで6分という時間がかかっている。津波予報の発表は、地震発生から3分が目標とされている中で、なぜ6分という時間がかかったのであろうか。

この大きな原因は、細分化された予報区と量的津波予報(詳細な予想される津波の高さの発表)を導入した新しい津波予報に関係しているようだ。

津波予報の発表は、津波予報中枢(札幌管区、仙台管区、気象庁本庁、大阪管区、福岡管区、沖縄の各気象台)が、それぞれ管轄する地域の沿岸に発表することになっており、例えば、北海道の沿岸であれば札幌管区気象台が発表することになっている。これは、以前の津波予報(平成11年の新しい津波予報運用前)も同じであった。ただし、今日の津波予報と以前の津波予報では、津波予報の「判定」のためのデータの処理に違いがあるようだ。というのも、以前の津波予報の場合、北海道沿岸に発表するであれば、札幌管区気象台管内で観測されたデータをもとに解析が行われ、津波予報が発表されていた。つまり、それぞれの津波予報中枢が、それぞれ完全に独立した形で判定と津波予報を発表していた。しかし、現在の津波予報の発表は、予報区が細かくなった上に、その予報区の沿岸に来襲する津波の高さの予想をあわせて発表することから、震源やマグニチュードをより正確に

解析し精度の高いデータをもとに津波予報の判定を行う必要がある。そのために、今回の「十勝沖地震」の場合は、札幌管区気象台管内の観測記録だけでなく、隣接地域を観測する仙台管区気象台管内のデータや、そして全国のデータが集まる東京・気象庁本庁のデータを踏まえて、札幌管区気象台が津波予報の判定をするようになっている。

この点を整理して言えば、各津波予報中枢で観測された「分散」しているデータを、気象庁本庁が「統一」して最終的な分析結果を出し、その統一されたデータをもとに、各津波予報中枢が津波予報の判定と発表を行うようになったのである。このデータ処理作業は、回線によって送られコンピュータが自動的に処理を行っているものの、今回の「十勝沖地震」では、本庁と各地方の津波予報中枢とのやりとりにある程度の時間がかかり、地震発生後3分を目標としていた津波予報の発表が、実際は6分かかってしまったようである。

この「十勝沖地震」の教訓を踏まえ、気象庁は次のような大きく分けて2つの課題について検討を行っている。その第一は、気象庁本庁と地方の津波予報中枢とのやりとりとその時間の短縮である。データや解析方法等を整理して、津波予報を本来の目標の地震発生から3分で発表できるようにすることである。第二は、場合によっては気象庁本庁が統一した最終的な分析結果を発表する前に、地方の津波予報中枢が先行して津波予報を発表することである。現在の津波予報の判定は統一したデータで行うようになって入るものの、各地方の津波予報中枢が単独のデータで津波予報の判定と発表を行うことを禁じているわけではない。したがって、気象庁本庁からの最終的な分析結果の送信に時間がかかってしまう場合などには、各地方の津波予報中枢が、最終的な分析結果を待たずに津波予報を発表することも可能なのである。

今回の「十勝沖地震」では、他にも津波情報に関する改善が行われている。例えば、津波の観測記録の発表箇所の増加である。押し寄せた津波の高さを速報するために、各地の検潮儀（検潮所）における波高の記録が発表されているが、これまでは、気象庁が発表する波高は、気象庁が所有している検潮儀の記録が速報されていた。検潮儀は、気象庁以外の官庁や自治体が所有しているものもあるものの、今回の「十勝沖地震」では、気象庁が所有していない検潮儀の波高記録は、気象庁からは速報されなかった。今回の「十勝沖地震」において、気象庁の所有する浦河町・浦河港では1.3メートルの波高が記録されたが、北海道開発局が所有する近隣の広尾町・十勝港の検潮儀は2.5メートルの波高を記録していた。しかし、北海道開発局が所有する十勝港のデータは、気象庁にはすぐには入らないため、波高の記録は速報されなかったのである。このような点を改善するために、気象庁以外の機関（国土交通省、国土地理院、地方自治体など）が所有する検潮儀のデータなども気象庁のデータに取り込むことができるようになった。

昨今、津波予報だけではなく気象警報なども含め災害情報の詳細化が進められている。しかし、この情報の詳細化により、情報の処理に時間がかかったり、情報の受け手側の対

応が不十分になっているといった問題も生じてきているようだ。情報の詳細化が及ぼしているマイナス面の検討と改善が喫緊の課題になっていると思われる。

また、津波予報は、予報の判定は最終的には人間が行うことや、過去の津波のデータがまだまだ少ないことなどもあり、迅速化にも限界がある。そのため、各自が津波から身を守るためには、ある程度の地震を感じた場合（強い揺れを感じた場合や長い揺れを感じた場合など）は、津波予報の発表を待たずに避難を行うことも求められている。津波予報の改善だけでなく、各自の津波への適切な対応をさらに徹底させていくことも不可欠な課題であろう。

2003年十勝沖地震に関するアンケート調査

東京大学社会情報研究所 廣井研究室
東京経済大学コミュニケーション学部 吉井研究室

9月26日午前4時50分に起きた十勝沖地震についておうかがいします

問1 2003年十勝沖地震(本震)が発生した9月26日午前4時50分頃、あなたはどこにいましたか。(はひとつ)

1. 自宅	92.8%	(869)	4. 町内(市内)の高台や内陸部(自宅以外)	1.0%	(9)
2. 港・海沿いの屋外	0.9%	(8)	5. 町内(市内)にはいなかった	1.5%	(14)
3. 海上の船の中	1.0%	(9)	6. その他(具体的に)	2.4%	(22)
			無回答	0.5%	(5)

問2 では、本震が発生した時、あなたは起きていましたか。(はひとつ)

1. 眠っていた	62.0%	(580)	3. 起きていた	19.0%	(178)
2. 床に入っていたが眠ってはいなかった	17.8%	(167)	無回答	1.2%	(11)

問3 あなたは本震が起きて、まだ揺れている間に何をしましたか。(はいくつでも)

1. あわてて外に飛び出した	9.1%	(85)	8. 家具などが倒れないように押しつけた	22.1%	(207)
2. 机や食卓の下などに身を伏せた	1.2%	(11)	9. 家族の安全を守ろうとした	25.9%	(242)
3. 家の中の安全なところに避難しようとした	12.1%	(113)	10. 頑丈なものにつかまって身をえた	13.2%	(124)
4. 火の始末をしようとした	15.3%	(143)	11. 何もせずじっとしていた	12.0%	(112)
5. 窓や戸を開けた	37.0%	(346)	12. 地震に気がつかなかった	0.9%	(8)
6. テレビをつけた	29.9%	(280)	13. その他(具体的に)	9.2%	(86)
7. ラジオをつけた	7.9%	(74)	無回答	0.5%	(5)

問4 では、あなたは揺れがおさまってから何をしましたか。(はいくつでも)

1. 家族の安全を確認した	49.1%	(460)	7. 窓や戸をあけて外の様子を見た	33.5%	(314)
2. 火の始末をした	15.1%	(141)	8. 避難するかどうか家族と話し合った	17.6%	(165)
3. テレビをつけた	45.7%	(428)	9. 避難の準備をした	46.7%	(437)
4. ラジオをつけた	12.7%	(119)	10. 外に出て様子を見た	28.2%	(264)
5. 市や町の防災無線の放送に注意した	48.1%	(450)	11. 特に何もしなかった	0.7%	(7)
6. 倒れた暖房機を戻した	1.6%	(15)	12. その他(具体的に)	10.1%	(95)
			無回答	1.3%	(12)

問5 地震の直後、あなたは次のようなことをしましたか。(はいくつでも)

1. 海や川の様子を見に行った	14.2%	(133)	3. 船を沖出した	3.0%	(28)
2. 港や船の様子を見に行った	12.4%	(116)	4. 海や川沿いにある車を安全な場所に移した	6.2%	(58)
				無回答	71.4% (668)

問6 お宅では地震によって、次にあげるような被害がありましたか。(はいくつでも)

1. 自分や家族がけがをした	2.1%	(20)	8. 窓ガラスが割れた	5.7%	(53)
2. 屋根が壊れた	1.0%	(9)	9. 食器だなから食器が落ちてこわれた	50.7%	(475)
3. 壁や天井が壊れた	4.8%	(45)	10. 台所・トイレ・風呂などの設備の具合が悪くなった	8.0%	(75)
4. 壁にヒビが入った	23.3%	(218)	11. 水道が止まった	13.7%	(128)
5. 石油ストーブが倒れた	1.5%	(14)	12. ガスが使えなくなった	3.7%	(35)
6. 屋外の石油タンクが倒れた	4.0%	(37)	13. 停電した	35.4%	(331)
7. 家具が倒れた	28.0%	(262)	14. 特に被害はなかった	15.9%	(149)
				無回答	3.0% (28)

問7 あなたは、揺れがおさまった直後に、津波が襲って来るのではないかと不安になりましたか。(はひとつ)

1. 非常に不安になった	39.3%	(368)	3. 少し不安になった	26.3%	(246)
2. 不安になった	25.3%	(237)	4. 不安にならなかった	8.0%	(75)
				無回答	1.1% (10)

問8 地震直後、あなたは、この地域に津波が来ると思いましたか。(はひとつ)

1. 津波が必ず来ると思った	30.7%	(287)	3. 津波は来ないだろうと思った	9.7%	(91)
2. 津波が来るかもしれないと思った	56.8%	(532)	4. 津波のことはほとんど考えなかった	1.9%	(18)
				無回答	0.9% (8)

問9 地震直後、津波によってご自宅にどのくらいの被害が出ると思いましたか。(はひとつ)

1. 自宅が壊れるほどの被害が出ると思った	13.5%	(126)	3. 自宅には影響がないと思った	56.2%	(526)
2. 自宅が浸水する程度の被害が出ると思った	23.3%	(218)	4. 津波のことはほとんど考えなかった	3.8%	(36)
				無回答	3.2% (30)

問10 津波は地震の後どのくらいで来ると思いましたか。(はひとつ)

1. すぐ逃げないと間に合わないくらい早く来ると思った	20.6%	(193)
2. 津波は早く来るが、服を着て、車に荷物を積んで逃げるくらいの余裕はあると思った	48.1%	(450)
3. 津波が来るまでには、かなりの余裕があったと思った	19.9%	(186)
4. 津波が来るとは思わなかった	8.8%	(82)
無回答	2.7%	(25)

問11 あなたが、地震発生時にいた場所にとどまっていたら、津波が来て、自分の身にどのくらいの危険があると思いましたか。(はひとつ)

1. 非常に危険だと思った	14.3%	(134)	3. 少し危険と思った	34.1%	(319)
2. 危険だと思った	19.7%	(184)	4. 危険とは思わなかった	29.6%	(277)
無回答				2.4%	(22)

問12 次に、津波警報についてお聞きします。今回の地震では、地震の6分後に津波警報が出ました。あなたは、地震直後、この津波警報をお聞きになりましたか。(はひとつ)

1. 聞いた	86.8%	(812)	2. 聞かなかった	11.9%	(111)	無回答	1.4%	(13)
--------	-------	---------	-----------	-------	---------	-----	------	--------

問 ↓ 3にお進みください

付問1~2は、問12で「1. 聞いた」とお答えの人だけお答えください

付問1 では、あなたはその津波警報をどのようにして知りましたか。(はいくつでも)

1. 民放テレビから	7.9%	(64)	6. 防災無線の屋外拡声器から	41.6%	(338)
2. NHK テレビから	47.5%	(386)	7. 市役所(町役場)の広報車から	25.1%	(204)
3. 民放ラジオから	5.7%	(46)	8. 家族や近所の人から	4.7%	(38)
4. NHK ラジオから	12.8%	(104)	9. 警察や消防の人から	11.5%	(93)
5. 防災無線の戸別受信機から	34.4%	(279)	10. その他(具体的に)	3.0%	(24)
無回答				0.4%	(3)

付問2 あなたはこの津波警報を聞いた時、どのように思いましたか。(はひとつ)

1. すぐに避難しなければいけないと思った	34.2%	(278)
2. すぐに避難した方がいいかもしれないと思った	23.4%	(190)
3. 警戒の必要はあるが、海の様子を見てから判断した方がよいと思った	17.4%	(141)
4. 大した高さの津波ではないので避難の必要はないと思った	15.6%	(127)
5. その他(具体的に)	8.0%	(65)
無回答	1.4%	(11)

再び全員がお答えください

問13 市役所や町役場では、地震直後に、「津波の危険があるので避難するように」と呼びかけましたが、あなたはこれをお聞きになりましたか。(はひとつ)

1. 聞いた 81.0% (758) 2. 聞かなかった 16.9% (158) 無回答 2.1% (20)

問14にお進みください

付問1~2は、問13で「1. 聞いた」と答えた人のみお答えください

付問1 あなたはその避難の呼びかけをどのようにして知りましたか。(はいくつでも)

1. 民放テレビから	4.5%	(34)	6. 防災無線の屋外拡声器から	50.1%	(380)
2. NHK テレビから	27.8%	(211)	7. 市役所(町役場)の広報車から	35.0%	(265)
3. 民放ラジオから	4.5%	(34)	8. 家族や近所の人から	5.0%	(38)
4. NHK ラジオから	10.0%	(76)	9. 警察や消防の人から	15.8%	(120)
5. 防災無線の戸別受信機から	38.0%	(288)	10. その他(具体的に)	2.0%	(15)
			無回答	1.7%	(13)

付問2 あなたはその避難の呼びかけをどのように受け止めましたか。(はひとつ)

1. 避難するように命令されたと受け止めた	39.3%	(298)
2. できるだけ避難した方がよいと受け止めた	32.3%	(245)
3. どちらかといえば避難した方がよいと受け止めた	16.8%	(127)
4. 自分の住んでいる地域のことだとは思わなかった	2.0%	(15)
5. その他(具体的に)	5.7%	(43)
無回答	4.0%	(30)

再び全員がお答えください

問14 あなたは、地震直後、避難しようかしまいか、迷いましたか。(はひとつ)

1. 迷った 26.3% (246) 2. 迷わなかった 71.5% (669) 無回答 2.2% (21)

問15 避難する際に、あなたには「守らなければならない」と思った物がありましたか。(はいくつでも)

1. 船	12.5%	(117)
2. 車	23.2%	(217)
3. 家財道具	6.8%	(64)
4. 預金や預金通帳、印鑑	63.6%	(595)
5. 家	11.2%	(105)
6. 位牌	14.6%	(137)
7. そういうものはなかった	17.3%	(162)
無回答	7.8%	(73)

問 16 では、地震の直後、あなたは実際に避難しましたか。(はひとつ)

1. 避難した	55.8%	(522)	2. 避難しなかった	43.4%	(406)	無回答	0.9%	(8)
---------	-------	---------	------------	-------	---------	-----	------	-------

付問 1 は、問 16 で「2. 避難しなかった」と答えた人だけお答えください

付問 1 あなたはなぜ避難しなかったのですか。(はいくつでも)

1. その時いた場所が危険とは思わなかった	59.6%	(242)
2. 市や町から避難の呼びかけがなかった	7.4%	(30)
3. 海の水が大きく引くなどの前兆がなかった	17.2%	(70)
4. 防波堤や防潮堤を超えるような大きな津波は来ないと思った	21.4%	(87)
5. 大津波警報ではなく津波警報だったので	9.6%	(39)
6. 津波の高さが 2m 程度と言われたので危険とは思わなかった	13.3%	(54)
7. 釧路などで来襲した津波の高さが 1m 程度という放送を聞いた	20.0%	(81)
8. 体が不自由な家族がいて、避難できなかった	4.2%	(17)
9. ぐっすり寝ていたから	0.2%	(1)
10. 車など避難する手段がなかった	1.5%	(6)
11. 迷っているうちに避難し損ねた	7.1%	(29)
12. 津波のことは考えつかなかった	0.2%	(1)
13. その他(具体的に)	19.7%	(80)
無回答	1.0%	(4)

6 ページの問 17 にお進みください

次ページの付問 2~9 にお答えください

付問 2~9 は、問 16 で「1. 避難した」と答えた人だけお答えください

付問 2 あなたが避難した理由は何ですか。(はいくつでも)

1. 津波を警戒して	89.5%	(467)	4. 停電等で自宅に居られなかった	7.1%	(37)
2. 余震を警戒して	33.9%	(177)	5. その他(具体的に)	6.9%	(36)
3. 自宅が壊れるのではないかとあって	8.0%	(42)	無回答	1.1%	(6)

付問 3 あなたが避難したのはどこですか。(はひとつ)

1. 公民館や学校など市町が指定した避難場所	46.6%	(243)	4. その他(具体的に)	6.3%	(33)
2. 津波の危険がない、屋外の高台	38.9%	(203)	無回答	0.8%	(4)
3. 津波の危険がない、親戚・知人宅	7.5%	(39)			

付問 4 あなたが自宅から避難しはじめたのは、揺れがおさまってから何分くらい後でしたか。おおよそで結構ですからお答えください。

だいたい(14.57)分後

付問 5 避難をはじめてから避難し終わるまでに何分くらいかかりましたか。

だいたい(35.43)分くらい

付問6 あなたは避難する時、どのようにして避難しましたか。(はひとつ)

1. 歩いて避難した	18.4%	(96)	5. 船で避難した	1.5%	(8)
2. 走って避難した	3.3%	(17)	6. 自転車で避難した	0.8%	(4)
3. 自宅の自動車で避難した	69.2%	(361)	7. バイクで避難した	- %	(0)
4. 近所の人や親戚の自動車で避難した	4.8%	(25)	8. その他(具体的に)	1.1%	(6)
			無回答	1.0%	(5)

付問7 あなたが避難したきっかけは何でしたか。(はいくつでも)

1. 以前津波を体験したので、津波が来ると思った	26.6%	(139)	6. 市や町が避難を呼びかけたので	54.2%	(283)
2. 地震の揺れ具合から津波が来ると思った	63.8%	(333)	7. 津波警報を聞いたので	51.1%	(267)
3. 海や川の水が大きく引いたので	7.3%	(38)	8. 役場や消防団の人が来て、説得されたので	2.1%	(11)
4. 家族が避難しようと言ったので	21.6%	(113)	9. 実際に津波に襲われたので	1.5%	(8)
5. 近所の人が避難するように言ったので	8.4%	(44)	10. その他(具体的に)	4.2%	(22)
			無回答	0.6%	(3)

付問8 あなたは避難する時、次のような物を持って行きましたか。(はいくつでも)

1. 懐中電灯	34.7%	(181)	5. 食料・飲料水	40.4%	(211)	9. その他(具体的に)	19.0%	(99)
2. 貯金通帳や印鑑	63.2%	(330)	6. 薬	20.7%	(108)	10. 何も持っていかなかった	11.7%	(61)
3. 現金	69.7%	(364)	7. ヘルメット・防災ずきん	2.9%	(15)	無回答	1.5%	(8)
4. 保険証	50.4%	(263)	8. 位牌	10.9%	(57)			

付問9 あなたが避難している時、周囲の状況はどうでしたか。(はひとつ)

1. 避難する人や車はほとんどいなかった	8.4%	(44)	3. 周囲は避難する人や車で混雑していた	32.4%	(169)
2. 避難する人や車が多少あった	54.4%	(284)	4. その他(具体的に)	2.5%	(13)
			無回答	2.3%	(12)

再び全員がお答えください

問17 今回の津波で、あなたやあなたのご家庭では、何らかの被害を受けましたか。(はいくつでも)

1. 自分や家族が津波に流されそうになった	0.2%	(2)	4. 船が津波によって流されたり壊されたりした	1.0%	(9)
2. 家や家財道具が水に浸かった	0.1%	(1)	5. その他(具体的に)	10.8%	(101)
3. 自動車が津波によって流されたり壊されたりした	1.7%	(16)	6. 被害は何もなかった	76.6%	(717)
			無回答	10.0%	(94)

問18 あなたは、これまでどのような津波経験をしましたか。(はひとつ)

1. 自分や家族が津波に襲われたり、危ない思いをした	7.4%	(69)
2. 自分や家族は大丈夫だが、住んでいる地域で津波に襲われたり、危ない思いをした人がいた	19.0%	(178)
3. 住んでいる地域で津波があったが、危ない思いをした人はいなかった	21.8%	(204)
4. 上記のような津波の経験はない	45.9%	(430)
無回答	5.9%	(55)

付問1は、問18で「1」～「3」と答えた人だけお答えください

付問1 それは、いつの津波ですか。(はいくつでも)

1. 昭和27年の十勝沖地震	41.9%	(189)	5. 昭和57年の浦河沖地震	18.8%	(85)
2. 昭和35年のチリ地震津	53.9%	(243)	6. 平成6年の北海道東方沖地震	28.2%	(127)
3. 昭和43年の十勝沖地震	29.5%	(133)	7. その他(具体的に)	2.2%	(10)
4. 昭和48年の根室半島沖地震	16.9%	(76)	無回答	5.8%	(26)

付問2は、問18で「1」～「3」と答えた人だけお答えください

付問2 あなたの津波経験は、今回のあなたの津波避難行動にどのように影響したと思いますか。(はひとつ)

1. 津波の経験があったので、すばやく避難することができたと思う	37.7%	(170)
2. 津波の経験がかえって災いして、津波が来るのにまだ余裕があると思い、避難がゆっくりだったと思う	9.5%	(43)
3. これまでの津波経験から、今回は大きな津波は来ないと思い、避難しなかった	19.7%	(89)
4. 津波の経験は、今回の避難とはあまり関係ないと思う	13.7%	(62)
5. その他(具体的に)	7.3%	(33)
無回答	12.0%	(54)

問19 下に津波に関するいろいろな意見をあげました。あなたは、これらの意見に対してどう思いますか。(それぞれ はひとつ)

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	無回答
1. 津波のエネルギーは、台風の波のエネルギーよりもけた違いに大きい	1 68.1% (637)	2 15.2% (142)	3 4.1% (38)	4 1.6% (15)	11.1% (104)
2. 津波警報が出てから避難しても間に合う	1 23.6% (221)	2 25.4% (238)	3 17.1% (160)	4 22.5% (211)	11.3% (106)
3. 津波が陸上を進む速さは、大人が100mを全力で走る時と同じくらいである	1 31.5% (295)	2 16.3% (153)	3 9.0% (84)	4 28.4% (266)	14.7% (138)
4. 大きな津波が来る前には必ず海の水が大きく引く	1 67.8% (635)	2 10.6% (99)	3 5.7% (53)	4 6.3% (59)	9.6% (90)
5. 海の水が引かずにいきなり津波が来ることがある	1 23.1% (216)	2 14.9% (139)	3 24.9% (233)	4 23.6% (221)	13.6% (127)
6. 津波は怖いというけれど、自分にはピンとこない	1 16.7% (156)	2 15.7% (147)	3 10.3% (96)	4 43.7% (409)	13.7% (128)
7. 津波が深い海を進む時は、ジェット機と同じくらい速く進む	1 31.9% (299)	2 24.0% (225)	3 18.2% (170)	4 10.0% (94)	15.8% (148)
8. 大きな揺れに襲われたら、何が何でもすぐに高台に避難すべきだ	1 40.5% (379)	2 22.4% (210)	3 19.0% (178)	4 7.5% (70)	10.6% (99)
9. 大きな揺れに襲われたら、他の家族のことはかまわず、急いで高台に逃げるべきだ	1 8.8% (82)	2 9.2% (86)	3 20.4% (191)	4 50.5% (473)	11.1% (104)

問20 ところで、今回の十勝沖地震の当日、市や町の防災無線は役に立ったとお考えですか。(はひとつ)

1. 非常に役に立った	44.0% (412)	4. 全く役に立たなかった	3.6% (34)
2. ある程度役に立った	33.7% (315)	5. 防災無線の放送は聞かなかった	9.7% (91)
3. ほとんど役に立たなかった	6.0% (56)	無回答	3.0% (28)

問21 防災無線には、戸別の受信機と屋外拡声方式のスピーカーがあります。

(1) 今回の地震の前、お宅には戸別受信機がありましたか。また、その受信機はいつでも聞こえる状態にありましたか。(はひとつ)

1. 戸別受信機があって、いつでも聞こえる状態になっていた	43.8%	(410)
2. 戸別受信機はあったが、音がしぼってあったり、故障などで聞こえない状態だった	4.0%	(37)
3. 戸別受信機はなかった	45.2%	(423)
無回答	7.1%	(66)

(2) では、屋外拡声方式のスピーカーはどうだったでしょうか。(はひとつ)

1. 普段から放送の内容が、まったく聞き取れなかった	9.0%	(84)
2. 普段から放送の内容が、あまり聞き取れなかった	33.3%	(312)
3. 普段から放送の内容は、ほとんど全部聞き取れる状態だった	46.7%	(437)
無回答	11.0%	(103)

問22 今回の地震直後(3時間以内)に、あなたは離れたところにいる誰かと連絡を取ろうとしましたか。(はひとつ)

1. 地震後直後に連絡を取ろうとした	64.7%	(606)
2. 地震後直後には連絡を取ろうとしなかった	25.7%	(241)
無回答	9.5%	(89)

問23 この地震直後(3時間以内)に、あなたは次のような通信手段を利用しようとしたか。また、利用しようとした通信手段はどのくらいつながりましたか。次のA~Gの通信手段について、どのくらい利用できたか教えてください。(それぞれ はひとつ) あなたが普段使っていない通信手段については「4. 利用しようとしなかった/持っていなかった」とお答えください。

	すぐにつながり、問題なく利用できた	つながりにくかったが、利用できた	つながりにくく、全く利用できなかった	利用しようとしなかった/持っていなかった	無回答
A. 固定電話	1 16.1% (151)	2 17.7% (166)	3 26.0% (243)	4 19.0% (178)	21.2% (198)
B. 公衆電話	1 1.6% (15)	2 1.3% (12)	3 1.7% (16)	4 46.3% (433)	49.1% (460)
C. 携帯電話・PHS(音声)	1 10.0% (94)	2 22.1% (207)	3 19.6% (183)	4 17.5% (164)	30.8% (288)
D. 携帯メール	1 4.7% (44)	2 7.1% (66)	3 6.0% (56)	4 34.9% (327)	47.3% (443)
E. パソコンのメール	1 1.0% (9)	2 0.6% (6)	3 0.4% (4)	4 47.1% (441)	50.9% (476)
F. パソコンのウェブ検索	1 0.9% (8)	2 0.4% (4)	3 0.5% (5)	4 47.3% (443)	50.9% (476)
G. BB フォンなどの IP 電話	1 0.2% (2)	2 0.3% (3)	3 0.2% (2)	4 48.7% (456)	50.5% (473)

問24 災害時に電話が混線して使えない時、自分の安否を家族に伝えることができる「災害用伝言ダイヤル(171)」という仕組みがあります。あなたは今回の地震が起こる前、この仕組みのことを知っていましたか。(はひとつ)

1. 聞いたこともなかった	53.5%	(501)
2. 聞いたことはあるが、使い方までは知らなかった	37.8%	(354)
3. 聞いたこともあるし、使い方も知っていた	5.4%	(51)
無回答	3.2%	(30)

問25 では、あなたは、今回の地震の時、「災害用伝言ダイヤル(171)」を使いましたか。(はひとつ)

1.使った	1.0%	(9)	2.使わなかった	94.6%	(885)	無回答	4.5%	(42)
-------	------	-------	----------	-------	---------	-----	------	--------

問26 今回の地震の後、あなたは次の「1」～「12」のようなことを感じたことがどのくらいありましたか。(それぞれ はひとつ)

	よくあった	度々あった	あまりなかった	全くなかった	無回答
1. 心配事があってよく眠れない	1 12.2% (114)	2 26.1% (244)	3 29.0% (271)	4 20.0% (187)	12.8 (120)
2. 何かをする時にいつもより集中することができる	1 5.8% (54)	2 12.7% (119)	3 42.0% (393)	4 21.4% (200)	18.2 (170)
3. いつもより自分のしていることに生きがいを感じる	1 5.7% (53)	2 11.6% (109)	3 41.0% (384)	4 22.0% (206)	19.7 (184)
4. いつもより容易に物事を決めることができる	1 6.5% (61)	2 11.6% (109)	3 39.6% (371)	4 23.1% (216)	19.1 (179)
5. いつもより気が重くてゆううつになる	1 9.3% (87)	2 20.6% (193)	3 26.0% (243)	4 26.1% (244)	18.1% (169)
6. 自分は役に立たない人間だと思う	1 3.5% (33)	2 9.0% (84)	3 34.0% (318)	4 35.6% (333)	17.9% (168)
7. 一般的にみて幸せと感じる	1 16.0% (150)	2 23.1% (216)	3 26.4% (247)	4 15.9% (149)	18.6% (174)
8. いつもよりストレスを感じた	1 14.4% (135)	2 22.8% (213)	3 25.2% (236)	4 20.6% (193)	17.0% (159)
9. 問題を解決できなくて困った	1 3.4% (32)	2 8.4% (79)	3 34.8% (326)	4 34.1% (319)	19.2% (180)
10. いつもより日常生活を楽しく送ることができた	1 4.2% (39)	2 11.6% (109)	3 41.7% (390)	4 23.4% (219)	19.1% (179)
11. 自信を失った	1 1.8% (17)	2 6.8% (64)	3 30.6% (286)	4 41.7% (390)	19.1% (179)
12. いつもより積極的に問題を解決しようとすることができた	1 7.4% (69)	2 13.9% (130)	3 39.7% (372)	4 20.6% (193)	18.4% (172)

問27 今回の地震の前に、あなたは「近々、この地域で大地震が起こる」と思っていましたか。
(はひとつ)

1. 必ず大きな地震が起こると思っていた	18.8%	(176)	3. 大きな地震が起こるとはあまわななかつた	18.2%	(170)
2. ひょっとしたら大きな地震が起こると思っていた	52.2%	(489)	4. 大きな地震が起こるとはまったく思わなかつた	8.3%	(78)
			無回答	2.5%	(23)

問28 政府の地震調査研究推進本部が平成15年3月24日に公表した長期評価では、マグニチュード8クラスの十勝沖の地震が10年以内に10～20%、30年以内に60%程度の確率で発生するとしていました。あなたは今回の地震前にこのことを知っていましたか。(はひとつ)

1. 知っていた	40.7%	(381)	2. 知らなかつた	57.1%	(534)	無回答	2.2%	(21)
----------	-------	---------	-----------	-------	---------	-----	------	--------

問29 次にご家庭での地震対策についてお聞きします。

(1) お宅では、今回の地震の前に、次のような地震対策をしていましたか。(はいいくつでも)

1. 自宅の耐震診断	0.9%	(8)	9. 家族の連絡方法を定める	13.0%	(122)
2. 自宅の耐震補強工事	3.2%	(30)	10. 家族がバラバラになった時に落ち合う場所を決める	14.9%	(139)
3. ブロック塀や石塀などの耐震補強工事	0.6%	(6)	11. 津波に備えて、避難する場所を決めている	38.0%	(356)
4. 家具の固定	30.3%	(284)	12. 地域の人と津波の時にどう避難するか話し合う	10.7%	(100)
5. 地震保険への加入	22.4%	(210)	13. 地震の揺れに気づくとすぐ火の始末をする	63.6%	(595)
6. 津波避難訓練への参加	26.4%	(247)	14. その他(具体的に)	3.1%	(29)
7. 津波危険地域を表示した防災地図を家の中の見える所に貼ってある	5.8%	(54)	15. 何もしていない	12.5%	(117)
8. 非常持ち出し品の準備	33.3%	(312)	無回答	3.5%	(33)

(2) では、今回の地震の後、新たに地震対策をしましたか。(はいいくつでも)

1. 自宅の耐震診断	1.9%	(18)	9. 家族の連絡方法を定める	12.3%	(115)
2. 自宅の耐震補強工事	2.8%	(26)	10. 家族がバラバラになった時に落ち合う場所を決める	12.3%	(115)
3. ブロック塀や石塀などの耐震補強工事	1.1%	(10)	11. 津波に備えて、避難する場所を決めている	20.5%	(192)
4. 家具の固定	21.7%	(203)	12. 地域の人と津波の時にどう避難するか話し合う	9.3%	(87)
5. 地震保険への加入	6.0%	(56)	13. 地震の揺れに気づくとすぐ火の始末をする	34.2%	(320)
6. 津波避難訓練への参加	8.2%	(77)	14. その他(具体的に)	2.5%	(23)
7. 津波危険地域を表示した防災地図を家の中の見える所に貼ってある	3.1%	(29)	15. 何もしていない	22.9%	(214)
8. 非常持ち出し品の準備	35.9%	(336)	無回答	10.9%	(102)

問 30 あなたは、地震直後のテレビ・ラジオからの情報について、次のようなことを感じましたか。(はいいくつでも)

1. もっと早く津波への警戒を呼びかけてほしい	29.8%	(279)
2. 津波避難に際しての留意点・注意点を もっと詳しく伝えてほしい	17.5%	(164)
3. 具体的な避難場所を伝えてほしい	10.6%	(99)
4. 津波の強さについて もっと詳しく伝えてほしい	36.1%	(338)
5. 津波の到達時刻について もっと詳しく伝えてほしい	44.2%	(414)
6. 津波の予想される高さについては、もう少し正確に伝えてほしい	39.4%	(369)
7. 津波以外の留意点や注意点も、もっと伝えてほしい	17.8%	(167)
8. 上記のようなことはひとつも感じなかった	15.3%	(143)
無回答	9.3%	(87)

問 31 現在あなたは、次の「1」～「15」の考え方についてどう思っていますか。(それぞれ はひとつ)

	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	無回答
1. 家族の愛情を感じる	1 50.6% (474)	2 26.5% (248)	3 5.1% (48)	4 2.6% (24)	15.2% (142)
2. 近所の人との関係が大事だ	1 51.6% (483)	2 28.6% (268)	3 5.2% (49)	4 1.9% (18)	12.6% (118)
3. よいことをすれば、報われる	1 29.2% (273)	2 30.9% (289)	3 16.1% (151)	4 7.2% (67)	16.7% (156)
4. 気をつけてさえすれば、多くの不幸な出来事は避けられる	1 26.2% (245)	2 32.8% (307)	3 17.9% (168)	4 8.3% (78)	14.7% (138)
5. 見知らぬ人でも信頼できると思う	1 10.7% (100)	2 23.3% (218)	3 33.1% (310)	4 16.3% (153)	16.6% (155)
6. 今の自分にとっても満足している	1 15.0% (140)	2 34.7% (325)	3 24.7% (231)	4 9.8% (92)	15.8% (148)
7. この世界はよいところだ	1 12.6% (118)	2 31.2% (292)	3 25.4% (238)	4 13.4% (125)	17.4% (163)
8. このごろの人は、モノへ執着しすぎている	1 19.1% (179)	2 25.1% (235)	3 26.9% (252)	4 9.8% (92)	19.0% (178)
9. 災害は神や仏が人間の過ちや社会の腐敗を戒めるために起こすものだ	1 3.8% (36)	2 7.1% (66)	3 23.2% (217)	4 48.4% (453)	17.5% (164)
10. 災害にあって生きるか死ぬかは、一人一人の定められた運命によって決まっている	1 15.6% (146)	2 20.9% (196)	3 21.7% (203)	4 26.4% (247)	15.4% (144)
11. 自然の大きな力の前では人間の力などは無力であり、対策などしてもしょうがない	1 10.4% (97)	2 15.7% (147)	3 28.4% (266)	4 30.4% (285)	15.1% (141)
12. 自然の力は確かに大きい適切な対策をとれば被害を大きく減らせる	1 46.6% (436)	2 30.0% (281)	3 5.6% (52)	4 4.2% (39)	13.7% (128)
13. どんな災害にあっても、自分だけは助かるような気がする	1 4.5% (42)	2 7.8% (73)	3 34.1% (319)	4 38.2% (358)	15.4% (144)
14. 災害から身を守るには、自分の考えで判断し行動することが大事だ	1 17.9% (168)	2 25.0% (234)	3 27.1% (254)	4 15.0% (140)	15.0% (140)
15. 災害の時こそ、まちの人々が協力しあう必要がある	1 62.5% (585)	2 22.5% (211)	3 1.8% (17)	4 0.9% (8)	12.3% (115)

問 32 あなたは子供の頃、昔起きた地震や津波について、親や祖父母や近所の人から話を聞いたことがありますか。(はひとつ)

1. ある	52.7%	(493)	2. ない	問33へ	39.1%	(366)	無回答	8.2	(77)
-------	-------	---------	-------	------	-------	---------	-----	-----	--------

付問は、問 32 で「1. ある」とした人だけお答えください
 付問 それはどんな話でしたか。具体的にお書きください。

問 33 では、あなたは国、北海道、市町に対してどのようなことを望みますか。(はいくつでも)

1. 地震・津波予知体制の強化	54.7%	(512)	8. 個人被害の補償	44.0%	(412)
2. 広報の充実	24.4%	(228)	9. 被災者のための公的住宅の建設	36.4%	(341)
3. 町・市の対応体制の強化	39.4%	(369)	10. 観光客の誘致対策	5.4%	(51)
4. 情報連絡体制の強化	39.9%	(373)	11. 漁業施設への公的援助	11.3%	(106)
5. 避難所や避難道路の整備	31.3%	(293)	12. その他(具体的に)	2.1%	(20)
6. 防波堤(防潮堤)のかさ上げ	26.5%	(248)	13. 特にない	3.4%	(32)
7. 消防力や緊急医療体制の強化	30.3%	(284)	無回答	8.7%	(81)

問 34 最後に、国、北海道、市町など、行政に対する不満や要望がありましたら、どんなことでもお書きください。

(省略)

最後に、あなたご自身のことをおたずねします

F1 あなたの性別は何ですか。(はひとつ)

1. 男	43.4%	(406)	2. 女	56.6%	(530)
------	-------	---------	------	-------	---------

F2 あなたの年齢はおいくつですか。(はひとつ)

1. 10代	0.0%	(0)	3. 30代	10.9%	(102)	5. 50代	23.6%	(221)	7. 70代以上	17.4%	(163)
2. 20代	6.0%	(56)	4. 40代	17.9%	(168)	3. 60代	24.1%	(226)			

F3 あなたの主な職業は何ですか。(はひとつ)

1. 漁業従業者	16.2%	(152)	4. 旅館・民宿	0.5%	(5)	7. 主婦	26.2%	(245)	10. その他(具体的に)	6.0%	(56)
2. 農業従業者	1.3%	(12)	5. 会社員	10.8%	(101)	8. 学生	0.1%	(1)			
3. 自営業	13.8%	(129)	6. 公務員(教員を含む)	9.1%	(85)	9. 無職	15.5%	(145)	無回答	0.5%	(5)

F4 あなたは、この地域にお住まいになってから何年になりますか。 (35.88) 年

F5 (1)同居の家族の人数は、あなたを含めて何人ですか。 (3.25) 人

(2)同居の家族のうち、あなたを含めて地震が起きた時、ご自宅にいた人は何人ですか。
(2.96) 人

(3)そのうち、地震発生直後に避難したのは、あなたを含めて何人ですか。 (2.06) 人

F7 地震が起きた時、お宅には次のような方が一緒に住んでいましたか。(はいくつでも)

1. 小学生以下の子供	12.9%	(121)	3. 体の不自由な人・寝たきり の人	8.1%	(76)
2. 70 歳以上のお年寄り	39.1%	(366)	4. そのような人はいない	47.5%	(445)
			無回答	6.1%	(57)

F8 お宅のある場所は、市や町から津波危険地域に指定されていますか。(はひとつ)

1. 指定されている	45.7%	(428)
2. 指定されていない	15.4%	(144)
3. わからない	35.8%	(335)
無回答	3.1%	(29)

F9 地震時、あなたがいた場所の近くに、津波から安全な避難場所がありましたか。(はひとつ)

1. 近くにあった	79.5%	(744)
2. 近くになかった	12.0%	(112)
3. あるかどうかわからなかった	6.3%	(59)
無回答	2.2%	(21)

F10 お宅にはいつでも利用できる自家用車がありますか。(はひとつ)

1. ある	88.9%	(832)	2. ない	10.6%	(99)	無回答	0.5%	(5)
-------	-------	---------	-------	-------	--------	-----	------	-------

長い間、ご協力どうもありがとうございました
同封の返信用封筒(切手不要)に入れてご投函ください

附属資料2 厚岸町床潭地区住民聞き取り(抜粋)

(1)住民9

質問： どこに寝ていらっしたんですか。うちの2階ですか、1階ですか。

住民9 ちょうど下の方の道路っぶちの方で。

質問： 1階の、道路っぶちの方に寝ていて、一応飛び起きたというか、何もしないで。その後すぐどうしました？ 揺れが収まってからは。

住民9 着替え。着て、あとはもう逃げる算段。

質問： 着替えて、逃げる。

住民9 着るもの、ある程度寝ているから、厚いものを上に羽織って。

質問： 羽織るだけですか。

住民9 その後、たんすから出したとか何か着てはいない。普段こういうようなのを着て、あとは上に、言うなれば オカン というか、そういうもので。

質問： 一応、着替えたわけですね。そのときにはもう、あ、これは津波だなと思って、逃げなきゃと思ったんですか。着替えて羽織ってるということは、もう逃げようと思って。

住民9 やっぱりもう、あれだけの地震だから逃げるのがあれだから、津波どうであれやっぱり。

質問： 奥さんもそのころには、着替えているころには家の中に入ってきて、長靴を履いたまま。

住民9 もう逃げると。

質問： 逃げよう。じゃあ、奥さんはその住民9さんを起こしてというか、連れてそのまま逃げようと思ったんで、長靴で家の中に入ってきたと。

住民9 もう脱いだって、うちの中、玄関に水槽あって、そういうのもみんな。

質問： めちゃくちゃですか。

住民9 めちゃくちゃだから、そんな靴脱いでもあれだろうから。

質問： 出発するのにはどれくらい時間かかったんですかね、車で。

住民9 収まってからやっぱり、5分やそこらはかかってるね。収まってから何だということ。

質問： 5分ぐらいは。それで、出発。奥さんと同じ車じゃないというのは、どういうことだったんですか。

住民9 車2台。軽用と2台あるからさ。我々、そういうものをやっぱり買うてば コガン だから、言うなれば一緒に逃げると、トラックと乗用車持ってった方がいいし。投げていくより。

質問： そうか。流されちゃうかもしれないし、2台に分乗して、5分後ぐらいに厚岸の町の方まで。

住民9 山の上さ。

質問： 山の上まで行ったと。それはずっと道がありますけど、何かたまれるところというか、止まれるところが。

住民9 いや、高いところから。床潭やっぱりある程度、浜でも一応見えるしな、ほかで。

質問： そうですね。

住民9 そっちの方で、言うなれば神社の方に行けば一番あ

れなんだけどね。

質問： 高い。

住民9 どうしても我々、そっち行かないから、もうある程度町の方へ走る。

質問： いつも行くところという感じですかね、通るところだから。

住民9 知っている方がいい。そして、おふくるとか乗してるから、トイレとか何とかってなれば、子野日公園とかトイレとか何かあるからね。

質問： 公園があるんですか、あっちの方に。

住民9 町の入り口、こっから行けば床潭の出口のところちょうど子野日公園があるから。

質問： 子野日公園。

住民9 女がいたからトイレとか。

質問： そうですね。

住民9 やっぱりちょっとしたところ、みんなごちゃごちゃしているところへ行ったって、トイレとかやっぱり女の人はね。

質問： そこまで、取りあえず子野日公園まで。

住民9 坂の上によかったんだけど、やっぱりトイレとか食品が売っているとか何も食べてないから、やっぱり朝飯とか腹減ったり何だりするから、町の方へ行くコンビニあるから。

質問： ありますね、なるほど。

住民9 そういうのを買って食ったりして。

質問： もう普段から逃げるならあっち方面だなんていう、そういう心積もりはあったんですか。

住民9 やっぱり行くっていえば、そのまんま行っちゃうんだよね。

質問： 町の方へ。

住民9 直行する、高いところへ行っちゃうな。

質問： そのときたぶん、また戻りますけども、地震の直後、停電こちら辺りませんでした？

住民9 ここは、したね。

質問： そうするとテレビもラジオも全然聞こえないし、暗いしという、そういう感じの中で急いで逃げたと。そのきっかけというのは、別に誰かに言われたからとか、津波警報を聞いたからとか、そういうことはないわけですね。

住民9 やっぱり最初、停電すぐしたのかな、あれな。やっぱり津波警報は入ったからね、すぐに、テレビに。

質問： 津波警報はどのように最初はお知りになりました？

住民9 最初は、車のラジオ。

質問： 車のラジオね。

住民9 ラジオでもって。言うなれば、解除ならないから。

質問： 町の防災無線とか、そんなのは聞きました？

住民9 いや、聞かない。

質問： 聞かない。もうそのたぶん前に外に出てたという。

住民9 山の上へ、あそこの山の上まで行けば、防災聞こえないからね。

質問： その山の上とかには、どなたかほかの方も逃げてきました？

住民9 結構もう、道路沿いに何台も着いたね。

質問： 公園まで行ったんですか。公園にもやっぱり何台か。
住民9 公園には結構やっぱり町の人とかもいたし。
質問： 公園というのは、別に避難場所に指定されているわけではないんですよね、特別。
住民9 なってるかも分かんないね、あそこら辺に。
質問： そうですか、町の人はいたということは。そこにしばらくいらっしやっただんですか。公園にはどれぐらいいらっしやっただんですか、時間でいうと。
住民9 15分もそこらもいたね。山の上にはいたんだけど、トイレしたいっていうから、トイレに行ってそこで。車も何台もいたし、またすぐこっち来たって何も一緒だから。そしたら、ここで少し休憩して、そしてまた山の上にもた戻ってきて。
質問： 15分ほどで、また山の上まで戻った。
住民9 行ったついでに、今度は飯というか、コンビニに行ってみるかということで買い物に行って。
質問： それじゃあ、町の方まで買い物に行ったんですか。
住民9 パンとかそういうのを買って、子野日公園で休憩を取った。
質問： また公園に行くと。そうすると、それは結構長い時間行ったり来たりというか、ここまで戻ってきてないわけですね。
住民9 いや、来てない。やっぱり解除になってないからね。神社の方の高い道路、あそこにいる人たちは結構津波のあれを見ているわけ。そうしたら、それからある程度、結構、あれ何時ごろだろう、7時半か8時ごろかな。今度は神社の方のあそこへ、俺が様子を見に来たんだ、どんなような状態になっているかなと思って。
質問： そうしたら、どんな様子でした？
住民9 そのときあれだもんね、築港の船が、水船になったのがあれだとか、ひっくり返ったとかって、何杯か。
質問： 浜に泊まっている、ちょっと揚げている船がですか、浮いている船。
住民9 浮かしている。
質問： 浮かしているやつ。
住民9 前に浮かしているやつ。あれは津波でもって岩壁の上に揚がってしまったらしいんだよね。
質問： もともと海の上に浮かんでいたのが津波で。
住民9 津波で揚がったらしいんだよね。そして今度は引くときに、一緒に落ちなくてどっかで引っ掛かったか何かして、そういう引っ掛かった船が水。
質問： 見えただんですか、何杯か。
住民9 何杯か、2杯くらい。2回も3回も結構津波は来たような。
質問： 2波、3波。
住民9 来たような。上のあそこにいる人たちは結構見てるからね、わらは見ないけど。結構引いて何回も来たらしい。
質問： なんかことを言っていました？ 怖いねみたいな話をしていたんですか。
住民9 そんな高いようなあれでもないから。サササーッとやっぱり来たらしいけど。来るとき、やっぱり結構潮は引くから、普段見られないような岩だっ見える。
質問： 見えたらしいですか、潮が引いてね。それが7時半から8時ごろ、行って見たときの話ですね。
住民9 そのときは、もうすでに終わってる。

質問： その後、見に行ってきた、どうしました？
住民9 そこで結構、そっちの方の浜に下がったりなんかして、船の マタジ とか何とかしてたから、一応8時半ごろかな、うち来たかな、どうかなって。そのときでもまだ解除になってないから。
質問： 一応、うちに恐る恐る来てみたんですか。
住民9 したけど、やっぱり結構もう帰ってきてる人もいたからね。
質問： 戻ってきてどうしました？
住民9 そのまま今度は帰らないで。
質問： もうご家族とともに、うちにそのときには戻ってきたんですか。そっちの神社の方に様子を見に行つたのも、やはり3人でいらっしやっただんですか。
住民9 いや、俺1人で、軽4でもって。
質問： 1人で。じゃあ、また1度その山の上まで戻って。
住民9 いや、あんまり今度は俺が戻って来ないから、乗用でもって。
質問： 一緒に来たんですか。
住民9 下の方に来たときに、俺が戻って来るのと一緒になったから。
質問： じゃあ、途中で落ちあって家に戻ったと。そのとき、まだ解除になっていないのに、なんか大丈夫かなという気持ちはどうですか。
住民9 結構、みんな トガイチ のような人も来てあれだったんだね。ちょうどあれなんだ、組合の昆布の出荷の日だったんだよ、検査の日だったんだね。そしたら、俺、実行組合長やっているもんだから。
質問： 電話で。
住民9 電話かけたけど、そのころまだうちさ来てないから、こっちは全然。
質問： 分からない。
住民9 分からない。ちょうどうちに様子を見に来たときに、ちょうど組合からそこへ来て検査。まだお前、解除にならないのに検査あれなのかって、いや、ほかの地域に聞いたら、やってもいいよと言うから来たって。ここの地域はだめだって、昼からじゃないとだめだぞということで。ほかの床潭3つくらいか、これからこっちに2つくらいあるんだけど、そっちの方は昼前にやったんだけど、ここは昼から、1時から。
質問： それは、まだ津波警報解除されていないから。
住民9 まだないし、うちの中もごちゃごちゃして、片付けてもないのに、そんなあれじゃないということでもって、昼1時からということでもらったんだ。
質問： それは品質を検査するわけですか、昆布の。
住民9 そうね。
質問： 出荷で何か等級を付けて出すみたいな。
住民9 等級で出して、それを収めれば組合の倉庫に持っていく。
質問： なるほど、これは漁業組合の人ですね。
住民9 そうね。
質問： その日は昆布漁はお休みだったんですか、そういう検査の日だから。
住民9 いや、あれ、何月だったか。
質問： 9月の26日。
住民9 いや、検査あっても。
質問： あるときはあるんですか。
住民9 あっても何も、沖はちゃんと出れるし関係ない。

質問： 住民9さん自身は漁師さんですよ。

住民9 そう。

質問： 昆布を主に採っていらっしゃる。

住民9 昆布だけしか。

質問： 昆布だけですか。そのときに、地震だと、津波が来ると思ったときに、船をどうしようっていう考えはなかったんですか。

住民9 そんなことやっているより、もうそういうのはあれでしょう、そういうところに行って、もし津波とか来たということになれば、そんなことやって死ぬより逃げた方がいい。

質問： じゃあ、もう全然そんなことやっている場合じゃないと。

住民9 言うなれば、利尻とかあいうようなことを考えればさ。

質問： 利尻というのは。

住民9 いや、それ津波でさ。

質問： 奥尻ですか。

住民9 奥尻とか、ああいうことを考えれば、そんな船なんてあったって。ある程度揚げてあるときは縛ってあるんだし。流れたといたって丘に揚がってくるから。縛りに行って、もしものことがあったらどうにもならないし。

質問： やっぱ奥尻のことっていうのは、そのときイメージありましたか、怖いみたいなの。そのときあんまり思わなかった？

住民9 そんな。我々、それ以上のあれは経験しているから、小さい。

質問： 十勝、27年の。

住民9 やっぱ小さいくても、まだ音が出なくてもそういうのは恐ろしいっつうことを。

質問： 27年のときはどんな恐ろしい経験だったんですか、住民9さんご自身は。覚えていらっしゃいますか。

住民9 そう何というあれでもないけど、やっぱり地震というあれになったら、もう逃げるといもののが、もう大きい地震になったら、もう津波という頭があるから。

質問： やっぱ親御さんとかが、津波は怖いから逃げるとか、そういうふうな話もあったんですか。

住民9 やっぱ我々小学校かそこらのときは、ここにいたからね。我々、あれの3月、小学校のときは トウ走ったからね、津波で。

質問： トウ？

住民9 沼、走って逃げたもんだから。

質問： 沼の方まで。

住民9 沼に氷が張っていたから、そのころは。そういう経験があるから、やっぱり大きい地震というものになれば、津波というのがあるから。

質問： そのときには昼間ですよ、27年のときには。小学校に行っていたんですか、小学生だったんですか。

住民9 あれのとときは今、我々60歳だからな。その前のときのあれだね、地震。小学校の何年生ぐらいのころだろうな。

質問： 小学生のころ、そのときは、この辺もかなり。

住民9 そのときは一番ひどかった。

質問： 何か町の歴史を見ると40軒ぐらい流された。

住民9 そのときが一番で。

質問： そのときは、もうすでにここに住んでいらっしゃっ

たんですか、この場所ですか。

住民9 そうだね。

質問： お宅はさっき聞いたところ、お宅は流されなかったけど水は来たと。じゃあ、かなりご自身も危ない経験をしたと。

住民9 そうだね。

質問： 沼の方は氷が張っていて、その上に逃げたんですか。

住民9 小学校のころのあれはね。あのころはまだ、ちょうど学校にいたころだったからね。

質問： 学校にいたと。それで、津波だということで、特に奥に逃げなきゃというので、あっちの奥の方に行ったわけですね。小学校自体は結局、水には合わなかったんですよ。

住民9 学校は何でもなかった。

質問： 沼の方に逃げるといものもなんか怖い気もしますよね、今から考えてみるとね。

住民9 それしかなかったね、あのころ。

質問： なるほど。

住民9 それは、十勝沖じゃないからね。

質問： それは十勝沖じゃないんですか、小学校のころの。昭和27年、十勝沖。

住民9 昭和27年、十勝沖だっけ？

質問： 27年、十勝沖だと思います。

住民9 それ逃げたときは、やっぱり後ろに波来てたからね。

質問： 見えましたか。

住民9 見えた。

質問： そのときのことはやっぱり覚えてますか。

住民9 うっすらだね、逃げたのを覚えてるな。

質問： それでもう、かなり怖いと。小学校のもう低学年ですかね。

住民9 そうだね。

質問： なるほど。この辺は、津波に関する何か言い伝えみたいなのというのはありますか。

住民9 いや、そういうことは聞いたことがないけどね。

質問： 津波のときには、だいたい引き波があるとかそういう話というのは。

住民9 やっぱ津波が来るってことは、潮が引くということ。

質問： 潮が引くと、まず引くと、それから来るという感じですかね。奥さんなんかこの辺の出身なんですか。

住民9 いや、町の。

質問： 町の方。奥さんもやはり地震だから津波だっていう感じで、逃げようとしたわけですよ。それはもう話を聞いていたからですかね。

住民9 そうだね。

質問： なるほど、分かりました。今5人ぐらい来て、お話を聞いているんですけど。今は住民9さんで、隣がNさんですか。

住民9 そうね、今は で。

質問： もうNさんはいないですか。

住民9 いない。

質問： Kさんはまだいますね。じゃあ、ここ、隣はもう空き家ですかね。もう何にも家がないんですか。

住民9 家ない、倉庫はあるけど。

質問： 家なし。27年の十勝沖のときには、この小林さんのあたりも被害はあったんですかね、ここまではないですか。

住民9 みんなうちこうあるから、だいたい似たような。
質問： 似たようなものですか。この裏の方はどうですか。
村上さんとかはやっぱ同じですかね、この辺は。こ
っちの方はどの辺までが水に浸かったのか分かりま
すかね、27年のころ、よく覚えてないですか。さっ
きお話聞いた住民27さんですか、そのあたりはそ
んなにひどくなかったと。
住民9 わりと記憶には。小学校のころだけど、おやじたち
の聞いたりなんかした、川あたりが一番。
質問： 川沿い。
住民9 川沿いに船がそのまま流れて、揚がってきたからね。
質問： 川沿いに船揚がってきたという話を聞いているんで
すか。
住民9 だからね、ちょうど川沿いのこっちの方に、今、川
縁に家が建ってるでしょう、こっちとこっちと。
質問： あのあたりはもう完全に。
住民9 あそこの方が死んだかな。あそこのうちに行けば、
おやじなら結構覚えて、我より年いっているから。
質問： お名前だと？
住民9 Kさん、KKさん。
質問： KKさんね。
住民9 そこ今、夫婦2人でいるけども。
質問： これはどなたが亡くなったんですか。
住民9 おんちゃがあれかな、ちょっと。
質問： 長男？
住民9 おんちゃが、それあれなんだ。言うならば、健常者
でなかったからね。
質問： ああ、逃げ遅れたんですかね。あとはどこで亡くな
ったとか分かりますかね。
住民9 あとは。あとは津波で亡くなったと思ったんだけど
ね。
質問： なんか3人ほど亡くなっているって聞いたんですけ
ど。
住民9 小さいからそんな分からないけど。そこのうちに行
って聞けば一番分かりやすいんじゃないかな。
質問： 分かりました。もう川沿いですからね。このKKさん
とSさんの間に建物ありますけど、ここは人は住
んでないですか。
住民9 Sさん？
質問： STさんというのかな。
住民9 ああ、T、すぐ隣だ。
質問： その隣もありますよね。
住民9 Sさん。
質問： Sさんは？
住民9 今は息子だから、STの次はS、今、息子はHにな
っている。
質問： ここはSHさんになっているんですか、隣は。分か
りました。その隣はKさんですか。もうKKさんで
すか、SHさんの隣は。
住民9 いや、Tさん。
質問： Tさんがいらっしゃるんですか。
住民9 して、もう一軒。
質問： もう一軒あって、KKさん。Tさんの隣は？
住民9 今、Nって。
質問： Nさんですか。このあたりは新しい人ですか、Tさ
んは。
住民9 息子さん。
質問： Nさんは。

住民9 今、みんな息子の代になってる、おやじはいない。
質問： なるほど。
住民9 だから、このKKさんのとこで聞けば一番あれだろ
うね。
質問： KJさん？
住民9 俺。
質問： Jさんですね。これ何だろう、お母さんの名前が書
いてあるのかな。
住民9 KTになってるんだよ。
質問： KTは、お父さんですか。
住民9 はい。
質問： もうKTさんじゃないですね。KJさんですよ、
分かりました。
住民9 ここが川だったら、川の縁のKKさん。
質問： KKさん。あともう一戸、立派な新しい家は？
住民9 反対側にある、KKさんのおんちゃの方ね、KSさ
ん。
質問： KSさん。これは家族というか、親せきというか。
住民9 おやじ、今の言うならばじじいたちが兄弟。
質問： 兄弟ですか。
住民9 おんちゃ。
質問： こことここは兄弟。
住民9 こっちの方が、KKが。
質問： 兄ちゃん。これ、新しいうちなんですね。分かりま
した。これ、今もう漁はしていないですよ、この
季節は？
住民9 してないね。何杯か 雑魚 みたいなのあるけど、
俺のところは今回はそんなに。
(録音終了)

(2)住民10

質問： どのような家族構成になっていますでしょうか。奥
様と。
住民10妻 だんなさんと、長男夫婦と孫が2人です。
質問： お孫さんがお2人。お孫さんは男のお子さん、女
のお子さん？
住民10妻 女と男と。
質問： じゃあ、6名でいらっしゃいますね。まず、地震が
起こった4時50分ですけれども、この時間はどうさ
れていましたか。
住民9妻 仕事をしていたかね。
住民10妻 小屋で私は仕事をしていた。
(中略)
質問： 地震はどうでしたか。大きかった。
住民9妻 大きいなんて、嫌だった。これ、どうしようと思
った。
質問： 何か被害というんでしょうか、倉庫の中で何かもの
が落ちたりとかしましたか。
住民10妻 うちはなかったけれども。
住民9妻 うちでも何ともない。
住民10妻 うちの中は、みんなこういう瀬戸物がみんなそ
の中から飛び出して。
質問： 家のもの。棚とか倒れたりしませんでしたか。
住民10妻 棚はないけど、部屋のたんすとか倒れて。
質問： たんすが倒れて。
住民10妻 その上に、寝ている部屋にテレビがあったから、

テレビもみんな落ちたし、ここの神棚のものは全部、うちでは落ちて、ここの戸もみんなそこが開いて、もう全部。

質問： ものが全部出てしまったということですね。

住民9妻 2階がね、下が車庫になっているからね。

質問： まず、お1人で昆布のところにいりましたんですか。

住民10妻 うん、小屋でね。

質問： そのときに地震があって、そのときに揺れてその後どうされましたか、すぐに。

住民9妻 私は外へ飛び出た。

住民10妻 私は昆布を……

住民9妻 まじくる 機械を押さえていたんだって。

住民10妻 機械があるんだよね、きりんと言って、こういう。

住民9妻 圧縮機。

質問： きりんという圧縮機が。

住民9妻 それを押さえていたんだって。

住民10妻 それを、前の地震のときに、それが揺れて窓にそっちにガラスがあるでしょう。それにぶつかって割れたものだから、前のときの地震でね。あれは何年前だろうね。

質問： 夜の地震ですか。

住民9妻 いいえ。10月にあったことがあるよ、大きい地震が。

住民10妻 地震ね。

質問： 北海道東方沖地震。

住民10妻 東方沖というの。

住民9妻 あのとときにこの人は窓ガラスを割ったんだ、そのきりんて。

住民10妻 きりんがこう行って、これが行ってガラスが割れたものだから、それを押さえていたのさ(笑)。うちにみんな、孫やら嫁さんも寝ているから心配で行ってみようという気持ちはあったんだけど、前のようにしてまたガラスが割れてしまったらこれを入れるのはまた困ると思って、そのきりんを押さえていたの。そして収まってから、ここへ走ってきた感じ、私はね。

(中略)

質問： 住民10妻さんは、その揺れが収まってからどうされましたか。

住民10妻 うちに走ってきた。

質問： ここに、うちの中へ。

住民10妻 こっちからもね。

質問： 倉庫はその、青いところから。

住民10妻 その裏からここへ走ってきて。

質問： ご家族の方は皆さん、起きていて、その地震で起きたんですか。

住民10妻 うん。起きて、やっぱり上で収まるまで待っていたんじゃないかな。

住民9妻 つかまっていた。

質問： 皆さん方は、ご家族の方は寝ていらっしゃるんですか、その時間、4時、5時は。

住民10妻 寝ていたんでないかな。

住民9妻 寝ていた。うちでも、ばあちゃんもみんな寝ていた時間帯だから。

住民10妻 うちで、息子とお父さんがサンマの船でもっていなかったの。

質問： じゃあ、沖の方に出ている。

住民9妻 沖に出ている。

住民10妻 出ている。

質問： じゃあ、お孫さんと。

住民10妻 嫁さんが。

質問： それで、ここに戻ってきました、その後どうされましたか、戻ってきて。

住民10妻 もうすぐ逃げようと言って、車でもって。

住民9妻 何もものなんか持たないものね。

質問： 何も持たないで。倉庫にいらっしゃったので、外に出る格好だと思うんですけど、お孫さんとかお嫁さんなんかは。

住民9妻 パジャマの上だったね。

住民10妻 パジャマだった。

質問： その上に何か着て。

住民9妻 着て。

住民10妻 着てたわ。

住民9妻 そうやって逃げているよね。

住民10妻 それで、知っているうちのところまで逃げたけれども、靴下を履いていないし、今度寒いと。

住民9妻 借りた。

住民10妻 気が付いてあれなんで、何も、そのままだ着て、パジャマの上に。

質問： そのときは、もう停電していたんですか。

住民9妻 停電していました。私が倉庫から逃げるときに、倉庫に行くときはうちから出るときはサンダルで行ったけれども、地震の後は沖で履く長靴が倉庫のところにあるから、長靴を履いてでた。

質問： 長靴を履いて。

住民9妻 自分はね。こんなサンダルを履いては逃げられないなと思ったから、長靴を履いてうちへ行ったら、うちの玄関に熱帯魚を飼っていたのがもう引っくり返って、熱帯魚が一面に。

質問： 熱帯魚が。

住民9妻 玄関に。前の地震でも倒れないのに、今回はげた箱が引っくり返ったから、熱帯魚なんかが、もう水浸しなの、玄関が。そして、長靴を履いていたからそれを起こして、うちに入ったときにもう電気が消えているから、部屋がもう真っ暗で、カーテンがしてあったから、だから私は泥靴のまま、長靴を履いたまま上がって行ってカーテンを開けて、もう逃げよう。ばあちゃんのところへ行行って、「ばあちゃん、逃げよう、逃げよう」と。

~~~~~

質問： どうも申し訳ございません。すみません。それでは、おうちへ戻られて、逃げようということで、停電になって。何かニュースを聞こうとか、テレビやラジオを聞こうとかされましたか。

住民9妻 車で逃げているから、車に乗ったら。

住民10妻 思わなかった。

質問： 思われませんでしたか。

住民9妻 すぐ、何もテレビも電気もみんななくて。

住民10妻 逃げようという感じで。

質問： それは、やはり津波が。

住民9妻 頭からもう津波が来ると思っていたから。

質問： ということは、もうとにかく地震があれば津波が。

住民10妻 あれは大きかったから、津波かなと思って、嫁さんたちにも、「早く逃げな、逃げな」と言って、「お母さんは」って言うから、ちょっと待ってよと、そ

の辺のお金とかそういうのを持って、後から今度。  
質問： ということは、もうすぐにここから逃げようという。それは歩いてですか、車で。  
住民10妻 車で。  
質問： 車で。下の方にある車。  
住民10妻 うん。  
質問： そうですか、車で。それは誰が運転されるんですか。  
住民10妻 嫁さんも私もするけれども、嫁さんが。  
質問： お嫁さんが。  
住民10妻 運転して。  
質問： それ1台で、お孫さん2人と4人で逃げたというわけですね。そしてどこへ向かったんですか、避難するところよ。  
住民10妻 避難をする場所はそこにあるんだけれども、知っているうちのね。床屋さんの向かいを上がっていったところに藤谷さんがあるんだよね。  
質問： 藤谷さん。こちらが郵便局がありまして。  
住民9妻 ここを入ったところ。これは厚岸から来ているところですか。  
質問： そうですね。  
住民9妻 床屋さんのここを上がっていく、この辺にFさんというんですけど。  
質問： FHん。  
住民9妻 ここに。  
住民10妻 ここに、山の上だから。そこは知っているうちに、前のときもそこに。  
住民9妻 そこに避難をしているの。  
住民10妻 逃げさせてもらったんだよね。  
質問： そうですか。  
住民10妻 だから、とにかくそこに上がっていきなという感じで。  
質問： 避難場所ではなくてFさんのところへ逃げたと。前の地震というのは東方沖のときにそこへ逃げたということですか。Fさんのお宅へ着くまでに地震が起こってから、だいたいどれくらい時間がかかっていましたか。  
住民9妻 10分もかからないでしょう、すぐだものね。  
質問： 10分ぐらい。  
住民10妻 終わって、すぐ逃げようという感じで。  
住民9妻 帰ってきてから、だだっとなっていった感じで。  
質問： じゃあ、もう5時ぐらいにはだいたいFさんのお宅に。Fさんももう心得ていらっしやるということですか、だいたい避難されてくることを。  
住民10妻 そうだと思うよね。  
質問： そうしましたら、波警報が出たということを知ったのは、避難した後ですか。  
住民10妻 した後だよ。  
質問： それは何でお知りになりましたか。テレビとかラジオとか。  
住民10妻 叫んでいたりとかしていたけど。  
住民9妻 だけど防災無線が入ったというけど、誰も聞いていないみたいで。  
住民10妻 後から何か回ったよね、車でね。  
質問： 車が回っていた。  
住民10妻 津波警報が発令しましたとか何とかでね。  
質問： 広報車ですかね。  
住民9妻 広報車が通ったね。  
質問： それで知ったというような形。Fさんのお宅ではず

っと、何をしゃべったと聞いたらおかしいんですけども、避難された後はどういうふうにしていましたか。  
住民10妻 やっぱ、あそこの中にみんな親せきもまだいるから。車の中にいる人もいるし、そこの中に入らせてもらって。  
住民9妻 やっぱ高いところにあるから、津波は心配ないからね。ちょうど土手の上上がっているようなところで。  
質問： このFさんのお宅だけではなく、ほかにも何軒か。  
住民10妻 F はい、あります。  
質問： 藤谷さんのお宅の方に何人が逃げてこられたんですか、住民10妻さん以外にも。  
住民10妻 うん。藤谷さんの兄弟の人が来て。  
質問： 兄弟とか親せきの方とかが。そこで何時ごろまで藤谷さんのお宅にいらしたんですか。  
住民9妻 8時まででいなかったかな。  
住民10妻 津波警報があれしないうちに。  
質問： 8時ぐらいにおうちへ戻られた。  
  
住民10妻 そうだね。  
住民9妻 私は8時半に来たときに、まだ解除になっていなかったけど、うちへ来てみたの。  
質問： そうですか。  
住民9妻 ええ。波はもう安心だなという感じで。起きて、波がもう2時間も3時間も ..... しているから、うちには86~87歳になるばあちゃんがいるんだけど、ばあちゃんが、 ..... のときも、来ているなら、波はもう来ると。  
住民10妻 来る時間帯にすればね。  
住民9妻 時間帯によって、ばあちゃんもそうやって言うし。  
質問： もう地震が起きてから津波は.....  
住民9妻 もう2時間以上もたっているし、そんなものなら来ないと、ばあちゃんがそうやって言うから。  
住民10妻 山の上だから、「今、津波だわ」とか言っている人もいたんだけど、私たちもそれがうさだと思っただけ。帰ってみようということでもって。  
住民9妻 私は坂の上の中間のところを止めて、下を見ていたの、その坂の途中で。あそこを今下りてくる坂の途中で、やっぱり見えるところにはいないとだめだねという感じで。そうしたら、ばあちゃんが、十勝沖もチリ地震のときもあれだけでも、地震があつてこんな2時間もたつても津波が来ないから、もう大丈夫だってそう言うから。  
質問： なるほど。警報は解除ではなかったんですけども、1回戻ったということですね。それは住民9妻さんも8時半ごろで。  
住民9妻 私は8時半で。  
質問： 住民10妻さんが8時ぐらいですか。  
住民10妻 ちょうどその前だよ。  
住民9妻 私は8時半だった、時間を分かっている。組合のちょうど検査日だったから。  
住民10妻 大丈夫だわと言って。  
住民9妻 自分たちの判断で。  
質問： 藤谷さんのお宅にいて、8時ごろ戻られた。  
住民9妻 私たちが来たときにみんな来ていたもの。  
質問： だいたい皆さんは帰っていらしたんですか。  
住民9妻 帰ってきていました。

質問： そうですか。家族全員帰れた。その後うちに帰ってどうされましたか。

住民10妻 やっぱり片付けを。

質問： 片付けですか。そのころはまだ電気は来ていないですか。

住民9妻 昼すぎまで、来てなかった。電話も不通だったから。

質問： 電話もかからなかった。そうしますと、例えば地震についての情報ですね、それは停電ですと、テレビはつきませんからラジオをつけましたか。

住民9妻 いや、つけない。

質問： 特にラジオはつけなかった。特に情報は何も聞かないんですか。

住民9妻 もう片付けるのが。

住民10妻 そういうのを聞くというのは、うちの今度お父さんも帰ってきてから、ラジオを聞けばよかったと言われたけれども、ああ、そうかなという感じで。

質問： 町の方から津波の解除の知らせが来るのは何時ごろだったか覚えていますか。

住民10妻 お昼前に来たのかね。

住民9妻 前に来たね。組合の検査が来た。

質問： ちょうど組合の検査日だったわけですか。

住民10妻 そうなんです、午後出荷する検査日だったので、それで津波警報も解除にならないのに、検査をしに来たんだ、組合が。

質問： そうなんですか。

住民10妻 そんなもんだから、私らはちょっと反発したのね。地震があったのに、そんなことをやりに来ていいのかいと組合に言ったんだけど。

(中略)

質問： そうですか。今津波のことを伺ったんですけど、十勝沖地震のお話だけ聞きましたけれども、皆さんはもうここに住んでかなり長いんですか。

住民9妻 私は40年近く。

質問： 40年近く。

住民9妻 この人はもともとここで生まれた人。

質問： じゃあ、そうすると。

住民10妻 五十何年か。

質問： 住民9妻さんの方はどちらからこちらへ来たんですか。

住民9妻 私は厚岸の駅前からこっちへ嫁いだんです。だけれども、昔の十勝沖地震は知っています。小学校へ上がる年だったので。

質問： 昭和27年ですね。

住民9妻 だから私がちょうど小学校1年生へ上がる年だったから、地震の記憶はあるの。

質問： 昭和27年の十勝地震をお2人ともご存じ？

住民9妻 この人は、まだ分からないから。

住民10妻 分からない。

住民9妻 私が小学校1年生に上がる年で地震は記憶は鮮明に残っているんだけど、この人は私より1つ、2つ若いから。

住民10妻 残っていないね。

質問： 幼稚園ぐらいですか。

住民10妻 そうだよな、分からないもの。

住民9妻 私はやっぱり記憶があるの、あの地震は、はっきり覚えている。

質問： じゃあ、生まれて初めて大きな地震だったという。

住民9妻 そう。小学校1年生に上がる年で、十勝沖、昔の津波も分かっています。

質問： 覚えていらっしゃる。

住民9妻 近所の駅前で……

質問： 厚岸の駅ですか。

住民9妻 厚岸の駅です。あの辺に住んでいたものですから、十勝沖ははっきり鮮明に覚えています。

質問： 津波も来ましたか。

住民10妻 来ました。

質問： 津波も覚えていますか。住民10妻さんが十勝沖地震を覚えていないということなんですけれども、その後十勝地震があったことはもう。

住民10妻 聞いているね。昔から、親たちがこういうふうにして逃げたとかいうのは聞いているけれども、自分では確かではない。

住民9妻 まだちょっと小さいものね。

質問： 住民10妻さんのお宅と住民9妻さんのお宅は昔からここですか、十勝地震当時から。

住民10妻 そうですね。

質問： チリ地震津波、昭和35年のこれは覚えていらっしゃいますか。

住民9妻 私は中学2年でした。

質問： そうですか。昭和35年ですね。住民10妻さんはチリ地震津波は覚えていますか。昭和35年ですね。

住民10妻 35年だから、覚えているよね。

質問： でもあまり印象は。

住民10妻 ないですね。

質問： 床潭に住み始めてから津波の経験というのはございますか。昭和43年の十勝沖地震というのがあったんですが、そのときは津波が。

住民10妻 覚えてないよね。

質問： そうですか。

住民10妻 チリ地震はすごかったよ。

住民9妻 海のところに立って、見ていたらすごかったよ。

住民10妻 あれは冬なんでしょう。

住民9妻 いや、春先。春先にはね。

質問： 5月ですね。

住民9妻 その日は学校が遠足の日だったんです。明日は天気になってくれますようにと思っていたのに、朝はすごく素晴らしいいい天気なのに、やっぱり漁業をやっていたから、海の水がなくなると、母親が。

質問： やっぱり水が引くわけですね。

住民9妻 引いてきたから、何も前触れもなく海の水がないというので、母親が浜から来たんです。それが記憶に残っています。

質問： 実際、津波の被害もご覧になりましたか。

住民9妻 見ましたよ、浜に立っていて、そうしたら、木工所からの丸太が全部海に流れて、あっちに行く波とこっちに来る波と、丸太の流れがものすごかったのを記憶しています。そのときに床潭が津波で浜が。

質問： 昭和48年に根室で半島沖地震があったとき、そのときは津波はご記憶ですか。

住民9妻 何もそんなにこの辺はないね。

住民10妻 ない。

質問： やはり十勝沖とチリ地震が一番大きかったというような感じですか。

住民9妻 今までは。

質問： 今までは。そして、平成6年の東方沖地震のときに

も津波が。

住民9妻 来たけれども、別にそこまで来たわけではない。ほんの何センチかで。

質問： 東方沖のときもやっぱり避難をされましたか。

住民9妻 東方沖もしました、10月ですね。

質問： 10月です、はい、そうです。

住民9妻 あれは、その当日に結婚式があったんです、向こうで。私は避難するは、お父さんは背広を着て結婚式に行くで、何かちくはぐをやっていたんだ。

質問： そのときに避難をしたのは、やはり十勝沖地震とかチリの地震があったから、それとも、前年の奥尻島の地震があったからですか。

住民9妻 奥尻島がね。

住民10妻 あれね。

質問： 奥尻ですか。

住民9妻 だから漁村センターに避難した。

質問： 漁村センターに、あそこにありますよね。奥尻のやっぱり印象が強かったと、やっぱり地震の後には津波が来ると。

住民10妻 その前まではうちのお父さんが、地震になっても30分は津波が来ないから大丈夫だと言っていたんだよね。

質問： 30分は来ないと。

住民10妻 でも奥尻はもうすぐ来たから。

住民9妻 奥尻は地震の後6分か7分でぱっと来たらしいから、それが頭から離れないの。

住民10妻 すぐ逃げろと。その前までは、地震が来てもまだ30分は津波は来ないから大丈夫だというんだよね。

質問： やはり奥尻の地震、あれは日本海側ではありますけれども、地震の後にはすぐ来るといったのは、やっぱりあの奥尻が一番。

住民9妻 奥尻がやっぱりあるから、意識に思っているね。

住民10妻 だからこの度もすぐ津波と.....

住民9妻 あれだけ大きいから、津波が来ると思った。

質問： ですから、もう皆さんは何もしないでぱっと逃げたよ。

~~~~~

質問： それで、続きになりますけれども、住民10妻さんも車で逃げて8時ごろには戻られて、住民9妻さんもやはり車で逃げて、高台かどこかにいらして。

住民9妻 そうです。

質問： それで、また8時半ごろに戻ってこられたと。この厚岸町は、何かパンフレットというんですかね、この地域の。

住民9妻 何とかマップというやつ？

質問： あれは皆さんのおうちに配られて。

住民9妻 前に来たね。

住民10妻 あるよね。

質問： それは、どうですか、普段見ていらっしやったり、すぐに。

住民9妻 いや、私は本当にはそっちに逃げたらという話もあって、やっぱりこっちに逃げるんだよね。

住民10妻 住民27さんの方から行ってという感じだけれども、やっぱり川があるから、危ないからこっちという感じだけれども、やっぱり。

住民9妻 例えば、ここに逃げなさいという。いつもこっちへ行っている生活があるから、何かこっちへ行きたいの。

質問： この地域の方々は、本当は住民27さんのお宅の階段がありますよね。あそこへ逃げなさいというのが。

住民9妻 だいたい言われてたんだけど。

質問： 言われていた。

住民9妻 こっちはわりと普段行かないでしょう。

質問： そうですね。

住民9妻 何かこっちの方が安心感があるの。

質問： ちょうどここは小学校があって、この商店街というんですか、あの辺がありますけれども、だいたいこの川を渡って商店のあるあたりの方がいつもいらっしやるので、こちらの方へ逃げると。

住民9妻 何か行きやすいという感じで。

質問： それで、住民10さんの場合はFさんのお宅、それで.....

住民9妻 私は山の方で。

質問： 山の方で車の中にいらしたと。皆さん、この近所の方々は指定されたところという場所はどこなんですか。やっぱり住民27さん。

住民9妻 住民27さんのうち。川からこっちは住民27さんに行った方がいいんですよという指定があった。

質問： ここは4班というんですか。

住民9妻 4班というより.....

質問： 川からこちら側の人は。

住民9妻 住民27さんの方に行った方がいいんですよという感じ。

質問： というふうに言われるわけですね。

住民10妻 何だかんだそっちへ行くと決まっはいいないけどね。

住民9妻 十勝沖の昔になったときは、こちら辺が津波が来た場合でも、ここのグランドのそこだと、もう少しそっちへ行っったところ、住民2さんがあるんですね。そこが全然流されなかったの、やっぱり高いから、残って、全然流されなかったからと、こっちへ行っった方がいいんですよという感じ。

質問： やっぱり川のそばというのは危ない。

住民9妻 危ないという。

住民10妻 私たちもそう思うんですけども、やっぱり川を渡ってこよう。

質問： 逃げちゃうということで。距離としてはそんなに、距離は変わらない、やっぱり.....

住民9妻 私は1回役場の調査のときにそんな質問が出て、どんな感想というのを述べたときに、ここに道路が1本あるでしょう、厚岸から来る。この厚岸から来る途中にこっちの方に筑紫恋というところに2~3軒あるところがあるでしょう。だから住民27さんのこの辺からもう1本そこに道路がつないであれば、ここのところが、1回うちが道路下の のかしがったんです、前の地震で。

質問： 東方沖ですか、10月の。

住民9妻 うん。だからあれだけうちがあれて、もし道路が、そこで倒れて道路をふさいだら絶対みんな車で来ているのに、道路が1本しかないから。だからもう1本ここの辺に、道路が1本欲しいなという感じ。そうすればこの沼のふちのこっちにあった厚岸行きの道路とぶつかるから、住民27さんのところから真っすぐ道路がもう1本あれば、大した便利だろうにねと、私は常々そう思っている。

質問： このご近所という、いわゆるこの近くの方ですね、

小学校のこのお向かいの方々というのは、普通は住民27さんの方へ逃げたことを、川から向こうへ逃げなさい、川からこちらの人は住民27さんと言われているんですけども、皆さんは住民27さんの方へ逃げた方もいるんですか。ほとんどやっぱり...

...

住民9妻 だからとにかくこっちなね。

住民10妻 Kさんの向こうから、何か逃げていた。ここからこの2~3軒のところにKさんがあるんですけど、こっちへ逃げたのではないかな。

質問: とにかく、安全なところへ逃げましょうということで、どこに行きなさいという強制はないわけですよね。もう好きなところへ逃げるといふ。

住民9妻 こっちの神社のあそこにも避難所があるんです。

質問: 神社の方ですね。

住民10妻 そこに逃げた方もいるしね。

質問: やっぱり車で逃げた方は多いですか、この辺の方は。

住民9妻 やっぱり車に乗って逃げている。

質問: そうですか。津波が来るということで、海を見に行く人はいますか。海の様子を見に行くという人は。

住民9妻 いや、海を見たいなら山の道路から見ると。

質問: 山の上から見ると。やっぱり津波がすぐ来るといふと怖いからですね。先ほどのお話ですと、昭和27年の十勝沖のときは、30分ぐらいで来たということだったんですけど、奥尻の地震があったので。

住民9妻 奥尻がやっぱり教訓になりました。

質問: 教訓ですね。

住民9妻 だからうちのお父さんは、もう今は、前は地震が来て津波警報が出たぞといえ船を巻きに行ったものですが、みんな、浜に明かりがついて、夜中にみんな船を巻いているよという感じ。

質問: 揚げるとか、縛るとかして。

住民9妻 揚げたとかロープで縛ったりとかして。今は誰もそうやってやらない。

住民10妻 やらないね。

住民9妻 それも奥尻。

質問: 奥尻ですか。

住民9妻 うん。船を見にいったら絶対いいことをしないから、津波が来たら船どころではないと、体一つで逃げようよ。

質問: 奥尻がもしなかったら、やっぱり今回、津波のことは考えたとしても少しゆっくりだった。

住民9妻 ゆっくりだったですね。船を巻いていくかどうか、きっとそうだと思う。

住民10妻 そうやって言われていたんだ、お父さんに。絶対何ともないと、地震が来て30分は津波は来ないから。でも奥尻でああいうふうになったから早く逃げた方がいいと言われて。

住民9妻 やっぱり、前は地震になって津波が来るぞといっても、みんな浜に明かりをつけて、そして船を巻きだすの、みんな。そしてロープで縛ったりとかして、それから逃げていますよ。だけど今は、あの奥尻が本当にいい例であれだっけとすぐ来たもんね。だって6分ぐらいで来たから、ニュースを聞いたから。

質問: やっぱり奥尻は大きかったんですね、皆さんの印象は。あとは、何か地震や津波に関する言い伝えとかことわざとかあるんですか。こういうことがあった

ら津波が来るとか、こういうことがあったら地震が来るとか。

住民10妻 やっぱり地震雲が出ていれば、地震が来るのではないかと思って、そういうあれから結構みんな話し合ったよね。

住民9妻 雲ね。

質問: 雲ですか。それから、津波の場合はやっぱり波が引くというふうに。

住民9妻 いったん潮が引いてから来るというからね。

質問: やっぱりそれは有名で、引いてから津波は来るという。

住民9妻 だから今回だって、..... みんな立って見ていたら、ずっと引いていったって。

質問: そうですか、波が。

住民9妻 うん。

質問: それは津波が来るんじゃないかと。

住民9妻 津波が来るな、潮が引いているな。

質問: そうですか。

住民9妻 前回もそういうのが来た後に波が来た。

質問: ここはそうすると、津波はこの辺に来たんですか。

住民9妻 全然。船の揚げるところまで来ていると。

質問: おうちの方は。

住民9妻 別に何もあれですけど。

質問: そうですか。

住民9妻 台風の波も 曲がる ようで。

質問: そうですか。

住民9妻 本当に、台風の波も

質問: あと何か、先ほど津波の避難をするときに何か持って逃げるということはあるんですか。

住民9妻 私はやっぱりちょっとした貯金通帳とか。

質問: 貯金通帳。

住民10妻 お金とかね。

住民9妻 それに逃げるときは、1つに包んで置いてあるの。

質問: 避難袋。

住民9妻 ナップケット と。そういうものは風呂敷でもって、車に積んで、とっさのときだから、それはいつでも積んであるの。

質問: 住民10妻さんはどうですか、何も持たずに。

住民10妻 そういふときはやっぱりお金とか通帳とかを探して持って行く感じ。

質問: すぐですよ。もうすぐという。

住民9妻 お金と

質問: 今度の地震がありまして、何かこういうことを知らせてほしいとか、こういうことがあったらよかったですか、さっき道路の話が1つありましたけれど、何かありますでしょうか。こういうことをしてほしいとか、こういうことがあったら便利だといかいう話ですね、何かございますでしょうか。

住民10妻 防災無線だとすぐこういうふうになるとかという、すぐにはならないよね、なかったよね。

質問: ならなかったよね。

住民9妻 いる間は全然耳にしていなよね。

住民10妻 そういふのはやっぱり早くね。

質問: なるほど。

住民9妻 無線で叫ばなくてもいいから、異常を知らせるようなサイレンを。

質問: 何でもいから。

住民9妻 ええ。ウーウーでいいでしょう。後はもう逃げな

さいというようにして、そういうのが鳴ればいい、何もそういうのがされてなかったね。

住民10妻 なかったよね。

住民9妻 逃げるまでには何もなかったよね。

質問： 皆さん、車で逃げられて渋滞とかなかったですか、車は。

住民9妻 なかったです。

(後略)

(3)住民12

だいたい地震が起きたの4時50分ぐらいだったと思うんですけど、そのころまでには何をされていたんですか。

住民12妻 朝はもう起きて、ちょうどご飯支度をしようかなと思っていましたよ。

質問： ご飯支度ね。まだご飯を食べるところまで行ってなかった。

住民12妻 いってないです。

質問： なるほど。いろいろ支度をしていて、そうしたら急にグラグラッと。

住民12妻 そうそう、そうしたら止まらないから娘も起こして、これならきっと地震来るねって、津波が来るねと思って、地震が大きかったから。

質問： そうしたらまず、娘さんを起こしたんだけど、起こしたのはやっぱり逃げるということがあったんですね。

住民12妻 そう、逃げるということが頭にありますね。

質問： なるほど。津波のことを思い浮かべたので、娘さんも起こしたよ。特にそんなに大きくなければ、別に。

住民12妻 別に起こさないけどね。やっぱりこの床潭の人は、津波に遭っているから、おっかながりますよ。

質問： そうですか。

住民12妻 ええ。

質問： すると、娘さん以外の人はもう起きて、服も着ていてという形でしたけど、娘さんもすぐ起こして、服着れと。

住民12妻 そうそう、服着れと、もうまかないさせて。

質問： 揺れている間は、どうされていました？ やっぱり固まっていた。

住民12妻 やっぱり物の落ちないようなところにいると、安全なところにいると危ないから。あと止まってから、今度すぐ逃げる用意をしましたよ。

質問： そうですか。そうしたら揺れ始めたときは、皆さん、どこか柱の陰とかですか。

住民12妻 そうそう、危ないところにいたらあれでしたから。

質問： 例えばどういうところに？

住民12妻 私たちはこっちに出てきましたよ、すぐ台所の方に。

質問： 台所の方に。

住民12妻 ええ、ここに出てきましたよ、居間に。

質問： 居間にね。居間にみんなで移った。そのときは、火とか使われていたんですか。

住民12妻 いえ、使われていません。ただ、ガスはすぐ止めました。

質問： ガスはすぐ止めた。じゃあ、ガスもすぐ止めて、揺れている間はちょっと何というか、じっとしてて。

住民12妻 そう。

質問： いったん収まったと思ったら、娘さんを起こして、

もう逃げるよという形で。

住民12妻 そう、防災無線が入りましたから、すぐ。消防署でサイレン鳴ったでしょう。

質問： サイレンね。

住民12妻 ええ。

質問： 防災無線というのは、各戸に1台ありますか？

住民12妻 ええ、全部あります。1軒ずつにありますから、じきにもう無線が入りましたからね。

質問： それか、じゃあ、地震が収まってからすぐぐらいですか、やっぱり。

住民12妻 いえ、すぐでもないですね。6時ごろになってからかな、入りましたよ。

質問： 6時ごろ。結構じゃあ、しばらく立ってから。

住民12妻 すぐではないと思いますよ。

質問： 家にいるときに聞いたんですかね、その地震が起きた後に。

住民12妻 地震が起きた後に、消防が先に鳴ったような気がした。消防が先に車みたいなので。それから、今度、防災無線が6時ごろ入ったと思いますね。

質問： じゃあ、消防団が何か広報車みたいなやつで。

住民12妻 そうそう、回って歩くからね。

質問： 広報車で回っていたと。

住民12妻 ええ、津波警報発令中とかって。

質問： それは地震が起きて、逃げるよっていうふうに準備をしてから、どれぐらいたってます？

住民12妻 どれぐらいだろうね。やっぱり私方、私の実家の方に逃げたんですね、末広の方にね。実家が高いところにありますから。海は見えるけど、高いところにあるから、津波来ないから、そこに逃げたんですね、車でね。

質問： そしたら、あれですか。

住民12妻 5時半ごろにはもう実家の方に行っていましたからね。

質問： なるほど。そうしたら、もう一回整理しますと、娘さんを起こして逃げるよと。揺れが収まってからもうすぐ、支度したらすぐに家を出た。

住民12妻 早々と車に乗って逃げましたよ。

質問： 車に乗ってと。

住民12妻 ええ。

質問： 車に乗ってどこに向かおうって？

住民12妻 幌万別です。

質問： 奥さんの実家ですか。

住民12妻 はい。

質問： 幌万別？

住民12妻 はい。

質問： さっき末広と。

住民12妻 ええ、末広の行く手前にあるんですね、ピリカウタと幌万別ってね。

質問： そうですか。さっきどこだったか、住民29さんというお宅の方までちょっと行ってきたんですけど。

住民12妻 住民29さんですか。

質問： はい、市美さん。

住民12妻 そうしたら、ピリカウタでしょう。

質問： そうですか、いや。

住民12妻 そのちょっとそっちの方に行くと、うちの実家があるんですね。

質問： そうですか。いずれ床潭の外れの方ということですかね。外れというのか、末広の方。

住民1 2妻 そうです、小島と大黒島のすぐ向かいの方ですよ。
質問： そうなんですか。そこに向かおうと。
住民1 2妻 ええ。
質問： そのときは、どこへも寄らずにもう真っすぐそこへ行こうということですね。
住民1 2妻 ええ、行きました。
質問： 分かりました。そのときに、ご近所の様子というのはどんな感じだったんですかね。
住民1 2妻 近所でもたいてい車に乗って、もう走ってましたよ。
質問： そうですか。だいたい皆さん、違わないような時間に逃げていたと。
住民1 2妻 そうですよ。
質問： 例えば、あと何か持っていく物とかというのは。
住民1 2妻 やっぱり着替えとか何かかっていうけど、何もただ貯金通帳ぐらいしか持っていきませんもん、急いでいるから、何も大事なもんしか持っていきませんよ。
質問： もう通帳と。
住民1 2妻 通帳と印鑑とかを一緒にしているから、そのくらいしか持っていきませんよ。
質問： なるほど。お金の関係で
住民1 2妻 あとはそんなに、持っていくといっても、あれですから。
質問： そうしたら、まず家で地震が起きて、逃げる用意をして。その逃げる用意をしているときに、消防団のあれが回っていたということですか。
住民1 2妻 そうですよ。
質問： 例えば役場とかそっちの方の人が来たとか、何かそんな話は。
住民1 2妻 地元の人なんだろうかね、あの子らは地元だろうか。防災無線が早かったらどうか、消団の方が早かったらどうか、はっきりは分からないけどね。
質問： いずれ、逃げる前に聞いたのは、その消防団。
住民1 2妻 そうそう、消防のような気がするんだな。
質問： 防災無線も、もしかしたら聞いたかもしれないと。
住民1 2妻 それから津波警報があれだから、すぐ逃げましたよ。
質問： 分かりました。じゃあ、やっぱり津波の警報が出たよと。
住民1 2妻 そうですね。やっぱり床潭の人はおっかながりますね、平均ね。私方、実家漁師だけでも、昆布採りだけでも、高いところに家がありますから、津波来ても大丈夫なんですね。
質問： 実家の方ね。
住民1 2妻 実家の方は。
質問： そうすると今言った防災無線とか、それから消防団の広報車とかって話が出ましたけど、いわゆるテレビとかラジオとか、そっちの方は。
住民1 2妻 そういふの見ますよ、すぐ。
質問： 見ました？
住民1 2妻 テレビも見ます。
質問： つけました？
住民1 2妻 つけました、すぐテレビは。
質問： 電気は大丈夫でしたか、そのときは。
住民1 2妻 電気は大丈夫でしたよ。
質問： そうですか。じゃあ、すぐテレビをつけたと。その

ときはテレビや何か地震のことは？
住民1 2妻 入りました。
質問： 入りました。それもう逃げる前のときですね。
住民1 2妻 はい。
質問： それで、情報を見るためにつけたのはテレビだけです。
住民1 2妻 そうです。
質問： 分かりました。じゃあ、もう消防団は言ってるし、防災無線は言っているし、テレビはテレビで言っていると。テレビや何か津波の恐れとかってありました？
住民1 2妻 出ましたからね。すぐもうあれしましたよ、逃げる用意しましたよ。
質問： じゃあ、もうそれで真っすぐ車でずっと実家の方に行かれて、実家には何時ごろまでいらしたんですか。
住民1 2妻 実家にはやっぱり9時ころまでいましたね。
質問： 9時ごろ。そうしたら、そこにいればもう安心だということですから、警報が解除されるまではという形だったんですかね。
住民1 2妻 そう、いました、だいたいね。帰ってきてから、今度うちの中を、傷んだ物を片付けたりして、その後はもうだいたい用意していますよ、逃げる用意。
質問： 9時ごろに帰って、家の中を整理して。
住民1 2妻 ええ、うちの中、整理しましたよ、解除になってからやっぱり。お父さんはでも2回ぐらいうちに見にきましたよ、車で。
質問： そうですか。皆さん、実家に連れていって、ご主人だけはちょっと様子を見に来たと。
住民1 2妻 様子を見に来ましたよ。
質問： すみません、そういえば、こちらのお仕事は昆布漁が主だってるんですね。
住民1 2妻 はい、昆布です。
質問： そうですよ。それはやっぱり何かお仕事の関係で心配だったとか、そういうことですかね、家の方も。
住民1 2妻 家の方でないだろうかね、小屋はあれですけど。
質問： これのほかの、十勝の方とかでいろいろ調査をやって聞いたんですけど、十勝の方だと漁師さんが主に沖で魚を捕ったりする方が多いらしくて、津波が来ると陸に揚げられちゃうから、沖に船を持っていくって人がいるらしいんですけど。
住民1 2妻 床潭でも大きい船の人はやっぱり沖へ船出しましたよ。うちのは船こう巻いているからあれだけど。
質問： 巻き上げて。
住民1 2妻 岩壁にかけている人は沖に出しましたよ。
質問： 岩壁につけている人はね。
住民1 2妻 ええ。
質問： 巻き上げというのは、陸に揚げているということですよ。
住民1 2妻 そうそう、そこに揚げているのはそのままでしたけど、かけている人はやっぱり沖に出しましたよ、すぐそこら辺までに。
質問： 陸に揚げている船は別にいいっていうのは。
住民1 2妻 いいっていうより、やっぱり巻いているから安心というのもある、揚がってもそんなに流されることはないと思います、っていうのがあってないだろうか。
質問： そうしたら、もともと陸に揚がっているの、例え

ば津波が上がってきても、ちょっと浮いて少しだけ動くぐらいの話なんです。

住民1 2妻 そうそう、大丈夫だと思いますよ。波よけみんなつくったからね。離岸堤って、前にね。前はなかったんですけど、離岸堤っていう、波よけをつくったから。あれがないと、きっと結構上がってくると思いますよ。波よけがつくったから、そんなに上がってこれないんですよ。

質問： 上がってきても、そんなに船が流されることはない。

住民1 2妻 ないと思います。

質問： なるほどね。

住民1 2妻 それからは、やっぱりもうみんなに枕元に電池とかは用意されていますよ。電池と逃げる用意だけはしておきなさいということ、それから、みんなさせてます。

質問： それは家族の人全員ということですね。

住民1 2妻 ええ、家族全員。もう電池と逃げる用意だけはしておきなさいということ。

質問： 電池というのは、あの懐中電灯ですね。

住民1 2妻 懐中電灯。枕元に置いておきなさいと言って。

質問： あと逃げる用意というのはどんなものですか。

住民1 2妻 やっぱり1回ちょっと着る、着替えぐらいね。

質問： 着替えね。

住民1 2妻 着替えとか何か、タオルとかジャンパー、冬は枕元に置いておきなさいと言っています、用意していますよ。

質問： そうすると奥さんの方は家の方に戻ってきたのは9時ぐらいだったということですけど、そのときはもう結構、地震のときもそうですけど、また倒れたり落ちてきたものとかというのはありましたか？

住民1 2妻 落ちてきたというのは、そうだね。私たちのたんすの部屋のガラスが割れたくらいで、そんなにでもなかったですよ。

質問： たんすのガラス？

住民1 2妻 たんすがちょっと1つ倒れただけで、あとそんなでもないですよ。

質問： そうですか。

住民1 2妻 はい。

質問： あとでも食器棚の食器が落ちてきたとか。

住民1 2妻 何ともないです、ここは。今は何ともないです。ただ、私たちの部屋だけがひどかったんですよ。たんすの物がみんな引き出ちゃって、がばっと真ん中のたんす倒れただけでね。あと1つガラス入ってるのがガラス割ただけで、冷蔵庫のところも何ともないです。

質問： そうですか。例えばその鉢植えが落ちたとか、そんなことも？

住民1 2妻 ないです、何ともなかったです。

質問： では、ご主人が2回ぐらい様子を見に行ったときも、特に変わったこともないですかね。

住民1 2妻 ないです。

質問： はい、分かりました。じゃあ、だいたいそういう形で、もう9時に帰ってきた後は、ずっとこちらにおられたんですか。

住民1 2妻 いました。うちの中を片付けてね。

質問： もう一つちょっと我々のこの調査でいろいろ知りたいのに、やっぱりさっき言われた大きいから津波が来るんじゃないかという頭が、すぐ出てくるん

よね。

住民1 2妻 そうですね、地震が来るとね。

質問： それは過去の経験とか、親とか親せきから聞いたとか、いろいろあると思うんですけど、どういってやっぱり一番。

住民1 2妻 私はやっぱり実家の方で見えていますからね、分かりますよ。

質問： 昔の十勝沖が何かですか。

住民1 2妻 そうですね、私生まれたの27年ですから、地震が来た年に生まれてますから。その後も私が小学校のころ、実家で見えますから分かります。

質問： 小学校のころって、何年ですか。

住民1 2妻 末広小学校のころだよ。

質問： 末広小学校のころ。

住民1 2妻 あれ、一番……

質問： ちょっとすみません、いいですか、足。

住民1 2妻 大きいのは27年ぐらいに来たんですか、十勝沖地震というのは。

質問： 昔の十勝沖は、昭和27年に来たんですね。

住民1 2妻 そうでしょう。

質問： その後といたら、チリ津波とか何かそういうのが、あと釧路沖とか。

住民1 2妻 私なんか生まれたところに津波来たっていうから、27年に生まれているから、津波来た年に生まれてるんでね。その後に、うちの実家から見えますよ、浜が高いから、浜に座って、津波。

質問： 小学校何年ごろでしたか。

住民1 2妻 何年だろう？ やっぱり2回くらい見えますから津波って分かります。

質問： 小学校のころに2回ぐらい。

住民1 2妻 ええ、見たよ。だから、津波って分かりますよ。

質問： ちょうどよく見えるところですね。

住民1 2妻 ええ、見えるんです、うちは高いから。浜が高いから、もう見えるからね、津波分かりますよ。

質問： それは昼間の話ですか、そのときは。

住民1 2妻 夕方です。

質問： 夕方ね。それなら見えますもんね。

住民1 2妻 ええ。

質問： 学校終わった後に、家に帰ってきてから。

住民1 2妻 学校行く前でしたね。

質問： 前？

住民1 2妻 学校終わった後ですね。

質問： 終わった後ね。

住民1 2妻 学校から帰ってきて、みんなあれしてましたから。

質問： 小学校は？

住民1 2妻 末広に行きましたから。

質問： 末広にも小学校があるんですね。

住民1 2妻 あったんです、あります。今はもう厚岸にいったけど、人数が少ないから。

質問： 末広の方で見たと。

住民1 2妻 はい。今回の津波も朝方でしたから見ましたよ。

質問： 見ました？

住民1 2妻 ええ、見ましたよ。

質問： 実家の方で？

住民1 2妻 はい。もうガラッと岩が出ますから。

質問： 引く。

住民1 2妻 引いていくときに岩がバラッと出るでしょ

う。それでまた、ぐるぐると潮を巻いているから、込んでくると今度ぐるぐる、岩が全部なくなっちゃうから、見ましたよ。

質問： 潮が巻くってというのは、

住民1 2妻 何か渦巻くようになって、だんだんだんだんあれして波が増えてくるんですね。岩が全部もうなくなっちゃうんです。波全部あれして見ましたよ。うちの子供たち初めて見るからね、あらーって言うてるよ。私の子供は初めて見るから。

質問： じゃあ、結構実際、地震もそうですけど、津波も見られてるわけですね。

住民1 2妻 そうですよ、ええ。

質問： ちょうどさっき住民2 7さんのところに行ったときに、その27年に津波になって、今の床潭小学校の脇に何か小さい川というのか、堰みたいのが。

住民1 2妻 沼みたいのあったんでしょう。

質問： 沼から海につながっているのがあるんですね。

住民1 2妻 つながっているんですよ、川がずっと。

質問： それで、そこがどうも、そこから上がってきて、結構町やられたって。

住民1 2妻 ここみんな流されたんでしょう。ここのうちの辺あたりきつと、そう思いますよ。だから、ここの人は地震来るとおっかながりますよ。

質問： やっぱ。地震が来ると、あ、これ津波来るかもしれないと、皆さんも。

住民1 2妻 今、ここすっかり川もう縁あれしたけど、きつと沼からずっとつながっているから、川、そこのところね。だから、きつと川伝いにここ津波がずっと上がったんでしょう、そこの沼に、言ってたでしょう。

質問： そうらしいですね。

住民1 2妻 住民2 7さん方は床潭にいたからね。

質問： こちらに嫁がれてきたということですけども、ご主人はじゃあ、もともと。

住民1 2妻 ええ、ここにいましたからね。

質問： じゃあ、ご主人でも、お年を考えると小さいころでしたかね。

住民1 2妻 お父さん、22年生まれだから、もう55~56なってますからね。

質問： じゃあ、27年だから5歳ぐらいですかね。

住民1 2妻 ええ。

質問： 結構、記憶あるかもしれないですね。

住民1 2妻 あると思いますけどね。

質問： ご主人の話を聞ければ、なおよかったけど、今は出稼ぎですか。

住民1 2妻 ええ、静岡の方に行っているんです。

質問： 静岡というのは、さっきご長男が？

住民1 2妻 息子さんと同じ方に働きに行っているんです。

質問： そうなんですか。

住民1 2妻 はい。

質問： 分かりました、やっぱりそうですね。例えば、何ですか、東方沖地震とかそれから釧路沖地震とかという、結構この辺多いんですけども、そういうときのもだいたいこちらの方におられて。

住民1 2妻 結婚してから今30年ですからね。47年ぐらいにも来たでしょう、1回。

質問： 何回か来てますよね。

住民1 2妻 47年ぐらいに来たでしょう、地震ね。私、結

婚した年に来たんですよ。あのときも結構大きかったですよね。

質問： 大きかったですよね。

住民1 2妻 あのときも津波が来ましたよね。

質問： そのときもあれですか、やっぱり。

住民1 2妻 結婚して間もないときだから、あのときね。ずいぶん床潭の人はおっかながるなと思ったんですよ。実家は高いところにあるからね。すぐ姉さん逃げなさいって言うから、何こんなに慌ててるのかなと思ったけど。ここの近所の人に、ここ昔流されたんだよって言うから、ああ、そうかと思って、そうしたから地震っておっかながるんだなって、私は思いましたよ、ここの人は。

質問： なるほどね。逆にこっちに来てから、やっぱり逃げないとだめですね。

住民1 2妻 そうですね。

質問： やっぱり奥尻とかでも昔ありましたね、何年か前にね。

住民1 2妻 そうです、そうです。

質問： ああいうことがやっぱり結構記憶残ってるんですかね。

住民1 2妻 テレビ見るとおっかないね。こっちからみたらずっと強いからね。後で電信柱の線あたりまで上がったから、みんなもうすっかりなくなっちゃったでしょう。

質問： そうですね。

住民1 2妻 あっちの方はね。それから見たら、こっちはそうでもないからさ。

質問： その実家で子供のころ見た津波というのは、ああ、海がやっぱり高くなるんだなぐらいの話でしかなかったけど。

住民1 2妻 そう思っていましたよ、小さいころはね。

質問： やっぱりこっちに来たら、やっぱり本当にそれが来るから大変だという話で。

住民1 2妻 やっぱりここ1回されているから、おっかないんだなと思いますよ、ここの人は。

質問： なるほどね。皆さん、起きるの早いでもんね、みんな朝ね。

住民1 2妻 そうですね、今でも冬でも、平均は私方は5時半ころにやっぱり起きますよ。5時半か6時ころには起きますね。

質問： 何か5時ぐらいにはもう、住民2 7さんのお宅も起きるとか言っていましたね。

住民1 2妻 起きるでしょう。平均やっぱり5時か6時ころに起きますよ。

質問： 普通の家だったら、6時ぐらいに起きるのもあるから。

住民1 2妻 浜の人は今、冬でも何もしてなくても5時か6時ってば起きるね。

質問： なるほどね。やっぱりすぐ皆さんパパパッと逃げていったということですよ。

住民1 2妻 住民2 7さんはね、すぐ裏の方に逃げる、避難ところがあるから。

質問： そうですね、ちゃんと階段もつくって。

住民1 2妻 階段つくって避難所あるんですよ。

質問： それは、今もちょっと住民2 7さんにも聞いて、いくつか避難場所ということ。

住民1 2妻 ええ、こことあともう1つそっちの方にもあり

ますよ。

質問： 神社の方とかね。

住民 1 2 妻 神社の方にも。私方はこっちは神社の方に本当は逃げるんだけど、車止めるところもないからね。

質問： なるほどね。やっぱり歩いて逃げるといよりも、車で行くっていうことを考えてる方が。

住民 1 2 妻 歩いて逃げる人もいますよ、その床屋の辺に。床屋あったでしょう、すぐ来るところに、角に。

質問： 角っこ。

住民 1 2 妻 床潭から真っすぐ来るところ、その床屋の辺にみんな避難している人もいましたよ。

質問： そうですか。でも、あの辺って高くないですよ。

住民 1 2 妻 高くないよね。あの辺にみんな避難してた人もいましたよ。

質問： じゃあ、車というのは、やっぱり速く逃げるといこと。

住民 1 2 妻 そうだね。

質問： 住民 2 7 さんの方にも 1 回人が集まってきて、それから上に上がってきたということだね。

住民 1 2 妻 ちょうどあそこね。住民 2 7 さんのうちの裏の方に、階段つくって避難所つくりましたからね。

質問： そちらに行くよりは実家に行った方がいいということですか。

住民 1 2 妻 ですね、私方はね。

質問： そうですか、分かりました。被害もそんなになくてよかったと。

住民 1 2 妻 ええ、なかったですね、うちはおかげさまで。

質問： そうでしたら、外見とか壁とかそういうところは。

住民 1 2 妻 何ともなかったです。

質問： 何ともないですか。ご近所なんかはどんな話でした？

住民 1 2 妻 なんか壁とか傷んだ人もいってましたけど、そうでもないですね、うち方はね、何ともなかったですね。

質問： じゃあ、比較的この辺は地震のあれとしても、中は分からないけども、そんな大きな被害ではないということですね。

住民 1 2 妻 なかったです。

質問： やっぱり皆さんも津波の話を考えて、ぱっと逃げたということですね。

住民 1 2 妻 そうですね。

(後略)

(4) 住民 15

質問： その訓練も昭和 27 年の十勝沖地震の以後ですか。

住民 15 その地震の教訓があるものだから。この防災無線を付けてから何年たつかな。

住民 15 妻 何年たつかね。

住民 15 ちょっと役場で調べた方がいいけれども、6 ~ 7 年たつんじゃないかな。防災無線を。

住民 15 妻 訓練は、10 年前のあれ、1 月 14 日に、10 年前の。

住民 15 東方沖地震か。

住民 15 妻 あのときから訓練をやっているんじゃないかい。

質問： 東方沖から。

住民 15 うん。北海道東方沖地震があったね、あのころからやっている。

住民 15 妻 平成何年だっけ。

住民 15 だから、結局津波の被害 せっかく来たんだから、ちょっと。津波には敏感だよ、この人たちは。この間は津波は来なかったけど。

住民 15 妻 この間は引き波だけ、引いていって。

質問： 引き波はありましたか。

住民 15 妻 ありました、この間の地震は。

質問： どれくらいありましたか。結構、この辺、何メートルか引きましたか。

住民 15 妻 何メートルくらいだったかね。だから、私なんかは、ここはそっちに逃げるんですよ、ここは、こうやってね。入り口の床屋さんがあるでしょう。あの入り口に、床潭に入る。あそこのところに逃げて、それから神社の山に上がるんです。あそこが非難場所になっているんです。

質問： 向こうに行ってから神社に上るんですか。

住民 15 妻 ええ、神社のところに入るんです。あそこから直っすぐ、あの道路を。私なんかの足でも、地震が来たとき逃げたら 3 ~ 4 分であそこまで行くから。

質問： 3 ~ 4 分。

住民 15 あのころで、七十何戸だか床下浸水とかいろいろなこと、実際に倒壊して完全にしたのは 11 軒だったんでね。いや、今の話だけど、昔の話になっちゃったけど。そういうことで、ここの人は真剣なんだわ。これは、昭和 27 年の 3 月 4 日だから。これは、当時の写真だ、これ、ずっとある。

質問： 貴重な資料ですね。

住民 15 妻 はい(笑)。

質問： ひどい。

住民 15 だからそのころはうちの母さんはまだ何も、昭和 27 年だから 25 歳ぐらいのときか。

住民 15 妻 27 年だから...

住民 15 26 歳ぐらいか。僕は 28 歳のときだった。そのときは僕はちょうどうちにいなかったんだけど、向かいの今の シゲチョウ の方にちょっと用事があったとき。

質問： そのころから住民 15 さんたちはここに住まわられていたんですか。

住民 15 そう。

質問： お 2 人とも生まれてからずっとここに住まわられて。

住民 15 妻 はい、生まれてずっとからです。

住民 15 厚岸生まれだから。当時の被害の状況を写真に撮ったので、また複製しておいたんだ。これはどの辺だろう。ずっと見て。これはうちだな、きっと。これ、草。

住民 15 妻 そうだ、そうだ。これ、流されたところね。

住民 15 当時は馬がいたから、だからこれは馬小屋の屋根だけど、波がバラバラといったから屋根の方だけちょうど、下に馬がいてその上に草を置いてあるの。だからこれは上なのさ。

質問： 2 階建てになっているんですね。

住民 15 そう、そう。これは昆布でしょう。

質問： はい。

住民 15 これはずっと向こうの方の、神社からだいぶ向こうへ入ったところの、あそこは低いところをちょうど山にぶつけて、こうぐっと巻いて出たのね。そのときの、これは倉庫が壊れたから、倉庫の中にあつた昆布なんだ、これ。

質問： さっきお伺いした話だと、ここの川を上がってここ

ら辺がひどかったと聞いたんですけれども。

住民 15 そこら辺ね。それと.....

住民 15 妻 そっちの神社の下の方がね。

質問： こっちの方もあったんですか。

住民 15 妻 こっちの方のところ。

住民 15 今は港ができていけど、そのころはまだ港ができていないから。

住民 15 妻 とにかくうちのところ、ここら辺が一番いったんじゃないの。

住民 15 これ、佐藤隆助があるでしょう。この辺からこういったのさ。

質問： そうですか。

住民 15 うん、この辺。そこら辺も。住民 27 君は、今回の地震のことで聞きなさいと言ったんでしょう？

質問： はい、そうです。

住民 15 俺は余分なことを言っちゃったけど。

質問： いや、いや。

住民 15 僕は、そういう前の.....

住民 15 妻 いきさつがあるから。

住民 15 恐怖が頭に染み込んでいっているから、だから地震には即対応して避難しちゃうね。これ、入り口に床屋さんがあるでしょう。あそこはうちの親せきなんだけど、あれも住民 15 というんだけど。あそこまで逃げるのさ。あと、ここは神社のすぐそこと、それからこっちの方は高島さんの山の上に避難場所をつくってある。

質問： 先ほど見てきました。

住民 15 そこにみんな。案外だから真剣だよ、防災訓練なんかについては。

住民 15 妻 熱心だよ。防災訓練をやるといってもちょうど忙しい時期で、みんな昆布を乾している時期だから、私らは暇だから。

質問： 何月ごろですか。9月ですか、やっぱり。

住民 15 妻 その時期にやっているよね、何かね。

質問： ということは、7月から10月.....

住民 15 妻 9月だね。9月の何日か防災の日があるんですよ。

質問： 1日ですね。

住民 15 妻 そのころにやって、学校の生徒と部落の人が逃げる。私らは暇だから逃げるけど、浜の人なら訓練だと思っているから。

住民 15 津波に遭ったのはその十勝沖地震だけさ。それから、霧多布で昭和 35 年にチリ津波の災害があったでしょう。あれは霧多布だけなんです。

質問： こう流れて行ったんですよ、向こうの方へ。

住民 15 だからここは被害はなかった。

住民 15 妻 被害はね。津波の引き潮はあったけど。

住民 15 それで霧多布は、その十勝沖地震とチリ津波とで2回でもって、もう大変だということであそこに防潮堤を造った。35年の津波のすぐ後に防潮堤を造った。だから霧多布は2回大きな被害に遭っているんだね。

質問： だけど、厚岸町の中でもやっぱりここは十勝沖の被害に遭われているので。

住民 15 一番大きい、被害の大きかったのはここです。

住民 15 妻 だけど、もう昭和 27 年ころなら忘れられているものね。1回、札幌から北大の先生が来てセンターで話があったんですよ。私らは確か10人ぐらい集ま

ったかな、津波に遭った人が。だけど昭和 27 年のこれは全然、この先生たちにも忘れられているんだからね。

住民 15 そうね、やっぱり。

質問： 最初、10月に来たときに厚岸町の役場に行ったときに、ここの床潭のところを聞かれたらいいんじゃないかという話をされていて。それで今回、住民 27 さんが今自治会長さんなので。

住民 15 妻 自治会長さんですからね。

質問： 住民 27 さんをご紹介いただいて、お話をさせていただいているんですけれども。

住民 15 これは昆布だね。これはちょうどうちのだ、これ。当時、昭和 27 年まで荷馬車で運送をやっていたから。うちの孫じいさんの代から運送屋さんだから。

住民 15 妻 持っているでしょう。ほら、これはうちのところだもの、持っているでしょう、これ。

住民 15 前の写真だから。この写真から撮ったんだ。この昭和 27 年の津波があったときに、当時、馬で資材を運んでいたのでは遅いから、国鉄でそのころはトラックの輸送をやっていたんですよ、国鉄で、町営自動車 が。それで運んだんです。

そして、やっぱり昭和 27 年にこういう災害という場合に、もう今はそういう荷馬車でのんびりものを運んでいる時代ではないなという話から、それでうちがトラック事業をやったんです。それは今建設の名刺だけれども、昭和 27 年に今度はトラック事業をやって、そして今の真栄町に 札幌ドラッグ があるでしょう。薬という大きな看板を掛けた。役場庁舎からちょっとこっへ来たところ。気が付かないかな。

質問： すみません、気付きましたでした。

住民 15 大橋のちょっと 200 メーターぐらい手前です、役場から来て。

質問： 役場の方.....

住民 15 役場から来て、郵便局があるでしょう。あれからちょっと来たところに、薬という大きな看板が掛かっているでしょう。あの横にある事務所がうちの事務所だから。

質問： そうなんですか。すみません、気付きましたでした。じゃあ、やっぱり今回の地震のときも、起きたらもうすぐにあっちの方に逃げられたんですか。

住民 15 妻 そう。うちなんかみんなワット、こんなの。戸を開けていたけど、何も片付けなくて早く逃げたんです。

住民 15 これは、当時昭和 27 年ごろからトラック事業をやっていたんです。昔は陸上は荷馬車で運んで海上は、はしけとって、今のミハラ組さんのあたりは昔は船でもって、この末広とか センボウ とかあいう、あんまり交通の便の悪いところは全部海上でもって輸送した。このちょうど昭和 25 年かい、朝鮮動乱は。

質問： はい。

住民 15 それから今度は軍需特需でもって日本の経済がきっかけをつくったでしょう、朝鮮動乱で。そのころに今度は朝鮮も取り引きをしたし、それで今度は僕が車屋をやると言い出した。そして、おやじはお前たちがやると言うんだからいいんじゃないかというので、それでトラックをやりました。それがとうとう貨物の始まりになり、とうとう建設も。建設を

やってからもう二十何年たつけど。トラックをやってからもう50年たつ。

質問： すごいですね。

住民 15 たまたま、事務所が向こうでなぜここにいるかという、僕は昭和50年から議会に出たものだから。それで、ここの連中が、お前、向こうに行ったら困ると、それでもってここにいるんです。それで、昭和47年に大橋が架かって、47年からだから、事務所には車で10分ぐらいで行っちゃうから、だからずっとここにいる。だから子供たちとか兄弟は全部向こうにいる。床潭に住んでいるのは、僕とうちの親せきだけです。今は商売を……

質問： 今、ここにはお2人で住まわれているんですか。

住民 15 そう、そう、2人だけです。このでかいうちに2人しかいない。子供たちはみんな成人してみんな出ていった（笑）。

質問： うらやましい限りです、本当に。

住民 15 妻 地震が来るから、ここにはもう子供たちも孫たちも嫌だって（笑）。

住民 15 だからこの間の地震では、うちが記録に残しているのは何も無い、災害も何も無いから。

住民 15 妻 こういうようなのが壊れるだけだね。

質問： どれぐらい壊れましたか。

住民 15 妻 ぎっしり入っていた（笑）。

住民 15 やっぱり戸棚の中のもの。うちはこれが引き戸になっているでしょう。だからガッシャンと壊れても、ガラスに寄り掛かって、ガラスが1枚だけ割れたのかな。

住民 15 妻 全部割れて残ったのはこれだけ。

住民 15 こちら辺なんかみんなガラスで、格好のいいコップほど薄いんだよ。

住民 15 妻 割れる。

住民 15 みんなそんなのはいかれちゃったけど。

住民 15 妻 このレンジがここまで飛んできて、これ。あのレンジがここまで飛んできて、これ、ここに穴が開いているけれど。

質問： じゃあ、家電が飛んだんですね。

住民 15 だから瀬戸物とガラス類は少し傷んだけど、あと家具類はそんなに傷んでいない。

質問： 瀬戸物と少しの家具が落ちたぐらいだということですね。

住民 15 妻 そうだと思う、うちあたりはね。ただこちら辺は一番ひどいんじゃないの、その真ん中辺のおうちは。川伝いのうちは。

住民 15 そうだね。やっぱり地盤がそこは湿地帯のそばだから揺れるのかな。保育所、研修センターはかなり傷んだ。

住民 15 妻 保育所とあそこら辺のうちね、ひどかったです。

住民 15 研修センターもひどく傷んだんですよ。今研修センターはもう漁村研修センターというんだけど、それはあまりひどくなかったから修理をして今使っているよ。保育所は今発注したばかり。

住民 15 妻 まだやっていないです。

質問： そうなんですか。

住民 15 災害の査定を受けて発注したばかりだから、3月いっぱいぐらいはかかるでしょう。

質問： だいぶ崩れたりしたんですか。

住民 15 妻 何かすごく傷んでいます。

住民 15 2,300万円くらいの見積もりだったけど、それより安い落札はされているけどね。

質問： 地盤が悪かった。そうですね、沼ですものね。

住民 15 地盤は沼の湿地だからね、やっぱり地盤は弱いね。この家は下は砂地になっているね。だからこの辺は場所がいいけど、向こうはやっぱり沼のふちだから地盤が緩いんだね。振動が激しいんだね。あそこでも1軒、住宅の壁が落ちたものな。

質問： へえ。砂地は地盤がいいといいますがものね、砂地のところは。

住民 15 妻 こちら辺だって結構、中が亀裂が入ったり、この大きいうちなんてすごかったんだよ。そこね、亀裂が入って。

質問： この、食器が落ちたとか小物が落ちた程度で、あとは全然そんな。

住民 15 妻 程度なの。

住民 15 うちは何も傷んでいないよ。もっとも僕のうちは頑丈にできているから、基礎がきちんとしているから。

住民 15 妻 みんな、今建てる人は今はやりのあれでやってみよう。

質問： 組み立てみたいな感じの。

住民 15 妻 そうだ、そうだ。結構あんなのは傷んでいる。

質問： そのときはお2人も。

住民 15 妻 夜だったから、それで地震が来たら、もうまかなうのが早いんだから、すぐ逃げて。

住民 15 明け方でなかったかい。

質問： もう起きていらしたんですか。明け方だと思う、4時、5時ぐらい。

質問： 4時ぐらいですね。

住民 15 妻 夜、朝でしょう。

住民 15 そうしたら明け方だというの。

質問： ああ、夜です。

住民 15 妻 すぐ逃げました。

質問： 寝ていられたんですね。

住民 15 妻 そうです。

住民 15 寝ていたけど、すぐ起きて。

質問： すぐ起きて、もう何もせず。

住民 15 妻 何も。こんなのが散らかっているけど、そのまま（笑）。

住民 15 地震のときに、あれを持っていく、これを持っていくとやってもだめなの。とにかく体一つでさっと逃げるといこと。あなた方は調べれば分かるけど、奥尻であれだけ被害が大きいということは、なまじか車に荷物を積んだり、何なりして逃げようとして家が全滅しているんだたでしょう。体一つでぱっと逃げた人は助かっている。だから、地震が来たらすぐ津波という、そうしたら体一つで水から高いところへ逃げるといこと、避難をするといことさ、それが一番だ。なまじかものを持っていくといつても。

住民 15 妻 私らが逃げる時にはもう誰もこちら辺にはいないですから。早くて、早くて、この浜の人たち。

質問： 周辺の家も早かったんですか。

住民 15 妻 うん早い。私たちが一番遅い方です、あそこへ行ったのは、もうみんなあそこにはいないんだもの、どこかへ車で行ってしまっ。

質問： 本当ですか。

住民 15 妻 その、うちの向かいのそっちの方の人なんて、

コンクリイ まで、あっちの方まで逃げて行って、車で(笑)

住民 15 ここも、そこから神社の下にずっと、町の方に向かって道路を今改良工事をやっている。あの道路に上上がったなら大丈夫です。

住民 15 妻 神社のそこまで上がったらね。

住民 15 これの 小坂 にちょっと上がったから。

住民 15 妻 上がったらいいと思うんだけど、車だからみんな わけてしまって (笑) 今工事をやっていたでしょう、あそこへ逃げるんだ、みんな、あの高いところへ。車はどこへでも上に行くから。うちあたりだけだ、どこかそこにおいて、そこに上がっているのは(笑)

質問: もうテレビとかもつけなくて、そのままダーっと。

住民 15 妻 いや、地震が来て起きたらすぐテレビを見ます。やっぱり状況を見てね。

住民 15 それと、今防災無線は全戸に付いているからね、全部のうちにある。

住民 15 妻 無線が入るから。テレビは何度ありましたかとすぐに見ます。

住民 15 テレビの方はすぐ出るよ、津波の心配があるとかないとかすぐ出る。

質問: じゃあ、まず起きられて、テレビをつけて。

住民 15 妻 それからやっぱり厚いものを着て。

質問: そうしているうちに防災無線が鳴ったぐらいの感じですか。

住民 15 妻 鳴ったり何だりね。

住民 15 すぐ逃げる、避難所へ。

質問: じゃあ、避難をされたのは起きてからどれぐらいたれてからですか。

住民 15 やっぱり20分ぐらい。

住民 15 妻 20分や30分たつしね。

住民 15 30分はかからないよ。

住民 15 妻 かからない。まかんなったり、だったりやっぱり厚いものを着たり、何か。

住民 15 ものが大切ということはないけれども、やっぱり外へ出ると寒いからね。身支度はきちんとして。

質問: じゃあ、取りあえず着て出たという感じ。

住民 15 そう、そう。ものは持って逃げない。

住民 15 妻 逃げないね、そんなのは。

住民 15 ものを持って逃げようとする、命を落とすから(笑) それをやったらだめだね。

質問: じゃあ、やっぱりまず地震が起きたら、もうすぐ津波というふう考えるのは昔からですか。

住民 15 そう、そう。

住民 15 妻 津波の震度にもよるよね。

住民 15 震度にもよるけどもさ。やっぱり震度4以上になったら、津波というのは頭にあるね。

住民 15 妻 津波という頭はあるわね。

質問: 4度以上。

住民 15 2度や3度ぐらいなら津波は来ない、震源地にもあれだけでもね。4度以上、5度、6度なんていうのはやっぱり津波はいつも想定していないといけないうね。そして、やっぱりこの沖をずっと十勝から根室、道東海域というのは地震地帯というふうにかからいわれているからね。

質問: そうですね。行かれたときには、町役場の方とか来られていましたか。

住民 15 あのときは来てないけれども、防災無線で入っているし。

住民 15 妻 来ていないね。

質問: 消防団の方とかはいらっしゃいましたか。

住民 15 妻 消防団は、いや、そのときは来なかったね。

質問: じゃあ、もうこちら辺の住民の方だけが。

住民 15 妻 だけで。

住民 15 そう、そう。とにかく1回ひどい目に遭っているから、もう真剣だ(笑) ぱっと逃げちゃうから。1回経験していないと、やっぱりどうしても横着になるんだよね。ところが1回そういう恐ろしい目に遭っているから。

質問: そういう経験をされていない若い方とかも。

住民 15 やっぱり横着だね。

質問: そうですか。やっぱり意識の差というのはあるんですね。

住民 15 やっぱりここはそういう津波のあったところだからね。

住民 15 妻 地震とかあれば、うちの娘が一番先に釧路から電話が入るものね、どうしたと。旭川の娘だったり、真栄の息子は見に来るけど(笑)

質問: 近くに住まわれているんですか。

住民 15 妻 うん。真栄町。

住民 15 真栄町の方にいるから。

住民 15 妻 釧路にもいるからね。おっかないのを知っているから、すぐ電話をよこす。

質問: この日もすぐに電話がありましたか。

住民 15 妻 ありました。朝ね。

住民 15 そして、地震があつてすぐ電話がかかってくるんだ。

住民 15 妻 すぐなら来るけど、それ以後になつたらかかって来ない。

住民 15 今度はもう来ない。ということは、電話局でも調整をしているんじゃないかい、規制を。

質問: 電話の規制を。

住民 15 妻 一斉にだめさ。

住民 15 調整をしているんだ。だから今度はかかりづらいうんだ。

質問: じゃあ、避難されてからどれぐらいいらっやったんですか、そっちの上の神社の方には。

住民 15 妻 逃げていってからかい?

住民 15 やっぱり3時間も4時間もいたね。

質問: 本当ですか。

住民 15 妻 うん。

住民 15 解除になるまで帰ってこない。

質問: それは寒かったでしょう。

住民 15 妻 いや、いや。親せきのうちに入って。

住民 15 親せきのうちがあるから、床潭の入り口の床屋さんがあるから。あそこの玄関口にいたから。あそこからすぐ山が目の前にあるでしょう、山が。

住民 15 妻 山に上がるにいいでしょう。あそこのうちも、逃げていっていないの。あそこのうちも、床屋さんもひどかったの。だけどみんな逃げていっているけど、私らはもうそれ以上行けられないから。

住民 15 床屋の中のこういう理容器具なんかはみんながしゃがしゃがになっていた、パーッとそこら中。

住民 15 妻 寒くなったしもう大丈夫だと思っても、やっぱり2時間や3時間はいるよね、そこにね。

住民 15 やっぱり警報解除になるまでいた。
住民 15 妻 それから片付けです。
質問： 解除まで。
住民 15 妻 電気は止まったのか、あのときね。ご飯を炊けないで、今度は。
質問： その床屋の方は別のところに行かれたんですか。
住民 15 妻 そうだ、そうだ。どこかへ逃げていったんだ、それも。
住民 15 何もあの坂の上まで逃げて。
住民 15 妻 だからあそこにいればどっちを向いてもいいんだけど。
住民 15 あれはすぐ山を上がっていけるんだ。ここはわりとすぐ近くに山があるから、そこへ逃げる。
住民 15 妻 私らはこの川でもなければ、そんなに学校は避難所になっているんです、本当のことを言えば。その裏の学校。でも学校にいられないわね、やっぱりそっちへ逃げた方がいいものね。
住民 15 今はRCの建物だから。だからちょっとやそっとの津波ぐらいでは学校は倒壊しない。
住民 15 妻 学校はいいんだけどね、やっぱり学校へ逃げるよりそっちへ逃げる。
住民 15 昔のこのころは木造だもの、十勝沖地震のころは全部木造だから。
質問： 鉄筋だと避難ビルになりますからね。
住民 15 そう、そう。うちは、前のうちのときはこの上のはりのあたりまで波が来て、バラバラとあっという間にうちがつぶれちゃったから。
質問： ご近所の方とは、その逃げるときというのは声を掛けられたりしますか。誰とも会わないで逃げる。
住民 15 妻 みんなだね。
住民 15 一緒に逃げましょうなんて、そんなことは言ってもらえない、一斉にパーッと行っちゃう。
住民 15 妻 ただ、向かいのうちの「お父さん」と呼んでいるのが聞こえたようだったけど、それ以後はてんでみんな車で逃げるから、今。
住民 15 だからあれから隣なんかは地震が来たとなったら、必ず車のエンジンをかけているよ。
質問： 本当ですか。
住民 15 うん。
住民 15 妻 隣のうちは、あれから車はちゃんと道路の方に、白い車が見えないかな。ああいうふうにして、ずっと逃げるようにもうあっちに向けて止めてあるよ。このお姉ちゃんは（笑）。
質問： すごいですね。じゃあ、きっかけも迷いもなくもうずっと逃げたわけですね。
住民 15 妻 そうだな、この人たちは。
住民 15 やっぱり1回被害に遭っているからね。
住民 15 妻 ずっとあっちの方の有明の方へ逃げて行くんだ。
住民 15 ただ、今は地震保険に入っている人もだいぶ増えてきたよ。昔は誰も地震に入らなかったけどね。
質問： 本当に、着ていくものだけで何も持っていけなかったんですか。
住民 15 妻 私は持って逃げる、ちょっとしたお金は持って逃げていくけど。あとは全然、それだけは、大事なものは。
質問： 財布を持つぐらいですか。
住民 15 妻 手に持って、体に付けて逃げます。
住民 15 ものはね。うちはあれだもの、会社が向こうにあ

るでしょう。会社にこれぐらいの大きい俺個人の金庫も置いてあるんだ、会社の金庫のほかに。だからそこに、登記書類とかそういうものを全部向こうにあるから、預金通帳とか。

質問： そうなんですか。
住民 15 ここにあるものといったら、本当に日常使うお金と。
住民 15 妻 小遣いだけだ。
住民 15 ここの郵便局のちょっとしたお金だけ。
住民 15 妻 それだって私らにしたら大事だものね、だからそれだけは持って逃げます（笑）。
住民 15 あとは大した、持って逃げなきゃといってもね。
住民 15 妻 ないから。
質問： 僕はここに来る前、先月ですか、静内町の方で話を聞いているんですけども、そのときにやっぱり位はいを持って逃げたので、位はいを探して遅れちゃったとか、着替えを全部入れたので、それで遅れたとか、そういうふうなことをおっしゃっていたので。
住民 15 そういうことをやったらだめなんだって。とにかく一切早く体一つで逃げるということ。それはもう僕らもいろいろよその被災地を見にいったりするけどね。特に青苗地区、奥尻なんかはそうだよ。地震があつてすぐに津波が来ているからね。
質問： 奥尻のときに議会に。
住民 15 そう、そう。津波に遭って復興して5年目に行ったんだ。だからだいたい復興が終わったころ。というのは、その前に行くとか結局相手の町村に迷惑を掛けるでしょう。やっぱりせつかく……

(後略)

(5) 住民 17
質問： ご主人と、それから。
住民 17 じいさん、ばあさん。
質問： お父さんとお母様と。
住民 17 そうそう。
質問： あと、お子さんですか。
住民 17 そう。娘1人に息子1人。
質問： ご長男の方ですね。6人全員おうちに？
住民 17 そうそう。
質問： ああ、そうですか。地震が4時50分だったんですけど、皆さんおうちにいらして、寝ていらしたんですか。
住民 17 寝てたね。寝てて起きるかなと思ったときに、雨降ってたもんだから。
質問： 雨が降っていた。
住民 17 うん。雨降ってたからね。もう晴れてたかな。雨、晴れてたかな。
質問： ああ、そうですか、雨の後で。それでお布団の中に入ってたという、もう起きてらしたんですか。
住民 17 あのとときは起きてたか。2階にいたから、うちはね。2階で寝たからね。あとは年寄り下下下。
質問： 2階でお休み、目は覚めてたんですけど床に就いたというような感じですね。地震の揺れはどうでしたか。
住民 17 ここね、地震の通り道というか、すごく揺れるんです。ここはもうめっちゃくちゃ揺れるんだわ。その保育所なんて使い物にならないのよ。

質問： あそこのお寺の近くでしたか。
住民 17 お寺じゃなく。
質問： 保育所の、センターの近く。
住民 17 センターの、あそこはね。そのくらいここは地震の通り道。全部ここ取り替えたの。
質問： そうですか。これは今回の地震のときにはおうちの方は何か。
住民 17 全部だめ。全部取り替えたんだ、これ。中は。
質問： 塗り替えたりとか。
住民 17 そうそう。
質問： おうち自身は残って、それで。
住民 17 そう。
質問： 中の棚とかも全部倒れて。
住民 17 全部、そうそう。棚は倒れなかったんだけど、中の茶わんだとか全部だね。食事はして、そこのは大丈夫だったけど、このキャスター付きは大丈夫なんだけど。
質問： 2階はやっぱり大きく揺れて。
住民 17 そう、2階はたんすだとか全部。
質問： 倒れて。
住民 17 倒れたね。
質問： これまで北海道の東方沖地震とか釧路沖地震とかありましたけど、そんなのに比べてどうでした、今回の地震は。
住民 17 あの方がすごかったね。あの方が、ちゃんと言わせる人は今回の方が大きかったと言うんだけど、こちらは10年前でしょう、東方沖が出たのはね。
質問： 東方沖の。
住民 17 そのときはまだこの家じゃなかったから、まだ向こうにあったんだけど、そのときもすごかったね。玄関から出られなかったね。靴箱だとか全部倒れてしまっただけ。
質問： じゃあ、今回もかなり大きかった。
住民 17 かなり大きいね。
質問： そして地震の後どうされましたか。
住民 17 すぐ避難、ここは川があるもんだから。
質問： 川があるから。ああ、なるほど。すぐに避難。このとき停電でした、もう電気は？
住民 17 全部停電。なってるうちにもう停電だね。何もかも全然。
質問： そうですか。じゃあ、ニュースとか何かは。
住民 17 荷物は一切持たない。
質問： ニュースとかテレビやラジオは？
住民 17 ラジオは全然聞かない。
質問： ああ、そうですか。それで車でお逃げになったんですか。
住民 17 車でね。
質問： 6人全員で逃げた？
住民 17 いいえ。うちは親がいるから、年寄りだから。こちらはもう年寄りを連れて、子供たちは先に。
質問： じゃあ、2台で。
住民 17 そうそう。
質問： じゃあ、ご主人と奥様とご両親が1台の車、それで息子さんと娘さんが1台の車で、2台で逃げたというわけですね。
住民 17 そうそう。
質問： 逃げた場所はどちらに逃げられましたか？

住民 17 うちの奥さんの妹が高台にいるわけさ。高台ということはずっとこっちだね。
質問： 床屋さんがあって。
住民 17 違うね、こっちだね。こっちの方の展望台のある方だね。
質問： 展望台のある方、床潭の？
住民 17 そうそう、山の方。
質問： 山の方ですか。ちょうど今、まだおうちはこちらにありますけど、ここですよ。
住民 17 そうだね。
質問： どの辺ですかね。
住民 17 こっちの方だね。
質問： コンピラさんとか。
住民 17 Sはここだね、T。これ、かなり古いときのあれだね。
質問： これは昭和56年ですね。すみません。じゃあこちら辺までずっと。
住民 17 そうそう。これはもう山の上ですから。
質問： 時間はどれくらいで着きましたですか。
住民 17 時間はもうそこへ上がってしまえばゆっくり行くからね。そこに上がってゆっくり上がったら2分かそこらで。だけど向こう側へ到着する地震になって5分か10分くらいで到着しましたからね、1回の余波というのは。
質問： あ、津波の。
住民 17 津波の。
質問： そうですか。となると、もう地震が来たら、すぐ何も持たずに車に乗って道を走ってこのSさんのお宅へ行っただけ。
住民 17 そうそう、だけど、ここにいる間にもう津波の1波は来たからね。
質問： その間、ここまでは来なかった。
住民 17 ここは来ないけど、向こうは来てみたいですよ。
質問： そうですか。やっぱり10分くらいはあったんですか、逃げるまで。
住民 17 うちも年寄りなもんだから、ズボンはいたり何はいたりかにやったら、やっぱり10分はかかってるでしょうね。
質問： なるほど。
住民 17 妻 ちょうど起きるか、朝だから起きるかそのくらいに来たから、ちょうど時間かかるんだね。でも、こちらが一番早いね、ここ。
住民 17 こちらはね、うちは小さいときに、俺が本当の生まれてすぐのときに一度ここさ津波が来てるんです。
質問： 十勝沖地震ですかね。
住民 17 十勝だね。
質問： 昭和27年の。
住民 17 そうそう。そのときにうちのじいさんの一番兄が亡くなったんです、津波で。
質問： おじいさんの。お父さんのお兄さん。おじさんがですか。
住民 17 そうそう、おじさん。だからそういう経験があるものだから、教えられてるもんだから、地震来たといったら、もう津波警報も何も無い、大きい地震来たなと思ったら、もう津波という考えがあるもんだからすぐ逃げてしまう。
質問： そうだったんですか。まだお小さいころだったんですか。

住民 17 そうそう、全然物心分らんようなときにそういうのが来てるの。

質問： それでおじさんというのは津波で流された、逃げ遅れたんですか。

住民 17 そうそう。

質問： そういうことがあって、すぐに逃げるという。

住民 17 そうそう、そういう習慣がもう付いている。うちらはね。それと川があるもんだから。それとここは海よりもこっちの方が低いというような、したもんだからもう。

質問： なるほど。こちらの方の床潭から厚岸の町の方じゃなくてこちらに逃げた。

住民 17 そうそう。そちらに逃げるの、こちらは。

質問： こちらに逃げなかったのは何か理由があったんですか。

住民 17 こっちの方が近いから。こっちは川があるでしょう、沼があるでしょう。

質問： なるほど、川や沼がありますからね。

住民 17 したから、ここからすぐ、ここからこの床屋さんあるでしょう。床屋さんのとこからすぐ、ここだね、ここからこっちにパーッと逃げる。

質問： それでSTさんのお宅に着いて、それで何時ごろまでSTさんのお宅にいらっしやいましたか。地震が4時50分だったんですが。

住民 17 9時か10時。

住民 17 妻 解除になるまで。

住民 17 解除になるまで。大丈夫だというときまでね。

質問： 地震が起こりまして、テレビもラジオも停電ですから聞けないと。何か？

住民 17 妻 車の中で。

質問： 車のラジオで、カーラジオで。それで津波警報はその中で知ったんですか、津波の警報が出た。

住民 17 いや、もうなった時点でもって津波だなんて分かった、潮が全然違うから。うちは漁師だから。漁師だからもう潮でもって全部分かるんです。

質問： なるほど。

住民 17 妻 電気消えて、この防災無線も全然、こちらが逃げた時点では、全然まだ。

質問： 広報車は来ました？

住民 17 広報車は来たけど、もうかなり遅くなってたね。広報車も人間だから、やっぱり少し。

質問： そうですね。じゃあ、それは警報ではなくて経験から、これはもう津波が来るだろうと。

住民 17 そうそう。

質問： 気象庁が出した津波警報が出たということを知ったのはやっぱりカーラジオからですか、それともSさんの。

住民 17 そうそう。Sさんのうちさ行ったとき防災無線でもって、あそこは電池のあれがよかったもんだから防災無線はガンガン入ってたですね。

質問： ああ、そうですか。じゃあ防災無線で、警報が出てることを分かったと。

住民 17 そうそう。それから今度ラジオを聞いて。

質問： Sさんのお宅へ行ったときのラジオというのは、どんなことをニュースでやってました？

住民 17 妻 何もかにも全然ラジオ聞いている暇もなく。

住民 17 何も暇ないんだ。だって、そこを走っていったら、石がチャラチャラ落ちてるものだから、そんなよう

な こうなってる所でしょ。今直してるんだけど。石がやっぱりポトポト落ちてるわけさ。

質問： じゃあ、もうラジオなんか聞いているときじゃない。

住民 17 そうそう。

住民 17 妻 もうここの中であちこちぶつけて転がったりなんかしてるもんだからね、 すぐその場で逃げちゃったから、何もかにももう、何の余地も何もなかった。もう逃げるしかない。

質問： 解除になりまして、おうちへ戻られたわけですね。

住民 17 そうそう。

質問： そして、おうちに帰って何をまずされましたか。

住民 17 後片付け。後片付けも何もないんだ。俺らは漁師なもんだから、昆布の検査もその日にやってたもんだから。それも今度、全部1回でもってなっちゃったというので。

住民 17 妻 もう晩までね、暗くなるまで。掃除機、電気切れてるから掃除もできない。

住民 17 全部だめなんだ。

質問： 検査はやったんですか、できたんですか。

住民 17 昼からね。昼から解除になったから。解除になったから昼からやるかと言って、昼からやったんだけど、組合と連絡取って。

質問： それで停電ですから、もう掃除機も動きませんね。

住民 17 妻 もう壊れた物が足の踏み場所もなく。

質問： 検査が終わってから片付けですか。

住民 17 そうそう。

質問： それはもうその日1日ずーっと片付け。

住民 17 そうそう。部落でも停電だから電話も何も全然さかないのさ。携帯もだめさ、全部だめ。

質問： 何も連絡が取れなかったんですね。

住民 17 そうそう。

住民 17 妻 あっちからこっちから心配して電話来たり何したって全然通じなかったの。

質問： 片付けのときは何か情報とかが入ってきましたか、やっぱり停電ですから何も入ってこなかった。

住民 17 いや、もう全然。全然分からない。

質問： 片付けにもう丸1日、次の日もやったんですか。

住民 17 そんなにも傷まなかったんだけど。

住民 17 妻 次の日はもうかからない。

質問： 1日でほしい。

住民 17 ちょうど1日でね。

住民 17 妻 もう片付けてしまわないとだめだね。

質問： なんか家の中とか外でひびが入ったりとか。

住民 17 もう全部。

住民 17 妻 このクロスも全部やり替えた。

住民 17 これ全部取り替えてしまった。

質問： 窓ガラスは割れたりしました？

住民 17 窓ガラスは大丈夫。

質問： さっきご主人が言われた、地震の通り道というぐらいうごかったんですね。

住民 17 そうそう。そのわりに厚岸の方は揺れは少ないんです、ここだけが。

住民 17 妻 すごかったよね。話聞くと、あっちの方が揺れ少なかったって。立ってられなかったもん。2階から下りてくるのやっただけだった。そのまんまで2階に。

質問： ずーっといたわけですね。先ほど昭和27年の津波の経験をということだったんですけど、そのときの

ご記憶はありますか。

住民 17 ないです。うちのじいさん方は知ってるよ。

質問： 1歳か2歳。

住民 17 そうそう。もううちのばあさんさおぶって、うちのばあさん逃げたというからね。全然分らないからね、うちはね。

質問： そのときにおじ様が亡くなられたということで、それ以来.....

住民 17 妻 いたみたいだよ、あっちの方にも流されて。

質問： 川に津波が来たんですか。

住民 17 妻 川から入ってきて。

住民 17 そのときは逆、ここ湾だから。湾でしょう。湾だもんだから、聞いた話だよ、1回来ただけど、そのときは何ともなかったんだってね。ところがその入った波が、湾の中に入った波が、返し波ってある。出ていく波。出ていく波でもってこっちの方が全部やられてしまった。

質問： ここにおうちはもともとあった。

住民 17 そうそう。この辺にあったやつが。

質問： そこが全部流されて。

住民 17 そうそう。

質問： そこでおうちにそのおじさんがいらしたんですか。

住民 17 いやいや、避難したって間に合わなかった。

質問： このとき津波はわりと時間がかかったんですか、それともすぐ来たんですか。引き波？

住民 17 それははっきり分からないんだけど、返し波というのか、返し波でもってやられたみたいだよ。

質問： それ以来、お宅の方では、地震が来たら津波ということがある。

住民 17 そうそう。

質問： じゃあ、これから例えば今から 10 年前ですね、北海道東方沖地震がありまして津波の警報がでて、そのときもやっぱりすぐ逃げました？

住民 17 すぐ逃げた。それでも逃げた。

質問： 夜でしたね、あれは、10月の地震ですけど。

住民 17 あれも朝でなかったかな。朝だよな、あれ、東方沖。朝方だよな。

住民 17 妻 1月のね。

住民 17 1月じゃない、10月でなかったか。9月か。

住民 17 妻 釧路沖は1月15日。

質問： 東方沖は10月4日か5日だったと思うんです。

住民 17 妻 そう、初めころ。.....。

質問： 夜だった。

住民 17 朝だよな。

住民 17 妻 あれは朝でなかったかな。あのときも逃げたよね。

質問： 逃げました、やはり同じように車で。

住民 17 妻 車で。

質問： そのSTさんのお宅。

住民 17 妻 ええ、STさんの。

質問： そうですか。それからチリ地震津波を覚えていらっしゃるんですか。

住民 17 うん、覚えてるよ。

質問： このときはどうでした？

住民 17 チリ地震は、そのときはこっちの方は潮は引いたんだけど、潮の速さがあればすごかったんだけど、津波は来なかったからね。潮のあれは引いたり戻っ

たり、引いたり戻ったりしたんだけど、霧多布へ入っていったんだけどね。

質問： 霧多布の方に。

住民 17 そうそう。

質問： 浜中とか ですね。

住民 17 そうそう。

質問： あと、昭和43年にも十勝沖地震がありましたけど、これは43年でしたかね、あれは函館の方が被害が出たんですかね。

住民 17 昭和43年、俺が学校出て、分からないな。

質問： あと、昭和48年に根室半島沖の地震があったんですけど、このとき津波は覚えていらっしゃるんですか。

住民 17 俺はそれで船に乗ってたからね、ケーソン船乗ってた。6月だよな。

質問： そうです。

住民 17 6月だよな。そのときは分からないね。船に乗ってたからね。あれは花咲来たんだよな。

質問： 花咲港へ。

住民 17 花咲へ来たんだよな。そうそう。

質問： そうしますと、津波で避難をしたというのは、今回とこの前の東方沖以外何かありましたか、それ以外に避難したことというのは。

住民 17 だから東方沖と1月か、あれ来たの、釧路沖。あれもやっぱり避難した、俺はそれこそ、そのときはダウン だったけど。

質問： あれは夜でしたね。

住民 17 あれは8時ころだね。

質問： これも避難されました？

住民 17 そうそう。「すぐ逃げられて」電話くれたんだけど。

住民 17 妻 その時点でもう電話切れちゃった。

質問： あのときは幸い津波はなかったんですよ。

住民 17 あのとき津波はなかった。

質問： でも一応念のため逃げた。

住民 17 そうそう。もうとにかく地震になったと思ったら逃げる。

質問： 釧路も東方沖も今回もかなり大きく揺れましたよね。

住民 17 そうそう。それこそイランとかあっちの方の家だったらみんなまた何万人も死ぬし、そういうような地震だね。

質問： そうですね。じゃあ3回これまで避難の経験があるわけですね。

住民 17 いやいや、3回どころじゃない。

質問： もっと避難してします？

住民 17 うん、もっと、もっと。

質問： 何か地震があれば。

住民 17 そうそう。それこそ揺れが大きい地震あると思ったら、津波警報となったらすぐパッと。

質問： 逃げるわけですか。

住民 17 うん。来ても、それこそもう来ないと分かっているパッと。

質問： それはやっぱりさっきの27年の津波のことが経験があるから。

住民 17 それと、ここが川だから、津波は川出て走るから。

質問： なるほど、平成5年に奥尻島の地震津波がありましたよね。あれで被害がありましたけれども、それは何か影響しましたか。あれを見て例えば、やっぱり津波は怖いもんだと思ったとか、なんかそういうことは？

住民 17 津波は怖いものと思ってるけど、奥尻の場合はこっちは地震ならなかったから。ただ、函館に俺の姉がいるもんだから電話かけてきて、「警報入ってるから気を付ける」と来たけど、見たけど奥尻の方だから、あ、それは津波は来ないと。やっぱりうちは漁師だから、津波来る場所と来ない場所がすぐ分かるから、もう潮を見ただけで分かるね。

住民 17 妻 何回も来たんだよ、この間もね。

住民 17 この間はもう完全に分かったからね。もう高台から見たからね、津波来るのを。

質問： この辺は言い伝えとありますか、漁師の皆さんの勤なのかもしれませんけれども、こういうときは津波が来るとかというのは何か分かるもの、コツというんですかね、言い伝えというんですか。

住民 17 結構、地震雲が走ったとか、それからゴメが騒ぐだとか、そういうやっぱりいろいろあるというんだけど、俺は分からないね。

住民 17 妻 地震になったら津波しかないから逃げるしかない。

住民 17 昔の人は、ネズミが浜いなくなれば何か災害が来るだとか、やっぱりあったね。あったと思うんだ。

質問： 津波の前には潮が引くとかという話は？

住民 17 あるよ。

質問： 聞いてます？

住民 17 そう。

質問： 今回も引きました？

住民 17 引く、速いんだよ、潮引くのは。みるみる間に引いてしまうからね。それこそ今まで見たことのない岩まで出てしまうからね。

住民 17 妻 引いてるうちはいいけど、今度来ればおっかない。

住民 17 そうそう。引いてるうちはいいんだけど、今度来る場合は1回に来るからね、ガーッと。

質問： なるほど。それから、津波が来るとき、何かあらかじめ用意してるものですね。

住民 17 ない。

質問： 特にないですか、とにかく何も持たずにパッと逃げると。

住民 17 そう。みんな女の人は欲があるもんだから、貯金通帳だ、お金だ、何だかんだって、みんなパッと探すけど、もうそんなの持たなくてもいいって、貯金通帳なんかそんなものなくなってもまたすぐ発行できるんだから、何も持たずにすぐ逃げる。

質問： この辺でやはり十勝沖地震経験された方で、ご家族で津波の被害に遭われた方は皆さんやっぱりそういう感じですか。

住民 17 そうだね。もうすぐ逃げる。もうこの辺はすぐ逃げるね。

質問： この川沿いの方は特に。

住民 17 そうそう。

質問： なんか津波のことで、この町の方に要望というんですかね、こういうことがあったらいいとか、何かそういうことってございますか。

住民 17 町の方にですか。どうだろうね、大きい津波か、奥尻みたいに大きい津波来ると、1回でも来ると、すぐ防波堤、波よけだとかそういうのなるんだらうけど、俺はやはり必要だと思うね。だけど、ざーっと船が、船の巻き場だから、それだけのやるとなれば

ばお金も掛かるし。

質問： 地震が来たら、よく海を見に行く人いますよね。

住民 17 あれは絶対やめますね。

質問： 船ももう揚げる人いますけど、それもやめた方がいいと。

住民 17 船はやはり大きい船は沖へ出すといいね。沖の方へ船持って行くわけですよ。だけど、うちはかけてあるんだけど、もうそんな船というわけではないね。

質問： とにかく逃げると。

住民 17 そう、とにかく早く逃げると。

質問： あと、このあたり、27年の十勝沖地震の何か記録のようなものが、碑が建つてるとか、何か記念碑が建つてるとかということはあるんですか。

住民 17 ないね。

質問： 特にないですか。

住民 17 そういうことはないね。

質問： なんか津波の残ってるものがあるとかというのは？

住民 17 残ってるものは……

質問： 津波の跡というんですか。

住民 17 写真だとかそういうのはたくさんあるんでないの。

質問： あ、写真。

住民 17 学校あたりにあるんでないかなと思うよ。

質問： 何か乗り上げたものが残ってるとか、そういうのはないですか。

住民 17 写真で全部結構そういうのを見たことあるよ。写真でね。新聞だとかね。新聞さ、その27年の津波の来た風景だとかさ、昔のことだから、それこそかぶってたき火してたりさ。確か俺、うちにあるかな、ないな、分からないな。確か見たことあるね、そういうのはね。

質問： この町にいくつか階段があって、津波の避難場所がありますけど、皆さんやっぱりああいうところへ逃げる。

住民 17 行かない。

質問： 行かないですか、なぜ行かないですか。

住民 17 そっちの方さ行くと、そっちの方がこころ地形が曲がってるもんだから、ここよりも向こうの方が低いですよ。

質問： 住民27さんの方。

住民 17 そうそう。行くまでだったら、そこにもとは川がそっちへ走ってたもんだから、その場所が低くなってるんです。

質問： 川は昔ここじゃなかったんですか。

住民 17 こころ辺だね。こころ辺からなってたんだ。

質問： この辺からというのは？

住民 17 こころ辺だね。

質問： KBさんとか。

住民 17 そうそう。

質問： この辺に昔、川があった。

住民 17 こころ辺にあったんだ。だもんだから低い。だから津波が来たら低いのが走るから、水。だから、そっちへ行かないで、この川を渡ればすぐだから。それから津波が来る。

質問： この川になったのはいつごろなんですか。だいぶ昔ですか。

住民 17 分からないね。

質問： ずーっと昔。

住民 17 そうそう。

質問： ただ、昔ここに川があったことはもう有名な。
住民 17 そうそう。
質問： 住民 17 さん、ここは代々何代目ぐらいですか、この床潭に住んでから。
住民 17 うちのじいさんの親というのそこだったからね。そこから別家になって、そして俺だからね。
質問： 3代目。
住民 17 3代目ですね。
質問： そうですか。という大正ぐらいからここに、昭和の初めぐらいからもうずっと。
住民 17 うちのじいさんは大正 15 年生まれだからね。大正だね。
質問： もうずっと長いわけですよ、この辺のことはもう詳しいわけですよ。なるほど、この辺は低いわけですよ。そうするとこっちへ逃げたら危ないと。だからこっちへ逃げた方がいいという。
住民 17 そうそう。ところがここに川があるから。だから。
質問： なるほど。そういうことを皆さんご存じなんですかね、この辺の人たち。
住民 17 知ってますよ。
質問： だから逃げないわけですか、あんまり。川が、こっちの方へ逃げないで、もうこっちへ逃げたりとか、こっちへ逃げたりとかするわけですか。
住民 17 そうそう。
質問： やはり車で逃げの方が多ですか、津波のときは。
住民 17 車だね。だって車置いていったら、車を買わなきゃだめだから。だから車乗ってパーッとどこでもいから高台さ逃げて行け。
質問： ST二さんのおうちに避難するときには、おうちでもうじっとしていられたんですか。じっとしていられたというか、特に何もしてなかったんですか。
住民 17 そうそう。そこだってみんな集まるもんだから、ああでもない、こうでもないと話しながら。
質問： 何人も集まってくるんですね。
住民 17 そうそう。やっぱりみんな避難してくるから。
質問： それで解除されて、帰ってくると。
住民 17 そうそう。
質問： やはりもう解除されたら安心。
住民 17 そうそう。もう大丈夫だと分かっているんだけど、一応安全のためにやっぱり。
質問： じゃあ、あとはその日はもう昆布の検査と片付けで大変な1日だったわけですね。
住民 17 そうそう。
質問： あと、それから余震もしばらく続きましたけれど、余震はどうでしたか。やっぱり多かったですか。
住民 17 多かったね。今までないとき余震は多かったね。今回の方が多いわ。
質問： 余震のとき例えば津波のことを心配するとかありますか。
住民 17 やっぱりある。大きければある。
質問： やっぱり避難しますか。
住民 17 いや、しない。すぐテレビをつける。
質問： テレビをつけると。ああ、なるほど。特に警報出なければずっといるという。
住民 17 そうそう。
質問： よく分かりました。
住民 17 1メートルや2メートルの津波なら全然大したことはないんだけど、やっぱり4メートル、5メータ

ーになるとちょっとね、本当に怖い。
質問： 1メートルぐらいだと、そのテトラポットぐらいですか、来るとしたら。
住民 17 いや、そんなに来ない。うちの背丈だって2メートル近くまであるから、1メートル70か。だけどやっぱり1メートル70といたらまだ結構まだ。
質問： ですから、そうになるとやっぱり3メートル、4メートルになるとやっぱりちょっと。
住民 17 そうそう。やっぱりちょっと来るかなと。
質問： よく分かりました。
(後略)

(6)住民 18
質問： まず、当日の状況の方からちょっとお聞きしたいんですけど、通常こちらの方のご家族というのは何人でお住まいですか。
住民 18 妻 今は3人。
質問： 構成はご夫婦と。
住民 18 妻 ばあさん。
質問： おばあさんって書いたらあれだな。そうすると、当日も3人で。
住民 18 妻 いえ、当日は2人。ばあさんは入院していたものだから。
質問： そうですか。あと例えば子供さんとかは、近くにいるとかというのは。
住民 18 妻 ええ、みんな厚岸で。
質問： 皆さん。
住民 18 妻 厚岸っていう真龍の方。
質問： シンルイ？
住民 18 妻 真龍、真栄町っていうかな。真龍だよ。真の龍、真龍。
質問： 真龍。じゃあ、もう普段も行きはあるんですね。
住民 18 妻 そうそう、行ったり来たり。
質問： はい、分かりました、当日は2人と。地震があったのが朝の4時50分ですよ。
住民 18 妻 そう、はい。
質問： ちょっとほかのところもいろいろ聞いて回っていると、こちらの主に産業に漁師さんが多いということで、やっぱり朝、普段漁があるときは早いって聞きしているんですけども、こちらの方は昆布ですか。
住民 18 妻 そう、はい。
質問： 回りで聞いた中でも昆布の方がおられて、いつも昆布漁があるとき3時ぐらいに起きられる。
住民 18 妻 そうそう、私も起きていました。小屋で仕事してましたから。
質問： ただ、当日26日の金曜日は漁は休みだったとかっていうふうに。
住民 18 妻 そう、昆布は休み。
質問： 昆布は休み。
住民 18 妻 ええ。
質問： 漁に出るのは早く起きなきゃいけないんですけどもということですか。
住民 18 妻 はい。
質問： 休みのときでも、大して変わらないですか。
住民 18 妻 早いです。
質問： そうですか。
住民 18 妻 大して変わりません。

質問： そうすると、そのときは何時ごろから起きてられていたんですか。

住民 18 妻 私は、だいたい3時半。

質問： 3時半。

住民 18 妻 ええ。

質問： ご主人の方は。

住民 18 妻 寝てます(笑)

質問： ご主人は何時ごろまで寝て？

住民 18 妻 地震来るまで。

質問： じゃあ、奥さんの方はもう起きてて。

住民 18 妻 ええ、仕事していました、倉で。

質問： ご主人は寝ていたと。

住民 18 妻 はい。

質問： 作業所というのは。

住民 18 妻 すぐその小屋。

質問： その敷地の隣ですね。

住民 18 妻 ええ、そうそう。

質問： 敷地内の作業所で仕事をしていたと。

住民 18 妻 はい。

質問： 仕事というのは？

住民 18 妻 昆布の後始末。

質問： それ、特に何か火を使ったりとか。

住民 18 妻 そういうことはないです。

質問： 手作業っばいですかね。

住民 18 妻 そうそう。

質問： そうしましたら、敷地の中で、建物の中ですから、当然地震の揺れは同じぐらいの。

住民 18 妻 そうそう。

質問： そして、地震が起きたときというのは、揺れてますよね。揺れている間というのはどうされてましたですか。

住民 18 妻 それこそ玄関、戸口のどこに来て、立ってられないからしがみついて、外のそれこそ電信柱の線を見ました、収まるまで。

質問： 戸口にしがみついて。

住民 18 妻 ええ。

質問： やっぱり立ってられないぐらいだったですか。

住民 18 妻 そう。

質問： じゃあ、しばらくずっと揺れていて。

住民 18 妻 そうそう、収まるまで。

質問： その間何か考えてました？

住民 18 妻 だから、もう電柱の揺れる、わあ、すごい、すごいって感じ。

質問： 揺れは大きい。

住民 18 妻 大きい。

質問： そのときって、なんか津波とかっていうのは。

住民 18 妻 もう頭にあります。

質問： ありましたか、やっぱり。

住民 18 妻 はい。

質問： それはやっぱり大きいからということですか。

住民 18 妻 そうそう。

質問： 津波があるというのは、もう揺れているときから頭に出てきたと。

住民 18 妻 そう。

質問： 分かりました。そしたら、揺れが収まったら。

住民 18 妻 今度お父さんが下りてこないわけ、2階に寝てるものだから。これもいるし、ワンちゃんも。もう呼んで、そしたら自分はまず地震来たから部屋でこ

れを抱いて、テレビは足に落ちてくるわ、物が落ちてくるから、まかなう暇がない。どうにか起きてきて、それから今度まず津波が来るから、私こそこれを連れて避難しようとかかったんだけど、船、それこそ岩壁に置いてあるわけさ、かけてあるわけさ。

質問： つないでる、揚げてない。

住民 18 妻 揚げてない。海の大きい船と小さい船とね。そして、小さい船はそのままにして、大きい船をお父さんが沖に。

質問： 沖出ししたの。

住民 18 妻 出しに行ってしまったの。

質問： ちょっとその辺を少し詳しく聞きたいんですけど、まず奥さんはそっちで地震に遭って、戻ってきて、それでお父さんはもう起きてました？ そのとき。

住民 18 妻 ようやっとなら起きてきたんです。もう物がすごかったもんだから、倒れて。手も足も付けられない。

質問： それで家に戻ったら、だいたいどんな感じでした？

住民 18 妻 どんな感じって。

質問： テレビが落ちた。

住民 18 妻 そこら中のもの、あらゆる、そっちの方の。冷蔵庫こそ、中のものは全部出たけど、倒れはしなかったけど、背座なんか倒れるわ、ストーブは倒れるわ、このジャーは倒れるわ、要するにややかに水入ってるものもてっくり返って、もううちの中どうしようもなくなってしまった。

質問： そうなんですか。

住民 18 妻 うん。そんなのを片付けるっていうよりも、頭は津波。こんなことしてられない、津波。だけど、お父さんはそっちこっち、窓も全部開いてしまったから、戸が。まず、閉めていかなければならないことになって、もう私は避難したけど、お父さんはそこら辺全部やってから、船に乗って沖出たみたいね。

質問： そうすると、かなり物の散乱とかが。

住民 18 妻 すごかったの、皿はみんな出て割れる。うちの中、もう手は付けられない、どの部屋も。

質問： そしたら、もう床に割れたやつが散乱していると。

住民 18 妻 散乱して。

質問： そしたら、戻って、ご主人もさすがに自分で目が覚めて、下りてきたんですよ。

住民 18 妻 ええ。

質問： そのときには、もう散らばってて、そのときはご主人はもう着替えてました？

住民 18 妻 ええ、もう着替えて。

質問： 着替えて。

住民 18 妻 これを連れて下りてきたから。

質問： なるほど。着替えて、うわ、これはひどいということになって。

住民 18 妻 そしてね、お父さんも津波さ、頭。ラジオたってラジオがないから、そこにあったものだから、軽用のラジオを大きくかけて。

質問： 車のラジオね。

住民 18 妻 それを聞きながら、津波の情報を聞きながら、ある程度、開いている戸を閉めてやったみたい。私はもうそのまま避難してしまったけど。うちの中のこと是一切ちよさないで。

質問： そうしたら、そのご主人はラジオをつけて。

住民 18 妻 聞いて。

質問： 確か各戸に防災無線はあるって聞きましたけど。

住民 18 妻 だけでも、そのときはまだ津波のあれも何も入ってない感じ。私らは聞く余裕もないし、流れてたものだかも頭がない。要するに、自分で避難しようという感じ。

質問： とにかくそっちの方に行つて、流れてたかもしらんけど。

住民 18 妻 ないけども、もうそんなのない、ただ逃げるので一生懸命で。

質問： そうすると、あとテレビとかはつけたんでしたっけ。

住民 18 妻 もう全然かからなかった。

質問： それ、電気つかなかった。

住民 18 妻 電気もつかない、消えてしまった。

質問： 消えてしまった、停電になったと。

住民 18 妻 そうそう。だから、もうラジオを聞くよりしょうがないもんだから。ラジオを聞きながら、お父さんはもう津波が来るぞと。あのときは八戸かどこか、いや、八戸でない、どこだろう。津波が2メートルだか何ぼだかってラジオで聞きながら、津波が来るというので船を沖出しすると言って。

質問： そしたら、奥さんの方は、もうワンちゃん連れて。

住民 18 妻 そう、すぐ避難。

質問： 歩いて行ったんですか。

住民 18 妻 いえ、車で。

質問： 車で。

住民 18 妻 ええ。

質問： 車は、別に車。

住民 18 妻 ええ、あります。

質問： その軽じゃなくて、別の車で。

住民 18 妻 ええ。

質問： 普段、例えば津波に遭ったら、どこに逃げてくれて何かありますか。

住民 18 妻 あります。神社、上。

質問： 神社のところ。

住民 18 妻 神社の上。

質問： 神社の方へ行けと言われていたのと、それは車で走っても大丈夫なんですか。

住民 18 妻 ええ、だいたい何ていうか、うちより高いところのところに車を止めておくから。そこだつて津波が来るか来ないか分からないけど、一応そこまで置いて山に登ります。

質問： ああ、なるほどね。

住民 18 妻 いったん、山に。

質問： 下まで行くには。

住民 18 妻 車で。

質問： 車で走つて、車からやっぱり降りて上がっていく。

住民 18 妻 そうそう、上がるんです。

質問： それって、あの海の方って見えまして？

住民 18 妻 見えます、見えます。

質問： どんな感じだったですか。

住民 18 妻 やっぱし波、それこそ引いてつたり、岩がそれこそいっぱい見えたり。またザーッときて、海にかかっている、そこに築港って、湾になっている船がけておくところ、その船をみんなちょうど昆布時季だから小さい船もいっぱいかかっているわけさ、つないであるわけさ。そうしたら、やっぱり潮引けば、見て、あ、あの船かっぱ返るとかさ。

質問： ひっくり返ると。

住民 18 妻 うん。波来て。そういうふうな姿を何回も、引

いたり来んだり、引いたり来んだりするのは見てました。

質問： そうですか。

住民 18 妻 はい。

質問： すると、ご主人はもう逆に。

住民 18 妻 沖に行つてしまつて、いませんでした。

質問： いなかったと。そうしたら、奥さんの方は何時ぐらいまであつちの方にいたんですか。

住民 18 妻 何時だろう、10時半ころまでいたかな。

質問： 10時半まで。

住民 18 妻 時計も何ももう見るあれもないものだから。でも、かなり遅くまでその津波の引き具合、見てたものだから。

質問： 警報が解除されたのが、確か11時ぐらいでしたかね。

住民 18 妻 そうだよ、帰つてきてからまもなく解除だったので。

質問： じゃあ、やっぱり沖見て、もういいかなという感じを見て。

住民 18 妻 ええ、そう。

質問： 帰つてみるかというよな。

住民 18 妻 だいたいみんなで集まるでしょう、やっぱし山に避難するから。そうしたら、やっぱりみんなで、もう大丈夫じゃないかと、まだ解除にならなくても、もうこれ以上は来ないかな。結局みんなが1人下がり、2人下がりしているうちに、自分たちも下がってくる感じ。

質問： みんなで渡れば怖くない。

住民 18 妻 そういう感じね。

質問： そしたら、ご主人の方は沖出しに行つて。

住民 18 妻 沖です。

質問： ご主人は何時ごろ戻つてきたんですか。

住民 18 妻 何時、やっぱり解除になつてからだから11時過ぎてからだな、だいたい。

質問： 奥さんよりも後に帰ってくる。

住民 18 妻 そうそう。私の方が帰つてきて、今度おうちの中、掃除しているところに帰つてきたから。お父ちゃん、なんか船も無線で連絡取つてみたいだよ。

質問： そうでしょうね。

住民 18 妻 うん。

質問： 船はみんな無線でつながりますね。

住民 18 妻 うん、そうそう。

質問： あと漁業組とね。

住民 18 妻 やっぱり解除になつたといえ、下りてくるべし、まだならないといえ、沖にいるべしって。

質問： じゃあ、とにかく逃げると沖出しするのが、もう精いっぱいってこと。

住民 18 妻 そう。

質問： 逃げるとき、何か持っていかなかったですか。

住民 18 妻 貯金の通帳やら、一応バックに1つになつて、それをたなえて。

質問： バックの通帳と何か入つてるんですか。

住民 18 妻 やっぱし土地の権利書から何かみんなひっくり返して。

質問： 貴重な。

住民 18 妻 そうそう、バックに入っているから。

質問： いつもそれは置いてある。

住民 18 妻 それ置いてある、置くところがあるわけ。それ

をたなえて、即散らばさないようにって。

質問： それは、いわゆる何か災害があったときのために、もう準備はしてあるということですね。

住民 18 妻 そうそう。

質問： それだけ持ってとにかく分かれていったと。その間、電話関係とかそういうのは。

住民 18 妻 一切なし。

質問： ご主人と別れた後、何か連絡を取るとかということを考えなかったですか。

住民 18 妻 全然考えない。

質問： 取りあえず。

住民 18 妻 そうそう。

質問： あとご近所と声掛けとか、そういう話は。

住民 18 妻 一応、みんなで避難するよとかさ、行くよとかいう声は掛けていくけれども。

質問： そうですか。

住民 18 妻 もう私が行く前に、みんなの方が早い、避難するのが。

質問： 逆に声掛けられて。それはもうすぐお隣とか。

住民 18 妻 そうそう。

質問： 皆さん、早いですね。

住民 18 妻 早いです。

質問： ほかのところも聞きましたけど、もう隣近所とかそういうよりも、まず自分たちという話をしてましたね。

住民 18 妻 いや、ここ川が近いからどうしてもね。そういう津波に遭ったことはないんだけれども、やっぱり昔の人は、1回ここで津波に遭っている人は、やっぱり津波おっかないっていう、速いっていうんだよね、要するにね。

質問： なるほどね。あと消防団が何かの広報車が何か回ってたっていう。

住民 18 妻 その役をやっているのがうちのお父さんなんだけども、うちのお父さんは船が大事なものだから、そういうところは沖に行ってしまうから。普通の津波警報とかそういう船ない場合は、すぐ回って歩く消防の車で。

質問： ほかの人が回った？

住民 18 妻 そうだと思います。

質問： やっぱりちょっと回ったということですね。

住民 18 妻 うん。

質問： それは聞かれました？

住民 18 妻 全然、全然。

質問： それも聞いてない。それも回る前にもう皆さん動いたということで。たまたま聞かなかっただけですかね。

住民 18 妻 頭の中は、そのときはもう津波の下げたのでそんな気になる あ、下がってった、ああ、また来る来るというような感じで。もう津波は珍しいといえばあればかもしれないけど、そういうなるというのは本当に何十年に1回でしょう。だからと思って、黙って引いてたとか込んでたとかいう、かなりそこそ岩壁に車を置いてた人なんかの車、ああ、もう流れるんじゃないのかと思うくらいまで上がって、結構津波の高さがありましたよ。

質問： なるほどね。今、ここに3人で住まれてるということで、ご主人はこの出身というか。

住民 18 妻 私もここ、床潭。同じ床潭。

質問： そうですか。ということは、すみません、前の津波というのは、確か昭和27年だったと思う。

住民 18 妻 そうです。

質問： そのころもおられましたか。

住民 18 妻 おられたって、まだ私は26年生まれだから。

質問： まだ小さい、赤ちゃんでしたね。

住民 18 妻 まだ小さい。お父さん、23年でまだそんなに、3つか4つくらいだ。

質問： 一番最初に自治会長さんの住民27さん、ちょっとお話を聞いたんですけど、あの方はそのころまだ高校生で、結構覚えていたんですけど。すると、例のその川、沼にそこから水が入ってきて、それで流されたという話言っていましたので、その話をもしかしたら、回っていてほかの聞いたことある人いるか。

住民 18 妻 私もそういうことは昔の人によく聞いて、それこそすぐ隣の人が子供もおんぶってちょうど橋を渡ると同時におぶってただけそのまま落として、身体障害者みたいな人だったね、その人がおんぶってた、その子供が流れた話だとか聞いていますよ。

質問： なんか3人亡くなったというのが、記録に残っていますよ。

住民 18 妻 あと8番地のコマツさんという人ね。やっぱりおぶっていて、1人手引くや何だっっているうちに、おんぶってる子供が流されて、そういう話も聞いています。

質問： そうですか。あと、ご主人もこちら辺？

住民 18 妻 そうです、ここ。

質問： 近いですよ、もう川と。何かそんな記憶とかあってあるんですかね。

住民 18 妻 どうだろう。まだ3歳だ4歳なら、そんなになんないかと思うけどね。なんせ川伝わってくるとというのが、地震が来れば津波が来るという頭。

質問： それはあれですか、やっぱり27年のやつが。

住民 18 妻 そうだよ。

質問： それは例えば地震が来るたびに、親が、さあ逃げろとか、すごいあれだったんですか。

住民 18 妻 いや、私は高台から下に嫁さんに来たから。

質問： 下に。

住民 18 妻 高台だったからさ、津波は別に。ここへ下に来てから、やっぱり何回から地震が来れば津波が見てるけれども、地震来れば津波という頭がありますから、もうすぐ逃げる。

質問： それは高台から見てる分には、自分のうちは安全なんだけれども。

住民 18 妻 こういう低いところにいけば。

質問： やっぱりこれはすごい、これはいつてるなど、被害を見てるといこともあって。

住民 18 妻 そうそう。だって、そのとき大きい船がみんなそっちの川伝わって、そっちの奥の沼の中から、その方に流れたっていう話も聞いてるから、ああ、津波って川上ってくるんだなっていうことで、おっかないなと思ってるから。そういう目に遭ったことはないんだけども、人の話を聞いて。

質問： なるほど。これはやっぱり逃げないとだめだなと頭にある。

住民 18 妻 そうそう。

質問： 生々しい証言というやつが、結構やっぱりいっぱい頭にきてるといことですね。なるほどね。

住民 18 妻 嫌だよ、ただ津波は、あと火事ね。
質問： 火事ね。火事はやっぱり地震起きた後、火を消して
いなくてということで起きちゃうので。奥尻なんか
特にそんなあったんですけど。
住民 18 妻 本当に地震来たら火を消すというけども、1カ
所だけじゃないでしょう、火燃やしてるところは、
消しに歩くのも緩くないくらい大きい地震来たら、
そう思うよ。だから、常に気付けてなければ。それ
から、うち、今なら本当にうちから離れるという自
体が、おっくうだもんね。うちを全部留守にする
というのがおっくう。
質問： そうでしょうね。おばあちゃんのご主人の方のお母
さん？
住民 18 妻 はい、そうです。
質問： そしたら、おばあさんの方が逆にそのときの。
住民 18 妻 そう、経験してます。
質問： そうだよ。いや、でも、あんまり聞いてあれする
のもあれだから。分かりました、もうだいたい皆さ
んの話で。いなかったけど、その話だけは生々しい
からということですよ。
住民 18 妻 そうですね。
質問： 分かりました。
住民 18 妻 住民 27 さんなら本当に経験して分かってるん
だな、津波の恐ろしさというのは。
質問： 高台に上った後は、もうずっと海を見ていて。
住民 18 妻 見て、そうそう。
質問： ご近所の方も当然いますよね。
住民 18 妻 みんなほとんど。
質問： お話ししながら。
住民 18 妻 見たりしながら。
質問： そのときに、なんか早めに1回様子を見に行ったり
というような人とかいませんか？
住民 18 妻 いや、別に。
質問： もうみんなずっとそこで。そこでその情報というの
は何かあるんですか。
住民 18 妻 別にない。
質問： 黙って様子を見てて。
住民 18 妻 見て、ラジオ持ってた人いたな、中にはね。
質問： なるほど。それはみんなで聞こえてました。
住民 18 妻 そうそう。
質問： そうというのがやっぱり情報、判断の材料になる。
住民 18 妻 一方、防災無線があったから、呼んでるか
ら。
質問： 防災無線で。
住民 18 妻 無線で叫んでるから。
質問： 屋外にあるやつということですか。
住民 18 妻 そう、外にあるやつが聞こえるわけ。
質問： それって、避難したすぐのときにもう聞いてますか。
住民 18 妻 ええ、聞いてますよ。
質問： 高台に行ってから。
住民 18 妻 高台に行ってから。
質問： 行ってから聞こえる。
住民 18 妻 びっしり聞いてます。
質問： そうですか。やっぱそれで役場の方から、残ってな
いで逃げろと言ってる。
住民 18 妻 そうそう、避難してくださいと。
質問： 分かりました。でも、逆におばあちゃんとかが残っ
てたら、もっと結構大変だった。

住民 18 妻 そうそう、ちょうど病院に入ってたから、いな
かったもので。
質問： おばあさんはご自分で取りあえず歩いて。
住民 18 妻 歩けます、歩けます。
質問： 大丈夫ですか。結構、高齢者の方とかいると大変だ
という話も聞くんですけど。あと例えば町に行っ
てる子供さんたちとか何か連絡したとか、そういうこ
とは。
住民 18 妻 ないない。もう各自、自分たちで逃げてるな
と思ってるから連絡も何も。だって、電話は通じない
し。
質問： 逆に向こうから、津波、大丈夫だとか。
住民 18 妻 来ない、来ない(笑)。
質問： それもなんかあれですけどね。なるほど、逆にお子
さんたちもそういう話をしてるんですか、津波は怖
いよというような話。
住民 18 妻 いや、そんなしてるわけじゃないけども。
質問： やっぱりいろいろ皆さん、自分たちで逃げますね。
大変ですね。分かりました。だいたいそういう形で
聞けることは聞きましたので。お邪魔してます。今
はあれですか、昆布ってお休み？
住民 18 妻 ええ、昆布は、さお前って早く採る昆布が6月
から。
質問： なんか11月ぐらいまでって言ってました？
住民 18 妻 10月いっぱい。10月の15日まである。
質問： そうですか。
住民 18 妻 あと後片付け、11月は。
質問： 今は、じゃあ、昆布漁以外のお仕事ですか。
住民 18 妻 ええ。出稼ぎに行く人方は出稼ぎに行くし、内
地に。
質問： 今、住民 27 さん。
住民 18 妻 住民 27 さん。
質問： 住民 12 妻さんか。
住民 18 妻 住民 12 妻さん。住民 12 妻さんのとこに行っ
たら、出稼ぎに行ってるって言ってましたね。分か
りました、大変すごい貴重なお話聞けまして。
住民 18 妻 いえいえ。
質問： やっぱり27年ぐらいの地震、大きいですよ。
住民 18 妻 大きいみたいね。
質問： その後も何回か結構地震あったと思うんですけど、
こちらに来られたのは何年ごろですか、嫁がれたの
は。
住民 18 妻 48年。
質問： だいたいその後もありますよね、地震というのは、
やっぱりそのたびに。
住民 18 妻 逃げて(笑)。
質問： 津波で逃げるというのは。なるほどね、やっぱりそ
れも27年の話を聞いてそうになっているんですよ。
分かりました、どうもありがとうございました。
住民 18 妻 いいえ、いいえ。
(録音終了)

(7)住民 19
質問： もうずっとここですか。
住民 19 生まれも育ちも、ずっと床潭だ。
質問： 奥さんもそうですか。
住民 19 いや、お母ちゃんは霧多布だからね。あっちも十
勝沖地震のときはやられた方なんだけどね。

質問： この間の地震の、9月の秋の朝の5時ぐらいにあった地震のときは、どうされました、寝てられました、起きて。

住民19妻 私はあの日ね、4時回って起きて.....

住民19 あのでっかいとき起きたばかりだな。ガタッていったから「ほら」って言って起きた。

質問： お仕事は漁業の方ですか、昆布か何か。

住民19 そうだ、昆布専業者だ。

質問： そうすると朝早いんですね。

住民19 ほとんど、この部落は鮮魚やっている人、何人かいるけど、土台は昆布専業者だ、ここの部落は。

質問： じゃあ、その日は奥さんだけが4時ぐらいに起きられていて。

住民19妻 私、ガタガタッて揺れたから、泡食って起きてきて。

質問： 地震で起きたんですか。

住民19妻 目は開いていたんだけど。

住民19 逃げたもん。

住民19妻 そうしたら、来てね。花が大事だから花を押さえていたんだ。揺れがひどくなってきたから、「父さん起きなさい」と言って起こしたでしょう。

住民19 だから、これがとっくり返ってきて、ガラスみんな割れちゃったんだ。

質問： ああ、これですか。ガラスないのはそれで。

住民19妻 何もみんな枠も何も無い。そっちはもう。

住民19 テレビもとっくり返って、ここに来たんだ。

質問： テレビは、これは壊れ.....

住民19妻 何ともなかった。

住民19 壊れなかった、何も障害物なかったから。

住民19妻 そっちの流しにある、戸棚がとっくり返ってきて。

住民19 その戸棚の中の瀬戸物、みんなとっくり返って。

住民19妻 みんなやられちゃって、ミカン箱でもって3つ出たよ。

住民19 あのボール箱のミカン箱へ、壊れたやつさらって入れたけど3つか、ごみに出したけども。

質問： 結構ひどかったんですね。

住民19妻 そうだね、こんな、ぼろくそなうちだから。

住民19 いや、うちは古いからね。そうだからって風呂場もべそぼそ、ひび入ったけども、あとは別にどこもそんなもの何でもなかった。むしろ新しいうちの人たち、俺の親せきのやつも毎度遊びに来るんだけど、2階建てで頑としたうちで、まだ建てて10年もたつのか、そんなにもたないのか、そっちこちちゆがんでしまって、戸が合うとか合わないとかとって、俺が切ってるんだ、しゃべっていたけれども。ナワチュウ しているから、臭いべさ。

質問： いやいや、大丈夫です。うちも実家、海の近くなんです。

住民19 これ、だから、この津波情報入る前に、パーッともう、うちのばあさんは、もうすぐ背負って行けるように準備はしているんだ、常に準備している。

質問： 日ごろからね。

住民19 俺はそんなもんやらないけど。だから食料でも、ある程度1カ月でも2カ月でもたてば、それを出して代わり買ってきて入れて、そうやって常にやっているんだ。

住民19妻 食料品から下着とか。枕元にも電池と、ラジオ付いた電池と。

住民19 だからリュックサックを背負えば、それでポッと行けるようにしているんだ。

(中略)

質問： じゃあ、今回もやっぱりもう地震だって揺れたら、もうすぐに逃げられたわけですか。

住民19 うん、今回は。

住民19妻 逃げるのに、揺れが終わってからにしないとって、危ないから。

住民19 連絡もらう間もない、町の放送も入るけど、だけど、そんなもの待っていると、自分は浜辺にいたんだから、一番様子分かるんだから、もうすぐに今度、この持つ物、ばばが用意してあるから、それを2人して連れて背負って、俺はそこに小屋造ってあるんだ、山に避難所として。

住民19妻 帰るときに見えるさ、ポツンとあるから。

質問： ああ、そうなんですか。

質問： 個人の避難所ですか。

住民19妻 自分のところ。

住民19 うん、6畳間くらいの小屋が造ってあるんだ。

質問： どちら辺ですか。

住民19妻 いや、もうここ行けば、すつとすぐ。

住民19 床潭、床屋さんあるべさ。床屋さんのすぐ上の方に。

質問： あるんですか。

住民19妻 向かいの方に。

住民19 床潭の入り口のそこの上に俺、小屋造ってあるんだ。

住民19妻 前の地震のときにね、津波だけあって。

住民19 もうあれ造ってから、10年近くたつな。

質問： 前の地震というのは、釧路沖ですか。

住民19妻 何かの地震あったときに、津波に注意しろって、そのときだわね、造ったときは。

質問： 東方沖地震かな。平成3年ぐらいのとき。

住民19 ちょこちょこ キナ が来たときにやったんだ。そこら辺の半端材料運んで行って、造るかって。

住民19妻 だからその辺でうろろろ歩くなっていうの、危ないから。戸だけ開ければ、だから地震収まってから出なさいって言うけど、何せ泡食うんだ、本当に(笑) 男の人っていざというとき、やっぱり女の人の方がずうずうしいのかな、ずぶといのかな(笑)。

住民19 だからこの間の地震のとき逃げていって、中でストーブも油も上げてあるんだから。1年に1回ずつ、油上げてあるやつを持ってきて、入れ替えておくんだ、俺。

住民19妻 錠掛けてあるから。そして、傷んでもいいように、投げてもいいように、厚い毛布だとか、レイザブ だとか、全部敷いて。

住民19 だからシート1枚と毛布3枚ばかりと。

住民19妻 全部上げて置いてある。

住民19 そういうものは上げてあるんだ。だけど、こういうモグラネズミいるから、毛布なんか穴開けられるけど、でもないよりいいと思って。

住民19妻 だからこっちは食料品と、何かあったら困るから薬だとかそういうものと、食べるのにスプーンとか、こういうものとか、はしから全部とコップ入れる、並ぶ、コップから何かみんな入れて背負っ

て持って、バスが走るようになるまでちゃんと。枕元に置いておくんだ。

住民 19 だから電池2本も3本も、ラジオ付きのやつ用意してあるんだ。

住民 19 妻 電池も買って入れて。

質問： じゃあ、この間のときもまずそこに行かれたんですか。

住民 19 そうだ、そうだ。

住民 19 妻 背負って立って、ただ取っていく。

住民 19 寒いかなと思って、火入れて、ガタンといたらすぐパシッと消すにいいし、外に持って出るのいいから、こいつと反射板のストーブ1つ上げてあるんだ。火たいて窓を開ければ下は通る道路だから、だから様子も分かるから、これからこっちへずっと一眺めだから、状態が分かるんだ。

住民 19 妻 だけどあれ寒いときで、地震来たときは、車っていいような悪いようなだね、車。あれで出からずいいもんね、それよりも走った方がいいもんね。

住民 19 だから訓練に役場で来て、訓練する場合って行くよ。俺らのところは床屋さんの前に集合せいというんだよ。「皆さんの意向を聞きたい」と言うから、訓練だからここに集まればいいっていうの。実際に起きたときに、どこに避難するんだって。山のそばだから、山に上がるもいいって。だけども身を隠す場所がないのに、天気の良い暖かい日ばかり来るんじゃないぞっていうの、そこら辺どう考えているんだって。

質問： そうですね、寒いですもんね。

住民 19 今ね、みんな車でパッと逃げるってするべさ、いいような悪いようなもんなんだ。先頭車が道路ふさいだら、100台列になったら、それにみんなばたしてしまいうんだから。

質問： もうそのときは、すぐにもう10分ぐらい歩いて、ダッシュと走って行かれたんですね。

住民 19 妻 あとは霧多布なら、あの津波前の十勝沖でないね、チリのときかい、あれからこっちがあれだったよ。もう近くの人、遠い人は仕方ないけど、近くの方は車一切使わないで、徒歩で逃げろというようになったようだ。

質問： じゃあ、テレビとかもつかないで、すぐバーツと出たんですか。

住民 19 妻 何もなし。だからカチャカチャカチャカ壊れてても、手も付けないで、父さんも壊れるだけ壊れておけ、構わないでおけと、そのまま逃げに行った。

住民 19 何時だ、あれ、8時半ころか、なったからみんな人間歩きだしたから、みんなうち心配だから様子見ているんだなと思って。だから俺ら、8時半過ぎてから「行ってみるか」と言って行ってきて。

住民 19 妻 この、ぼろっちいうちだけど、それは心配なくて。

住民 19 それから壊れた物を片付けたんだ。

質問： じゃあ、8時半まで向こうにいらっしゃって、8時半ごろにこっちの方に戻って来られた。

住民 19 妻 来たら今度は足の踏み場がないでしょう。危ないから物掃いてやらないと、ガラスだの何からでしょう、1日かかったよ。

住民 19 壊れても、いたわしいわけでもないけれども。

質問： 向こうの小屋の方にはラジオがあったということは、住民 19 持っていった。持っていきばかりに用意してあるんだ。

住民 19 妻 電池に付いているラジオ。

質問： 懐中電灯とラジオが一緒になっているんですね。

住民 19 妻 それが前の地震のときに、札幌の長男が2つ送ってよこしたんですよ、心配で。

質問： ラジオの電池だけが向こうに置いてあるってということなんですか。

住民 19 妻 いや、全部入っているの、背負っていくのに、みんな。電池は電池で入っているけど、予備を入れてあるんだ。

住民 19 入れて予備から何から。だからボンとリュックサック背負えば、それでいいんだ。

住民 19 妻 東京あたりだの、でかいビルおっかなくないんだろうか、あれ。かなり揺れるでしょう。

質問： 高いやつね。

住民 19 前の十勝沖のときの津波は、夏だったらこの子供たち、大方けがしたよ。命なくしたのも数多く出たよ。

住民 19 妻 ここはずっと川だったから。

質問： 凍っていましたからね。

住民 19 とにかくこの沼に運ばれたんだから、だから学校の子供たち、氷渡って逃げたもんだ。3月でまだ逃げ上がったくらいなら、ヨシが植わっているところは早く抜けるんだよ。

質問： もっと深いところは、まだだと。

住民 19 だけど3月の初めだったから、まだ大丈夫だったからよかったんだ。

住民 19 妻 だけど不便なとこだわ、ここは。

住民 19 あれが氷抜けてからだったら大変だったんだ。むしろ黙って学校に押さえておいた方がよかったのさ。

質問： 氷のところを、はって逃げたんですよ。

住民 19 うん。

(中略)

質問： 聞き忘れてしまったんですけど、リュックの中って何が入っていますか、着替えと。

住民 19 妻 着替えは別にあれして、リュックの中はね、食料品入っているでしょう、とにかく砂糖と塩と水は何もなくても1週間ぐらい、それでもってやれるというからね。それと缶詰類とかお菓子類、とにかく……

住民 19 4リッターのポリ、あれ用意してあるんだ。

質問： 水。

住民 19 水入れる。

住民 19 妻 それとかあめかい。あめってドロップのようなあめだとか。

質問： 砂糖と塩と水と、缶詰とあめ。

住民 19 妻 それとお菓子。お菓子って何ていう、そのカンパン、缶に入ったこんなようなカンパンあるでしょう、それを入れて。

質問： 着替えはいつも別に用意されていて、それはもう必ず用意して。

住民 19 妻 それにその中に今度、薬品を入れておく。薬、けがしたときのあれね。

質問： すごいですね。皆さんのうちもそうなんですかね、

周りのうちも。

住民 19 妻 やってないかね。私らの年だとね、そしたら結構重たいの下からドンと、詰めるだけ詰められるから。

住民 19 昔の十勝沖みたいに、ここに津波上がったら、あんなことではだめだな。「車で走れます」なんて言ってたってだめだ。

住民 19 妻 これにみんな入って、食料品、これ電池、ラジオ付いている電池だとか、これとね。これにお菓子だとか、これをみんな、薬入れだとか、全部ここに入れて。そのほかに今度、大事な書類だとかいろいろなものがあるでしょう、それまた別に。それは出せるのに全部入れて、枕元にみんなこうやって置いてあるから。

質問： 枕元にですか。

住民 19 妻 そう(笑) だって、その辺に置いたら訳分からなくなる。だから邪魔くさいけど、用心して3月の末まで(笑) あれのときだって……

住民 19 この年になったら、どうでもいいわなんて言うわりに(笑)

質問： いやいやいや、まだまだ、そんなに。

住民 19 妻 逃げるたってね、空手で行くより背負って逃げなくちゃね。

質問： 本当のどうでもよくなったら、もう逃げないですもんね(笑)

住民 19 妻 だって、そりゃ逃げなかったら、見てかかって、逃げる、みんな逃げるなんて…… いいんだって、じんとしていたら、みんなに迷惑掛けるもんね。役場 だって命落としたり、それまでですよ。私、今思えば十勝沖、私まだ中学生のとき、それが親たちや兄貴たちのやっているのが頭にあるから、こうやってみんなそろえるもんね。うちの兄貴は丸通の運転していたから、トラックにみんな積んで湯沸山に逃げたから、そしてテント張ってそこに10日いたからね。下が雪だったから雪掃いてさ、その辺でヨシだとか草を敷いて、むしろ敷いて、鉄道シート敷いて、あれを布団に敷いて、そこに10日いたよ、山に、霧多布の。

質問： 十勝沖のときに。

住民 19 妻 昔の十勝沖のときに。

質問： もうそのときからご家族の人は、みんな用意していたんですか、逃げるように。

住民 19 妻 そうそう。うちの父親が内地の人でね、うちのすぐ裏に井戸あったの。そうしたら地震来たら「ちょっと待っててよ」って行ったら、「みんな津波来るから」だって。「早く自分の身の周りの物だけ持って逃げれ」って。「どうしてたっけ」「井戸の水がなくなった」って。何言っているんだかと思ったら、本当に来たもんね。だから、そういうのはあるから、それでもなかったらこんな何にもやらないよね。

住民 19 昔なら、この津波なんか来るようになれば、一番先に分かるのがネズミだっていうね。ネズミいなくなるっていうね。

住民 19 妻 動物は敏感だっていうもん、何か変わったことあればね。

質問： 本能で分かるんでしょう。

質問： チリ地震のときは、もう特にここではなかったんですね。

住民 19 妻 もう私は全然、ここは何にもなかった。

質問： チリ地震のときも兄さんがまた逃げられて。

住民 19 妻 そう、水取場にいるから。2回ともやられた。

質問： チリ地震のときも10日間くらい避難されたんですね。

住民 19 妻 ねえ。新聞に七十何ぼの女性がけがして7針を縫ったって出て、「いや、どこの人だかね」と言ってたけど、うちの兄嫁さんだった。あのときは地震来ないで津波来たから、何か夜中に目開いて、兄貴は姉が2階に寝てたから、何かこう、水のような、雨も降ってないのに変だなと思って、目を覚まして起きたら、もう腰まであったっていうもん、下に下りてきたら、地震が夜中だから。そのときは逃げるのに今度泡食って、取っ払うから物をここに、泡食って地震でなく泡食って、何かやってけがしたみたいよ。

質問： それが新聞に出られて。

住民 19 妻 それが新聞に出たから、知らないから「誰か、ばかみたいにのきなこいってけがなんかして」って、うちの嫁さんだった(笑) うちの実家の嫁さんだったって。名前が出ないから分からなかった、年だけ出て。3月のあのときに、3月に来たころだから、いつまで娘が「いつまでこうやっておくの」って言うから、「お母さん、3月いっぱいこうやっておくよ」って言うの。いつ来る、3月だって油断ならないもんね。十勝沖、前のときは聞いているんだよな、波も上がったけど、氷が大きかった。うちより大きい氷、バツバタと上がって、それにほとんどやられたんだよね。

質問： 氷。

住民 19 妻 氷、3月の月、すごい氷。

住民 19 昔ならこの家の前、島あるべき、大黒島。あれスキー履けば行けるくらいの氷の詰め方したもんだもの。

質問： 流氷か何かですか。

住民 19 うん。

住民 19 妻 津波の波と一緒に上がってきちゃったの、氷が。

住民 19 だからあれ1回目の十勝沖のときっていうのも、結構氷あったんだ。

住民 19 妻 それで、あの波引いたらうちが何にもないんだよ。そうして、でかい氷がバツバタと上がって、今度煙突も棒だけになっちゃって。あれ流れないもんなんだね、あんな細いのに頭、煙突の棒だけあって、うちも何にもない。私たちの何にも被害に遭わなかったから、今度。

住民 19 俺は1回目の十勝沖のとき、俺らのおやじ、昆布採りやってた番屋、みんなぶつつぶれちゃった。

住民 19 妻 だからそのとき氷が上がったから被害に遭わなかった人たちみんな、15歳以上の人全部、1軒のうち何人いても、その氷たたいてね。3日も4日もかかったんだよ、その氷たたきのめすのに。

住民 19 あのころだから、車なんかいないもんだから。

住民 19 妻 霧多布だってこのときには、あの氷なければまだ被害少なかったと思うんだけどなと、みんな言っていたけどね。おっかないわ。

質問： どうも長い間、お昼時にお伺いして、本当にすみませんでした。

(録音終了)

(8)住民21

質問： ここは昔、昭和27年ですか、津波がこの川沿いに来たという地区だと思うんですけども、そういった地区の方を15軒、20軒ぐらいに皆さん、どうしたのかなとお聞きしているところなんですけれども、ご主人は住民21さんですよ。その地震のときは朝早かったと思うんですが、どんなような状態だったでしょうか。起きたとき、揺れたときってというのは、

住民21 最初は小さかったべさ、そのときにあっと思って起きて、それから起きるわけだ。そしてまずは津波のことしか頭にはないから、もう先に逃げる用意をして。

質問： もう、すぐ起きた瞬間、地震だと思った瞬間に津波が。

住民21 うん、その頭しかないから。もうここ川近いし、家の前はもう平らだから、来たらもう一気にいっちゃうって頭しかないから、まずは着替えしか持っていけないで、それで逃げるだけ。

質問： 寝てるときは、寝るためのラフな格好ですよけれども。

住民21 普通のね。

質問： それは着替えたりはしなかったですか。

住民21 すぐはいたよ、着替えたよ。着替えてるときに、もう大きくなってたから。

質問： もう揺れが収まる前から、着替えていたと、逃げようと思って。

住民21 そう。

質問： これは素早い行動ですよ。

住民21 まあ、奥尻のあれがあるから、何分とも言われないうし、まずは。

質問： やっぱり奥尻の記憶っていうのが。

住民21 はい、海近いからさ。よその人はどうであれ、まずは津波のことしかないから。

質問： すぐに着替えて、その後はどうしました？

住民21 その後は車で高台っていうのかい、その方に。

質問： こっちの厚岸の方に。

住民21 いや、その上の方に兄貴いるんだわ、うち建てて。そしたら、そっちの高いとこまで。

質問： そのときにはご家族一緒で。

住民21 みんな一緒。

質問： 家を出るのは、だいたい地震からどれぐらい、何分ぐらい？

住民21 10分もしないべな、したか。

住民21 妻 揺れ収まったときには、もう。

住民21 逃げる用意だからな。

質問： そのときはご家族の方は、もうすぐ逃げる態勢で。

住民21 起きてる、もう子供たち起こして。

質問： 子供さんたちは寝てたんですね。

住民21 そうそう。

質問： 奥さんも同じように寝てて。

住民21 そう。

質問： 皆さん、地震のときには就寝中。

住民21 もうみんな一緒に逃げる用意ですね。

質問： 地震、津波っていうふうな思っているのは、奥尻のことを思い出したって言いましたけど、やはり昔の記憶というか、この地域の記憶というのがありますか。

住民21 うん、そうだね。まずは地震が来たら津波だった

よ、それしか頭にないからね。

質問： そのころはまだ27年のころは、ご主人もまだ。

住民21 分からない、分からない。

質問： そういう話っていうのは、何かご家族とか近所の人から聞いているわけですか。

住民21 いや、まずね、この川伝わって船も一緒に流れていったとかっていうから。

質問： もうご両親なんかもずっとここにいらっしやった？

住民21 元はここでないけど、近くにいたんだけど、それは言ってるから。

質問： じゃあ、親御さんから、よく昔の話は聞いていたと。

住民21 うん。

質問： やはりこの川沿いの人を聞いてみると、避難が早いですよ。

住民21 そうだね。どうしてもあっちの方に行けば行くほど、全体的に高くなっていっているでしょう。浜から見ても、こう高くなるから、あのときは浜の半分くらいまで来たっていうんだね、あっちの方はね。でもこの辺ならある程度は走ったりするんだ。

質問： そうですね、川沿いを沼の方まで来たという話ですよ。

住民21 そうです、行っちゃうからね。どうしてもこの辺は平らだから。

質問： そのときはたぶんもう少し時間が、もう少しというか時間が30分ぐらいたってから来たらしいんですけども、もう素早くっていうのは、これはやっぱり奥尻の記憶ですか。

住民21 だべね。津波来てから逃げたって間に合わないもん。

質問： ご主人はご職業は漁師さんか何か。

住民21 漁師。

質問： そうすると船の心配なんかもしてる心配はないと。

住民21 まあ、船見に行ってる間に津波来てからでは遅いから、船はどうもならないなと思って、一応は逃げただけ。

質問： もうとにかく、命あっての物種じゃないけど。

住民21 と思う、考えはね。命なくなっちゃったら、何もできないもん。

質問： そうですよ。その後、何回か十勝沖の27年の後、何回か地震があって、この辺でも警報とか出てたんですが、そういうときにもやはり素早く逃げたんでしょか。

住民21 逃げてたね、やっぱり高台に。

質問： この辺だと釧路沖地震とか十勝沖 東方沖地震ですか、最近ありましたね。

住民21 東方のときは何て言ったのか。

住民21 妻 1月15日は何だっけね。

住民21 東方だべ、違ったか。十勝じゃない、1月、10月は来たのは釧路沖じゃなかったかな。

質問： 釧路沖、そうでしたね。

住民21 9月か10月に来たときは釧路か、そのとき昆布やっていたもん。

住民21 妻 うん、昆布時期だからね。

質問： 10月のころは、やはり逃げて。

住民21 逃げた。逃げたよな。

住民21 妻 逃げた。

質問： 釧路沖ですよ。

住民21 そう。確か昆布やっていた、乾燥機に昆布あったな。

質問： 東方沖のときも、あれは1月でしたか。
住民 21 1月は羅臼の方に稼ぎに行っていたから。
質問： そのときにはご主人はいらっしゃらなかったと。ご家族の方は、そのときは逃げましたか。
住民 21 妻 そのときも逃げましたね。
質問： そうすると大きめの地震があったら、素早く逃げるというのが、もう毎回のことという。
住民 21 そうだね。うちにはいないね、地震来ては。
質問： だいたいそのお兄さんのところに行くっていうのは、やはり定番ということになりますか。
住民 21 うん。どうしても子供たちいるから、どうしても。そして高いし、まずはうちだからさ。
質問： これは町内の地図があるんですけども、町内のお兄さんのお宅っていうのは？
住民 21 これ。
質問： ここですか。一番高いところ、奥ですね。ここは何ていうか、町からはここに逃げなさいみたいなのところっていうのはあるんですか。
住民 21 ある、山とこっち。ここでいえば高島。
質問： 高島さんの裏山と。
住民 21 高島これかい、この裏にあるでしょう、そして神社。
質問： ここはこっち側ですかね、地域的に言うと川のこっちだから。
住民 21 妻 ちは神社。
質問： あまり神社に逃げる人はいないですか。
住民 21 神社に逃げるっていうより、神社に逃げても隠れるとこないし。
質問： 何にもないですもんね。
住民 21 だからこの道路あるでしょう、ここにみんな車を置いて、やっぱりここまで来るっていったらかなりなもんだから。
質問： そうですね、かなり高くなっていますからね。
住民 21 ここにはかなり並ぶんだよね。でも俺は兄貴が高いところにいるから、まずはここに。
質問： やはりこのご近所の方なんかも、逃げているのは早いんですかね。
住民 21 と思うんだけどね、ここは川近いだけに、川に沿って上がってくるからさ。
質問： 分かりました。やはりでも、お若く見えても、そういった経験というのは、しっかりと伝わっているってことですよ。
住民 21 と思うんだけどね。
質問： 分かりました。どうもありがとうございます。やっぱりいろいろ聞いてみると、川沿いの方本当に早いですけど、さっきも一番奥の住民 26 さんに聞いたんですけど。
住民 21 住民 26 じゃない。
質問： 住民 26 さんか。住民 26 さんに聞いたんですけど逃げなかったと。結構あそこ近い、海沿いなんですけどね。
住民 21 そして裏山あるから、なおさらでないか。あそこら辺は、こう高くなっているから、そんなに来ないって言うんだよね。どんどん、こっちから行っても分かるように上がってくでしょう、なんぼがた道路。
質問： そうですね、何となく上がってますね。
住民 21 だから 27 年のとき、十勝かい。あのときは浜半分くらいまで来たけど、うちまでには来ないって。だ

から今回は自分で残っている人、結構いるもんな。
住民 21 妻 うん、向こうはね。ほとんど、うちから逃げたっていうのではないよね。
住民 21 こっちの方に逃げたとか、住民 27 さんの方に逃げたっていうのではないんでない。
住民 21 妻 ほとんど川からこっちの人は逃げたみたいだけだね。
質問： 川から、こっち側。
住民 21 妻 向こう側、奥へ。
住民 21 あっちへ行けば行くほど、またある程度低くなっているでしょう。だから、あっちのほど来たら。
質問： 昔の方も、何かあの辺、住民 28 さんとかあのあたりは、何かさらわれたみたいですね。
住民 21 妻 そうですね、それが一番すごかったらしいですね。
住民 21 だからどんどんやっぱり、ある程度、低くなっていくのかね、あっちへ行けば。
質問： 浜の幅は結構、真ん中の方はありますけど、来ちゃうんですね。
住民 21 うん、どうしても平らな方がね、丘ほど波高くなってくるんだもん。
質問： それで川沿いを上がるっていう話は、よく聞いているということですが、津波についての何かそういった豆知識じゃないですけど、知識みたいな、こういうときには注意した方がいいとか、そういうのっていうのはお聞きして。
住民 21 妻 あんまりね、地震イコール津波っていう感じで。でも大きい地震あったら、逃げる、まずは逃げるしかね。
質問： 地震があったら、もうすぐ来るかもしれないと、早く逃げろという。
住民 21 それしかないから。もう後は逃げるだけだね。
質問： 地震の津波が来るときには、まず引き波から始まるなんて話をする人もいるんですが、それはどうでしょう。
住民 21 そうじゃないかい、引くよね。この間あたりでも引いたときに、昆布採りの船、アンカーってあるんだけど、それは引いたときにアンカーごと引けちゃったんですって、利かないから。それで船よけてもらって、かっぱがったんだ。
質問： 何か2隻ひっくり返ったっていうのは、その引きで。
住民 21 うん、その引き波のときに、アンカーも引っ張られたっていう感じだね。それで船がよけてもらって、かっぱがったらしいね。
質問： だから海を見ていて、引き波を注意してて、引き波になったら逃げるなんていう人もいたんですけども、どうでしょうかね、そういう。
住民 21 そんなでっかくした岸壁行って、海眺めてる状態なんかないべさ。
質問： とにかくいつ来るか分からないから、早くってことですね。
住民 21 そうです、後は放送を待つ。
質問： 放送はお聞きになりました、その日は。
住民 21 まあ、相当びっちり。これと、消防団の方、出歩いているからね。
質問： それのタイミングとしては、ここで避難を取りあえずしてくださいみたいな呼び掛けを聞いて、出てるっていう時間的なタイミングになりますかね。

住民 21 いや、その前、その前。
質問： その前ですか。
住民 21 もう放送かかる前だもん。前にはもう逃げている
っていう状態。とにかく地震が収まったら逃げてると。

質問： 早いんですね。
住民 21 だって早く逃げないと死んじゃうんだよ。
質問： それはでも、本当にいいことだと思いますが。
住民 21 来てからじゃ遅いよ。
質問： そうですよ。やっぱり情報待ちっていうのも、遅
れちゃう原因の1つになりますからね。そうすると、
その放送聞いたのは、もう外で、外でも聞こえるん
ですか、そういう放送は。

住民 21 妻 外の放送も入るんで。
質問： じゃあ、もう逃げてる最中に何か流れているって
いうのは、お聞きにはなっていると。消防団、そこに
何か消防車がありますが。
住民 21 消防が出るからね。

質問： あれは消防団ですよ。
住民 21 妻 ここは団です。
質問： その人が広報車で、津波警報出ていますって。
住民 21 走って歩いて。
質問： それももう聞いたのは、避難した後に。
住民 21 上でね。
質問： やっぱり早いんですね。はい、分かりました。どうも
ありがとうございました。やっぱり住民 21 さんのお
っしゃるように、地震イコール津波、早く逃げるっ
ていうのがまず第一だと思うんですけど、なかなか
逃げない人もいろいろいるわけですよ、いろいろな理由でね。

住民 21 いるね。
質問： それを何とか早く逃げるようにならないかなって
いうのが、研究の主眼なんですよ。ですから住民 21 さん
のような方が、お手本ということで(笑)。

住民 21 でもそれが普通でないのかな。
質問： そりゃそうなんですけど、何かみんなゆっくりして
いる方が、この町でも多いんですね。

住民 21 中にね。
質問： 結局、昔も 27 年のときも大丈夫だったし。自分の
場所は大丈夫だったし、何回か津波警報出ているけ
ど大丈夫だったから、大丈夫だろうみたいな、そん
なお気持ちの方もいらっしゃるので、でもたぶん大
きいのが来たら危ないと思うんですよ。

住民 21 妻 うちがもう、何が何でも逃げてるんで。
住民 21 人がどうであろうと、やっぱりうちはね、そう
いう方法でやってるんで、まあ子供もちっこいからね。
質問： お子さんとかお年寄りなんかは、避難するときに時
間がかかったりすると思うんですが、そのあたりは
やはり。

住民 21 でもうちのあれでないか、母親方はその経験があ
るから。

質問： 早いですが、やっぱり支度は。
住民 21 早いっていうもんでないべな。
住民 21 妻 一番だよ、うちの母さんは早いよ。
住民 21 何でも戸を開けることも先決だね、どうしてもね。
質問： そうですか、お母さん早いんですか。
住民 21 妻 玄関の戸が一番先に開けるよ。

住民 21 開ける。
質問： 玄関のドアを開けて、逃げる支度も早く。
住民 21 うん、早いわ。
質問： そうするとお母さんの気持ちが、みんなに伝わって、
早く逃げなきゃっていう感じ、これちょっと 専門
でも無理だから。

住民 21 妻 でも父さんいるときから、もう地震来たら逃げ
るっていうのは、私お嫁に来てからずっと地震ある
たびに言われてましたね。

質問： お母さんというのは、ここにずっとお住まいですか。
住民 21 さん、だんなさんもずっとこの場所って
いうことですか。

住民 21 そう。
質問： 家の中で寝てる場所っていうのは。

住民 21 親は奥の方ね。
質問： 親は1階で。

住民 21 子供たちとうちらは、上で。
質問： じゃあ、2階でガタガタやって下りてきたときには、
お母さんもいろいろ起きて。

住民 21 妻 ちょうどね、この間の地震のときは不幸あって
町の方にいたんで、泊まっていたんで一緒ではな
かったんですけど。

質問： じゃあ、お子さんだけだったんですね、そのときには。
奥尻のときなんかは、高齢者の方が結構亡くな
っているんですけども、津波でね、やはり足がご不
自由とか、そういうのがあって避難に手間取った
ということがあるみたいなんですけど、この方も
ちゃんと足もしっかりしているし、問題はあんまり
ないですね。

住民 21 うん、元氣。
質問： 分かりました。どうも、ありがとうございました。
おくつろぎのところ、昨日も何か出掛ける前に急
に伺いまして、ありがとうございました。貴重な
お話を聞き……

~~~~~  
質問： 着替えはいつも。

住民 21 妻 うん、ひとまとめにして、廊下、踊り場の階  
段の踊り場のところに、持ち出しやすいところに  
置いてあったのを、それだけ1つ持って逃げたんだ。

質問： いつもそういうふうに準備している。  
住民 21 妻 いつもっていうわけじゃないんですけど、でも。

住民 21 前の地震のとき。  
住民 21 妻 いや、この地震来る前にテレビで地震の話が  
結構出てたんですよ。それでお父さんが「用意  
しておけよ」って言ったのを、たまたま用意して、  
それをただ1つだけ持って。でも今はもう常備入  
れて、いつでもそれ1つ持っていけば、まずは着  
替える分だけは大丈夫なように。あと薬とか、  
カットバンとかそういう、ちょっとした薬品と。

質問： もうそこに入っているんですか。  
住民 21 妻 そうです。電池とかも枕元に置いたり。

質問： その日、やはり停電しました、今回？  
住民 21 妻 停電しました。

住民 21 だから、これ電池入ってればいいんだけど、  
電池入らないとこなら、放送は。

質問： そうですね。住民 21 さんのところは、電池は  
入れ替えたりしてる？

住民 21 妻 いや、入れ替えてないけど。

住民 21 だけど、ここへ地震来たらここにいないから。  
質問： もう逃げるんだ。  
住民 21 兄貴のここにも付いているから、いいんでないか。  
質問： 懐中電灯も、それじゃあ、枕元に置いてあるんですか。  
住民 21 子供たちも持っているよ。  
住民 21 妻 そうですね、だいたい部屋1つずつくらいには、みんな寝るところには。  
質問： それは多いですね。  
住民 21 この間みたく、明るくなったときの地震ならまだしも、暗いときに停電になってからじゃあ、どこ歩いていいかわからないんだもんね。だから、みんな各自1個ずつくらいは持っているんだな。わあ、朝雪だ。  
質問： ちょっと雪多いですね、最近。  
住民 21 今年っていても、去年が少ないんだよね。  
質問： だいたいこの辺って、前も来たことあるんですけど、釧路沖地震とかのときに、晴れが多いような印象なんですけど、冬は。  
住民 21 ほとんど晴れる。  
質問： 何かからって晴れて、気持ちいい。寒い寒いんですけどね。  
住民 21 雪ないから寒いんだ、やっぱり。天気いいとどうしても寒いでしょう。  
質問： そうですね、風もあるし。分かりました。ありがとうございました、いろいろいい話を。  
(録音終了)

(9)住民 24

質問： 当日って、避難されました？  
住民 24 されました。  
(中略)  
住民 24 今回は、着替えをしながら、どうしようかな、おそらくここまで津波が来たら、おそらくだめだろうと、全部が。でもやっぱり避難しないことにはと思って、着替えをして間もなくだから、地震が終わって、5分くらいあったかな。  
住民 24 長女 5分 もあったっけ？  
住民 24 そんなに時間は長くないはずだわ。  
質問： 町からの警報は？  
住民 24 警報は何も聞かない。聞かないし、おそらく入らなかったよね、いる間はね。  
(中略)  
質問： 結構ものすごく早く逃げられたんですね、ということは。  
住民 24 そうだね、わりと私はあまりどきどきも何もしないで、とにかく、少し揺れて、これは、大きくなるかなと思って、起きようと思っている寸前だから、自分で起きて、まずたんすとかを押さえたんだけど、そっちに寝ているから、よくドアとかが開かなくなるというから、まずドアを開けて、来ようとしたら、その茶たんすの中のものが、全部ガチャガチャ落ちてきちゃったのさ、瀬戸物が。そうしたらもう行かれないでしょう、足、はだしだし、そこでじっとしていたんだよね。  
上で子供たちが寝ているから、あまり大きい声を出すとびっくりしちゃうから、だから少し黙っていて、そう

したら下りてきたから、そうして、すぐ着替えをさせて、私も着替えをして。だから何も片付けなくて、ただ本当に大事なものをちょっと持つぐらいで、それでただ飲み物とパンとかそれを持って、そして徒歩で、車を使っても込んだりするとだめだなと思って、車は置いて、徒歩で避難所ってあるでしょう、そこの上にあるんだ、神社のちょっと下の方に、そこに行ったのね、そのときは一番乗りだったね。誰もいなかったね。

住民 24 長女 大していなかったよね。  
住民 24 それと私たちがそこへ上がっていく、友達のうちの家族が上がってきて。  
住民 24 長女 山まで登ってきてる人、少なかったよね。  
住民 24 そうだね。  
住民 24 長女 ほとんどその上の道路のところさ。  
住民 24 車が、おそらくずっと並んだと思うんだよね。結局、車が流されてはもったいないとやっぱり思うでしょう、みんな。だから車をとにかく上に上げなきゃということ、上の道路に。だから上の道路は、わりと結構いっぱいだったみたい。  
住民 24 次女 本気で、展望台に行った人もいたよ、2家族ぐらいかな。  
質問： 皆さん、結構車で逃げられたみたい。  
住民 24 ここは車だわ、みんな。だから車で逃げたんじゃ、きっと込むだろうなと思ったから、私たちは歩いていこうって。だって結局、車で行って流されても、車くらいならしれているけど、人間はね。そして、歩いた方が早いさ、車より、すぐそこだから。あとの人は上がってこなかった人は、床屋さんのところでうろろしていたみたいなんだけど、分かりますか。だけど、ある程度は津波の心配もないよだというので、帰ってきたみたいだし。  
住民 24 長女 でも潮、引いたときには、ちょっとびっくりしたよね。だいぶ引いたよね。  
質問： 分かりました？  
住民 24 分かる、分かる。  
住民 24 長女 分かった、分かった、すごかった。  
質問： どれぐらい？  
住民 24 次女 来る来るってね。  
住民 24 そうですね、岸壁の……  
住民 24 長女 テトラぐらいまでいったっけ？  
住民 24 私たちが見たときは、大した引き方じゃなかったね、一番最初で。だいぶたってからだよ。  
住民 24 次女 うちら戻ってきてから津波が来たって……  
住民 24 戻ってくる前に1回、潮引いたんだわ。だからあれは、地震から30分くらいたっているんじゃない？  
住民 24 長女 結構たって、潮が引くのも遅かったでしょう、結構。  
住民 24 津波は来ないのか、来ないのかと、あの上から丸見えなのね、海が。そう言っていて、あれしていても、その逃げた時点では来ないし、やっぱり30分くらいたっていたかもしれないね。  
住民 24 長女 結構たっていたよ。  
住民 24 たっていたよね、1回目のときね。  
住民 24 長女 来ないと言って帰る気はしたけど、潮引いてきてさ。  
住民 24 まだあのかは、帰るというんじゃないのか。来ないね、来ないねと言っていたときは、一緒に逃

げていたその久保田のおばさんが、昔あった、久保田清三さんかな。こっちが久保田何とかさん。

質問： 清三さんか、清作さん。

住民 24 清作さんか、浜の方。清作さんとじいちゃんとはあちゃんが、2人して歩いてきたのさ。それで一緒に逃げたという感じだったの、そこまで一緒だった。私が出たら、来たんだよね。そして逃げるところが一緒に避難したのね。

質問： そこから一緒に逃げたという。

住民 24 そうい感じ。私たちの後ろに付いて来ていたでしょう、じいちゃんは体が悪いから。

住民 24 次女 私、抜かしたんだよ。

質問： ここは、お2人暮らしなんですね。

住民 24 だと思うね。じいちゃんが何か心臓が悪いんだ。だから車は運転するんだけど、車には毛布とかは積んであるんだと、おばさんは言っていたけど、やっぱり車だと危ないと思ったのか、リュックを背負って逃げてきたね。

(中略)

住民 24 ここはわりと地震が多いでしょう。太平洋プレートがどうのこうのと、よくテレビでやっているでしょう。小さいときから地震というのは、そんなにね。私は小学校の5年生のときにも来たもんね。5年生か6年せい、あのときは、震度5ぐらいかな。そのときは、ずっとそっちの展望台の近くの方に親戚があって、そこに避難したんだ、私だけが。

住民 24 長女 1人で？

住民 24 ママに連れていってもらって。津波って、あのときは、岸壁にあった車が2~3台、おそらく津波に流されたはずだから。渦を巻いて潮が引いていくのグーッと、こう水位が下がるというの、潮が下がるということだね。潮が引いて、引いて、引いてというってから、ブクブクと今度は水位が上がってくるんだわ。そして、きっと渚に来て、波になるというのかな。だから、はるかかなたから波がこう来るんじゃないと思うよ、私、津波って。あの奥尻のは、テレビの『九死に一生』でどこかだ、はるかかなたからこうやって来ていたけど、でもああいう津波ではないと思うね。

質問： 渦を巻いて引いていって。

住民 24 引いていった。だからこのたびも、この築港というか、岸壁の間口のところに渦を巻いているんだ。グーッと引いているんだよね。潮が引いていくというの、あれ？ でもその後は何も、今度津波らしい津波が来ないんだよね。

住民 24 長女 でも、怖かったって言ってたよ オリ、友達は何かその方が軽く来たみたい。

住民 24 私が、だから見ているときは、きっとあれが津波なんでしょう。テトラポットってあるでしょう、あのつながっている。パチャン、パチャンと来るわけ。本当に波がパチャンとぶつかる感じ、何で波もないのに、あれが津波っていうのかみたいな。

住民 24 長女 でもその後、来てたでしょう。

住民 24 その後、今度私が、大した津波じゃないけど、うちがひどいから帰ってきたの。

質問： 何時ぐらいですか。

住民 24 あれは帰ってきたのは6時半近いね。うちの旦那が、そのとき別海にいて.....

住民 24 長女 そこから帰ってきて、6時ぐらいに帰ってきたでしょう。

住民 24 地震の後、すぐ別海から走ってきたのさ、心配で。

質問： 別海？

住民 24 別海町ってあるんだ。きつとうちの旦那が1時間ぐらいで来たと思うから。

住民 24 長女 別海町は大して被害がなかったらしい。

住民 24 6時ごろおそらく着いたと思うんだよね。

住民 24 長女 6時ぐらいに着いたんだよ。よく来たねと言って、それで少し見えて、6時半近くだよ。

住民 24 そうだね、6時半にはなっていないね。

住民 24 長女 そしたら別海は大したことないって言われて、おばちゃんも言っていたよ。コップ2~3個しか割れるぐらいで、大したあれじゃなかったって。

住民 24 やっぱり場所なんだ、これ。

住民 24 長女 厚岸も大してひどくなかった、床潭はひどかったらしい、一番。

住民 24 被害の状況を見ればね。

(中略)

質問： じゃあ、地震が起きて、すぐ起きちゃって。

住民 24 長女 起きてというか、その何日前に、地震が、ちょっと小さいのが来て、妹と同じ部屋で寝ていたから「怖い」と言ったから、「そんなの、何ともない、寝ろ」と言って、寝て、またそのときも、大きく来る前に、小さいのが軽く来たの、最初の方。だからまた「怖い」と言うから、何ともないという気がしたら、いきなりだものね。ぐらぐら揺れて、机のものは全部落ちる、鏡台は斜めで、引き出しは、中が全部出るで。

住民 24 わりと長かったよね、揺れの時間はね。

住民 24 次女 押入れもごちゃごちゃになったというか、戸が外れたでしょう。あれ、外れなかった、押入れ？

住民 24 長女 そうだ、そうだ、押入れの戸も外れた、私の.....

住民 24 でもあのぐらいなら、本当に軽い方だと思う、うちは。

質問： 最初軽く揺れたので気付いて、話をしていたらガーッと来た。

住民 24 次女 ガーッと、ビビった。

住民 24 長女 また小さいのだろうと思って、何ともないという気がしたけど、もう揺れて揺れて。

住民 24 次女 電気つけると言われたけど、電気は.....

住民 24 長女 電気はつかないし、テレビもつかないし。

住民 24 こっち停電になっちゃったものね。だけど、結局、時間がそういう時間だから、夜明けだからもう、だから外も明るかったから、そんなにおっかなくはなかったけど。

住民 24 次女 ドアを開けて。

住民 24 長女 とにかくドアを開けると言って、ドアを開けて。

質問： それは揺れている間に？ 止まった後に？

住民 24 長女 終わってから。揺れているときはもう動ける状態じゃなかったから。

住民 24 動けないね、あれは。あれでやたらめったら動くと、けがをしたかもしれないし。かえってじっとしているか、何かのものの陰になるか、よく机の下に隠れなさいとか言うでしょう。机の下に隠れるのが一番無難かな、やっぱり、あれば。

質問： お母さんはそこら辺のところで立っていたんですね。

住民 24 そっち側のドアのところでした。

質問： 2人はずっと上で？

住民 24 長女 2階にいて。

質問： 寝ていて。

住民 24 長女 寝ていて、私はふとんにいた。

質問： ふとんにずっと、2人とも？

住民 24 長女 ベッドが倒れてくると思って、ずれて、私はとにかく絶対倒れると思ったから、ベッドにつかまって、倒れたときに、自分もジャンプして、何ともないように準備をしようとしていたけど、止まったから、とにかくベッドをつかんで、そういう感じだった。

住民 24 でもやっぱり2回、その前に大きいのが来ていたから、釧路沖とあれと。だからわりとおっかないとか、足が震えるとかというのは、全然私はなかったね。

住民 24 次女 私、ずっと足が震えてた。私、1人のとき、新聞読みにきたときもなかなか震えていたよ、あり得ないくらい。

住民 24 おっかなくはなかったね、全然。

(中略)

質問： 地震があった後に、すぐ下の方に2人とも下りて、それは避難しなきゃと思って下りて？

住民 24 長女 そう、絶対に津波来ると思って、誰か絶対死ぬと思ったから、とにかく自分の大事なものをに入れて、そこら辺にあるもの、服を着て、「危ないから靴下をはけ」とか言って、靴下も全然ちゃんとはいていないけど、もうとにかく何でもいいからはけと言って、下に下りてきた。

住民 24 大事なもので、何を持ちましたか。

住民 24 長女 絶対、友達は誰か津波で死ぬと思ったから、学校で撮ったカメラと、あとプリ帳、プリクラを張っているやつ、思い出に、死んでも大丈夫なように、それと、お金も大事だと思って、お金と、あと携帯をやっぱり連絡を取るようにと、携帯。

住民 24 次女 でも、あれ電池なかったんだよね。

住民 24 長女 電池、1個しかなかったけど、持たないよりはいいと思ってすぐ持って、とにかくリュックに詰め込んで、そこら辺にある服を適当に着て。

住民 24 長女 私はお金だけ。

住民 24 だから着替えをひと替わりと、結局、大事なものを詰めて、着替えをして下にもう1回下りておいでと。そうしたら、私は、とにかくスリッパを投げてくれと言って、スリッパを履かないと来られないから。

住民 24 次女 全部落として、スリッパに付いているかどうか分からないから。

住民 24 長女 でも私、それで気付かないで足切ったけどね。

質問： 足を切った？

住民 24 長女 切った、気付かないで、何か痛いと思ったら、血が出ていて。

住民 24 そんな、ビューッと切ったのじゃないんだけど。

住民 24 長女 ちょっとシュッと切ったくらい。

質問： だけど、けがですね。

住民 24 次女 あと靴をちゃんと履けと言われた。

住民 24 長女 とにかくパンとアミノサプリを持ってね。

住民 24 やっぱり避難をして、長いとおなががすくでしょう、朝起きたばかりだから。だから結局、手ごろなものと言ったらパンだね、パンと飲み物と。

住民 24 長女 ちょうどたまたまあったんだよね、あれ。

住民 24 買ってあってね。

住民 24 長女 昨日買ってあってね。

質問： 地震が来たら津波だというのは、やっぱりそう思う？

住民 24 昔から結局ここは.....

住民 24 次女 学校で勉強していたから。

住民 24 長女 学校の避難訓練も、やっぱり津波ということで。

質問： その小学校？

住民 24 長女 私は中学校だけど、小学校のときから言われていたから、地震が来たらもう津波だって。

住民 24 ここは海がそばだから、まず津波だね。地震よりも津波でしょう。結局、ここで地震がなくても、昔のチリ地震というんですか。あれでも津波が、ここより浜中の方が強かったけど来たでしょう。向こうからの津波が来たから、だからやっぱり津波がおっかないんだよね。だから昔の人は、結局津波、津波という頭があるから、地震が来たら、とにかく津波というのがあるでしょう。

住民 24 次女 あと、船が沖に行ったんだっけ？

住民 24 長女 それは、だいが昔のやつでしょう。

住民 24 いや、津波が来ると、結局.....

住民 24 長女 今回はね。

住民 24 船って、岸壁に船を付けるでしょう、大きい船とか。ああいう船は、結局そこにあったら、津波で倒されちゃうから、みんな船は沖に出るの。沖で避難するというのか、それはやっぱりみんなやっていたね。

質問： ここでもですか。

住民 24 そうです。どんな地震のときでも結局、岸壁に船を付けてあると、みんなそういうふうにするわけ。今回も早かったね、みんなわりと。

住民 24 長女 その次の日とかにも、すぐ地震が来たでしょう、あれ。震度4が来たでしょう。私学校に行っていないかったし。

住民 24 次女 私1人.....

住民 24 でも、あれだけの地震を体験するから。震度4くらいが来ても、一応はうんと立つ気がするんだけど、止まる、止まるみたい。

住民 24 次女 私、はって外へ出た、1人でいたからね。

住民 24 気持ちにやっぱり余裕が出てくるんだよね。

住民 24 長女 私は学校にいたから何ともなかったけど。

住民 24 次女 私、家で1人でいたから外に出た。

住民 24 長女 怖い。私は、大してそのときの地震の記憶がなかったから、大して怖くはなかったけど。

住民 24 次女 私はバリバリ記憶があるよ。

住民 24 長女 妹は記憶があったから。

質問： やっぱり怖かった？

住民 24 長女 怖くて。次の日も寝るときも、「怖い、怖い」とずっと言っていた。

住民 24 だから阪神・淡路、ああいう地震は、ここみたいに震源がどこか向こうで起きたものが来たわけでしょう、地震がここに。だけど、阪神・淡路は、ここで起きたものがここに来たわけでしょう。だからあ

れだけの被害があったんでしょ。だけど、こっちは直下型ということはないんじゃない？

質問： 津波ですね。

住民 24 だから震源地が沖だからさ、結局。この地盤の下での震源というのは、こちら辺はないんじゃないの？

住民 24 長女 マグニチュードは大きかったけど、そっちよりは。

住民 24 大きかったけれども、あっちの地震とは、また違うんじゃないだろうかね、こっちで起きる地震はね。津波もここはあれなんだよ、霧多布とかってあるでしょう。

質問： 奥の方ですね。

住民 24 あっちの方が強い、津波。ここは小島と大黒島ってあるでしょう。それで、何か波がかわすといったらおかしいんだけど、グーッとくる波が、そこでかわして散布の方面の方に潮の流れが行くと聞いたことがある。

住民 24 長女 止めているんじゃないの？

住民 24 まるっきり止まるんじゃないんだ。やっぱり潮の流れってあるから、それでそっちへ行くから、床潭というところ自体は、昔は津波が来たというんだけど、そんなにはかみたくないのは来ないんじゃないかという話も聞いたことがあるよ。だから島が2つ、小さいのが2つあるおかげで違うんじゃないかとは言っている。このたびも、小さい船は2つぐらい引っくり返ったんだわ、津波で。そのぐらいの被害で終わったから。

住民 24 次女 そうなの？

住民 24 引っくり返ったんだよ。

(中略)

質問： その日、1日停電だったんですか。

住民 24 長女 結構停電だったよ。

住民 24 お昼過ぎ。昼過ぎか、あれ、11時か、昼過ぎか。

住民 24 長女 1回お母さんと ホッちゃんどこか買い物に行ったでしょう。そのとき一瞬だけついたの、ピカッと電気が。1人でうちにいたんだけど、一瞬ついたけどすぐ消えちゃったからさ。それから全然つかなくて。

住民 24 お昼ころまでかな。

住民 24 長女 お昼ぐらいにテレビを見ていたよね、確かね。

住民 24 お昼ごろ近くまでは停電だったから。

住民 24 長女 テレビもつかない、何もつかないよね。ラジオをずっと聞いていたという感じ。

質問： ラジオを聞いていたんですか。

住民 24 長女 全部、学校情報も全部、ラジオを聞いて。

住民 24 次女 休みとか。

質問： ああ、そうか、土曜日だ。

住民 24 次女 金曜日だよ。

住民 24 防災無線は何も入らないもんね。

住民 24 長女 確か入らない。でもずっとウーッと聞いていたよね。

住民 24 ウーしか聞こえないもんな、しゃべってる声は聞こえないな。

住民 24 長女 ほかは全部ラジオで。

住民 24 そういっちはお兄さんに言うよりも、役場に言わなきゃだめなんだよな(笑)。

質問： 僕らはそういうのを勉強しているというか、調べて

いるので、地震のそのときに起きたのどのというよりも、どうやって安全に逃げるかとか、どういう情報を流すかという、そっちの方を調べているんですよ、文系なので。

住民 24 長女 ラジオも、学校情報は何回も流れていたよ。

住民 24 ラジオが何よりも、結局テレビは電気がつかないと、テレビって見られないでしょう。ラジオは電池だから、携帯に持っていけるし。持っていったんじゃないか、ラジオ、持っていったよね。

質問： ラジオ、持っていきました？

住民 24 持っていった、店のラジオ、あれ、持っていったんだ。

住民 24 長女 持っていったけど、電波がなくて聞こえが悪かったんだっけ。

住民 24 聞こえは悪いけれども、それでも.....

住民 24 次女 車の中でも聞いていたでしょう。

住民 24 車あった、おじ来たからさ、車で聞いたり。

住民 24 長女 ラジオとかで聞いたりとか。

住民 24 やっぱりラジオが一番情報が早いね、テレビはだめ。

住民 24 長女 全部つぶしていたよ、ラジオね。「連絡が入りますが、地震情報です」みたいな。

住民 24 そう、その日1日はずっとね。これだけ大きい地震だから情報がないと、私たちも、うちから出て逃げてしまえば、もっともテレビもそこにはないし、やっぱりラジオだものね。

質問： どういう話をラジオでもっと知りたかったとか、そういうことについては。

住民 24 結局ラジオでもテレビでもそうだけど、大きい町ばかりが写るでしょう、釧路なら釧路とか、田舎は写らないんだよ。そうしたら釧路もそうだけど、私たちは田舎に住んでいるから、そういうところの情報を、やっぱり自分のところの情報が欲しいよね、誰しも、どういう状況になっているとか。自分のところの情報だよ。

住民 24 長女 どこかそういうところを聞いても意味ないでしょう。

住民 24 そういっちはばかりが入るでしょう、ラジオは。(中略)

住民 24 昔の経験上、結局このそばがもう川でしょう、ここは浜で。これがうちの実家の浜なのさ、川のすぐここが。だから川伝いに来るからおつかないというのは、昔から言っていたよね。

質問： それはやっぱりそう覚えている？

住民 24 うん。

住民 24 次女 ばあちゃんが言ってたんだよ。

質問： それは聞いたことはある、川のところとか？

住民 24 長女 微妙。

質問： あまり川という意識はない？

住民 24 長女 川はない。

質問： ただ、津波はここは怖い。

住民 24 長女 でも学校では言っていた。昔すごかったって、この川が。

住民 24 だって川だって、昔はこんなコンクリートなんてやっていないから、このコンクリートをこうやって川を直したのは、31年、32年ぐらい前だわ、直し始めたの。それまでなんか、ただの川だもの、コンクリートも何もない。私が小学生ぐらいのときだから、

後半ぐらいだから。こういうふうになってから、30年あまりたつんじゃないの、これ川。こういうふうになったから、いいか悪いが、それは知らないんだけど、それだけの津波が来ていないからね、こっちはね。

住民24 次女 でもやってないよりはいいんじゃない。

住民24 長女 でも川なんて、意識はないよね。

住民24 でも、やっぱり川があるからというのでって、この辺の人は避難するのさ。

住民24 次女 そうなの？

住民24 そう、そう。

住民24 次女 私、ただ川なんかもあれだよ。草もぼーぼー生えて、何か.....

住民24 長女 生えているから流れているのか、流れていないのか分からないような。

住民24 津波というのは、ゲーンと来るじゃない。そして、川って細いでしょ。

住民24 長女 勢いがすごいということでしょう。

住民24 勢いよくグーッと入ってくるの。波がこの川にグーッと。それでもってこの沼まで押し寄せられて、またさらにこの沼で、そっちでぶつかった波がまた逆流してくるのさ、だからおっかないというの。それがあふれるわけでしょう、川からどンドン上がってくるから。だからこの辺の人は、危ないというのさ。

質問： その昭和27年のときも、こことこだけだったみたいですね。何か昨日聞いたら、こことこだけだったというふうに聞いたので。

住民24 そして、こっち側が低いから、こっち側。だからここから小島さん、この辺までなんだ。この辺までが危ないのさ。ここから高いの、また少し高くなっているの。こっちはそうでもないの。何せこころ辺というのは、この辺、こっちの方だ。この真ん中のこの辺は、それでもそんなに危険じゃないみたいだけだね。

住民24 長女 川..... 戻ったんでしょ。

住民24 だからそのときに川に氾濫したんだというの。

住民24 長女 違う、今回はさ。

住民24 今回は何も。だって津波という津波じゃないから、そんなに大きいものじゃないから。水位は上がったりはしたけれども、シケだってそんなあれでしょう、結局は。

住民24 長女 でも、うちの方も波だったよね、川というより。子供は結構、津波の方だと思う。お母方の世代というか、お母方は川だけだよ。

質問： 川というか、川に津波が。

住民24 入るから危ないよとは聞くけど。

住民24 長女 だけど、うちらみたい人は、きっと川というより津波だと思う。

質問： 津波で。小学校で結構、そういうのは教わるの？

住民24 次女 教わる。ビデオを見たり、あと津波が来たらどうしたらいいとか、あと何やる？

住民24 長女 私、分からない、もうない。でもやったよね。そっちに避難したり、高島山という山にも避難したりとかをやってたね。

住民24 昔、この人も小学校にいるころは、高島山にも避難したりいたわけ、学校が。ところが学校から、高島山避難所とあるんだ、ずっとこっちに、これはこ

こだ。

質問： 分かります。昨日お話を聞いてきて上がりました、高島さんのところから。

住民24 長女 あれはつらいんだよね、あれ。

質問： あの階段がすごい。

住民24 今度、距離があり過ぎるわけさ。そして沼の縁を通っていくわけ、ずっとここの縁を通っていくのさ、危険度100%だものね。それでやっぱりこっちは橋があるけれども、近いのさね、こっちの方が。だからこっち側に今、避難訓練はしている。

住民24 次女 何かこう来て、そこで止まって、人数確認をして、また行って、床屋さんへ行って、人数確認をして、ガーッと自分たちでダーッと行く。

住民24 長女 この山から、がけのところにも上れる、続いている。

住民24 次女 がけて？

住民24 長女 だからあっちの倒れた山に、がけに行ける。

住民24 山もずっと続いているからね。

住民24 長女 ずっと上れる、うちらは行ったもん、クラブで。

住民24 次女 うちら行ってない。

住民24 ここまで来るというのは、かなりの距離があるもんね。でも結局、私たち、その阪神・淡路の地震をテレビで見たり。

住民24 次女 『九死に一生』

住民24 じゃないけど、それ見たり。それだとか、津波であれした島、何だっけ？

住民24 次女 奥尻島。

住民24 ああいうのを見ているから、結局、こういうときはこうなんだと、変な話、勉強にもなるわね。

質問： やっぱり奥尻とか阪神のをテレビで見ているというのは、すごい大きい。

住民24 テレビで見ているから、地震が来たら、むやみやたらに飛び出すんじゃないで、こういう陰で落ち着けとか、あるでしょう。そういうのをやっぱりテレビを見て、なるほどなど勉強になるもんね。

住民24 長女 うちらなんて、落ち着いていなかったもんね。お母にいきなり「ガス、ガス」とか言う。お母はしっかりしている、さすがだなと思ったけど。

住民24 逃げるときは、ストーブの点検、ガス、そういうものは点検して、ストーブをたく時期は、まだよかったからいいけれども。

住民24 長女 うちらなんかそんな頭なかったもんね。とにかく逃げるで、もう逃げる、逃げるで、津波、津波と置いていたけど。

住民24 ああいうテレビも、『九死に一生』とあって、まずね、あってあれしたから、でも勉強になるよ。

質問： でも奥尻島のことは、分かる？

住民24 次女 ビデオで見るよね、学校で。

住民24 長女 私は、学校で見なかったよ。

住民24 テレビ、『九死に一生』でよくやっていたでしょう。

住民24 長女 この前入ったやつ前のときだよ、確か。

住民24 次女 私、学校で見たよ、ビデオ。

住民24 長女 私たちのときはなかった。

住民24 奥尻のときは、うちのだんなが、確か札幌に仕事に行ってなかったか。

住民24 長女 お父さん、そんなに行ったの？

住民24 聞いてごらん。そしてこっちは大した地震じゃな

いんだわ。ところが津波警報が出たの、こっちにも。

質問： どこにも？

住民 24 ここにも。そして津波警報が出て、私、この子供らを連れて、実家に行ったのさ、だんながいなくて、まだ小さかったから。そしてこの人だけを泊めて、何ともないみたいだけど、この人は寝ていたから泊めて、私とこの人だけ帰ってきて、そのときにはだんなは、確か札幌にいたと思ったね。寝ているか、お父さん、見てみて。こっちにも入ったよ。

住民 24 長女 奥尻のときにどこにいた？ いるって、札幌に。

住民 24 札幌にいたものね、お父さん。向こうは揺れたみたいだし、だけど電話は通じなかったのかな、私がいなかったからかな。

住民 24 次女 電話は込むからね。

住民 24 長女 今回の時だって、全然携帯が繋がらなかった。でも何か a u とかは、わりとつながったみたいだけど、ドコモが一番つながらなかったらしい。

住民 24 それは機種によってね。

住民 24 長女 違ったらしいけど。

質問： メールもだめだった？

住民 24 長女 メールも、運よくというの？

住民 24 合間？

住民 24 長女 それがよかったら、メールは行ったんだけど、それじゃなかったら全然通じなかった。

質問： じゃあ、電話も使えなくなったんですね。

住民 24 かかってくる分には、通じたんだ、この電話も、帰ってきてから。別海にいるだんなからも電話が来ていたし、だけどこっちからかける分には、ちょっと通じなかった。

住民 24 長女 私の携帯もそうだった。

住民 24 というのはあった。

住民 24 次女 お父さんからは、電話来たのか。

住民 24 だから結局、向こうよりこっちの方が、回線が込んでいたのかね。どういうものなのかね、これ。

質問： 普通、逆なんですけどね。

住民 24 かかってくる分にはかかってきたよ。

質問： よく地震とか災害があると、そこにかけるのは通じなくて、ここから外にかけるのは通じるものなんですけど。

住民 24 ああ、そうなの。電話は鳴っていたんだけどね。

住民 24 次女 おばたちも、リッチちゃんから電話がかかってきたと言っていたし、ヒロミお姉ちゃんからもかかってきたと言っていたよ。

質問： じゃあ、大丈夫なんですね。

住民 24 でもこっちからというのは、なかなかね。

(後略)

(10)住民 26

質問： 地震がグラグラッと来たときには、どうしてたんですか。

住民 26 俺は、浜にいたの。

質問： 浜にいたんですか。浜で作業が何かをしていたんですか。

住民 26 妻 私は起きるちょっと前だったから。

住民 26 作業はしてないけど、作業をするかなと思って浜へ行ったのね。そうしたら、がけがそっちにめためた崩れてきたのさ。初めてなんだよ、あのがけが崩

れたのは。

質問： ちょっと危ないなという感じはしましたか。

住民 26 危ない感じは全然しなかったけど、こちらは来なかったから。だけど、音はすごかった。

質問： がけが崩れてくる音がですか。地震の音ですか、がけの音が？

住民 26 がけの音が。煙がはえて落ちてきたんだわ。

質問： そのときは、かなりの揺れだったと思うんですが、立ちすくむ状態ですか、それとも……

住民 26 俺は外にいたから分からないけれども。

住民 26 妻 もう全然立ったまま動けないというか、どこも動けないんだよね、立って。孫がいたものだから、孫 1 人は寝てて、1 人は起きてしがみついていたから、その場から動けないという感じで。

質問： 奥さんは、寝てはいなかったけど、まだ床にいたんですか。

住民 26 妻 そうそう。

住民 26 だけどもあれだもんね、全然被害はなかったのね、ここは、地震の。全然壊れたもの、神棚だって……

質問： 神棚とかは落ちてきませんでしたか。

住民 26 水、そのままだったもんね。

質問： あまり家具が転倒とか、落下物はなし？

住民 26 妻 ないですね。

住民 26 全然ないのさ。だから通り道というか、そういうのはあるんだかね。同じ床潭でも、ひどいところはひどいんだよね。うちの方は、全然大丈夫だったの。

質問： 不思議ですね。

住民 26 前回はそうだったけども。

質問： 前回というのはいつごろのことですか。

住民 26 何年前だったか、あのときも大きい地震が来たか？

住民 26 妻 10 年前か。

質問： 東方沖地震ですか。北海道東方沖、釧路沖？

住民 26 妻 前は釧路沖でしょう、釧路沖地震のときだ。

住民 26 釧路沖だろう、そのときも全然。

質問： 大丈夫だった？

住民 26 大丈夫だった。

住民 26 妻 このテレビって、前にあったテレビだね。これが落ちた。

質問： 釧路沖のときは。

住民 26 妻 うん、うちは誰もいなかったんだよね。じいちゃんと高校へ行っている息子がいただけ。私は温泉に行っていたから、知床の方に 2 泊で行っていたんだけど。

質問： 今回は何も被害らしいものはなく。それでだんなさんは、がけが崩れてきたのを見てから、その後はどうしたんですか。

住民 26 その後、これは津波が来るなと思って、そして家に来て、あのとき余震も小さいのが来てたな。うちへ来て、浜をただ眺めているだけだね。

住民 26 妻 潮の上げ下げがあったから、それを見ていたね。

質問： というのは、津波が来るなと思ったけど、引き波が何かを注目していたということですか。

住民 26 引いたり上げたり、結構してたんだわ。何回もしてたね。昨日の道新でなかったか、厚岸の末広。

質問： 出ていましたね。何メーターかの津波が来たという話がね。

住民 26 4 メーターだかね。ここはそんな津波でなかったね。1 メーターか 2 メーターもあるかな。

住民 26 妻 でもあれから結構引いていくから、下げているから。

住民 26 ここからちゃんと見えるわけさ、グーッと下げたの。

住民 26 妻 テトラが上がっていったり、下がったりするのが見えてくるから。

質問： それでそのときには、その危険性はないと判断したわけですね、逃げるほどじゃないと。

住民 26 妻 そう。

住民 26 電気は停電だったし、ラジオをかけて聞いていたんだ。

質問： そのときには、どんなことが流れていましたか、ラジオでは。

住民 26 津波警報。そして防災無線でも避難してくださいということは入ったんだわ。だけど、この家までは来ないだろうと思って。そういうことで、俺たちはここにいたんだ。孫たちは、裏山へ……

住民 26 妻 その山に上ったんですよ。

質問： 孫だけ、ちょっと危ないかもしれないから、念のため逃げておけと。お孫さんは、何人いらっしゃるんですか。

住民 26 妻 2人。1年生と3年生。

質問： そうすると、お子さん夫婦もここにいらっしゃるんですか。

住民 26 妻 息子だけ。ちょっと訳ありで(笑) 息子と孫とで。

質問： 1年生と3年生のお孫さんだけが2人で勝手に行けと。

住民 26 妻 隣のばあさんとそっちの孫も上がっていった。

質問： 津波が来るから、危ないから、取りあえず逃げておきなさいよと。ご主人はこう見ていて、引いたり押ししたりする波を見ていて、そのときの思いというのは、どういう感じですか。ラジオでは津波警報が言っているし、無線では避難の呼び掛けをしていたんですか。

住民 26 防災無線だね。

質問： 大丈夫だろうと。

住民 26 大したことはないなどは自分で思っていた。

質問： それは、どうして大したことはないという気がしたんですか。

住民 26 1回とか2回とかの引き方とか、上げ方が、普通来れば、結構来るんだけど、台風でも結構上がってくるんだよ、波。だけど、津波のわりには、そんなに上がってこないし。

住民 26 妻 上には上がってこないから、波はね。

質問： そうすると、テトラポットが隠れるほどじゃない？

住民 26 全然。

質問： 基準みたいなのはありましたか、こうなったら危ないなみたいなというのは。

住民 26 妻 上の方に全然、砂利の方に上がってこないから、たぶん大丈夫。

質問： 波が上がってこないから大丈夫だろうと思っていたんですね。住民 26 さんは、防災無線で避難してくれを聞いたけど、もっと何か人が回ってきたという話を言っていましたか。

住民 26 妻 消防の車？ ここは歩けたし。

質問： 消防の車も、やっぱり来ていましたか、同じような

感じて。

住民 26 妻 ええ。

住民 26 消防の人が、あっちの岸壁の方へ行って、潮の上げ下げを調べているんだものね。そして厚岸はこのぐらい上がったと、だから避難しろとかと。

質問： それは港の方で測っていましたか。

住民 26 ええ。それで津波が来ていることは、来ているわけだ。ただ、小さく来ているから、自分たちは大丈夫かなと思って逃げなかったと。

質問： やっぱり大きな津波が来るときには、引き波が必ずあるとか、そういう話なんですか。

住民 26 あるね。

質問： 必ずあるんですか。

住民 26 あります。

質問： そうすると引き波があまりなければ、大きいものも来ないだろうという判断ですか。

住民 26 そうですね。自分たちが小さいとき、何年前か、十勝沖地震かい。あれは小学校、俺が1年生のときだったよ。

住民 26 妻 小学校3年生でしょう。

住民 26 3年生か。

質問： 昭和27年ですよ。

住民 26 そうかもしれない。そのとき学校にいて、そのときは大きい津波が来たからね。住民 26 さんも言っていなかったかい？

質問： 言っていました。そのときは、ご主人はどんな感じだったんですか。

住民 26 そのときもすごい地震で、みんな外にいったん逃げて、それから学校の中に入って間もなくじゃないかな。「津波が来た」ということでもって、3月の初めだ、あのとき。あそこに沼があるんだよ。それが凍っていたから、みんなそこを走って、山の方へ。あれが本当に、夏とか何かだったら、相当犠牲者が出たと思うよ、学生の。急に来たものだから、先生の指示も何も全然ないのさ。ただ勝手にみんな逃げていって、先生もどこにいるもんだか。

質問： じゃあ、子供たちが波を見て、これは逃げろという感じで。

住民 26 ワーッと行って逃げたような格好だべな。

質問： じゃあ、かなりの恐怖な体験をなさったと。

住民 26 そうだね。学校の中にいれば、安全だったんだ、学校は流されなかった。かえって外へ出たから、ちょうど学校のところが川縁でしょう。だから、川を伝わるものだものね、津波って。だから船とか、ずっと川の中へ行ったり、家のそれこそ屋根とか、みんなそっちへ流れていった。

質問： そのときと、今回は、違うなという感じがした？

住民 26 そうだね。そのときは子供だったし、津波が来たら逃げたような格好だからね、押し寄せてくるやつを見て。

質問： そうすると、押し寄せてきたら逃げればいいのかという気持ちもあったんですか。

住民 26 そんなに引いていかないからさ。

質問： 引き波がないから。

住民 26 引き波がないから、大きいのは来ないなど、自分では勝手な判断をして。それこそ、前のやつは子供だったし、みんながワーッと逃げたところで、連なって逃げたという感じだから。

質問： 川沿いに、やはり住む人は、その経験でかなり避難した人が多かったんですかね。

住民 26 あのと、川沿いの家もかなりいったからね。あのと、ここで何人死んだかな。3人か。

質問： 3人。

住民 26 3人だな。亡くなったのは。あれで、まず3月でない、今年の夏みたいだったら、あれはかなりそれこそ学生の犠牲が。

住民 26 妻 川、橋を渡って逃げようとするから、橋を渡っているうちにもう。沼が凍っていたから、沼の方をずっと真っ直ぐ逃げたから、それでだいぶ違うんじゃないかな。

質問： そのときは、ご主人はどこにお住まいだった、ここですか、やっぱり場所的には。

住民 26 ここです。

質問： そのときには、お宅では被害はなかったんですか、その昭和27年。

住民 26 被害はなかったね、ここはね。ほんのそばまでは来たんじゃないかな。そして昼は山でもって、そのときも余震がかなり来たんだよ。今度は父親は寝ないで、外は寝られないから、寒いしさ。結構外で寝たんじゃないか、寝た人は。

質問： 家が崩れちゃうというのを怖れて、外にいたということですか。

住民 26 津波がまだ来れば困るとか、そういうあれでもって外へテントを張って、そして泊まっていた人もいたんだ。俺らは、晩になれば家に帰ってきて、父親が今度は見て、俺らは着たまま寝て、「そらっ」と言ったら逃げよう態勢にしておいて、父親が見て。

質問： いつも警戒していたという。奥様の方は、やはりずっと床潭にいらしたんですか。

住民 26 妻 そう、津波も経験しています、1年生のときにね。

質問： 場所的には、どの辺のお住まいだったんですか。川沿いではなかったんですか。

住民 26 妻 近く、すぐ近く。

質問： じゃあ、同じような場所で、同じような体験を。

住民 26 同じ状況なんだ。

質問： 奥様の場合は、寝ていてというか、その後は、今回(9月)のときは、どうなさいましたか。

住民 26 妻 何と言ったらいいの、もう地震が収まってしまったら、あと孫たちに何でもいからゆっくり大事なものをに入れて、それを持って山へ行っていないさいと、そうはさせていたんだけど。

質問： ご自身が一緒に付いていこうという気持ちはなかったですか、そのときは。一緒に、私も危ないから逃げた方がいいかなというの？

住民 26 妻 それはなかった。

質問： 基本的には大丈夫だと、大丈夫だろうと思っていらっしまったんですね、念のためという。

住民 26 裏山は近いから、そして、高いところ、すぐそばだから。学校みたいところは、ちょっとあれだからあれだけど、ここは山が近いから。住民26さんなら、まだ遠いからいいけれども、俺らは浜は近いけど、山も近いから、来たらぱっと逃げられるなという、そういう感覚もあるもので、なお。

質問： 算段がね。

住民 26 妻 潮の引き方に気を付けて見ていたり。

質問： すぐに上れるような傾斜の山なんですか。

住民 26 はい。

質問： その後、お孫さんは山に行っているんですが、その後はどうなさいましたか。

住民 26 その後からは、もう。

住民 26 妻 やっぱり車を乾燥機に入れていたから、車をそっちの方にまた地震が来て、岩でも崩れればというので、車だけそこに出して。

質問： 車を山の崩れから避難する。

住民 26 それでちょうどその日は、昆布の検査だったんだ。それも、津波警報が入っているのに、来ないかと思っていて、検査もちゃんと来たもの、検査人も。それで検査もやって、うちでも出したから。

質問： それはもう午前中のことですか。

住民 26 午前中、8時半ごろもう来たな。津波警報、それこそまだ解除にならないのにさ。

(中略)

質問： それでその後は？

住民 26 妻 もう普通に。

住民 26 ただ、電気が来なかったから、ちょっと寂しいなという。

住民 26 妻 テレビの情報なんかも分からないし、無線だけのラジオか、この防災無線の……

質問： あれですね。あれはちゃんと音は鳴るわけですよ、停電しても。

住民 26 停電しても鳴る。

質問： あれは新し目ですね、機械自身がね。

住民 26 妻 もう何年たつたの？ でもだいぶんたつたね。

住民 26 初めは町だけだったけど、何年前からだったか、漁組のあれも入るようになって。だけど、組合員でないと入らないんだね。

質問： そういう漁組のお知らせは。

住民 26 一般の人には入らないようになっている。

質問： 今日は昆布の日、点検の日です、みたいなのは入らなかったんですか。

住民 26 妻 入らない。

住民 26 検査のあれは入らない。

住民 26 妻 各地区、地区だから、厚岸全部じゃないから。今日は床潭……

住民 26 出漁とかそういうのは入るのさ。

質問： 出漁というのは、今日は？

住民 26 妻 昆布、今日は何時から何時までですよ、朝に入る。中止の場合は中止で、今日は中止ですとかというのは入るから。

住民 26 前は、旗で知らせて、皆さんに。だけど、こういう防災無線が付いてから、今度。

質問： じゃあ、便利？

住民 26 妻 便利ですね。

質問： これは要するに、電池で動いていたと思うんですけど、停電のとき。電池はときどき入れ替えたりはして？

住民 26 妻 入れ替えたりしています。

質問： それは、やはり、町の方から指導があって、年に一度はみたいな。

住民 26 妻 そう。赤いランプがついていないときは、電池の入れ替え。入れ方の指導の放送とかも入って。

(中略)

質問： お孫さんは上に行ったままですが、それは？

住民 26 すぐ帰ってきた。  
住民 26 妻 そんなに長くないで、30分ぐらいもいたんだらうか、1時間ぐらいいたか。  
質問： 1時間ぐらいで、もう。  
(中略)  
住民 26 何年前だか、全国津波警報が入ったことがあるね。  
質問： 外国で起こったときですね。  
住民 26 9時か10時ごろ、俺は寝ていて、広島に親戚があるんだ。そこから電話が来て、今度「津波警報が入っている、どうしている？」と。そしてテレビをかけたら、ザーッと全国黄色いマークが付いて。  
質問： 平成8年でしたか、ありました、夜ですね。あのときは、じゃあ、広島からのお電話で目が覚めて？  
住民 26 親戚から電話が来て、初めテレビをかけてみて、そしてこういうふうになっているんだなと思ったのさ。  
質問： そのときはどうでしたか。  
住民 26 そのときは全然逃げないで。  
住民 26 妻 津波のあれはなかったもんね、上潮はなかったと思うよ。  
住民 26 夜だったからな。  
質問： 様子は分かりますか、夜でも、潮の様子というんですか。  
住民 26 妻 分からない。波があるときは、ぶつける音は聞こえるけど、そういうときは分からない。  
質問： じゃあ、警報が出ていても、逃げるとき、やはり潮が引かないと逃げないですか。警報が例えば出ていても、逃げるといふときは、どういうふうなときに逃げるといふふうにお考えになりますか。特に.....  
住民 26 来てからじゃないのかな、ここなら、すぐ逃げられるから。  
住民 26 妻 夜は気持ち悪いよね。  
住民 26 夜はちょっとあれだけど。  
住民 26 妻 そうなったら車でどこか逃げているかもしれないし。  
住民 26 前のときは、息子たちは、逃げていったんだわ。  
住民 26 妻 太田の方に、車でね。あれはいつだったろう。釧路沖地震のときか、その後か。  
住民 26 俺らはあれだもの。その前にもここまで届かなかったという、そういうあれがあるところでね。そうでないかと思うんだけど、前も来てない、ここまででは。  
質問： 前も来てない、前も来てない、前も大丈夫だったと、今度もたぶん大丈夫だろうと。  
(中略)  
質問： ここのお宅は、おじいさんの代ぐらいからですか、ここにおうちがあるのは。  
住民 26 うん。  
質問： 何年ぐらい、もう60年ぐらい？  
住民 26 妻 で、きかない。  
住民 26 どうだべ、俺があれしたころはあれだな。  
住民 26 妻 どこで生まれたの、そっち？  
住民 26 こっちでないな、そっちだな。だから.....  
質問： 50年ぐらい？  
住民 26 50年ではきかない。55年ぐらいいたつかな。  
質問： その間、一度もここは津波で被害を受けたことはないですか。  
住民 26 ないね。

(録音終了)

(11)住民 28  
質問： まず4時50分ですけれども、地震のときには皆さんどちらに、まずご主人はどちらにいらっしゃいましたか。  
住民 28 昆布というか、ここに乾燥機って、昆布を乾燥する乾燥機の小屋があるもんだから。乾燥機の小屋でちょっと仕事して、昆布でないけど、次の商売、こちらは昆布のほかに関わり次第、次にシシャモと、そういう漁もするもんだから、そのシシャモの準備してたのさ。その乾燥機の中で、その時間にね。  
質問： そのとき地震はどんな感じてしたか。  
住民 28 本当にあれだね、横揺れがやっぱりかなり強かった。  
質問： 乾燥機の中はどうです、なんか物は？  
住民 28 落ちる物は昆布なんか1本も掛かってないし、また物も何も積んでないから、かなりの揺さぶりはあったけど、落ちるような物は何もなかった。  
質問： そうですか。その後、地震が終わってご主人はどうされましたか。  
住民 28 終わってから、孫たちがまだ寝てたもんだから起こして、もうすぐ。これは必ずしも地震が大きいから津波の恐れはあるぞということで、車をすぐ上の方の安全地帯というとおかしいんだけど、上の方の道路あるもんだから上の道路に車を全部移動してさ。  
質問： そうしますと、地震が来まして、すぐにそこからおうちの中に入られて、それですぐ車の準備を。  
住民 28 そうそう。車の準備。うち車4台も5台もあるもんだからね。  
質問： 4台とも全部移動されたんですか。  
住民 28 全部だな、全部動かしたな。運転するのは3人しかいないんだけど、車は5台あるもんだからね。  
住民 28 妻 5台あるけど、1台は厚岸のうちに置いてあるもんだから。船心配だから、船を出すのに1台は行ったけど4台はこの上に上げたね。  
(中略)  
住民 28 物は壊れたにしても、そんなものに手掛けていられないから、いろいろこら辺の物は落ちたんだわな。手掛けていられないから、まず必ず来るぞと。車だけはまず誘導せいと、動かして、それから俺、船を今度は、ここにも船ね、漁港の、ここにも係留してある、昆布の操業船ね。そして町にその船もう1隻あるのはサンマさ。サンマ終わってシシャモの準備の船さ。それを町に係留してるもんだから、湾月町という漁港にね。それを沖へ移動するのに、孫と長男と2人で行って船を移動したわけさ、湾月町漁港からね。  
(中略)  
住民 28 それであと、こっに残ってるのが4人いるわけさ、まだ。俺と母ちゃんと、孫が弟の方、今、高校になるかというのが。それとお嫁さんと4人はまだここにいるわけさ。だけど「もう避難しなきゃだめだぞ」と言って山さ駆けずり上がったのが、約、やっぱり40分やそこらあったか。  
住民 28 妻 浜で今度あれだしね、拒否されたしね。  
住民 28 それでいろんな物も浜に散らかしてあるもんだから。やっぱり波来たっていえば何もかにもさらわれ

るから、そんな物もちょっと片付けてさ、それから山へ。

(中略)

質問： 上に駆け上がったのは、だいたい地震が起きてから何分ぐらいたってから？

住民 28 約 40 分ぐらい。40 分はたってるよ。

質問： それで奥様は地震が起こったときにはどこにいらっやって、おうちに。

住民 28 妻 倉庫にいて昆布を 選抜 した。

(中略)

住民 28 妻 ゴーともゲーともなく横に来たの、だんだん大きくなってきたのさ。だからわしはすぐ飛び出て、やっと 2 階から下りられなくなるんで、地震来たら下りれなくなったらおっかないから。

住民 28 孫たちが 2 階にまだ寝てるもんだから、朝早いからね。だから孫たちを呼び付けて下ろして。

質問： そうすると奥さんは倉庫から、すぐに地震が揺れ終わったらすぐ。

住民 28 妻 揺れ終わらないうちに出たのさ。

質問： それでおうちにいられて。

住民 28 妻 うちさも何も入れられないんだ、何もかも揺れて。揺れて入れられないから。

質問： じゃあ、外にいたんですね。

住民 28 妻 その目の前で揺れてこくって。

質問： 2 階にはご長男のご夫婦とお孫さん 2 人、4 人いるわけですね。寝てたわけですね。それで、起きると。

住民 28 そうそう。

質問： 上の長男のご夫婦とお孫さんたちはそれですぐ下りてきましたか。

住民 28 うん、下りた、下りた。下りてきたけど.....

住民 28 妻 下りるといったって下りられないんだって。立つのもみんなかっぱがって、人がかっぱがったらあれだべさ、油火災になるから押さえたと言ってるもの、みんな。

質問： じゃあ、押さえながら。

住民 28 だからやっぱりすぐは来られなかったんだべ、孫たちもね。

住民 28 妻 何でもいから地震来たらすぐ戸開けれというの。

住民 28 たんすもあるでしょうし、ストーブもあるから。だからストーブでもとっくり返ったら油がほれね。

質問： そうですね。上の方もやはりいるんな物が倒れたりしたんですか。

住民 28 妻 上の方は何も倒れないって言ってた、このたびは倒れなかった。うちで何も茶わん 1 つ壊れないし、戸棚なんかみんなドアの戸棚でないから、引き戸だから何 1 つ壊れない。

住民 28 今回は仏壇もそれこそ.....

住民 28 妻 仏壇が動いて仏壇の中がみんなぐちゃぐちゃになった。

住民 28 中で飾ってある巻物もみんな飛び出してさ、仏壇もかなり動いちゃってね。もう倒れる寸前だったよ。倒れはしなかったけどね。

質問： 中の物がこう出てきたんですね。

住民 28 そうそう。

質問： そうすると今度はお孫さんたちとご夫婦が下りてきたのはどれぐらいたってから下りてきましたか。

住民 28 妻 いや、終わってから下りてきたよ。

質問： 地震が終わってから下りてきた。

住民 28 まあ、揺れ終わってからだね。

質問： 外へ出て。

住民 28 妻 このでかい地震だから津波来るから逃げなきゃいけないから、大事な物だけ持って逃げなきゃいけないからと言って、車、嫁さんが移動するから、我々は何も移動しないからあれだったけど。

(中略)

質問： 今度はご主人は地震の後、乾燥機から出てきましたね。そしてそれから家の中に入りましたか、それともどこへ、海へ行きましたか。

住民 28 いやいや、もう何にしても来るから、もう大事な物だけ持ってすぐ山へ行くぞと。だから俺も今度、また船もそっちにもあるから、そっちの船も心配なのさ。船は上架はしてあったんだけど、それもあんまり津波来るなんて知らないもんだから、斜路の上にちょこっと上架しただけで、そっちの船も心配なもんだから、そっちの船さ行って縄掛けてね。

質問： それはどこですか。

住民 28 それはその漁港の向こうの方にね。

質問： そちらの方にいらっやってたわけですか。

住民 28 うん。そっちへ行って、まずもって縄掛けて、それから帰ってきて、それからまだ車 1 台、俺も上さ上げてるんだから。車も 5 台もあるけど運転手 3 人でしよう。

質問： そうすると船の方にいらっやってたのは、地震が起こってからすぐ、何分ぐらいたってからですか、向こうの船に行かれたのは。

住民 28 俺がか？ 俺がそっちへ行ってからだからやっぱりこころ辺であれしてから 15 分くらいたってたな。10 分か 15 分たってたな。

質問： 10 分か 15 分。それで縄掛ける時間ってだいたいどれぐらいで縄が掛けられるんですか。

住民 28 いや、縄掛けるといったって、船を上架してあるから、前の方と後ろの方と、どういう波が来ても固定しておけば逃げないなという感覚でね。なんぼも、5 分も 7 分もかかれば手いっぱいさ、そんなもんだ。

質問： そしてこちらに戻られてきて車をもう 1 台上げたわけですよ、ご主人が。それがだいたい地震が起こってから何分ぐらいたってました？

住民 28 何分たってるや、船 サダ の方へ行ってきたから、それから車で逃げてるから、これも 20 分くらいたってたな。

質問： 戻ってから 20 分ぐらいですか。それで車を上げて、上げたらその後どうしました？

住民 28 下りてきて、かかあたちまだここにいるもんだから、「来るから、大事な物持ったか。さあ今度は避難するぞ」ということで、それから山へ上がったんだ。

質問： それは車ではなくて。

住民 28 そうそう、車はもう上に上げてあるから。

質問： 自分で。

住民 28 避難階段がここへ付いてるから。

住民 28 妻 道路まで。

質問： じゃあ、ここの上の道路に上がったわけですね。

住民 28 そうそう。

質問： ああ、なるほど。家族の皆さんが上に上がったのは何時ごろ、地震が起こってからどれぐらいたってか

らですか。

住民 28 妻 みんな早かったよ。みんな車回すと同時に上がってるもん。我々こそ浜にまだ片付ける物があつたからあれだけど、みんな早いよ。

住民 28 平均にみんな早かったね、よその人はね。俺は車は早く回したけど、人間そのものが上がったのは俺らは遅組だった。ということは浜に俺もいろいろな商売やってるんだけど、エビも捕ってたもんだから、北海シマエビね。津波来るとも知らないし、少し暖かくなると、かごにヘドロが付いて汚くなるわけさ。

すると交代制でもってかご揚げてきて、またきれいになったかごをまた海に入れて、そういう繰り返しやってるもんだから、汚いのを揚げてそこで干しとったもんさ。干しとったとこさ、そういう騒ぎだから。何しても、どのくらいの津波来るか分からないけど、浜に置くよりやっぱりうちの方まで持ってくればなんぼでも安心だなと思って、そのかごを今度こっちまで運んでたもんだから、そのとき上に上がったけど、それ終わってからすぐ俺も上に上がったんだ。その避難場所へね。避難場所というか上の方へね。

住民 28 妻 その前に 1 回は波ね、津波来てる。

住民 28 もう余波はあつたよ。

質問： 余波はもう来てたんですか。

住民 28 もう来てた。

住民 28 妻 それ終わってから下がったんだから。

住民 28 だから来てるから、その後大きいやつが来るぞと言って上に上がって浜を見たけど、どんどんどんどん潮下げていったんだな。

質問： それでご主人が上に上がったときには、地震からだいたい何分ぐらいたってました？

住民 28 地震からなら、やっぱりかご片付けた、あつちの船を綱掛けてきた、実際に上に上がったのは 40 分や 50 分かかってるな。

質問： その間、奥さんはもうすでに上の方に上がっていた。

住民 28 妻 うん、上がってた。

質問： それは地震が起こってから何分ぐらい。

住民 28 妻 わしたちは早かったもの、かご半分片付けてさ。かご半分片付けたら孫が怒るんだ。「津波来たら流されるから行くぞ」って。だから何も半分片付けて上がったからそんな 30 分か 20 分で上がったんでないか。

住民 28 俺は最後までね、かごがここ散らかってるから、それを全部きちんと片付けてさ。だから俺が一番最後だったんだ、上がるのはね。

質問： あと高校 1 年生のお孫さんと、あと長男の奥さんがいらっしやいますね。この 2 人は？

住民 28 妻 上がっちゃってる、すぐに。

質問： それはもう地震が起こってすぐですか。

住民 28 いやいや、それはやっぱりかごを片付けたよ。だけど、いつ津波来るか、あずましくないもんだから、「来るぞ、来るぞ」とは言ってるけどさ。

質問： 奥さんよりも少し早く上がったんですか。

住民 28 妻 いや、同じに上がったんだよ。

質問： 3 人一緒に上がったわけですか。それが 20 分から 30 分ぐらいだと。そうですか。となると、やはりまず考えたことは、まず大きな地震が来るから津波が来るということはすぐわかったわけですよ。

住民 28 そうそう。前のやっぱり.....

住民 28 妻 わしたちは 50 年前の地震に遭ってるから、津波が。

質問： 十勝沖にあつたやつですよ。そうするとやはり船とか、かごかいるんなものが心配になってくると。

住民 28 そうだ。

質問： それをまずやっぱり片付けたり、あと船が流されないようにしたり、あと車も大事ですから上に上げたりとか、それをやって上がるというわけですね。

住民 28 ということは、今回の津波は小さいながらも来たことはあつたんだから。だけど、前の津波のときも相当の時間やっぱりあつたのさ。あつたんだけど、それもかなりでかい地震だったから、もう津波来るということもみんな頭に入れてなきゃならないのさ。だけどそういう津波なんていうこと誰も記憶にないもんだから、俺のまだ親は元気だったんだから。

だけどおやじの話は、南米の方ででかい地震が来れば必ず津波が来るぞと。だったら津波の来るといことだけ考えておけと言ったけど、みんな津波なんていうこと考えないで、それこそ 30 分も 40 分ものんきしとったでしょう。そういうところは何もこうやって漁港ないんだから、そのときに、いきなり津波というのは、ほって来るんじゃないんだわ。「もうこれは」と思ったら来たもの、それでうちこれ全部やられちゃったんだから。

質問： おうちはもう。

住民 28 みんなやられたよ。前の津波だよ。

(中略)

質問： 1 波が来たのは、何をされてるときに 1 波が来たんですか。

住民 28 だから俺はかごを片付けてるころ。

質問： ああ、かご片付けてるときに。それは 1 波というのはまず引いたんですか。

住民 28 いやいや、小さいながら攻めてきたのさ。

質問： どれぐらいの高さ、どれぐらいまで水が来たんですか。

住民 28 ここでこう見とったけんね、見とったというか、俺は浜でかご片付けてるんだけど、海の水がこうシャバシャバシャバと何も置いてて。

住民 28 妻 岸壁見えてるべさ、車上がってる、あの岸壁見えなくなるだけ来たんだ。

住民 28 ということは岸壁平らになったべさ。潮位上がれば結局平らになるでしょう、水増えるんだから。それで結局、引いていくと今みたいに下がって。それ見ながらかご片付けたから、俺は。だからもう津波来てるぞと、これ以上大きなものなれば困るから、もうやっとかご片付けるぞと言って、そしてかご半分ばかり片付けたけど、みんな母ちゃんたちもおっかねえもんだから(笑)、おっかねえからね。

(中略)

質問： なるほど。これはかごを片付けてるときですよ、ちょうど 1 波が来たのが。20 分ぐらいたって。

住民 28 やっぱり 20 分はたってる。

質問： そのときに、もうそれですぐ逃げようと思いましたが。それともまだ.....

住民 28 まだかご片付けて終わらねば、俺は上がってもうこられないから。

質問： それでかごを片付け終わって、これはもう来るぞと  
思って逃げたよ。

住民 28 そうそう。

(中略)

質問： 何か持ち出された物というのはありましたか、避難  
するときに。

住民 28 貴重品だけだ。

質問： 貴重品というのはお金と。

住民 28 まあお金だとか、それこそ金融機関のそういう書  
類というか、そんな程度で、そんな重たい物は持ち  
出すね。だけど何にしてもご飯はどうなってもご飯  
食べなきゃならないから、ご飯だけは持っていった  
よ、持って上がった。

質問： おひつかがかに入れて。

住民 28 うん、ご飯だけはね。

質問： 普段からそういう地震とか津波があったときに、こ  
ういうものを持って出ようというふうに準備してい  
たものとかはありますか。

住民 28 やっぱり心掛けてはいる。心掛けて、「そら」と言  
ったら「そら」というあれだぞというぐらいのね。

住民 28 妻 まがないなんかそんなもんはどうこうないけど、  
やっぱり大事な物は「そら」と言えば「そら」とい  
う。

住民 28 夜なんかにもし来れば悪いと思うから、乾電池なん  
てね、見ても分かるけど3個も4個も電池なんか  
も用意してあるしさ。

質問： それで上に上がられて、その上に何分ぐらいいらっ  
しゃった？

住民 28 だいぶいたよ、何時間もいたから。

住民 28 妻 うちだけでないから。みんなよその人もいたも  
の。ずっとあの道路の曲がり角のとこまでいたんだ  
から。

住民 28 「これ以上でかいもの来ねえべ、いいな、いいな」  
と言って見ながらして寄り添って話しながらさ。だ  
んだんまた今度、潮下げていくと「また潮下げてい  
ったぞ。また次に来るんでねえか」なんて、こんな  
ことを上ではそういう予測しながら結局、海ばかり  
眺めとったということですね。

質問： じゃあ、うちに戻られたのは何時ごろになりますか  
ね。

住民 28 妻 うちさ戻ってきたのは9時ころだな。

質問： 朝の9時ごろ。

住民 28 9時ごろは来たかな、もうな。9時ころでねえか。

質問： 3～4時間はずっと上にいらしたということですね。  
その間上でずっと海を見ながら皆さんとお話をし  
たり、あとなんか車でラジオをつけたりとかそういう  
ことはありましたか。

住民 28 妻 みんなラジオ聞いたり何だりしてたんじゃない  
の。みんな今、携帯持ってるしね。

住民 28 それは聞いているでしょう。防災無線でもって連絡  
流すもんだから。だからそれこそあれだ。

質問： うちの中にある無線の。

住民 28 うん、これね。

質問： それですね。それはここで聞かれました、地震の直  
後？

住民 28 いやいや、もう電気消えちゃったからね。

住民 28 妻 いや、この無線は電気消えても聞くんた。

住民 28 だけど、あとは電話も何も全然だめさ。電気消え

ちゃったから連絡取れないの。

質問： 停電ですよね。

住民 28 携帯もだめだったもんな、あのときな。

住民 28 妻 ちょっとの間な。

質問： この無線から何も放送はされませんでした？ 地震  
の後。

住民 28 妻 いや、放送されてたよ。

住民 28 このほかに表にでっかいのがあるから。誰もこの  
中に、うちの中でこれ聞いてるとというのがやっぱり  
おっかないから、もう何でもいから表へ出てるか  
ら。表ででかいやつでもって放送するから。

質問： 地震が起こってどれぐらいで放送してましたか。も  
うすぐですか。

住民 28 すぐでもだな。「岸壁に近寄らないでくれ、津波の  
1波が押し寄せてきてる」とかという、そういう連  
絡がね。

住民 28 妻 10分、20分ぐらいおきにあったんでないか。

住民 28 もう即来たようなもんだな。「津波の恐れがあるか  
ら皆、海岸へ下がらないでくれ」とか、そういう連  
絡はなんぼもかからないで、あれ30分なんてかから  
ない。ないうちに連絡来たんでね。

質問： 30分ぐらいのうちにもう放送をされていた。

住民 28 そうそう、されてる、されてる。これに入るのも  
表ででかいラッパ、拡声器であれするのと同じだか  
らね。だけど誰もうちさ入ってこれ聞いてるのがお  
っかないもんだからね。表に出て聞いてても、表に  
いれば例えば「津波来たぞ」、すぐ裏さ、うちの場合  
ならその裏さ駆けずり上がれば、もう安全だから。  
たとえうちが壊れようとき。

住民 28 妻 うち壊れるような津波なんか来ないって、こ  
の間 大型やったもんだもの。

住民 28 前は本当に全部ガラッと壊されたんだから。

住民 28 妻 50年前のな。

質問： 地震があった後にここのテレビをつけたとかラジオ  
をつけたとか、そういうことはありましたか。

住民 28 妻 テレビなんかつかない。

質問： テレビはまったく何もつけずに。

住民 28 妻 ラジオは子供たち持ってたんだけどな。車のラ  
ジオでもつけて。分からない。

(中略)

質問： テレビをつけなかったのは停電だったからですか。  
それとももうテレビなんか見なくても逃げようと思  
った。

住民 28 いやいや、テレビ見てるより、何でもいからま  
がなえ、そら逃げるぞということだから、テレビな  
んていうことに見てる暇もない。

住民 28 妻 電気も消してしまったんだもの、時間ないって。

住民 28 見てる暇もないし、そこら辺、今言ったようにか  
ごは片付けなきゃならない、車は上さ上げていかな  
きゃならない。だもんだから本当にテレビなんか見  
てる暇ないんだ。電気も消えたとしね。

質問： 気象台から津波警報が出てるんですけど、この警報  
をお聞きになりましたか。「警報が出ました」とい  
うことですね、「津波警報が出ました」ということを知  
りました？

住民 28 そうそう、この防災でもって。ここにはいないけ  
ど表で放送するから。

質問： だいたい地震が起こってから何分ぐらいたってから

警報の話聞いたという覚えがございますか。

住民 28 たいてい15分くらいたってるかな、あのとき。15分くらいたってぞ。

質問： それから先ほど9時ごろ戻られたというんですけど、戻ったきっかけとか理由ですね。どうしてこの9時ごろになって、まあ、そろそろ戻ろうかというふうに思われたんですか。

住民 28 ということはまだ解除はなってないんだよ。この防災では解除だよということはなってないんだから、ただ、我々が判断して。ということは、この波の潮位の上がり下がり、もうだいたい落ち着いてきたぞと。そしたらもうだいたいいいとここれで収まったぞと、もう下りてもいいよという我々の判断。

ただこの防災では、まだ警報が解除でないから海岸へ近寄らないでくれということは何分おきでやってるわけさ。これは防災では流してるのさ。だけど我々の判断で。ということは波も水が上がり下がりがだんだんもう少なくなってきたから、だからもうこれ以上のものは来ないぞと。

質問： なるほど。これまでの経験から、もうこれで大丈夫だろうということで初めて下りて。

住民 28 下りてきた。

質問： それで9時に家に帰りましたよね。その後は何をされましたか。

住民 28 妻 やっぱり何だかんだってうちの中ブタ小屋だったから、散らかってるからね。なんぼあれだっていたって、落ちる物落ちる、散らかってるから片付けなきゃいけないし。

(中略)

質問： さっき、かごの片付けとか船のことを心配されてましたけど、海の方にも行かれました、その9時に戻ってから。

住民 28 いや、行かない。行かないけど、厚岸さ行ってるのは、湾月町から船出てるから。それでその時間にはまだ解除でないから船は沖へまだ、沖で避難してるのさ。ただ俺たちがここで見とって、もうこれで大丈夫だぞと、これ以上大きなものは来ないから下へ下がるべというこで、俺はわりかし早い方だったわ、下がってくるのはだよ。上がってくるのは一番遅いかもしれないけど、下がってくるのは俺の判断で。

質問： じゃあ、9時になって片付けはしてましたけど、海の方には近づかなかったんですね。船を見たりとかというようなことはしなかった。

住民 28 近寄ってない。だけどやっぱり片付けとともに、あずましくないからちょっくらちょっくらと見てるんだわな、片付けながら。だけどそんなに水の上がり下がりの変動がないから、もうこれで落ち着いたぞと。

質問： なるほど。ずっと海を見ていらしたんですもんね、ずっと長年というか、仕事ですもんね。

住民 28 そうそう。

質問： その判断で、行政が何か言うよりは自分の判断の方がやっぱり正しいという信頼できると。

住民 28 俺はね。だからやっぱりこれではまだ解除でないから海岸は近寄るなどが、まだ避難してとかということは絶えずこれで流してたけど、俺の判断としては、もうこれ以上は大きなものは来ないぞと。だか

ら下へ行ってまず物を片付けたり、今度ご飯も食べてないから、そういう騒ぎだからご飯も食べてないんだから、朝から、まずご飯を食べるか。

(中略)

質問： そうですね。50年前の十勝沖地震、昭和27年の。このときにご主人はここで経験されたんですか。

住民 28 ここで。そのとき俺はまだ学校だから何年生くらいだったかな。

住民 28 妻 学校なんか卒業してる。我々卒業したのは、2つ3つ多いから二十歳くらいさ。

住民 28 そして俺もそれこそまだ若いし、親も両親いたったんだ。だけど、それこそさ波来てから「おい、津波だぞー」と言ってよその人から声掛けもって、「どら」って見たっけ本当に波そこまで来ちゃったからね。そのときこういう岸壁ないんだから。漁港がないから。ここ砂浜だから。上からガンガンガン上ってくるなら分かるけど、いきなり膨れて押し寄せてきたもんだから。

質問： あ、引かずに。

住民 28 そうだ。

住民 28 妻 津波は引かないでくるよ。

質問： 引かないでくる。もういきなり。

住民 28 妻 いきなり来る。2回目になれば引くんだ。

住民 28 2波、3波ということになれば引いていくけど、1波の場合はもういきなり来るから。それを「来たー、津波だぞー」とよその人に声掛けられて、親たちは逃げるんだけど、俺は何、それこそばかだというか、小さいもんだから、津波ってどんなもんだやというようなものでここに立っただけだ。

質問： もう津波を初めてご覧になる？

住民 28 うんうん。ところがそこまで来たんだから。これじゃだめだと俺も今度、泡食って裏まで逃げた。そのときもう親たちは上さ逃げてたから。だけど今度は波引いていったわな。そのとき、ホッキを採ってるわけさ。ホッキ採ってたホッキの船がもういきなりうちさ飛び込んできたのさ。

質問： へえ、船が。

住民 28 うん、船が、波と一緒に乗って。船がうちさ飛び込んでくる、浜に今度は氷もあつたわけさ。流れ氷が。

質問： 流氷。

住民 28 うん、流氷が。そんなたくさんではないけど。それも一緒にうちの中さ飛び込んできた。

質問： はあ。じゃあ、もううちは全壊。

住民 28 うん。そしてもうガラガラガラと一斉にもううち倒れていっちゃった。

(中略)

質問： 町の方から防災マップというんですか、この辺は津波が来るとこれくらい浸水しますとか、地震が来たときにはこういうものを持って逃げましょうとかというパンフレットというか冊子が来たことはございますか。

住民 28 そんなようなこともあつたぞ、来たこともあつたな。

質問： それは特に見たりはしなかったですか、読んだり。

住民 28 見てる、見てる、見てる。こういうものでラジオを持ってとかさ、それこそああいうパンが、カンパン、

ああいうものを避難するときとか、そういうものを書いたものは来たことはあったわ。

質問： でも、特にそれをいつもどこかに置いてるというわけではない。

住民 28 ない、ない。

質問： 1回見てしまったらどこかもう。

住民 28 そうだ。

質問： 避難訓練とかはこの辺はどんな？

住民 28 やってます。

質問： ありますよね。年に1回。

住民 28 うん、やってる。年に1回ね。

質問： 9月ですかね。

住民 28 うん。

質問： それにはご家族の方とかは参加されたりするんですか。

住民 28 やっぱりこら辺にいる者は船で沖へ行ってる人もいるし。だから、おかにいるというか、こら辺にいる者はな、俺も何回かしたけど。そこ、神社のところであるんだわな、避難場所というのはな。ただ、我々はそれこそ津波来ると避難するかと、そこまでも行かないでうちの中に行けばもう安全地帯だから(笑)

質問： 神社まで行く必要ないんだと。

住民 28 うんうん。そういうところまで行かないけど、本当は避難場所というのは神社のそっちにあるんだけど。

質問： 先ほど、津波というのは引くんじゃなくていきなり1波が来ると。

住民 28 いきなり。今までの経験から行くと、1波は必ずいきなり来てさ、それが下がって行って2波目が来ると。だからその下がって、そうすると今度は下げるんだから、どんな程度下げるかってそれによって次の来る2波が大きいんだわ。

質問： なるほど。それはもう昔からそういうふうには。

住民 28 そうだ、そうだ。

質問： それは27年の。

住民 28 ときには、あっと引いて行って、そら辺にあるこんな岩まで全部きれいで出てしまったんだから、それだけでかい波が来て引いていったんだから。でも今回は、来た波も小さいし、引いていったのも小さいわけだ。だからもうこんな程度で、これより大きなものは来ないぞと。だけどまだ下へ下がっていくのもまだあずましくないからもう少しいるべという事で山にね、これまでも今回はやったんだけど。

質問： 1波はだいたいそんなに大きくないと。

住民 28 うん。

質問： それはいつもそうなんですか。1波目はそんなに大きくない。

住民 28 いや、そんなことない。やっぱり27年のときは、いきなりその1波でもって家が流れたんだわ。あそこの床潭小学校の今いった高畠さんとか、あそこのとこに川があるんだから。あの川の中に船がみんな流れ込んで入っていったんだから。入って行って、第一そこのとこに沼があったでしょう。真っ白だ、今は雪かぶってるから。あの中さ船何ばいも流れ込んで入ったんだから、あれまで。

質問： なるほど、もうとにかく1波から怖いということで

すね。

住民 28 そうだ。だからそこそこの引いてから来るときもあるか知らないけど、俺の経験としては、もういきなりこさ来た場合は、もう2回、3回でもいきなり来てるわけよ。

質問： だいたいこの辺の人たちはみんなそう思ってますか。

住民 28 思ってる。

質問： 引くんじゃなくて、いきなり来ると。

住民 28 そうだ、もういきなり来るとということは頭に入れてるね。

質問： それから大きな地震があった後、だいたい何分ぐらいで津波が来るといふうに皆さん思っているしやいますか。

住民 28 そうだな、やっぱり今までから行けば30分、40分だな。そこらあたりが目安だと思うな。最後の人もやっぱりそう言ってるぞ。

質問： 地震が来たら、30分ぐらいの間にとにかく支度をして逃げるといふのがだいたい皆さん。今回も同じようにやっぱり。

住民 28 同じような格好で、何でもいいから来るぞと。だけど、来るぞといたって、車は片付けなきゃならない、船はそこら中に置いてある。さっき言ったようにエビのかごは浜さみんな散らかしてある。エビのかごね。そんなの片付けてる間に、やっと逃げたいんだけど。だけど片付けとつてもやっぱり浜を見ながら、海を見ながら。

質問： ずっと海を見てやるわけですよ。

住民 28 うん。

(中略)

質問： 津波はやっぱり力が強いですか。

住民 28 力は強いし、それこそムクツとやってくるからね。おっかない。だから27年のあれだって、「津波だー」とよその人にこうやって叫んできたんだからね。それでよってかかって、「何、津波」ってこうやって見たけど、何もそんな波なんか高くないんだよ。よってかかってこら辺全部もう洗い流していったんだから相当ね。こんな高い波で台風みたいにガンガン追ってくるもんでないんだから。

俺ここにいてかかって、どんな程度来るもんだかかって、「津波だ」って聞かされたけど、どんな程度かと思ってこうやって眺めてここへ立ってたんだから。立ってたってそこまで来たから泡食ってこうして裏に逃げたけど、そこまで駆けずり上がったけ、もううちバリバリバリとみんな壊されたんだから、だからもう俺も本当にもう寸前だったんだ。だから台風もおっかないけど、台風より俺は津波の方がおっかない。

(後略)

(12)住民 29

質問： ご主人はその揺れたときはもう起きていらっしたんですか。

住民 29 いや、起きていなかったけど。

質問： 寝ていました？

住民 29 妻 起きていたでしょう。起きていて、小屋にいたでしょう、この9月26日ですよ。

質問： そう、9月26日。

住民 29 妻 そのときは起きて。

住民 29 ああ、そうだ。起きて、まだ、昆布の仕事があったものだから、すぐ隣の倉庫で昆布の仕事をしていました。

質問： 仕事をしていたんだ。

質問： もう起きられていたんですか、その日は何時ごろ？

住民 29 妻 そのころは3時半ごろだね。

質問： 作中に揺れだしまして、それでどうしました？

住民 29 それで、うちの方でまだ寝ているからと思って、今度は急いで来て。

質問： 奥さんは、そのときはまだ寝ていたんですか。

住民 29 妻 いや、私はご飯を支度して、テーブルにもう全部出してしまって、そして揺れが、ああ、地震だなんて思っていたの。私もどっちかといえば、ずるいって言うんだか地震になってもそんなに泡を食わないんだよね。だけど、そのときの地震ばかりは、ガスと火を消やして、スリッパを履くのも容易じゃなく、揺れが。そして、わしは外に出る、うちのお父さんは小屋からはだして。

質問： 慌てて家の様子を見に。

住民 29 慌てていて、スリッパを履く暇もなくて。ゆっくりしていれば履く暇もあるけど、あの段階では何せうちの方が心配だもんだからね、小屋からすぐ真っすぐ。何せ戸が開かなくなったらどうにもならないからね。

質問： うちの方が心配というのは、家のどういうことが心配でした？

住民 29 家族がまだ。

住民 29 妻 寝ていたから。

住民 29 これがうちのご飯を支度するのに起きていても、2階に小さい子供たち今、ここでがやがやいた、あの子供たちと親が2階にいるのさ。

質問： 息子さん夫婦。

住民 29 そうそう。それと孫が大きいのが6年生、それから男の子が4年生で、今ここにいたのが2歳。

質問： お孫さんが3人いらっやって、そういうお孫さんのことが心配で。

住民 29 大きい人はそのまま逃げられるけど、小さいのは抱いたり、手を引っ張らなかつたら容易でないってことでね、それを心配だもんだから来てみたのさ。それで何せ、もう電気もつかない、テレビもつかない、電話もきかないだもんね。

質問： 停電ですかね。

住民 29 停電で。それで、携帯のラジオはあったからね、そこにこのラジオを置いて、それで情報を聞きながら。津波も来るなと思ったけど、津波が来てもここは高いから、さほど心配はないというのが頭にあったから、別に避難の心配よりもこの辺がどうなったかとか、うちがどうなったかということを見ても、やっぱり明かりがないもんだから、どうにもならないわけさ。

質問： やっぱり、まだ薄暗かったですか。

住民 29 まだ、暗かったよね。あの当時でも5時半を過ぎなかつたらまだ明るくならなかつたからね。

住民 29 妻 そして天気も悪かったから、なおさらね。

住民 29 何せ明かりがないもんだから、このうちの一番小さいのが、もう、おっかない、おっかないで。

質問： 地震のショックで。

住民 29 ショックでね。それから、暗いものだから、なお

もそうなんだ。それで、今度はだいたい明るくなったころになったら、津波警報が入って、第1陣の津波が来て、それを今度、見ているうちには、だいたい落ち着いて、子供たちもね。子供たちも津波を、少しだけ来たりしているのを見て、ああ、津波だとか何とか騒いでいるうちに、だいたい6時ごろにある程度、落ち着いてきたけど。

質問： 津波の警報の放送というのは.....

住民 29 防災無線。

質問： あれですか。

住民 29 防災も入らなかつたの。

質問： 入らなかつたんですか。

住民 29 というのは、普段は電気を使って、電池が入っているのを分かって、役場でもしょっちゅう情報で電池を取り替えなさいとか何とか言っているんだけど、何となく鳴っているから、その赤いボタンがつけばどうのこうのって、それもついているし、大丈夫だなんて思って取り替えなかつたの。それが、もう長年たっていたから。

質問： 電池切れ。

住民 29 電池切れというので、それで、情報が全然手に入らないわけさ、本当にラジオだけ。

住民 29 妻 ラジオで津波が分かつたんだもんね。

質問： ラジオで津波警報が分かつたわけですね。

住民 29 やっぱ、後で終わってからしばらくしてから取り替えながら、やっぱり電池がなかつたってことで、今は恐らく入るけど。

質問： それは、いつごろラジオで警報は分かりました？

住民 29 津波ですか。

質問： 津波警報自体は。

住民 29 だいたい20分ぐらいたってからだな。

住民 29 妻 うん、20分か25分ぐらい。だけど、やっぱり、わたしたちもここにずっといるから、このくらいの地震では津波はやっぱり来るんでないかという予想はあるんだよね。そう思っていたらやっぱり津波は来たね。

質問： 津波が来るのは分かるけれども、この辺は高いから大丈夫だと。

住民 29 妻 そうそう。

質問： ここは海岸から何メートルぐらいありますか。

住民 29 海岸から、そこの前でもってゼロ線からいくと、そこにブロックが積んであるでしょう。そこでだいたい6メートルというんだよね。

質問： 6メートル、海拔から。

住民 29 だから、そこからここは10メートル近くあるじゃないかね。

質問： 10メートル近くあるんですか。

住民 29 ゼロ線からね、プラスマイナスゼロ線から。だけど、そこは通り道だから、上に上がってくることは恐らくないんだよね。これを越えてくるということは。

質問： この上の土砂とか、ここの土砂というか、岩自体が崩れるという心配はあつたんですか。

住民 29 だから、明るくなるまでは分からなかつたもんで。多少、うちの前はある程度、こうなっているところから、のり面から、だいたい1メートルから3~4メートルぐらいまで地割れがそのところから向こうの端までずっと。

質問： 入っていたんですか。  
住民 29 段差がついて地割れしてね、それはありました、100メートルぐらいの長さだね。  
質問： そして、これぐらいの地震だと津波があるだろなという予想ですが、それはどういうふうなご経験からそう思ったんですか。  
住民 29 やっぱ、その前回の地震から、平成10年？  
住民 29 妻 5年。  
住民 29 そのときの地震を、それからいろいろな地震がある中で、地震もやっぱり来ているから、あの程度の地震だったら前回と同じくらいだから。  
質問： 前回というのは釧路沖地震のことですか。  
住民 29 そうそう。  
質問： 1月の。  
住民 29 そのぐらいの地震だから、恐らく津波は来るだろうというのは頭に思っている。  
質問： 釧路沖のときはどれぐらい来たんですか。  
住民 29 昨日テレビで、何か研究した結果、ここはそうでもないか、分からないんだけど、向こうのすぐその.....  
質問： 未広ですね。  
住民 29 あそこが4.2メートルと言っていたね。  
質問： それは今回のやつですよ。  
住民 29 今回のね。  
質問： 釧路沖のときには？  
住民 29 釧路でもそんなになかったもんな。  
住民 29 妻 津波はそのときに。  
質問： そんなになかった。  
住民 29 ただ、感じた程度だね、そのときは、それより前には2~3回はあるのさ。地震は小さかったんだけど津波が来たというの。  
質問： チリ地震とか。  
住民 29 妻 チリの後に。  
住民 29 そういうものでないのね、普通の地震。地震は4か5だかあるかもしれないけど。  
質問： 何回か小さい津波が来ているわけですか。  
住民 29 それで、ここから島があるでしょう、小島ってね。そこのところまで渡って行かれるような大きな津波が来たわけ。  
質問： 引き波で、引いちゃっていて。  
住民 29 引いたりいったり、引いたりいったりしてね。  
質問： という話を見たことがある？  
住民 29 あるある。  
質問： ちょっと待ってください、その島って？  
質問： 小島。  
住民 29 そこにね、今、見えないんだ、ここに真っすぐだね。  
質問： ここにあるでっかい島ですね。  
住民 29 遠い島とそこに小さい島があるんだよね、500メートルぐらい先に、真っすぐにあるの、そこのところまで。  
質問： まさか、あのでっかいのじゃないんですよね。  
住民 29 いや、向こうまでは行けないけど、山がこういふふうにあってかなり出たの。  
質問： それはいつごろのことですか。  
住民 29 妻 5月だよ。  
住民 29 何年ぐらいになる？  
質問： 何年ぐらい前の。

住民 29 妻 何年前になるべ。  
住民 29 まだ、湾内か、昆布所にいたときでないか？  
住民 29 妻 ちょうど コワカイ 時季だから5月なんだ。  
住民 29 20年ぐらいはたつね。  
質問： 20年ぐらい前、何だろうね。浦河沖とかじゃないですか。  
住民 29 どうかのだけれもないけどね。  
住民 29 妻 そのとき、やっぱり地震でも震度3でも津波が来るときもあるし、4で来るときもあるんだよね。このたびは6弱でしょう。だから、これは油断ならないなとは思って。  
住民 29 だからこの辺は、やっぱりマグニチュード5以上って聞いたら、ないって考えられないもんな。  
質問： マグニチュードですか、震度じゃなくて。  
住民 29 震度じゃなくね。  
質問： マグニチュードで5以上だとやばいと。  
住民 29 ええ。震度はもちろん5か6以上になるし。それも、わりとマグニチュードでもそのときによって5以上になってくるときもあるしね。5以下でも小さいのは、小さいのは何回も来ている、1メートルや50センチというのはね。  
質問： あのとときはどうでした？ 昭和27年の十勝沖で床潭の町の方でかなり。  
住民 29 ここは何ともなかったもんな。  
住民 29 妻 あのとときは、私がちょうど5年生のときで、そして学校も古かったから、ガラスは落ちてくる。それで、津波ということはまだそのときは分からないの、津波が来るといことは、地震で。そして、なんか変な波が来たぞというので、今度みんな今、床潭の トウ あるでしょう。今、氷が張っているけど、そこを逃げた。  
質問： 沼をね。  
住民 29 妻 そのときはね。  
質問： 床潭のところの川は何川というんですかね、ちっちゃい川は。  
住民 29 妻 何川っていうの、あれ。  
住民 29 何川だろう、床潭川とも言わないし、何ていうんだろう。聞いたけど忘れちゃったな。床潭川でいいんでないだろうか。  
質問： 奥さんはそのときに一応逃げたと、津波で逃げた経験はあるわけですね。  
住民 29 これはこれ、俺は地方の人だけど、これはここで生まれているから。  
質問： だんなさんは違うところからいらっちゃって。  
住民 29 妻 函館の。  
住民 29 だから、これはもう62歳か、それまでのことはほどほどのことは分かる。  
質問： だんなさんは、それじゃあ、ここに生まれて何年ぐらいになるんですか。  
住民 29 昭和36年に、ここに。  
質問： 36年から来ているんですか。  
住民 29 その前には本町の方には何年かいたけど、6年ぐらい。だから、通算は昭和30年ぐらいから厚岸に入っているの。  
質問： だから、27年のことは話には聞いているというか。  
住民 29 そうそう。だから今、だいたい経験したことだけど、そういうことがあると。それと前に今、うちの2番目の息子が釧路支庁の、今の道の支庁に入った

のさ。そして今は、スカベの道南の、そこに今は転勤になっているけど、それがまだ小学生だったな。そのころ、大黒島では養殖の仕事をしているもんだから、船にちょっと乗せていったら、大黒島のがけ崩れがものすごいあったの。

質問： それは地震で。

住民 29 地震で。それは、俺は船に乗っていて分からないから携帯の小さいこんなぐらいのラジオを持っていたから分かって、泡食って逃げてきたのさ。そうしたら、こちらに帰ってきたら地震だったって。

住民 29 妻 そのときも津波警報が入ったんだよ。

住民 29 何ともなかったけどな。

住民 29 妻 津波は来たんだけど、そんな大きい潮の引きもないし、そんなに大きな津波は来なかったの。ただ、本当の大潮になれば潮が引いていくぐらいな程度でもってね。

質問： それはやっぱり 20 年ぐらい前のこと。

住民 29 そうね。今、40 歳になるから。

住民 29 妻 数えていくと 42 歳になるから。

住民 29 40 歳にしてやっぱり、20 年、4 年生っていえばね。

質問： 30 年以上ですね。

質問： 30 年ぐらい前か。

住民 29 だから、そういうふうなことが絡んでずっときているから、さほど地震だっていっても大したことない、おっかなくないって言えばあれだけだね。

質問： 大したおっかない目には遭っていないわけですね。(中略)

質問： また当日に戻るんですが、当日はラジオで警報が分かった後、津波をずっとここから眺めていたということになりますか。当日の朝、海の様子をずっと見て、ああ、津波が来た来たとか、それをずっと眺めていらしたということですか。

住民 29 そうそう、その日もどこへも行かないで、黙って、音も鳴らないから。

質問： 当日は別に避難ということはその日はなかったんですね。

住民 29 なかった、それは 29 日までなかったからね。

質問： そのときご家族はどうされていたんですか。皆さん、ここで。

住民 29 そうそう、それまでは避難するまではここにいて。

質問： 普段通りの。

住民 29 そうそう。

(中略)

質問： 奥さんは、一応、津波の怖い経験をされて、それでもまあここは高いところだから大丈夫だろうという安心感がありますか。

住民 29 妻 そう。そういうことには慣れていているのかな。その津波の高さもどのくらいで来るというのが分からないだけで、ただ、津波が来て素通りしているようなもんだから。

住民 29 ここは、津波は恐らく入らないと思うよ。というのは、向こうから来たんなら真っすぐ、私は 潮キリ潮キリ と言って、潮の速いところだから、これを通して行って、床潭から回って入ったのが裏はすぐ山でしょう。行きとこがなく入ったものがあるという大きな被害になったというような格好で、ここは通り道だから、さほど高くないんだろね。ただ、波がシケたり、高くなったりして通っていく

のが大きいけど。

質問： やはり津波のときには引き波が来るという、いきなり来ることはないですか。

住民 29 妻 いきなり来るときもあるよ。

住民 29 今回は早かったんでないのかい、来るのが。

住民 29 妻 引き波が来ないうちに来た。

質問： 引き波がないということもあるわけですね。それから、昆布漁をされているということで、船があると思うんですが、これの心配はありませんでしたか、津波で船がひっくり返ったり、壊れたりするのではないかという。

住民 29 いや、そういう心配もさほどしていなかった。だから、地震が去って行って収まった後なら大層心配しない。ただ、避難命令が出されたので、ええっと思ったような状態さ。

質問： ここも避難命令が出たわけですね、当日の津波で。

住民 29 ここは津波では出ないんだけど、その後ね。

質問： 29 日ね。

住民 29 その後、29 日なって、なぜ、こんなところに。津波が来るわけでない、地震が来たって地滑りするわけじゃないのに何で避難しなきゃならんかって。

住民 29 妻 チリ津波のときは、あれは昭和 35 年だったかい？

質問： そうですね、35 年。

住民 29 妻 あのとときは、やっぱり潮が引いたね。そのときは潮が引く前に波が、こういうあれが入っていなかったのね。それで本当の砂地だったものだから、波が何かサワサワサワサワとうるさいんだよ。いつもの波と違うもんだから、いや、何かこの波うるさいね、津波が来るんでないかって。まさかチリだっていうことも知らないし、津波が来るんでないかって言っているうちに、今度は潮がパーッと引いていった。そして、津波だって。それで、その津波が終わってからチリ津波だということは分かったけど、霧多布の方ね、傷んだときは、でも、そのときだって何も今のこんなブロックみたいなのは入っていないんだよ、だけど、浜には何も上がって来ないの。

質問： 引いただけで。

住民 29 妻 うん、ただ、引いただけで。引いてきても何回も引いてみたり、波が来てみたりはしたんだけど上がって来ないの。

質問： 普段より上がったというわけではないわけですね。

住民 29 だから今、船があるところが見えると思うけど、あれまではかえって台風の方が上がるけど。だけど、津波ではまず上がるっていうことはないね。

質問： 台風の高潮とか。

質問： そのブロックはいつごろできたんですか、テトラポットは。

住民 29 これかい？ これは何年になる。何年ごろだ？

住民 29 妻 昭和 43 年かそれくらいじゃない。2 回目だから、このブロックを直したのがね。最初は 43 年ころだった。

住民 29 44~45 年ころから本格的に。

質問： やっぱり高波対策ですか。

住民 29 そうそう、海岸浸食の。

質問： 台風の高波のときにはかなり上の方まで来るんですか。

住民 29 今回の津波では今、船を上げている、斜めになっ

て船を降ろすところがあるでしょう、その中ごろまで来たかな。それで、末広に4メートル半ぐらいの津波の高さだっという話ですけどね。

住民29妻 台風ときはもうひどいもんね。

住民29 台風の方がおっかない。

質問： 台風で避難勧告とかは。

住民29 ないない。ここまでは来るっていうことはないけど。今は、なおこれブロックが積んであるからないけど。

住民29妻 台風の波の方がおっかないもんね、津波より。  
(中略)

質問： 奥さんはもともとご実家は床潭のどの辺ですか。

住民29妻 ここ。

質問： ここ？

住民29妻 生まれも育ちもここです(笑)

住民29 死んだじいさんっていうのがここで、今現在、生きていけば九十何歳になるけど、ここで6歳のときからここに住んでおったか？

住民29妻 うん、生まれて60日目だか68日目から来ている。

住民29 何でも今、亡くなったじいさんが、ここで84年か、ここで死んで、84歳で亡くなっているから。今現在、生きてると95か。

質問： じゃあ、代々の床潭育ちということですね。

住民29 末広の方で生まれたんだけど、すぐにここに来て、ここに住み着いて八十何年と、…… ようなことね。

質問： そうなると、津波でここは1回も波に洗われたことがないってことで大丈夫だという気持ちになるわけですね。

(中略)

質問： この地域は隣にSさん、Tさん、Aさんといらっしゃるんですが、その方々が津波で避難したということはないですか。

住民29 下の方はやっぱり、1人よりいないから、Tさんというところ。

質問： Tさんは避難したらしいですが。

住民29 何か避難したってわけじゃないけど、慣れているからそんなにおっかないことはなかったけど、気を付けたとは言っていたね。

質問： Tさんはかなり海に近いところですか。

住民29 ここの下の地盤の、うちの前から下がったところの地盤の向こうの方の外れのうち。今、誰もいなくて一人暮らしをしているんだ。Tんっていう人ね。

質問： それはまだ海に近いからと、気を付けたという。

住民29 だけで。

質問： 逃げたことはない。

住民29 うん。

住民29妻 うちさ来たよね。

住民29 来たって、あれは遊びに来ただけ。どうだったっていったって。

住民29妻 明るくなってから。

質問： 明るくなってから、しばらくしてから。

住民29 出口 だかとか話をして、毎度のことだから。

質問： 大変だったねみたいな感じで。

質問： あとSさんとかAさんもこれより上ですか。

住民29 Sんはすぐうちの隣だわさ、この2軒が避難したのさ。それで、Aさんのところは何ともなかったか

ら。

質問： Sさんも津波で避難したことはないわけですね。

住民29 ないない。

質問： 地滑りで避難したわけですね。

住民29 そうそう。

質問： Aさんも地滑りで避難ですか。Aさんは地滑りでは避難していない。

住民29 しない。

質問： それはもう違う地帯なんですね。

住民29 いや、今、この関係したところには入っていないのね。

質問： でも、Aさんももっと高いところですよ。

住民29 Aさんとこは、うちより高いところ、道路のすぐ下。

質問： 津波避難もなしと。だから、この4軒は津波で避難はしていないということですね。

住民29 そうそう。

住民29妻 昭和27年の十勝沖地震のときは、やっぱり初めての津波だったから、そのときは一番高いところまで上がったんだ。初めてそのとき津波が来たからどのくらい来るのかなと思って。したけど、やっぱり来なかったし、今は島に誰も人がいないんだけど、そのころは、まだ、島でみんな十何年生活をしてきたから、今度、町に行くたってうちの外に船で来て、船を着けて、そして町に買い物に行っていたの。その島の船が1艘そこに上がっていたのね、うちの船上げ場のところに、その船も何でもなかった。

質問： 27年のときね。

住民29妻 うん。

質問： 27年のとき避難したというのは、どなたが避難した、ご家族の方は避難したんですか、津波を恐れていたんですか。

住民29妻 そうそう。どのくらいの津波が、そのときは初めてで、津波だったんだっていうのは分からないから、一番高いところまで。本当の一番高いところだよ、そこまでは。

質問： 道路の近くまで？

住民29妻 山。

質問： 山の上まで。

住民29妻 一番上まで。

質問： どれぐらいの標高ですかね。

住民29妻 なんぼくらいあるの？

質問： 100メートル近くありますか、100メートルはないか。

住民29 100メートルはないけど、道路からなんぼだべな。今、地滑りのやいたところまでは40メートルといたった。それくらいあるかな、80メートル、道路からね。下からだったら100メートルくらいあるね。

住民29妻 だけど、よくあそこまで上がったと思うね。

質問： そうですよ。

質問： どのくらい時間かかるんですか。

住民29妻 どのくらいかかったかも分からない。

質問： 20分はかかるね、300メートル1時間だからね。

住民29妻 もう学校からみんな戻されて、帰ってきて危ないからって一番高いところまで上がってっていうので。

質問： 津波の後ですね、もう被害が出た後。床潭で大変なことになっていると。

住民29妻 床潭が全滅になってね。

住民 29 遊びに上がったんだって(笑)

質問: そのときはこっちへは来なかったから。

住民 29 妻 津波は来たんだよ。

質問: 来たけど被害はなくて大丈夫だった。

質問: それは一晩過ごしたんですか。山の上で。

住民 29 妻 一晩は、今度、Sさんの小屋があったわけ、昆布小屋がね。そこで一晩休ませてもらって、そこまで降りてきて今度ね。

質問: そのときに大きな被害がなかったから、津波が来てもそんなに大きい津波じゃないだろうという安心感というのはできたんですか。

住民 29 妻 うん、そうだよね。

住民 29 もう住み慣れているから、それまで何回も経験しても、ここに寄らないで真っすぐ入っていくから、まあ来ないんだ、心配ないっていう。

質問: そういう理論派なわけですよ。だんなさん、奥さんは経験だと。

住民 29 分からないよ。船が置いてあるところまで入る可能性もあるかもしれないけど、ここは大丈夫だからという頭があるね。

住民 29 妻 やっぱ震度3ぐらいでも大きな津波ではない、本当のはこうやって来ていたこともあるしね。

住民 29 だから、心配はないけど津波は来るということを警戒しなければならないということは。

住民 29 妻 あの奥尻みたくならね。

住民 29 地震が来たら何かにつけて逃げて、自分の逃げ場所を見てこなきゃだめだっていうのは、やっぱり基本じゃないかね。

(後略)